

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書 5

—松本市内 その2—

神 戸 遺 跡
上 二 子 遺 跡
中 二 子 遺 跡

1989

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書 5

—松本市内 その2—

神 戸 遺 跡

上 二 子 遺 跡

中 二 子 遺 跡

1989

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
助長野県埋蔵文化財センター

序

塩嶺トンネルを抜けた中央自動車道長野線は、松本平の中央部をよぎりながら北進し、やがて進路を東に向けて、筑摩山地へわけ入ることになります。この間、塩尻北インターより豊科インターまで約15.5kmが、松本市内及び豊科町内にかかります。たまたま、これの建設促進をめぐる、各界でさまざまな議論が繰り返されました。主な論点は、いかにして建設工事と事前の文化財保護事業との調和をはかり、同時に、200万県民待望の県下縦断自動車幹線供用の予定期間に合わせるか、というところにありました。

これに関連して、文化財保護行政側の立場にあっては、12遺跡278,730㎡という膨大な調査対象面積になること、経験の少ない沖積地帯の調査となること、対象面積に比して調査期間が短いことなど、調査条件からみて、関連する埋蔵文化財の記録保存事業遂行のための方途を探ることが、大きな課題となりました。幸にして、長野県埋蔵文化財センターの調査体制整備や、また、開発個々の工程調整等を通じながら、調査条件づくりに向けた関係各位の御努力の中で、昭和59年より同62年にかけて、予定した調査を終了することができました。

調査成果の概要については、現地説明会・出土遺物展示会・長野県埋蔵文化財センター年報等によって公開してまいりましたが、その後の整理作業のなかで、松本平の沖積地に広範にわたって立地した、主として古代・中世村落を彷彿させる、各種遺構群や遺物類が含まれていることが確認されました。またこれらが、松本平を南北に貫く奈良井川と一部梓川流域の沖積地にかかるといった、共通空間域にあること、時間的な幅も小さいことから、12遺跡個々の記録保存成果は当然のことながら、一連のものとして総合的に捉えることに意を注ぎました。従いまして、逐次刊行を予定しております全7冊の報告書内訳は、事実記載中心の、いわば各論編に当たる6冊（神戸・上二子・中二子遺跡、下神遺跡、新村島立条里、南栗遺跡、北栗遺跡、三の宮遺跡、南中・北中・北方・上手木戸遺跡）と、全体考察をふまえた総論編1冊に分けて編集をしてあります。

本書は、上記編集計画にもとづくもののうち、松本市南端の神戸・上二子・中二子の3遺跡を一書としたものです。いずれも、奈良井川左岸の川辺近くに立地し、中二子遺跡では平安時代の竪穴住居址群と掘立柱建物址群などからみて、北隣の平安時代前半期の大集落跡（下神遺跡）成立に関連するなど、奈良井川流域における古代集落立地の変遷にかかわった、それぞれの資料提示ができたのではないかと考えております。

最後になりましたが、調査開始より本書発刊に至るまで、記録保存の遂行に深い御理解と御協力をいただいた、日本道路公団名古屋建設局・同松本工事事務所・長野県高速道局・同松本高速道事務所・松本市・同教育委員会・松本平農業協同組合・地区被買取（者）組合等、並びに発掘現場や記録整理作業に従事された多くの方々、直接の御指導・助言を賜った長野県教育委員会文化課、発掘調査を実施した埋文センター職員に対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成元年3月20日

長野県埋蔵文化財センター

理事長 樋口 太郎

例 言

- 1 本書は、中央自動車道長野線建設工事に係わる、松本市内・豊科町内12遺跡の内、^{ゴゴ}神戸遺跡(EGD)・^{カキタニ}上二子遺跡(EKF)・^{ナカニ}中二子遺跡(ENF)の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、松本市内にかかる遺跡を、古代から中・近世にかけての一連の遺跡群としてとらえ発掘調査を実施した関係から、全遺跡に係わる内容と考察編を1冊に、各遺跡編を6冊に分けて編集し、以下の構成をとる。松本市内その1—総論、松本市内その2—神戸遺跡・上二子遺跡・中二子遺跡、松本市内その3—下神遺跡、松本市内その4—南栗遺跡、松本市内その5—北栗遺跡、松本市内その6—三の宮遺跡、松本市内その7—豊科町内—南中遺跡・北中遺跡・北方遺跡・上手木戸遺跡。
- 3 本書で使用した航空写真は、建設省国土地理院の許可を得て複製したものである。
- 4 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図(1:1000)、松本市発行の松本市都市計画図(1:2500)をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の2万5千分の1・5万分の1地形図を複製した。
- 5 本書及び松本市内・豊科町内遺跡報告書に掲載した、実測図の縮尺・表現方法、時代・時期区分、遺物写真縮尺、遺構・遺物の分類基準等は全分冊で統一しており、その要点は凡例に示してある。
- 6 本書および松本市内・豊科町内遺跡報告書では、以下の遺構記号を使用している。竪穴住居址—SB、掘立柱建物址—ST、柵址—SA、溝址—SD、土坑—SK、井戸址—SE、鍛冶址—SI、水田址—SL、畑・畠址—SN、自然流路—NR、不明遺構—SX。
- 7 本書で報告する3遺跡については、既に、当埋文センター発行の『長野県埋蔵文化財ニュース』、『長野県埋蔵文化財センター年報』1・2に調査概要を報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、本報告をもって最終的な報告とする。
- 8 発掘調査、報告書作成にあたり、次の各項目について、各氏に終始ご指導いただいた。
古代集落関係—小笠原好彦、中世集落関係—石井進、竪穴住居址・掘立柱建物址—宮本長二郎、プラント・オパール分析—藤原宏志、水田土壌—梅村弘、古代集落・土器—吉岡康暢・桐原健、人骨・獣骨鑑定—西沢寿晃、地形形成—小林詢、炭化材鑑定・同定—中島豊志、須恵器・灰釉陶器—斎藤孝正、美濃須衛窯産須恵器—渡辺博人、条里遺構—井原今朝男・小穴芳実・小穴喜一、輸入陶磁器—森田勉、古瀬戸系陶器—藤澤良祐、近世陶磁器—仲野泰裕、協力機関—松本市教育委員会、長野県遺跡調査指導委員会(順不同、敬称略)。
- 9 発掘調査及び文責等本書刊行に関する分担は巻末に一括掲載してある。
- 10 参考文献は巻末に一括した。
- 11 本書で報告した各遺跡の記録及び出土遺物は、⁰¹長野県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1 本書に掲載した実測図の縮尺は、特に断りのある場合を除いて下記のように統一してある。

(1) 遺構実測図

本文挿図 竪穴住居址・掘立柱建物址 1:60 住居址内施設・墓址・土坑 1:40

図 版 遺構図 1:120

(2) 遺物実測図等

土器・陶磁器 1:4 文字関係資料 1:3 墨書文字 1:2 土器拓影 1:3

金属製品 1:2 石器・石製品 1:6~2:3 鉄貨拓影 2:3

(3) 遺物写真

土器・陶磁器 2:5 内耳鏡・常滑系甕 1:4 中世土器・陶磁器破片 1:2

鉄製品 1:2 銅製品・鉄貨 1:1 石器・石製品 1:6~2:3

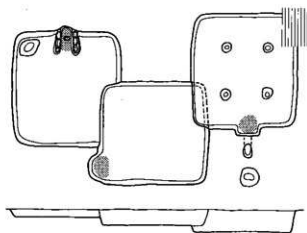
2 遺物実測図の番号は、遺跡ごとに次のように付けてある。

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| (1) 縄文・弥生土器、石器……1から通し番号 | (4) 文字関係資料………1から通し番号 |
| (2) 古代土器………各遺構毎の通し番号 | (5) 金属製品………1から通し番号 |
| (3) 中・近世土器・陶磁器……1から通し番号 | (6) 古代以降の石製品……1から通し番号 |

3 実測図中のスクリーン等は以下の事項を表わしている。

(1) 遺構

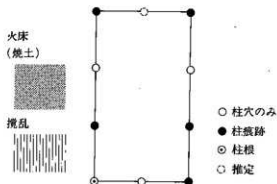
ア 竪穴住居址



イ 掘立柱建物址

本文中の掘立柱建物址模式図は、

約 1:200 で以下の事項を表している。



(2) 遺物

ア 古代土器

① 実測図の断面は、黒色土器、赤彩土器を含む土器—白抜き、須恵器—施釉陶器—黒塗り、輸入陶磁器—スクリーンによって区別した。黒色処理・赤彩を施したものはその処理された器面の範囲に、漆・炭化物の付着については以下のスクリーンにより表現してある。



② 施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

イ 中・近世土器・陶磁器

① 実測図の断面は、土器—白抜き、陶器—黒塗り、輸入陶磁器—スクリーンにより区別してある。

② 国産陶磁器の釉の種類は以下のスクリーンにより区別してある。但し、灰釉は白抜きにした。



③ 施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

ウ 金属製品

- ① 金属製品の形状はX線等の観察にもとづいており、錆・付着物によるふくらみは線の太きをおとして表現してある。
- ② 断面図は、平面形状観察にさしきわりのない範囲で平面図に組み入れてある。

エ 石器・石製品

① 打製石斧・磨石等の磨耗範囲は  で示し、砥石の使用面は、断面図に |—| で示した。

オ 土製品

① 羽口のタール付着・ガラス状発泡範囲を 、被熱により変色した範囲を  で示した。

4 本書を含む松本市内・豊科町内遺跡報告書における遺構・遺物の分類、時期区分の要点は以下のように統一しており、ここで扱っていないものについては、各報文中で説明してある。詳細は「松本市内その1」第3章に記述してある。

(1) 時代・時期区分

時代区分は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世、近・現代とし、古代を1～15期、中世を1～2期に時期区分した。

(2) 遺構

ア 竪穴住居址

- ① 主軸は、カマドの中心を通る竪穴住居址の中軸線をあて、それと直交する中軸線を直交軸とした。ただし、住居址の隅にカマドを有するものや、カマドの見られない住居址については、東西方向の中軸線を主軸とした。住居址の規模は主軸と直交軸方向での床面の差渡して測り、床面積はその二者の積をあてた。
- ② 平面形は「方形」「隅丸方形」「長方形1」「隅丸長方形1」「長方形2」「隅丸長方形2」及び「不整形」に分けた。(隅丸) 方形は主軸と直交軸方向の長さの差が10パーセント未満のもの、その差が10パーセント以上15パーセント未満のものを(隅丸) 長方形1、15パーセント以上のものを(隅丸) 長方形2とした。
- ③ 古代住居址の規模については、時期別に、一辺の長さで以下のような6つの種類に分けた。

時期 \ 型	小型	中型1	中型2	大型1	大型2	超大型
1～4期	3m強	4m強	5m位	6m位	7m位	8m以上
5～15期	3m以下	3m～4m弱	4m～5m弱	5m強	6m位	7m～8m以上

イ 掘立柱建物址

- ① 棟方向は、南北棟、東西棟と記してあるが、不明なものについては南北棟として記入した。
- ② 規模は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を基本として推定復元し、面積は両者の積により求めた。
- ③ 柱間寸法は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を求め、最大と最小値について表示した。
- ④ 掘り方では、平面形については方形、円形に分類し、「方」「円」と表記し、両者の混在するものは「方・円」とした。規模については、長軸の最大値と最小値を表示した。

(3) 遺物

ア 古代土器の器種分類について

- ① 本ページに示す古代土器器種分類表は、本報告書における土器の器種の呼称を示したものである。報告をおこなう土器のうち、土器の器種分類に当たって出土例が少なく、将来、周辺遺跡の資料をも含め、資料の増加を持って細別名を決定すべきと判断したものについては、ここではあえて細別を行わず、通例の呼称に従っている。
- ② 器種分類の詳細、器種内の法量等による細別については、総論編で明らかにしている。

イ 中世土器・陶磁器の分類

神戸遺跡から上手木戸遺跡を通して、出土した土器・陶磁器の主な器種内の分類と消長表を以下に示した。詳細は総論編で明らかにしている。

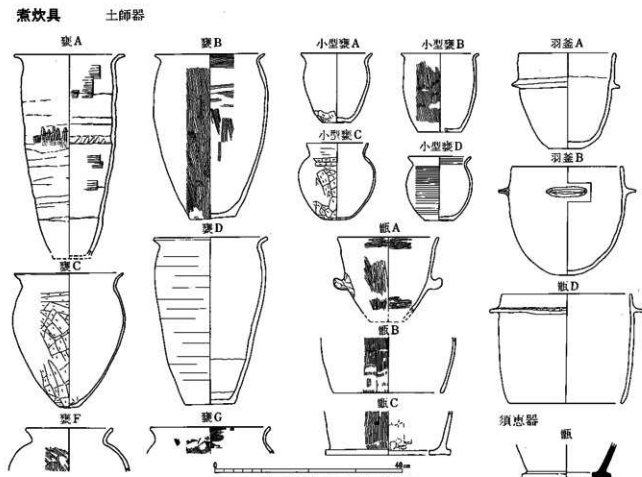
① 土師器皿

<手捏ね成形=1類>

食器



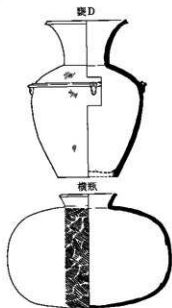
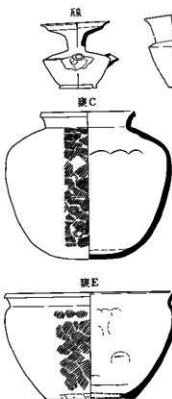
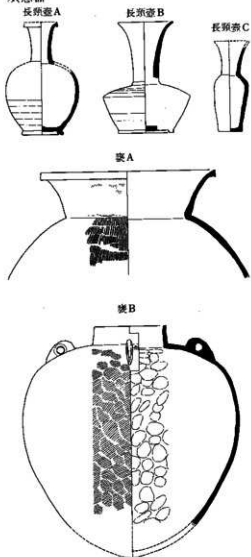
煮炊具



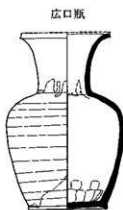
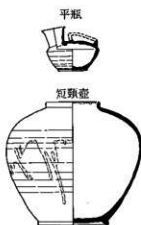
古代土器の器種分類(1) 食器・煮炊具

貯蔵具

須恵器



灰釉陶器



黑色土器 B



古代土器の器種分類(2)貯蔵具

	土 師 器		須 志 器		黒色土器A	土 師 器	神戸・中二子遺跡の代表的遺構
	杯 F	杯D・E	杯 A	杯 A	杯 A	杯 A	
700	1						
	2		○				中二子SB19
	3						中二子SB12
	4						神戸 SB12 中二子SB18
800	5						中二子SB5
	6						神戸 SB9 中二子SB22
	7						中二子SB4
	8						神戸 SB2
900	9						
	10						
	11						中二子SK4
	12						
1000	13						
	14						
	15						神戸 SB1
	備考	非ロクロ調整有椀杯	非ロクロ調整	ロクロ調整回転ヘラ切	ロクロ調整回転糸切り	ロクロ調整回転糸切り	ロクロ調整回転糸切り

古代土器時期区分の大略

- I A 1—口径約12,5cm以上、器高約2,5~3,5cmのもの。
 2—口径約11,0~12,5cm未満、器高約2,0~3,5cmのもの。
 3—口径約10,0~11,0cm未満、器高約2,5~3,5cmのもの。
 B 1—口径約9,0~11,0cm、器高約1,5~2,5cm未満のもの。
 2—口径約9,0cm未満、器高約1,0~2,0cmのもの。

〈ク口成形=II類〉

- II A—法量が口径約10,0~12,0cm、器高約2,0cm以上のもの。
 B—法量が口径約7,0~10,0cm未満、器高約1,0~2,5cmのもの。

② 内耳縁

- I—口縁部を強く「く」状に外反させるもの。
 II A—口縁部内面に明瞭な1条の工具痕を残すもの。
 II B—口縁部内面に明瞭な2条の工具痕を残すもの。
 II C—口縁部内面に明瞭な3条の工具痕を残すもの。
 III—口縁部の断面がクランク状に外へ張り出すもの。

③ 常滑系の壺・甕類

- I—頸部を緩く「く」状に反らせ、口縁端部を丸くおさめるもの。
 II—口縁部断面が「L」状の受口状を呈するもの。
 III—口縁部断面が「J」状あるいは「N」状をなし、縁帯が頸部に接着しないもの。
 IV—口縁部断面が「N」状をなし、縁帯を頸部に接着させようとしているもの。
 V—口縁部断面が「N」状をなし、縁帯を頸部に完全に接着させているもの。

④ 捏鉢

- I—口縁端部をやや細く挽き出し、端部を面取りするもの。
 II—器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部外面を面取りして尖らせるもの。
 III—器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部を隅丸方形および丸くまとめるもの。
 IV—口縁部から1~4cmくらい下をナデで器壁を薄くし、端部は丸くおさめているもの。
 V—口縁部から1~4cmくらい下をナデで器壁を薄くし、端部を角状にして端部中央に浅い溝を入れるもの。
 VI—口縁部から1~4cmくらい下を強くナデで器壁を薄くし、端部を丸くおさめて中央に溝を入れるもの。

⑤ 輸入陶磁器

横田賢次郎・森田勉氏の成果(1978)に負うところが大きく、特に青磁碗についてはそれに従って以下のように分類した。

- | | |
|------------------|-------------------------------|
| A—同安窯系碗I類。 | G—龍泉窯系碗I-6a・b類。 |
| B—同安窯系碗II類。 | H—龍泉窯系碗III-2類。 |
| C—龍泉窯系碗I-1・2・3類。 | I—龍泉窯系碗I-1およびIII-1類。 |
| D—龍泉窯系碗I-4類。 | J—明代の所産で、外面上半に雷文施文のもの。 |
| E—龍泉窯系碗I-5a類。 | K—明代の所産で、外面に片切彫りによる細蓮弁文施文のもの。 |
| F—龍泉窯系碗I-5b・c類。 | L—明代の所産で、外面に線刻によって細蓮弁文を施すもの。 |

⑥ 古瀬戸系陶器と大窯製品の分類は、藤澤良祐氏(1982・1984・1986)に従い、山茶碗の分類は、斎藤孝正氏(1988)・田口昭二氏(1983)による。

各形態 消長表

年 代	古代	中世1期			中世2期		近世
	12C	13C	14C	15C	16C	17C	
土師器 Ⅲ	I A1・2? I B1?	----- ----- I B2----- I A3-----	II A----- II B-----	-----	----- -----?	----- -----?	
内耳鍋			I-----	II B-----	II C-----	III-----	
埴 鉢		I----- II----- III-----	IV----- V----- VI-----				
常滑系 甕	I-----	----- II-----	III-----	IV-----	V-----		

本文目次

序
 例言
 凡例

第1章 神戸遺跡 (EGD)	1
第1節 遺跡の概観と調査の概要	1
1 遺跡の概観	1
2 調査の概要	1
3 調査の経過	7
第2節 基本層序と微地形	12
1 基本層序	12
2 遺構切り込み面の微地形	13
第3節 遺構と遺物	14
1 遺構	14
(1) 古代の遺構	14
ア 竪穴住居址 イ 掘立柱建物址 ウ 溝址 エ 墓址 オ 土坑 カ その他の遺構	
(2) 中世の遺構	29
ア 掘立柱建物址 イ 溝址 ウ 櫓址 エ 井戸址 オ 墓址 カ 土坑 キ 水田址	
2 遺物	49
(1) 縄文時代の遺物	49
ア 土器 イ 石器	
(2) 古代の遺物	50
ア 土器 イ 文字関係資料 ウ 金属製品 エ 石器・石製品	
(3) 中世の遺物	60
ア 土器・陶磁器 イ 文字関係資料 ウ 金属製品 エ 石製品 オ 土製品	
(4) 近世の遺物	69
ア 土器・陶磁器	
(5) 遺構外の遺物	70
第4節 調査の成果と課題	72
1 古代遺構の推移	72
2 中世遺構の推移	73
第5節 小 結	76
第2章 上二子遺跡 (EKF)	77
第1節 遺跡の概観と調査の概要	77
1 遺跡の概観	77
2 調査の概要	78
3 調査の経過	79
第2節 基本層序と微地形	80
1 基本層序	80
2 遺構切り込み面の微地形	80
第3節 遺構と遺物	81
1 遺構	81
(1) 古代の遺構	81

ア 竪穴住居址	イ 土坑	ウ 遺跡集中区	
2	遺物		82
(1)	縄文時代の遺物		82
ア	土器	イ 石器	
(2)	古代の遺物		83
ア	土器		
(3)	中世以降の遺物		84
ア	土器・陶磁器	イ 土製品	
第4節	小 結		85
第3章	中二子遺跡 (E N F)		86
第1節	遺跡の概観と調査の概要		86
1	遺跡の概観		86
2	調査の概要		87
3	調査の経過		87
第2節	基本層序と微地形		91
1	基本層序		91
2	遺構切り込み面の微地形		92
第3節	遺構と遺物		92
1	遺構		92
(1)	古代の遺構		92
ア	竪穴住居址	イ 掘立柱建物址	ウ 溝址
エ	墓址	オ 土坑	カ その他の遺構
(2)	中世の遺構		118
ア	墓址	イ 小ビット群	
2	遺物		118
(1)	縄文時代の遺物		118
ア	土器	イ 石器	
(2)	古代の遺物		118
ア	土器	イ 墨書土器	ウ 金属製品
エ	石製品		
(3)	中世以降の遺物		126
ア	土器・陶磁器		
第4節	調査の成果と課題		126
1	竪穴住居址の推移		126
2	掘立柱建物址		128
第5節	小 結		130
第4章	結 語		131
参考文献一覧			
発掘調査及び執筆等の分担一覧			
付表			
図版			
写真図版 (P L)			

目 次

- 第1図 松本市笹賀、神林地区遺跡分布図
第2図 神戸遺跡付近地形図
第3図 神戸遺跡トレンチ、大地区配置図
第4図 神戸遺跡遺構分布図
第5図 神戸遺跡古代遺構・グリット配置図
第6図 神戸遺跡中世遺構・グリット配置図（中部）
第7図 神戸遺跡中世遺構・グリット配置図（中部）
第8図 神戸遺跡中世遺構・グリット配置図（北部）
第9図 神戸遺跡土層概念図
第10図 神戸遺跡SB1、カマド実測図
第11図 神戸遺跡SB1 廃棄物実測図
第12図 神戸遺跡SB2、カマド実測図
第13図 神戸遺跡SB2 出土土器接合関係図
第14図 神戸遺跡SB4、カマド実測図
第15図 神戸遺跡SB9、カマド実測図
第16図 神戸遺跡SB10、カマド実測図
第17図 神戸遺跡SB16実測図
第18図 神戸遺跡SB22、カマド実測図
第19図 神戸遺跡SB24、カマド実測図
第20図 神戸遺跡ST1実測図
第21図 神戸遺跡SK743実測図
第22図 神戸遺跡古代土坑の長軸と短軸関係図
第23図 神戸遺跡古代土坑実測図
第24図 神戸遺跡ST7実測図
第25図 神戸遺跡ST11実測図
第26図 神戸遺跡ST13実測図
第27図 神戸遺跡ST14実測図
第28図 神戸遺跡SE1実測図
第29図 神戸遺跡中世墓址実測図
第30図 神戸遺跡中世墓址実測図
第31図 神戸遺跡中世土坑の長軸と短軸関係図
第32図 神戸遺跡中世土坑実測図
第33図 神戸遺跡中世土坑実測図
第34図 神戸遺跡水田址実測図
第35図 神戸遺跡水田址土層断面図
第36図 神戸遺跡水田址プラント・オパール
定量分析結果
第37図 神戸遺跡SB22～25出土須恵器法量分布図
第38図 神戸遺跡包含層出土緑釉陶器・輸入陶磁器
実測図
第39図 神戸遺跡出土墨書文字集成
第40図 神戸遺跡出土文字関係資料実測図
第41図 神戸遺跡出土石錐長幅比グラフ
第42図 神戸遺跡時期別古代遺構分布図
第43図 神戸遺跡時期別古代遺構分布図
第44図 神戸遺跡中世1期の掘立柱建物址群
第45図 神戸遺跡中世2期の掘立柱建物址群
第46図 神戸遺跡中世墓址分布図
第47図 上二子遺跡付近地形図
第48図 上二子遺跡トレンチ、遺構配置図
第49図 上二子遺跡土層概念図
第50図 上二子遺跡SB1、カマド実測図
第51図 上二子遺跡出土縄文時代遺物実測図
第52図 上二子遺跡出土古代土器実測図
第53図 上二子遺跡出土中世土器・陶磁器、土製品実
測図
第54図 中二子遺跡付近地形図
第55図 中二子遺跡トレンチ・グリット、遺構配置図
第56図 中二子遺跡遺構分布図
第57図 中二子遺跡遺構分布図
第58図 中二子遺跡土層概念図
第59図 中二子遺跡SB1、カマド実測図
第60図 中二子遺跡SB4、カマド実測図
第61図 中二子遺跡SB5、カマド実測図
第62図 中二子遺跡SB12実測図
第63図 中二子遺跡SB12カマド実測図
第64図 中二子遺跡SB15カマド実測図
第65図 中二子遺跡SB15実測図
第66図 中二子遺跡SB17カマド実測図
第67図 中二子遺跡SB17実測図
第68図 中二子遺跡SB19カマド実測図
第69図 中二子遺跡SB20、カマド実測図
第70図 中二子遺跡SB23実測図
第71図 中二子遺跡SB29実測図
第72図 中二子遺跡SB29カマド実測図
第73図 中二子遺跡ST1実測図
第74図 中二子遺跡ST4実測図
第75図 中二子遺跡ST7実測図
第76図 中二子遺跡ST9実測図
第77図 中二子遺跡ST16実測図
第78図 中二子遺跡古代墓址実測図
第79図 中二子遺跡古代土坑の長軸と短軸関係図
第80図 中二子遺跡SX3実測図
第81図 中二子遺跡SX4実測図
第82図 中二子遺跡中世火葬墓実測図
第83図 中二子遺跡出土墨書土器実測図

- 第84図 中二子遺跡出土石錘長幅北グラフ
 第85図 中二子遺跡出土中世土器実測図
 第86図 中二子遺跡時期別古代遺構

- 第87図 中二子遺跡時期別古代遺構
 第88図 中二子遺跡堅穴住居址・掘立柱建物址・主軸(直交軸)方向

図 版 目 次

- 図版1 神戸遺跡古代遺構割付け図
 図版2 神戸遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版3 神戸遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版4 神戸遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版5 神戸遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版6 神戸遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版7 神戸遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版8 神戸遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版9 神戸遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版10 神戸遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版11 神戸遺跡古代遺構実測図(中部)
 図版12 神戸遺跡古代遺構実測図(中部)
 図版13 神戸遺跡中世遺構割付け図
 図版14 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版15 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版16 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版17 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版18 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版19 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版20 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版21 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版22 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版23 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版24 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版25 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版26 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版27 神戸遺跡中世遺構実測図(中部)
 図版28 神戸遺跡中世遺構実測図(北部)
 図版29 神戸遺跡中世遺構実測図(北部)
 図版30 神戸遺跡中世遺構実測図(北部)
 図版31 神戸遺跡中世遺構実測図(北部)
 図版32 神戸遺跡縄文時代遺物実測図
 図版33 神戸遺跡古代土器実測図(SB1・2)
 図版34 神戸遺跡古代土器実測図(SB2)
 図版35 神戸遺跡古代土器実測図(SB3~9)
 図版36 神戸遺跡古代土器実測図(SB10~12)
 図版37 神戸遺跡古代土器実測図(SB13~15)
 図版38 神戸遺跡古代土器実測図(SB16~18)
 図版39 神戸遺跡古代土器実測図(SB18~21)

- 図版40 神戸遺跡古代土器実測図(SB22~25)
 図版41 神戸遺跡古代土器実測図(SB25・SK25・28・743・NR1)
 図版42 神戸遺跡古代金属製品・石製品実測図
 図版43 神戸遺跡中世土器・陶磁器実測図
 図版44 神戸遺跡中世土器・陶磁器実測図
 図版45 神戸遺跡中世土器・陶磁器実測図
 図版46 神戸遺跡中世土器・陶磁器実測図
 図版47 神戸遺跡中世金属製品実測図
 図版48 神戸遺跡中世金属製品実測図
 図版49 神戸遺跡中世金属製品・石製品実測図
 図版50 神戸遺跡近世陶磁器・遺構外出土金属製品・石製品実測図
 図版51 神戸遺跡遺構外出土石製品実測図
 図版52 中二子遺跡遺構割付け図
 中二子遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版53 中二子遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版54 中二子遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版55 中二子遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版56 中二子遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版57 中二子遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版58 中二子遺跡古代遺構実測図(北部・南部)
 図版59 中二子遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版60 中二子遺跡古代遺構実測図(北部)
 図版61 中二子遺跡古代遺構実測図(南部)
 図版62 中二子遺跡古代遺構実測図(北部)
 図版63 中二子遺跡古代遺構実測図(北部・南部)
 図版64 中二子遺跡古代遺構実測図(北部)
 図版65 中二子遺跡古代遺構実測図(北部)
 図版66 中二子遺跡古代遺構実測図(北部)
 図版67 中二子遺跡古代土器実測図(SB1~11)
 図版68 中二子遺跡古代土器実測図(SB12)
 図版69 中二子遺跡古代土器実測図(SB14~19)
 図版70 中二子遺跡古代土器実測図(SB19~23)
 図版71 中二子遺跡古代土器実測図(SB24~28)
 図版72 中二子遺跡古代土器実測図(SB29・SK3・4・7・12・SX1・3・4)
 図版73 中二子遺跡古代金属製品・石製品実測図

写真図版目次

- P L 1 調査遺跡周辺航空写真
 P L 2 神戸遺跡遠景
 P L 3 神戸遺跡調査区近景
 P L 4 神戸遺跡SB1・カマド、SB2・カマド
 P L 5 神戸遺跡SB4、SB5
 P L 6 神戸遺跡SB9・カマド、SB10・カマド
 P L 7 神戸遺跡SB22・カマド、SB24・カマド
 P L 8 神戸遺跡ST1、SK4・6・28・30・743
 P L 9 神戸遺跡ST6・7・8
 P L 10 神戸遺跡ST14・15、水田址
 P L 11 神戸遺跡中世土坑群
 P L 12 神戸遺跡SK114・180・218・224・240・270・303
 P L 13 神戸遺跡SK338・363・388・389・419・460・469・487
 P L 14 神戸遺跡SB1・2出土土器
 P L 15 神戸遺跡SB2出土土器
 P L 16 神戸遺跡SB10・15・22出土土器
 P L 17 神戸遺跡SB25、SK28出土土器
 P L 18 神戸遺跡SK743、遺構外出土土器、
緑釉陶磁・白磁
 P L 19 神戸遺跡出土文字資料、古代金属製品
 P L 20 神戸遺跡古代金属製品、石製品
 P L 21 神戸遺跡出土中世土器、陶磁器
 P L 22 神戸遺跡出土中世土器、陶磁器
 P L 23 神戸遺跡出土中世土器、陶磁器
 P L 24 神戸遺跡出土中世土器・陶磁器
 P L 25 神戸遺跡出土中世土器・陶磁器
 P L 26 神戸遺跡出土中世金属製品
 P L 27 神戸遺跡出土中世金属製品
 P L 28 神戸遺跡出土中世石製品
 P L 29 神戸遺跡遺構外出土金属製品、石製品
 P L 30 上二子遺跡遠形、近景
 P L 31 上二子遺跡SB1、出土土器・土製品
 P L 32 中二子遺跡遠景、近景
 P L 33 中二子遺跡近景、SB1
 P L 34 中二子遺跡SB3、SB4・カマド
 P L 35 中二子遺跡SB5・カマド、SB8・カマド
 P L 36 中二子遺跡SB9・SB14・SB15
 P L 37 中二子遺跡SB17・カマド、SB22・カマド
 P L 38 中二子遺跡SB25・カマド、SB29・カマド
 P L 39 中二子遺跡SB1・4
 P L 40 中二子遺跡ST6・7・9
 P L 41 中二子遺跡ST10・11・16
 P L 42 中二子遺跡SK3・4・7・11・12
 P L 43 中二子遺跡SB4・15・17出土土器
 P L 44 中二子遺跡SB12出土土器
 P L 45 中二子遺跡SB19・SB20出土土器
 P L 46 中二子遺跡SB24・28、SK4出土土器
 P L 47 中二子遺跡出土古代金属製品、石製品
 P L 48 中二子遺跡SB22・25出土石錘

挿表・付表目次

- | | |
|---|--|
| <p> 第1表 神戸遺跡古代土坑形態分類表
 第2表 神戸遺跡中世土坑形態分類表
 第3表 神戸遺跡水田址田面形状・面積・標高表
 第4表 神戸遺跡水田址アの規模・走向表
 第5表 神戸遺跡縄文土器片地区別出土一覧表
 第6表 神戸遺跡SB1出土土器構成表
 第7表 神戸遺跡SB2出土土器構成表
 第8表 神戸遺跡SB9出土土器構成表
 第9表 神戸遺跡SB15出土土器構成表
 第10表 神戸遺跡SB25出土土器構成表
 第11表 神戸遺跡文字関係資料一覧表
 第12表 神戸遺跡転用視一覧表
 第13表 神戸遺跡出土銭貨一覧表
 第14表 神戸遺跡近世土器、陶磁器器種構成表
 第15表 神戸遺跡近世土器、陶磁器産地別用途構成表
 第16表 中二子遺跡古代土坑形態分類表 </p> | <p> 第17表 中二子遺跡SB1出土土器構成表
 第18表 中二子遺跡SB4出土土器構成表
 第19表 中二子遺跡SB11出土土器構成表
 第20表 中二子遺跡SB12出土土器構成表
 第21表 中二子遺跡SB19出土土器構成表
 第22表 中二子遺跡SB20出土土器構成表
 第23表 中二子遺跡SB22出土土器構成表
 第24表 中二子遺跡墨書土器一覧表
 付表1 神戸遺跡古代竪穴住居址一覧表
 付表2 神戸遺跡古代・中世獨立柱建物址一覧表
 付表3 神戸遺跡遺構別古代土器一覧表
 付表4 中・近世土器、陶磁器出土遺構一覧表
 付表5 中二子遺跡古代竪穴住居址一覧表
 付表6 中二子遺跡古代獨立柱建物址一覧表
 付表7 中二子遺跡遺構別古代土器一覧表 </p> |
|---|--|

第1章 ^{ごうど いせき}神戸遺跡 (EGD)

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

神戸遺跡は松本市の南西部に位置する大字笹賀字神戸地籍にあり、現神戸集落を含む水田地帯一帯が遺跡の範囲である。遺跡の中心部は、時代による移動はあろうが、今までに縄文土器、土師器、灰釉陶器等が採集されている長照寺から神戸公民館を中心とした一帯と思われる。中央道長野線にかかる範囲は3.591-2番地の水田を中心とし、奈良井川と神戸集落のほぼ中間にあり、遺跡の東端部にあたる。

遺跡は、松本平を東西に二分して北流する奈良井川左岸に形成された自然堤防上に立地し、北東方向へ緩く傾斜する平坦部は小段丘脊を経て、比高差5-6mをもつ現河床へ続く。遺跡の標高は627~629mを測る。

本遺跡の過去の調査に、昭和55年11月、本調査区南西300mの地点で、園場整備事業にかかわる発掘調査が松本市教育委員会により実施され、平安時代後半の竪穴住居址2軒、鍛冶場遺構、墓址等が検出されている。

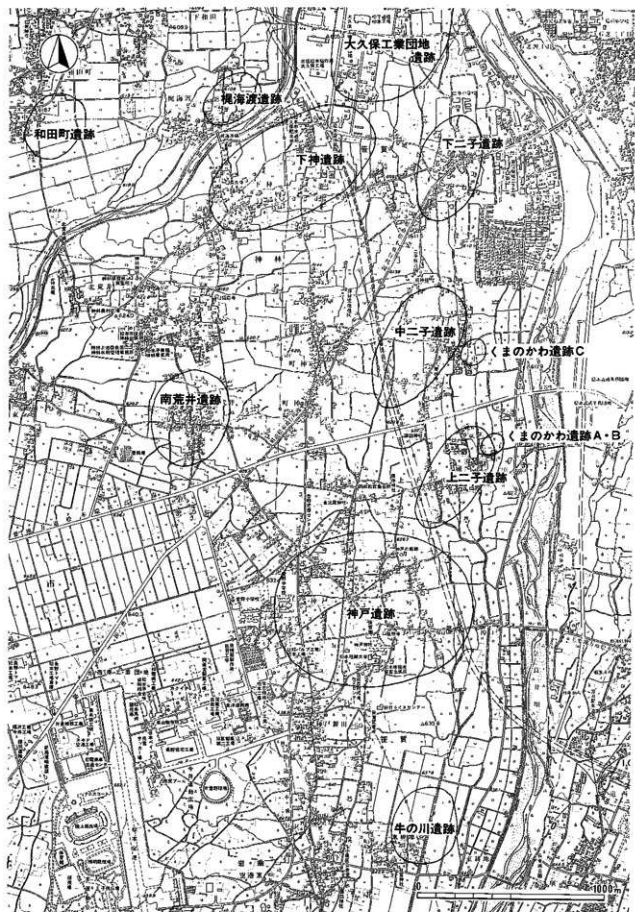
また、遺跡の北には上二子遺跡・くまのかわ遺跡・中二子遺跡・下神遺跡が続き、北西に南荒井遺跡、南に牛の川遺跡・今村遺跡が位置する。これらの遺跡は奈良・平安時代に営まれた集落跡を中心としており、奈良井川左岸の自然堤防上に、規模の差はあるものの、集落が点在していたことが知れる。

2 調査の概要

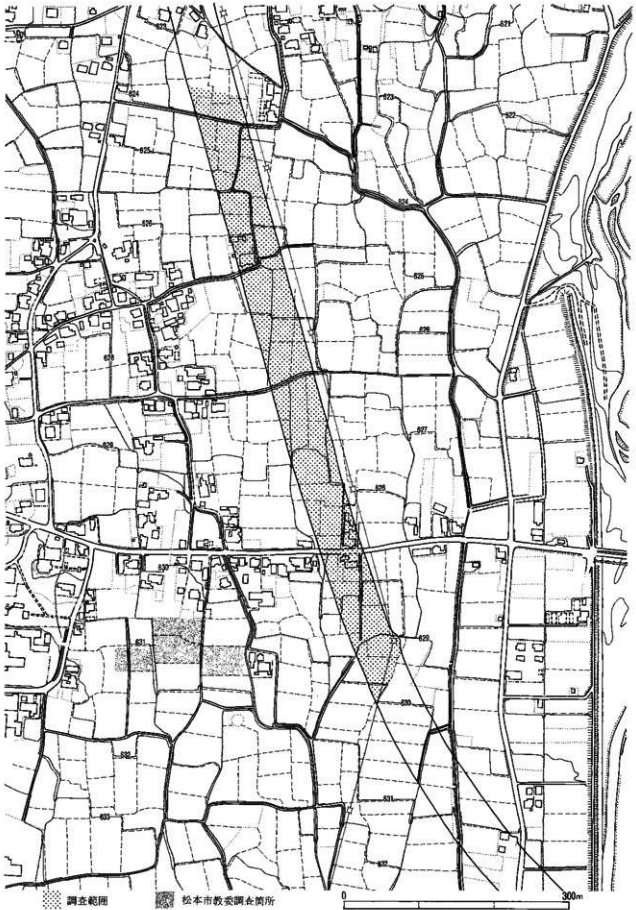
昭和59年10月、調査研究員3名により先行トレンチを県道横沢・村井線の南と北へ6本設置し、遺跡範囲の確認と遺物包含層の確認を行った。翌年も順次北へトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。その結果、県道南・北地区からは耕作土下に続く砂層と砂利層に土師器・灰釉陶器の破片が見られ、平安時代の遺構の存在が予想された。その北に位置する、市道神戸7号線と同10号線に挟まれた地域と、市道10号線北の地域からは中世に属する陶磁器類の出土があり、時期を異にした遺構の広がりが予想された。その範囲は、遺構の存在しない空白部分も含め約40,400㎡に及んだ。翌60年4月より調査研究員8名で本格的な調査に着手した。

県道横沢・村井線を挟む地域を南部地区、市道7号線と10号線に挟まれる地区を中部地区、市道10号線北を北部地区とし、遺構の検出と精査に着手した。トレンチ調査で予想されたように、南部地区からは平安時代を中心とした竪穴住居址群が、中・北部からは中世の墓址を中心に掘立柱建物址、溝址等が検出された。さらに中部地区北には奈良時代末の竪穴住居址4軒と土坑が構築されており、時期によりその占拠場所を変えていることが判明した。昭和60年11月15日発掘調査のすべてを終了した。延調査期間は210日を数えた。

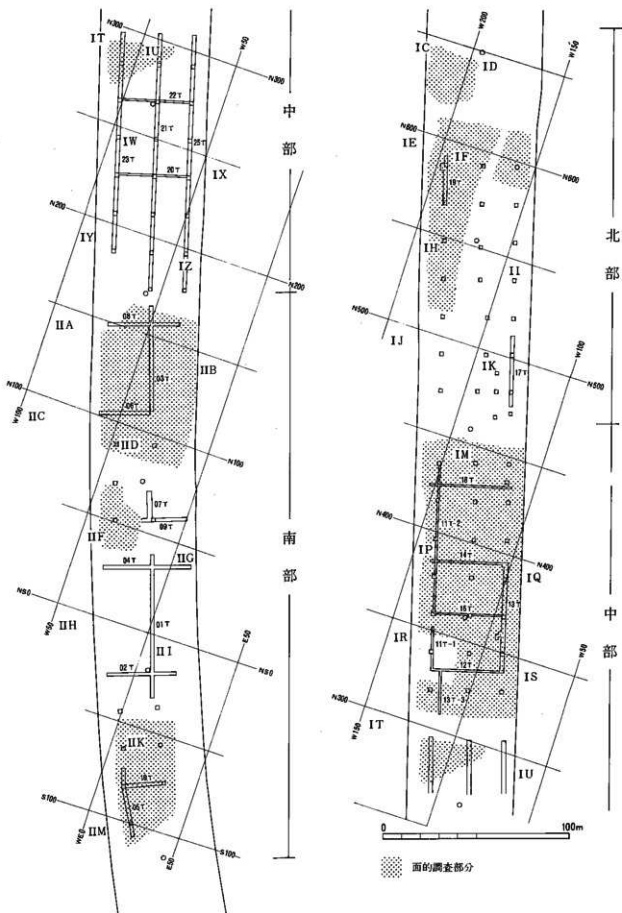
測量基準点は、日本道路公団の工事に用杭STA185+20 (X=19288, 7955, Y=-49909, 4285) を用い、この点をNS=0、WE=0とし、50m四方の大地区を設定した。遺構の測量は座標に合せた杭を用い、写真測量を併用した簡易遺方によった。標高も道路公団の工事に用杭より引き出し、調査区内に独自のべ



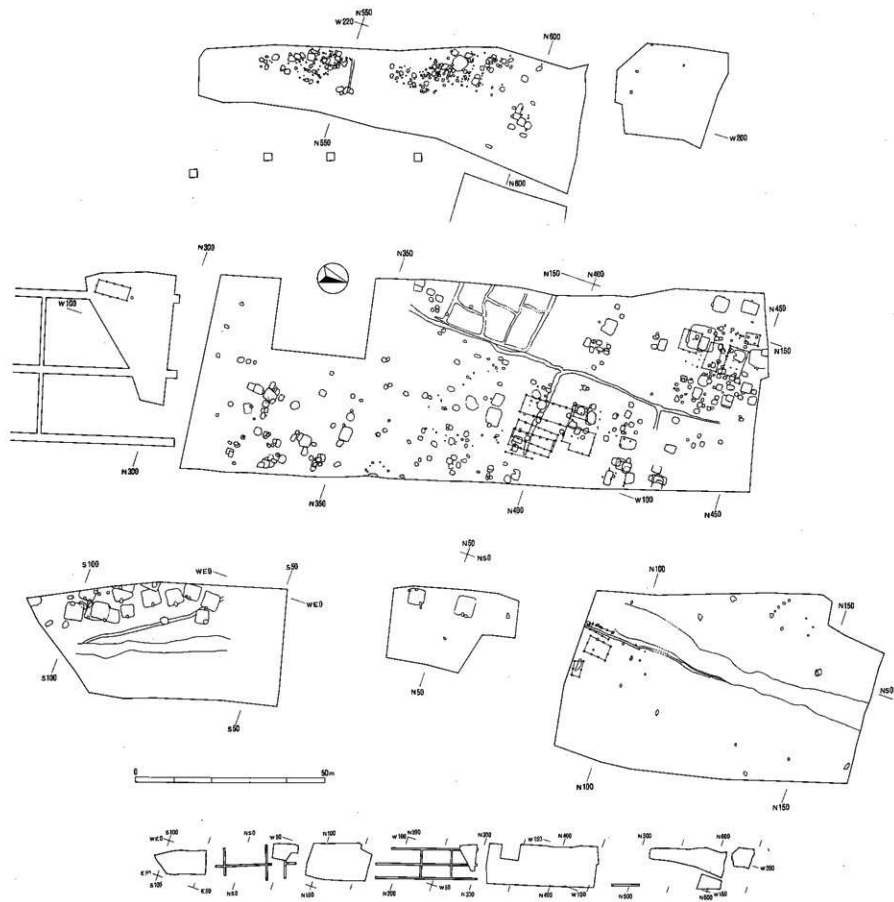
第1図 松本市佐賀、神林地区遺跡分布図 (1:20000)



第2図 神戸遺跡付近地形図 (1:5000)



第3図 神戸遺跡トレンチ、大地区配置図 (1:2000)



第4図 神戸遺跡遺構分布図 (1:1000)

ンチマークを設定し使用した。遺構分布図は、気球等を使用して作成された写真測量図を手書き図により補正した。

整理作業は、発掘調査の終了した昭和59年12月1日から12月13日、昭和60年12月16日から翌3月末までの冬期間に主として図面整理、遺構所見カードの作成を行った。昭和61年、調査研究員1名で未整理の図面類整理を4月より6月20日、及び11月に行い、報告書刊行にむけての諸整理は、昭和62年4月より着手し報告に至った。

3 調査の経過

昭和59年度

- 10月22日 確認調査開始。果道横沢・村井線の南へ01・02・04・05・10トレンチを、北へ03・06・07・08・09トレンチを設定し、01・02トレンチの掘り下げを始める。
- 10月31日 01トレンチ北に土師器甕・須恵器小瓶等遺物の出土が多い。耕作土下に砂層、砂利層と続き、遺物は砂利層上面に多く見られる。
- 11月9日 01・02・04トレンチ調査終了。土層断面実測図取り始める。06・03トレンチの掘り下げ。中世陶磁器・灰釉陶器・須恵器破片の出土や多い。
- 11月19日 08トレンチ掘り下げ。遺物少ない。
- 11月30日 果道南地区の確認調査終了する。
- 12月1日 土層図の整理、写真整理始める。13日終了。

昭和60年度

- 4月22日 トレンチ・テストピットの設定、調査開始準備を始める。
- 4月30日 発掘調査開始式。中部地区のテストピット掘り下げ始める。中・近世陶磁器・土師器・須恵器・灰釉陶器破片若干出土する。
- 5月8日 果道北地区のトレンチ掘り下げ始める。
- 5月21日 南部地区最南端の05トレンチより、竪穴住居址と思われる落ち込み3か所確認。遺物の出土も多くなる。
- 5月28日 重機により果道南の表土掘り下げを始める。北部19トレンチより土坑等の落ち込みが多数検出される。内耳土器片が多く出土する。
- 6月3日 果道北地区の表土除去を重機により始める。南地区遺構検出作業。
- 6月26日 南部地区遺構精査。SB1・2、ST1～5、SD1は終了。
- 7月19日 北部地区・中部地区、表土除去作業と平行して遺構検出作業を続ける。北部では土坑・柱穴を多数検出、遺物は中世のものが多いとみられる。
- 8月1日 中部地区全面の表土除去を始める。水田と思われる部分の精査を続ける。
- 8月13日 中部地区で4面の水田を確認。中世に属すると思

- われる。墓域、住居地、生産域が窺いそうである。
- 9月5日 南部地区の調査終了。竪穴住居址24軒、掘立柱建物址2棟、土坑63基。
- 9月20日 北部・中部地区とも遺構の掘り下げ、実測図取り、写真撮影。午後空測実施。
- 10月4日 北部SK180の調査終了し、北部地区発掘調査のすべてを完了する。土坑277基。中部地区水田址空測実施。
- 10月15日 水田址公開。報道関係者・研究者等25名参加。
- 11月14日 中部地区空測実施。遺構の実測図取り・写真撮影は終了。
- 11月21日 SK487より常滑系大甕が出土する。再度付近の精査が必要となり、調査期間を12月初旬まで延期する。
- 11月29日 すべての発掘調査を終了する。中部地区、竪穴住居址4軒、掘立柱建物址11棟、土坑402基、他に溝址・水田址・井戸址。
- 12月16日 整理作業始める。遺構カード・実測図の点検・整理。写真の整理。
- 3月31日 今年度の整理作業終了する。

昭和61年度

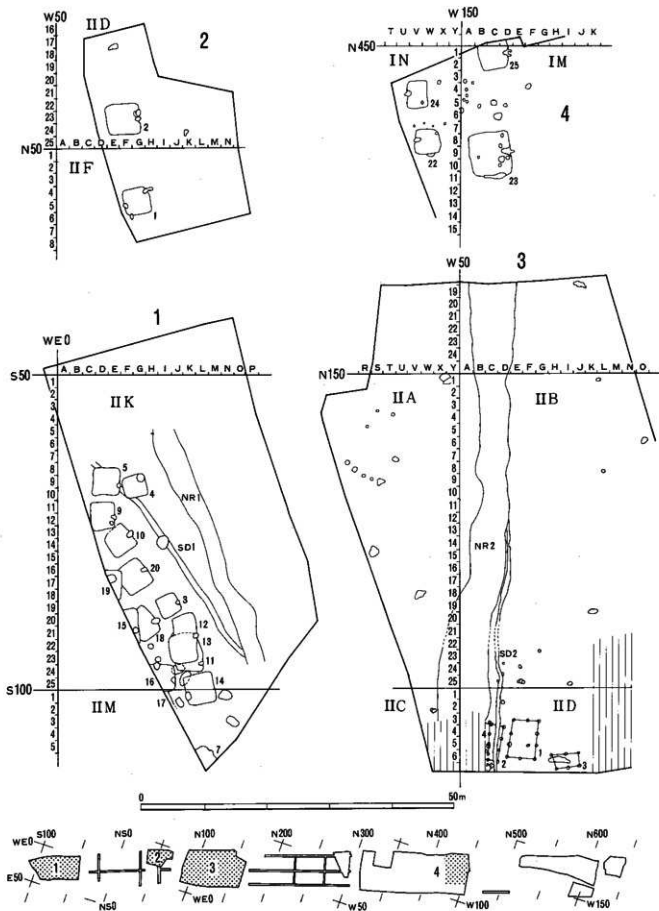
- 4月1日～6月20日、11月1日～11月30日
調査員1名により、空測図・手書図のつぎ合わせを行い、全体図の作成を行う。

昭和62年度

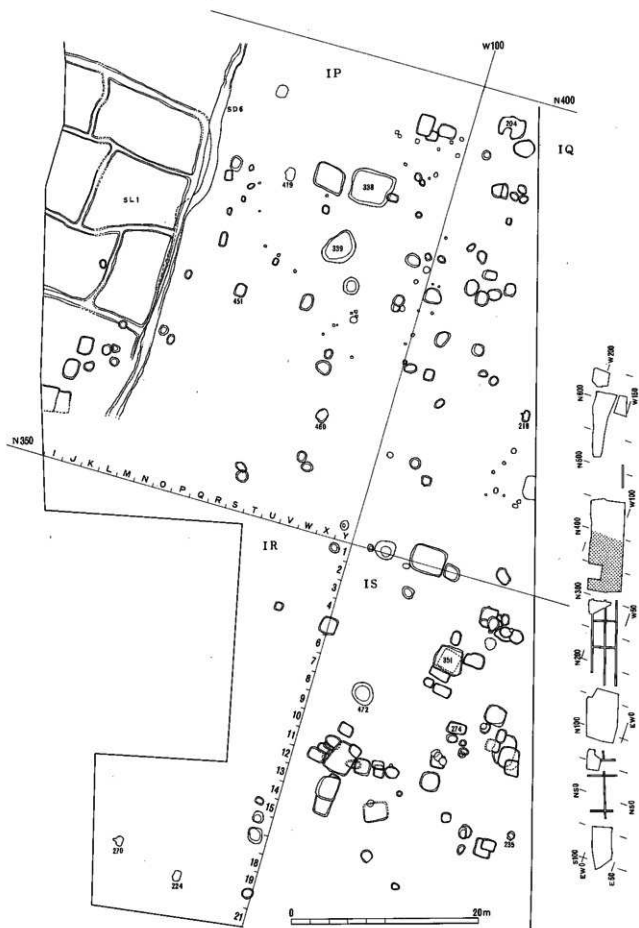
- 4月～3月 遺構図版レイアウトを調査研究員1名で行う。遺物の計測・選別を調査研究員1名と整理作業員2名で行う。
古代・中世土器、鉄製品、石器等遺物実測を始める。
遺構・報告書組み立て検討。

昭和63年度

- 4月～11月 報告書刊行にむけて、遺物図版レイアウト、遺物写真撮影、焼き付け、写真図版組、遺構・遺物図版トレス、原稿執筆を行う。



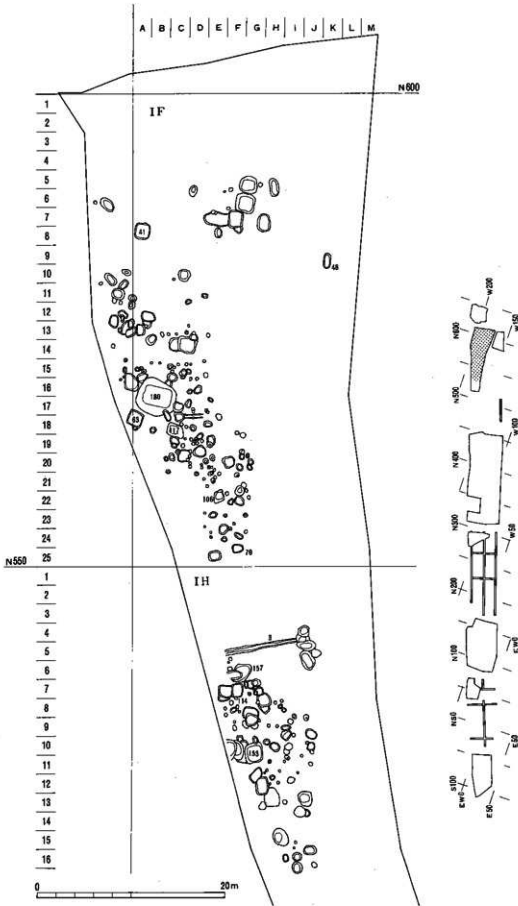
第5図 神戸遺跡古代遺構・グリッド配置図 (1 : 600)



第6図 神戸遺跡中世遺構・グリッド配置図(中部)(1:400)



第7図 神戸遺跡中世遺構・グリット配置図(中部)(1:400)



第8図 神戸遺跡中世遺構・グリット配置図(北部)(1:400)

第2節 基本層序と微地形

1 基本層序

I A層 淡黄褐色含礫泥層。神戸遺跡で見られる土層の最上位にあり、ほぼ全面を被覆する。層厚は一般に30～40cmである。小礫・風化礫を塊状に含み、シルトにまとまりを持つ泥質の基質から成る。

上半部は全面が現耕作土となっており、下半部は鉄・マンガンが集積する。中・南部地区の境界付近が最も厚く堆積しており、両側へ楔状に層厚を減しながら北部地区で消滅する。堆積前の旧河道が想定される箇所では基質が粗粒になる傾向にある。

I B層 灰褐色含礫泥層。II A層の低所を埋積し、I A層におおわれる。中部地区から北部地区にかけて分布し、層厚は10～30cmである。小礫・風化礫を散点させ、基質は細砂で風化した黒雲母が目立つ。

中部地区の広い範囲で本層上部が水田土壌化し、北部地区では現水田の土壌下によるマンガンが集積する。全体的に北方へ層厚を増し、上二子遺跡のI B層へ連続する。

I D層 オリーブ灰色含礫泥層。南部地区の南端付近に小分布し、上限はI A層におおわれる。層厚は一般に5～10cmほどである。小礫を塊状に含み、細砂の基質から成る。

西から東へ傾斜して堆積し、層厚・礫の含有率が増す。また、含まれる礫も大型化する。

II A層 明褐色～明赤褐色シルト層。III層またはII下層による凹地を埋積し、I B層I A層におおわれる。粗粒のシルト(5φ)に中央値を持ち、礫は含まない。本遺跡のほぼ全域に分布し、層厚は30～70cmで中部地区南半が最も厚い。

上面は緩やかな起伏が形成されており、その凹地にはしばしば河川による堆積物が認められる。これらをI r層と呼ぶ。この内、中部地区に見られるものが最も規模が大きく、上限の幅が10+m、厚さが60+cmで、ほぼ南北方向に走る。II A層は前半に明瞭な土質の変化は認められないが、中部地区の上記I r層を境に色調が若干異なる。南側(中・南部)はやや黄味を帯びており、南部地区の一部で5cmほどの腐植土壌が認められるものの漸移層の発達が弱い。北側(北・中部地区)は赤褐色を帯び、ときに黒色の腐植土壌が上限に認められる所もある。赤褐色部を漸移層と解釈すると土壌化の進行が著しいことを示している。

II B層 褐色含礫泥層。III層またはII下層上面の小規模な凹地をおおい、II A層におおわれる。小礫を塊状に含み、細砂～シルトの基質から成る。北・中部地区の境界周辺の地表下120～130cm付近に小分布し、層厚は15～25cmほどである。

II F層 砂礫層。III層またはIV層をおおい、II A層またはII B層におおわれる。中～小礫から成り、基質は中砂～極粗砂である。北部と南部に小分布し、層厚は20～70cmである。

砂礫層上面のオリエンテーションはN60°EとN30°E付近に集中する。層相は側方変化が著しく、砂礫層はIV層の凸部最高地点に上乘せするように堆積し、凹部側へ砂層に変化し、層厚も減少してやがて消滅する。

III層 オリーブ色シルト層。IV層の凹地を埋積し、II層におおわれる。きわめて淘汰が良く、礫や砂は混入しない。ほぼ全域の低地に不連続に分布し、層厚は10～50cmである。

層相は安定しているが、しばしば細砂をレンズ状に挟み、特にIII層基底付近では中砂を20cm厚に挟むことがある。II層との境界は凹凸に富み、II層下限が深くまで垂れ下がる中部地区南端付近ではIII層を欠如する。こうした箇所ではII層基底部が河原砂となっており、本来はIII層がIV層の凹地を埋積してほぼ一様の平坦面を形成したが、II層の堆積に関して多くが浸食されたと考えられる。なお、北部地区北端付近で

は上部が褐色シルト層となっており、2色調の本層が北側へ緩く傾斜している。

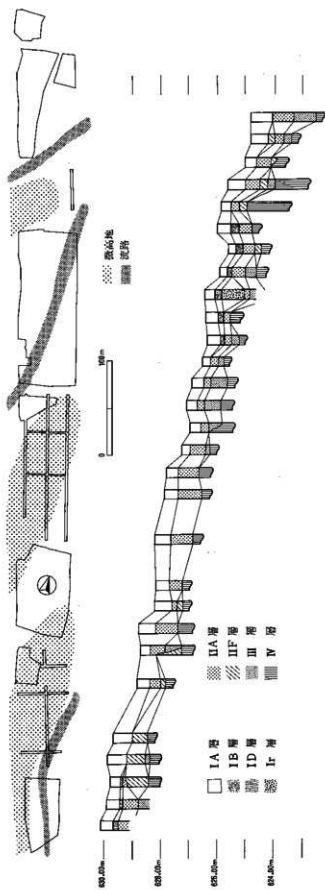
IV層 礫層。本遺跡の基底を構成し、上面は波状の凹凸を持つ。大礫から成り、基質は細砂～中砂である。主な礫種は硬砂岩・砂岩・頁岩・チャートなどで、片岩・珪岩も含む。

上面は詳細に見ると軸の一定しない小刻みな起伏を示すが、巨視的には北部・南部地区それぞれに1条ずつの大型の礫堆が存在する。頂部の軸方向は北北東から南南西をとり、調査域内では北・中部地区境界付近と南部地区平安時代居住域の北縁付近に現れる。底部の軸は頂部に平行し、位置が2つの頂部間の北側へ著しく偏り、中部地区の中央付近で調査区域に斜交する。この底部が位置を変えずにかなりの期間生き続け、III層の厚い被覆・II層基底の深部への浸食・II A層の層相変化・I r相の堆積を招いた。

2 遺構切込面の微地形

遺構切込面は、検出所見からII A層上面が2期から9期、I D層上面が10期から15期、I B層上面が16世紀とされている。

古代を通して地形景観はそれほど大きな変化はなかったと考えられる。遅くとも古墳時代には、本遺跡付近にII A層による2つの微高地が出現していた。どちらも南方縁に北北東から南南西方向の頂部を持ち、微高地間には奈良井川の分流が流れていた。本遺跡は、南側の微高地北端の頂部付近から北側の微高地中央の頂部付近までが範囲となっている。南側の微高地は、頂部の50mを越えない辺りに奈良井川の本流が流れており、頂部を越えて北西方には滑走斜面様に小規模な起伏を持ちながら緩斜面が続く。南部地区の密集した竪穴住居址群はその頂部と奈良井川本流の間の斜面上に、掘立柱建物址と竪穴住居址は頂部北西の緩斜面の小凹地周辺に立地する。また北側の微高地は、頂部南東方約25mに奈良井川の分流が流れ、頂部の北西側はやはり小



第9図 神戸遺跡土層概念図

規模な起伏を持つ緩斜面が広がる。中部地区の竪穴住居址群は頂部と分流の間の斜面上に立地する。

平安時代中頃の温暖期を経て中世の冷涼早乾期に至る過程で、松本盆地は洪水が多発する時期を迎える(総論編参照)。その初期の堆積物がI D層であり、本遺跡では南部地区で見い出される。発掘所見によると、I D層は古代8期の集落を襲い、11期の住居址がその上面を切り込んで営まれており、層相が奈良井川に向かって粗粒化かつ傾斜していることから、明らかに奈良井川本流の氾濫が原因している。しかし堆積量はわずかで、全体の地形景観への影響はなかった。

中世前期の間に、河川の流速の衰えのためか2つの微高地間にあった分流が、I F層とI B層の堆積によって消滅している。中部地区の中世の掘立柱建物址と土坑群はこの微低地を中心に立地する。水田址は同地点で掘立柱建物址や土坑群を切って開かれており、自然による大きな地形的変化はなかったと考えられる。現在、本遺跡の東縁は奈良井川の沖積段丘崖に隔されるが、この地形もこの時期に形成されたと推定される。なお、北部地区を除く広い範囲がI A層におおわれる。この結果、以前の起伏は姿を消し、ほぼ平坦な現地形が形成された。

第3節 遺構と遺物

1 遺構

(1) 古代の遺構

ア 竪穴住居址

概観

分布：神戸遺跡の調査区は、北部・中部・南部に分かれるが(第3図)、竪穴住居址は中部・南部にのみ分布している。中部地区の北端に4軒、南部地区西半分に19軒、合計23軒が検出された。中部地区の竪穴住居址は、切り合いも無くそれぞれ独立しているが、南部地区の竪穴住居址は切り合いが激しく、限られた範囲に集中している。

時期：中部地区の4軒はすべて4期に属すが、南部地区のそれは、4期～15期と各時期に分かれる。

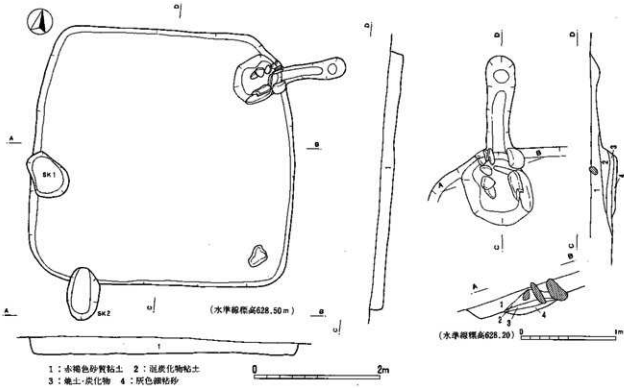
構造・規模：床面積から大・中・小の三種に分類されるが、大型の住居址は4期に1軒あるのみで、他は中～小型に属する。時期別の差は顕著に見られないが、11～15期の住居址は小さくなる傾向が指摘できる。カマドはすべて石組カマドである。床は地山をそのまま利用しているものが大半で、中央部分が堅くなっているものが多い。貼床されているものもあるが、全面に貼床されるものはなく、部分的になされている。周溝が検出された住居址はなく、柱穴の検出された住居址は1軒だけである。検出面が低いこともあり、覆土の様子を詳しく観察できなかったが、自然埋没した住居址が多い。なかには大形の礫が投げ込まれた住居址もあり、廃棄の様子を知ることができる。

SB1

位置：南部

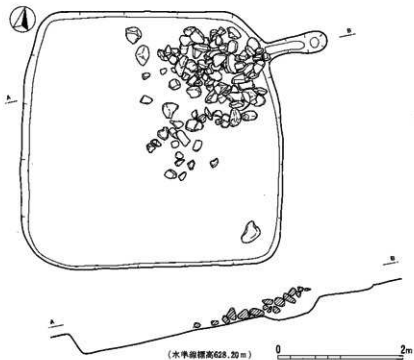
図版5、第10・11図

検出：II A層上面に大礫が多量に散乱している地域があり、その周辺を掘り下げたところ、地山となるII A層の上面下15cmで、赤褐色砂質粘土が一辺約4mの範囲に方形に落ち込んでいた。SK1が西壁、SK2が南壁上に重複して検出されたが、いずれも本址を切っている。カマド：石組カマドで、側壁両袖先端部の芯材に人頭大の花崗岩を用い、他は砂岩を使用している。上部に扁平な河原石を乗せて高さを均衡させ、その上に天井石をのせていた。煙道は壁外に長く延び、先端に径31cm、深さ10cmのピットがみられた。床：



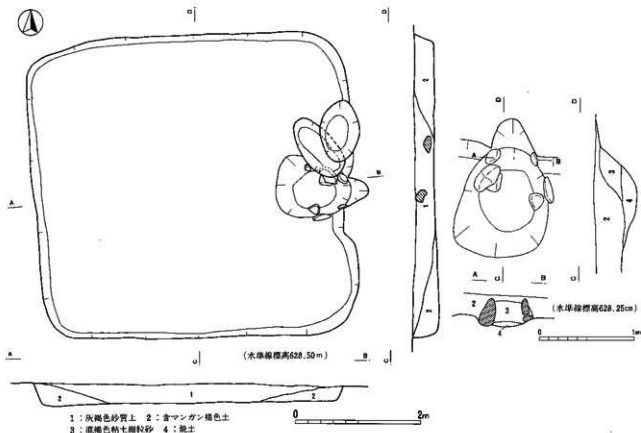
第10図 神戸遺跡SB1、カマド実測図

III層上面まで掘り下げた地山面を床とし、全体に堅く締まっているが貼床は施されていない。東南壁直下に 32×24 cmの扁平な河原石が下半部を床に埋めた状態で検出された。表面は円滑であり、「あて石」等の作業台の機能が考えられる。埋没状況：覆土が浅く分層は不可能なため埋没状況を把握できないが、覆土中に土塊の混入等は見られないので自然埋没と思われる。しかし、カマド上部から住居址内にかけて大形の礫が投棄されていることから、廃棄の際礫が投げ込まれその後自然埋没していったものと考えた。遺物の出土状況：



第11図 神戸遺跡SB1 廃棄礫実測図

況：カマド内、同前部、東壁際に本址に帰属と思われる土師器杯（図版33-1~6）とカマド南から灰釉陶器（同8-10）が出土したのみで、他は全て覆土中のものである。土師器杯・皿・甕、黒色土器A杯、灰釉陶器碗・皿の破片の他、石製品では砥石が出土している。器形を復元出来るものは少なく全体の量も少ない。土器の帰属時期から15期に属する住居址である。



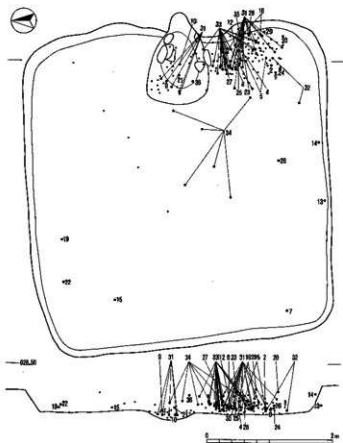
第12図 神戸遺跡SB2、カマド実測図

SB2

位置：南部

図版5、第12・13図

検出：II A層を掘り込み、暗褐色砂質土にII A層が混じる土が、方5mの範囲に落ち込んでおり、竪穴住居址と判断した。カマド北部分がSK3・4に、西壁付近はSK734～739の5基の小ビットに切られる。カマド：石組カマドで、袖石はほとんど抜き取られ数個残っているだけである。火床には焼土が厚さ6cm程堆積していた。床：地山面を床にする。西側部分にやや傾斜をもち、全体に堅い床であるが、貼床は認められない。周溝、ビット等内部施設はない。埋没状況：マンガンが多量に含まれる褐色土が南壁際より流れ込み、その上に灰褐色土が堆積する。人為による埋没土に特徴的に見られる、ブロック状土塊の混入が見られないことから自然埋没と考えた。遺物の出土状況：住居址全面の覆土中より出土するが、特にカマド南側部分の床面に集中する。この箇所は、カマドに使用されたと思われる大形の礫が投棄されており、礫の下



第13図 神戸遺跡SB2 出土土器接合関係図

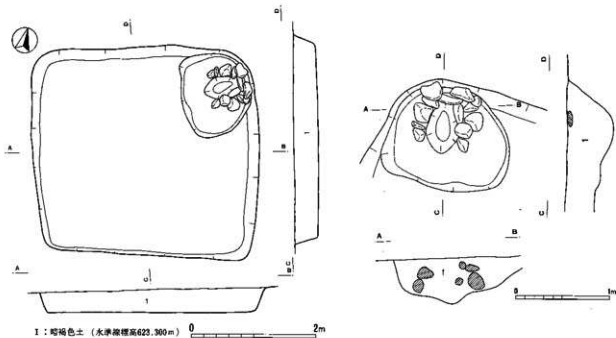
部に土師器・須恵器が大量に見られた。食器は土師器杯・盤、黑色土器A杯・椀、軟質須恵器杯、灰釉陶器椀・皿、煮炊具は土師器甕、貯蔵具は須恵器四耳壺・長頸瓶、灰釉陶器壺類が出土している。鎌・鎌・釘の鉄製品もカマド付近、床中央部から出土している。出土した土器のほとんどは8期に属していることから、8期の住居址と判断した。

SB 3 位置：南部 図版 3

検出：II A層上面で方約3.5mの暗褐色土の落ち込みを確認し、堅穴住居址と判断した。他の遺構との切り合いはない。カマド：石組カマドで、袖石は壁近くの左袖に2個、右袖に1個残っているだけで、他は抜き取られたものか無い。支脚石が燃焼部やや奥にある。焚口部の掘り込みは浅く、焼土の量も僅かであった。床：地上直上に僅かに残るII A層を床にする。中央部は堅く締まるが、壁際になるほど柔らかくなり、全体にやや凹凸をもっている。埋没状況：覆土は2層に分層でき、粘土混じりの黒褐色細粒砂が壁際に流れ込み、その後上層が堆積する覆土のあり方から、自然埋没と判断した。遺物の出土状況：ほとんどが覆土からの出土であり、その量も僅かである。土師器杯・椀・甕、黑色土器A杯・椀、軟質須恵器杯、灰釉陶器椀・段皿の破片の他、鉄製品が2点出土している。土器類からみて8期に属する住居址である。

SB 4 位置：南部 図版 4、第14図

検出：I D層を掘り下げる段階で暗褐色土の落ち込みがみられたが、明確にはとらえられず、II A層上面でプランが確認できた。一辺約4mの規模をもつ。北西から東南に走るSD1を切る。カマド：北東コーナーに設けられた石組カマドで、両袖芯材の石は良好な状態で残存していた。砂岩が多く用いられている。燃焼部は20cmと割深深く掘り込まれており、焼土も15cmと厚く堆積している。床：中央部分は堅く締まるが、壁際に行くほど軟弱となる。埋没状況：I D層とII A層の混土層が覆土であり、分層はできない。ブロック状土塊の混入も認められず、人為的な埋戻しは考えられない。遺物の出土状況：ほとんどが覆土中より出土したが量は少ない。土師器杯・椀・甕、黑色土器A杯・椀、須恵器壺・甕、灰釉陶器椀・段皿・長頸壺片がそれぞれ出土している。13期に属する遺物が大部分で、4期の須恵器杯・壺・甕片が少量混入している。



第14図 神戸遺跡SB4、カマド実測図

SB5 位置：南部 図版4

検出：I D層を掘り下げII A層上面で検出、暗褐色土が方形に落ち込む。SD 1を北東壁部分が切る。カマド：東壁中央やや南の壁中と床に焼土・炭化物の集中している箇所があり、床面は径45cmの範囲が10cmほど掘り凹められ焼土の堆積がみられることから、この箇所がカマドと推定される。石組・粘土等残存していない。床：中央部及び東半分はかなり固い床になっているが、西半分はII B層の小礫層を掘り込み、その上を淡黄褐色細砂粘質土を用いて貼床がなされている。全体に平坦な床面であるが、東から西へかけて緩やかに傾斜する。埋没状況：I D混土層が覆土であり、自然埋没と考えられる。遺物の出土状況：カマド周辺から土師器甕の破片が出土し、覆土中より土師器甲斐型杯、須恵器杯・蓋・小型壺が出土しているがその量は僅かである。出土遺物より4期に属する住居址と判断する。

SB7 位置：南部

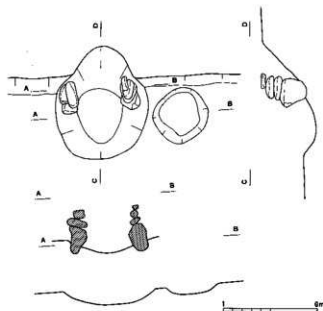
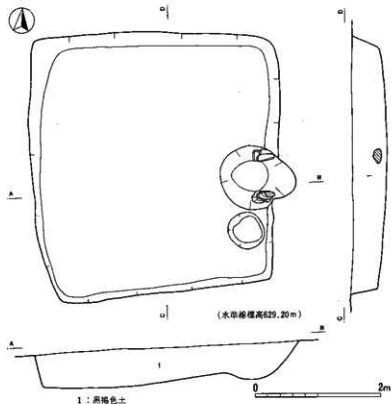
図版2

検出：II A層を掘り込んで暗褐色細粒砂が落ち込む。他の遺構との切り合いはない。調査区域境のため約5分の1ほど調査できたのみである。カマド：石組カマドで、両袖芯材の石組の遺存状態は良く、30cmほどの大形の礫で骨組みを作り、その間を中・小形の礫で埋め構築している。燃焼部は約8cmほど掘り凹められているが、焼土・炭化物はほとんど検出されなかった。床：中央部は礫層の上に褐色を呈すII A層を薄く貼り、床面を作るが、壁際は礫層が露出し凹凸がある。埋没状況：覆土は暗褐色土にII A層が混じる単一層で、青灰色砂質土のブロックや礫層中の小～中礫が入り込んでいることから、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物の出土状況：覆土中に小破片が散乱する。13期に属する土師器杯・碗・甕・羽釜・黒色土器A杯・碗・皿、灰釉陶器碗・皿・段皿が中心となるが、5期に属する武蔵型土師器甕C、須恵器杯・壺・甕も混入する。他に鉄製品1点が出土している。

SB9 位置：南部

図版4、第15図

検出：I D層を掘り下げ、II A層上



第15図 神戸遺跡SB9、カマド実測図

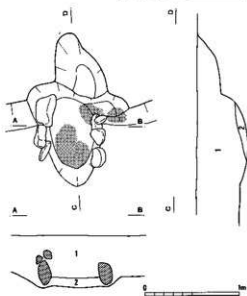
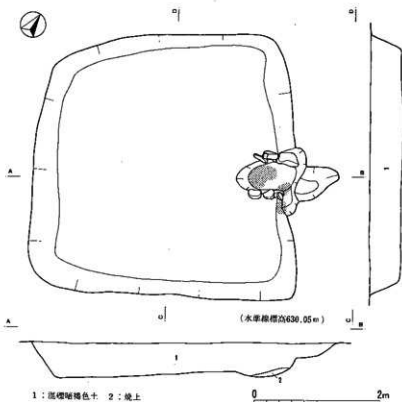
面で検出された。I D層が混じる暗褐色土が方形に落ち込む。他の遺構との切り合いはない。カマド：袖付け根部分にのみ礫を配するカマドである。芯材の礫はそのほとんどに砂岩が用いられている。一番下に径60cmほどの大形の礫を据え、その上に中～小形の礫を3～4段積み重ねている。燃焼部は径80cmの範囲が15cm程掘り凹められ、焼土の堆積が5～10cm見られる。床：中央部から東にかけての部分には貼床が認められるが、西側部分では明らかでなく軟弱である。中央部分がやや凹む。カマド南に径60cm、深さ10cmのビットがあり、西側に焼土の堆積が見られることから、灰溜めビットと判断した。埋没状況：床面直上から床20～30cm上にかけて径20～30cmの大礫が散乱している。覆土はI D層が混じる暗褐色土1層であることから、少なくとも住居址廃絶時に礫が投げ込まれ、その後I D混土層が堆積したと思われる。覆土からは人為的に埋め戻されたものか自然埋没か判断できなかった。遺物の出土状況：覆土中にはあまり見られず、カマド内、灰溜めビットから集中して検出された。黒色土器A杯・甕、須恵器杯・壺・壺・甕、軟質須恵器杯等6期に属する土器がほとんどである。鉄製品が1点出土している。

SB10 位置：南部

図版4、第16図

検出：II A層上面で検出、I D層が混じた暗褐色土が方形に落ち込む。東側部分は、II A層とI D混土層の差が明瞭に認められたが、西側部分はその差が無く検出が困難だった。カマド：石組カマドで、両袖芯材の石組は径30～35cmの花崗岩が用いられており、遺存状態も良い。燃焼部

は10cmほど掘り凹められ、焼土が5～10cm堆積していた。煙道は東へ幅広く伸びるものと、南東へ小さく曲がっていくものと2か所認められる。東に伸びる煙道には焼土・炭化物等見られないが、南東へ曲がるものには焼土も多量に認められることから、南東のものが最終段階の煙道であると判断した。床：全体に軟弱で堅緻な部分は少ない。埋没状況：覆土は、暗褐色土1層で埋没の状況を知る手掛かりは得られなかった。遺物の出土状態：カマド内とカマド南部分に遺物が集中して検出された。カマド左袖北から土師器碗・甕、灰釉陶器碗、カマド南部から土師器杯・甕、須恵器杯、灰釉陶器碗が出土している。南壁から須恵器長頸壺、覆土から墨書のある土師器杯(第40図-2)、黒色土器A杯・碗等が出土している。8期に属する土器である。他



第16図 神戸遺跡SB10、カマド実測図

に鉄釘が1点検出された。

SB11 位置：南部 図版3

検出：切り合いの激しい地区にあり、検出が困難であった。SB6、SK28、SK105を切り、SB13に切られる。そのため、住居址東南隅部分を調査できたのみである。カマド：石組カマドで、砂岩の袖石が両袖に3個ずつ残る。北西部分に、カマドに使われたと思われる大礫の散乱が見られる。燃焼部は円形に掘り込まれるが浅く、焼土もわずかに残っているだけである。床：小・中形の礫が混じる黄褐色細砂粒土を床とするが、全体に軟らかい。埋没状況：暗褐色土一層で、検出面から床面まで浅いため埋没状況はつかめなかった。遺物出土状況：カマド内、カマド北側部分に見られたが量は少ない。南壁際に押し潰された状態で土師器甕が出土した。土師器杯・甕、須恵器甕等8期に属する土器が出土している。

SB12 位置：南部 図版3

検出：II A層上面で検出、暗褐色の覆土が落ち込む。SB21を切り、SB13に切られる。カマド：SB13に切られているため破壊されて無い。西壁南寄りに構築されていたものと思われる。床：II A層下の礫層を床とする。全体に凹凸があり、堅い部分がところどころに見られる。埋没状況：検出面から床面まで浅いため埋没状況は観察できなかった。遺物の出土状況：僅かな量の遺物しか出土していない。覆土中より土師器小盤、灰釉陶器椀・皿が出土している。土師器小盤、灰釉陶器から13期に属する住居址である。

SB13 位置：南部 図版3

検出：II A層上面で検出。SB11・12・21を切る。カマド：石組カマドで、袖芯材に砂岩が用いられている。遺存状態は良い。火床にはわずかに焼土が残る。床：北側半分は、地山の礫上にII A層の土で薄く貼床が施されており堅いが、南側部分はやや軟弱である。埋没状況：掘り込みが浅く、覆土は薄い単層であるため埋没状況はつかみ得なかった。遺物の出土状態：僅かな量の遺物が覆土中に点在しているのみである。土師器杯・小盤、黒色土器A碗、甕、灰釉陶器椀・皿がある。他に鉄滓1点が出土している。8期に属するSB11を切っていることと土器の時期から、13期に属する住居址である。

SB14 位置：南部 図版2

検出：II A層上面で検出。暗褐色土が1辺4.5mの範囲に落ち込む。SK105を切る。カマド：石組カマドで砂岩の右袖石が僅か残る。焼土も僅かしか検出されなかった。床：部分的に黄褐色砂質粘土による貼床が認められるが、他は地山の礫が露出する。埋没状況：覆土が浅く、確認するまで至らなかった。遺物の出土状態：全体に散見される程度で遺物量も少ない。土師器杯・椀・羽釜、黒色土器A杯、須恵器杯、灰釉陶器椀・皿・長頸壺等が出土しており、混入も多いが、13期に属する住居址と判断した。

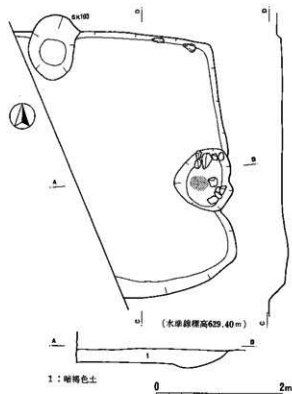
SB15 位置：南部 図版3

検出：II A層上面で検出した。調査区域のため北から東壁の一部が僅かに調査できたのみである。SB18を北壁部分で切る。カマド：東壁に2か所の石組が検出され、カマドが二基あると思われたため精査した。北側の石組は床面より10cmほど浮いており、また、焼土も15cm浮いていることや火床部分が検出されなかったことから、投げ込まれたものと判断し、南側の石組を本址のカマドとした。煙道口に花崗岩が一対立てられ他は砂岩が用いられている。火床部は径80cmの範囲が掘り凹められ、そのうち径30cmの部分に約5cm焼土が堆積している。床：II B層を床とする。全体に凹凸があり、軟らかい。埋没状況：暗褐色砂質土一層で埋没状況を確認することはできなかった。遺物の出土状況：床上5～10cmから全体的に出土しており、遺物の量も多い。土師器杯・有台鉢・甕、黒色土器A杯、軟質須恵器杯、灰釉陶器椀が出土しており、他に鉄鏃1、棒状鉄製品1、鉄滓2が出土している。4期のSB18を切っていることと、土器の様相から、8期の住居址ととらえた。4期に属する須恵器の混入が認められる。

SB16 位置：南部

図版2、第17図

検出：II A層が混じる暗褐色土が覆土となるため、II A層上面での判別が困難であった。SB17の北壁を切り、東壁北半がSK28を切り、SK103に北壁を切られる。西半部分は調査区域外のため調査できなかった。カマド：石組カマドで両袖石が数個ずつ残存しているだけである。燃焼部は約10cmほど掘り凹められ、焼土が30×20cmの範囲に堆積する。床：部分的に堅い床が認められるが、全体に凹凸があり軟らかい床面である。埋没状況：覆土は暗褐色土1層で埋没状態はつかめなかった。遺物の出土状況：床面より5～10cm上に散在しているが、カマド周辺から比較的多く検出された。11期に属する土師器杯・甕・瓶、黒色土器A椀、灰釉陶器碗・皿がある。混入遺物に美濃須衛窯産の壺・甕片がある。鉄器の出土が他の遺構に比べて多く、鉄鐔1、刀子2、苧引金具1、鉄鍬茎1など7点が出土した。また、鉄滓も4点出土している。



第17図 神戸遺跡SB16実測図

SB17 位置：南部 図版2

検出：SB16を精査中に調査区域境で検出された。SB16の南壁に北壁が切られる。調査区域境と東壁が平行するため、検出時に見逃していた点もあるが、東壁の一部分のみで大部分は調査区域外にある。カマド：調査区域境にカマド袖石と思われる大形の礫と焼土を認めたがすべては検出できず、規模構造等つかめなかった。東壁中央に位置する石組カマドが想定される。床：II A層を床とするようであるが、調査面積が狭く確認できなかった。埋没状況：暗褐色土単層で埋没状況を判断できなかった。遺物の出土状況：床上5～10cmから出土するものがほとんどで、8期に属する土師器杯・黒色土器A椀、軟質須恵器杯、灰釉陶器碗、須恵器甕が出土している。須恵器甕は床に置かれた状態で検出された。11期に属するSB16に切られることと土器の機相から、8期に属する住居址である。

SB18 位置：南部 図版3

検出：II A層上面で検出した。SB15に西壁部分を切られる。カマド：左袖付け根部分に大形の礫1個が残存しているだけで、他は破壊されていて無い。カマド石と思われる大形の礫がカマド周辺に散乱している。燃焼部は壁外へ丸く掘り込まれ、内部には焼土ブロックが入り込み、土師器甕の破片が投げ込まれている。床：中央部分は堅く締まるが、壁際へ行くほど軟らかくなる。埋没状況：暗褐色土単層であり埋没状況は判断できない。遺物の出土状況：南壁際とカマド内から検出されたものがほとんどである。土師器甕、須恵器甕が大部分を占め、食器類では、須恵器杯・蓋、美濃須衛窯産須恵器蓋片がわずかに検出されただけである。須恵器が出土土器の大半を占めること、美濃須衛窯産須恵器の存在、8期のSB15に切られることから、4期に属する住居址と判断した。

SB19 位置：南部 図版3

検出：II A層上面を掘り込み、暗褐色細粒砂が落ち込む。SB20の北西隅を切り、SK101が覆土内を切る。北壁の東半分から東壁、南壁のごく一部にかかる部分しか調査できず、他は調査区域外にある。カマド：

石組カマドで、花崗岩の袖石が焚口部にのみ残る。焼土等あまり見られない。床：北側部分はやや堅いが南側部分は軟弱である。埋没状況：単一層で埋没状況はわからない。遺物の出土状況：ほとんどがカマド内より出土している。出土土器は8期のものが中心で、土師器杯、黒色土器A杯、須恵器杯・蓋・壺・甕・片口鉢、灰釉陶器碗が出土している。4期のSB20を切ることで、土器の時期から8期の住居址である。

SB20 位置：南部 図版3

検出：II A層上面で検出した。SB19に北西隅を切られる。カマド：煙道口両側に一對の石が立てられている。燃焼部は80×60cmの範囲が深さ15cm掘り凹められ、焼土が残る。床：南東部は貼床が認められるが、他は小礫の混じる地山を床としている。埋没状況：暗褐色土1層で埋没状況は明確にできなかった。遺物の出土状況：カマド部分と南東壁下に集中しており、4期に属する須恵器杯・蓋、土師器甕が出土している。11期のSB19に切られることで遺物の時期から4期に属する住居址と判断した。

SB21 位置：南部 図版3

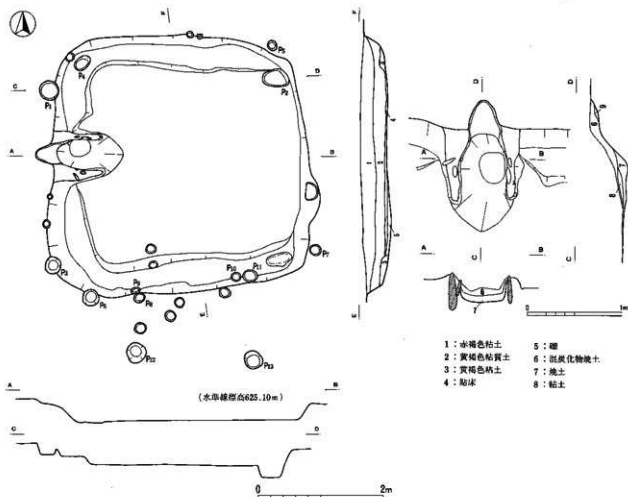
検出：I D層を掘り下げている時にカマド石組を検出した。切り合いの激しい地区であり、カマドのみ残され、他は切り合いにより破壊されていた。SB12・13に切られる。カマド：石組カマドで両袖芯材の砂岩が三個ずつ並び、焼土・炭粒が燃焼部に堆積する。灰釉陶器が燃焼部より出土している。遺物の出土状況：カマド部分よりすべてが出土している。燃焼部より出土した灰釉陶器は、碗・段皿が重なった状態で検出された。他に土師器杯・鉢・羽釜、灰釉陶器皿が出土している。カマドのみであるが11期に属する住居址と考えたい。

SB22 位置：南部 図版11、第18図

検出：中部地区の最北端に位置する。I B層を掘り込み、小礫や土師器・須恵器等の遺物が散在する褐色粘土が落ち込む。切り合いはなく単独で検出された。カマド：石組カマドで、河原石が両袖に平行して4個ずつ立てられ、粘土で固められている。残存状態は良い。燃焼部には焼土・炭化物が混じる層が認められた。煙道部は壁より30cm外に張り出す。床：床は貼床され、東壁部分を除き壁下に幅30cm、高さ10cmの黄褐色粘土で盛り土されたテラス状の部分が回る。ピットは床面に7、壁際に14、南壁外に6検出された。これらのピットの間隔や規模等から、本址には建て替えがあったと判断される。P1～P3と南東隅のテラス上に置かれた平板な河原石を1次の四柱穴にあてたい。P1の深さは13cmと浅いため、石の抜き取り痕の可能性が高く、西壁側は2本とも石が据えられていたと思われる。P1・石・P2・P3間が2.8～2.9m、P1・2・P3・石間が3.6mと等間隔で柱穴規模もほぼ同じである。建て替え後の二次の柱穴は、P4～P7を考えたい。P7を除き壁外に掘られていること、深さもP7を除き20～30cm前後であること、東壁側の2本、西壁側の2本の柱穴規模が同じであることがその理由である。P1周辺部やピット内に焼土と炭化物が広がっており、灰溜めとしても利用されたものと思われるが、柱穴内に焼土・炭化物が見られることから、建て替え後に再利用されたものと理解したい。住居址南側の壁際、壁外にある小ピットP8～13は、その位置から入り口部の柱穴と判断した。埋没状況：覆土は2層に分層され、床直上に薄く茶褐色粘土層が堆積し、その上に褐色土を基調にした黄褐色粘土が多く含まれる層と、少なく含まれる層がある。人為的な埋戻しの層に見られるブロック状の堆積は見られず、自然埋没と判断した。遺物の出土状況：カマド左右から多く検出され、覆土中には土師器、須恵器、灰釉陶器片が散在する。土師器甲斐型杯・甕、須恵器杯・美濃須衛窯産須恵器の盤等が出土した。甲斐型杯、美濃須衛窯産須恵器盤の存在、食器がすべて須恵器であること等から、4期に属する住居址である。

SB23 位置：南部 図版11

検出：II B層上面で検出した。古代遺構との切り合いはないが、中世に属するST9・10とSK6・289・319・349・353・362が本址の上に構築されている。カマド：石組カマドで壁外へ丸く掘り込まれる。袖石

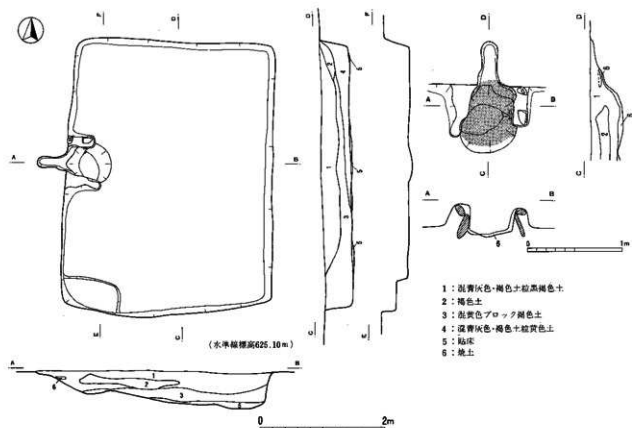


第18図 神戸遺跡SB22、カマド実測図

のほとんどは抜き取られているが、両袖に2個ずつ、煙道口に左右1個ずつの石が残る。煙道口には45×25cmの平石がみせられており、煙道が80cm壁側に伸びる。カマド前部に本址のものと思われる焼け石数個が散在する。径1.3m、深さ15cmのビットがカマド前に掘られる。焼土・炭が多量に入っており、灰溜めと思われる。床：全体に堅く平坦である。2～5cmの厚さで貼床されるが、北西隅の地山礫層が露出している部分とカマド前部は貼床されていない。大小のビットが東壁北からほぼ一列に南へ並ぶ。いずれも浅く上層構造を支えるためのものとは思われないことから、貯蔵穴的な機能を考えたいが明確にできない。カマド南のP3から焼石6個が右隅にかたまわって検出された。用途不明であるが、その位置等から貯蔵穴と南壁に幅40cmでテラス状の張り出し部が設けられているが、入口部の施設と考えたい。埋没状況：覆土は三層に分層され、壁際に淡黄褐色土が落ち込み、その上に暗茶褐色土・暗茶黄褐色土が堆積する。自然埋没と判断する。遺物の出土状況：床上5～10cmから出土するものが大部分で、そのほとんどは小破片である。カマド付近から土師器甕が集中して検出された。土師器甲斐型杯片・甕・黒色土器A杯須恵器杯・蓋・鉢・壺・甕が出土している。土器の時期から4期に属する住居址である。

SB24 位置：南部 図版11、第19図

検出：II A層上面で検出した。II A層を掘り込み、黒褐色土が落ち込む。他の遺構との切り合いはなく単独で検出された。カマド：石組カマドで扁平な河原石を芯に粘土で覆っており、遺存状態は良い。壁外



第19図 神戸遺跡SB24、カマド実測図

に煙道が伸びる。熱焼部は約10cm掘り凹められ、焼土が堆積する。袖部、煙道部の壁面は焼土化している。床：径3～5cmの小礫上に黄褐色土の堅緻な貼床が施される。南半分は厚さ10～20cmほどにもなる。南壁下の貼床下25cmに、平板な自然石が平坦面を上にして敷かれた状態で並べられており、貼床される構造を知るうえで興味深い。埋没状況：3～4層に分層されるが、黄褐色土やマンガン粒がブロック状に入っていることから人為により埋め戻されたものとする。遺物の出土状況：カマド内や周辺部から検出されたものが多い。4期に属する土師器甕、須恵器杯・壺・甕・美濃須恵窯産須恵器蓋の土器類の他に、鉄鍋1が出土している。

S B 25 位置：南部 図版12

検出：II A層を掘り込み黒褐色土が落ち込む。西壁を中世の土坑であるSK635が切る。北側半分は側溝等の構築物があるために調査できなかったが、横長の平面形をもつものと思われる。カマド：石組カマドで右袖部に4個、左袖部に2個の芯石が残存し他は破壊されていて無い。熱焼部は深さ15cmほど掘り凹められ、焼土が厚く堆積する。煙道は壁外へ細長く伸びる2本が検出された。北側の煙道は焼土・石組等見られず、煙道として機能していなかったものと思われる。床：全面堅緻な床が平坦に広がる。4本の主柱穴が掘られるが、方形に配列されていない。いずれも深さ9～25cmと浅い。埋没状況：単層で、黄褐色土のブロックや黄褐色土に青灰色土・黄褐色のブロックが入り込むことから、人為による埋め戻しがなされたものとする。遺物の出土状態：覆土中より出土した遺物がほとんどである。4期に属する土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。

イ 掘立柱建物址

概観

分布：南部地区北にのみ分布する。その数も4棟と少ない。2棟は切りあいもなく独立するが、他の2棟は切りあい、NR2にさらに切られる。

時期：遺物の出土はほとんど無いために時期を明確にできないが、SB2との位置関係から4棟とも8期に属するものと判断した。

構造・規模：2間×3間の南北棟が3棟、1間×2間の東西棟1棟がある。2間×3間のは、桁行き6m、梁行き4m程の同規模であるが、1間×2間のそれは、2×4mと小さい。柱穴掘り方はすべて円形で、径40cm前後、深さは20~50cmとばらつきがある。柱痕跡の残るものも多く、径12~15cm程度の円柱が立てられていたものと観察された。

ST1 位置：南部

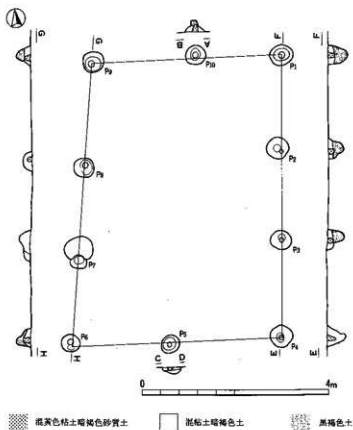
図版6、第20図

検出：II A層上面で、砂を基調とした褐色土に粘土ブロックが入る掘り方を10本検出した。2間×3間の掘立柱建物址と判断し精査した。単独で検出されたが、P2が中世のSK723に切られている。柱穴：柱間は、桁行き1.9~2.2m、梁行き1.8~2.4mとやや不揃であるが、いずれも柱筋は通る。掘り方は、径40~50cmとほぼ同じ規模をもつ平面円形をもつが、断面はU字形・皿形等4種類に分けられる。断面の一方が張り出すものが多い。断面の観察から、柱穴を掘った後一旦埋め戻し、その後、柱を立てたものと考えられる。なお、掘立柱建物址が廃絶された後、生活面は河川等により削り取られたものと思われる。柱痕跡はP2を除いてすべての柱穴で確認出来た。径12cmほどの円柱で、先端は丸く尖る。遺物の出土

状態：P8からのみ出土した。土師器甕の破片で、掘り方の壁や底部に接するように出土した。ローリングを受けておらず、埋め戻す際に入り込んだものと思われるが、小破片のため時期は判断できない。

ST2 位置：南部 図版6

検出：II A層上面で、砂質青灰色土中に粘土ブロックが若干入る土が落ち込む掘り方を6本検出した。西側の半分はNR2によって切られるが、柱筋が通ること、軸方向がST1と同じであること、桁行きの柱間から、2間×3間の掘立柱建物址と判断した。P5がST4のP1に切られていることから、本址はST4より古い。柱穴：P3・4は平面で、P1・2は断面で柱痕を確認した。径10~15cmの円柱である。いずれも先端は丸く尖る。掘り方の断面は、皿状のものから方形のものまで同一ではないが堅くしっかりしている。ST1と同様に、一旦掘り方は埋め戻され、その後柱が立てられている様子が断面から観察される。桁行きの柱間は1.8~1.9mと等間隔で柱筋は通る。埋土は、ST4に酷似する。遺物の出土はない。



第20図 神戸遺跡ST1実測図

ST 3 位置：南部 図版 6

検出：II A層上面で検出した。覆土がII A層に似るために検出は困難であった。本址のみ主軸が東西方向を向き、規模も小さい。SK57が本址西側部分に入り込んでいる。柱穴：掘り方はすべて平面円形を呈し、深さも30cmと同規模である。P5・6を除き柱痕跡が確認できた。径12~15cmの円柱で、先端は丸く尖るP1がずれるほかは等間隔に柱穴が並ぶ。掘り方断面はU字状で、一旦埋め戻しされてから柱が立てられることはST1・2と同様である。遺物の出土はない。



ST 4 位置：南部 図版 6

検出：II A層上面で検出したP1~4のみ検出し得たのみで、西側の大部分はNR2により削られている。規模はST2との切りあい関係や、覆土が類似していることから、ST2と同規模の2間×3間の南北棟になると思われ、ST2の建替えの可能性が強い。柱穴：すべて円形の掘り方で、深さはP2を除いて40~50cmと深く、断面形も途中から狭くなる形態をもつ。P2は、そのなかにあって30cmと浅く、平たい底面いっばいに厚さ12cmほどの平板な礎を敷いている。柱痕跡はすべての掘り方から検出された。径15cmほどであるが、P2のみ10cmと細い。遺物は全く出土しなかった。

ウ 溝址

SD 1 位置：南部 図版 2~4

II A層上面で検出した。竪穴住居群の東に位置し、南東から北西方向に約39mほど続く。幅70~90cm、深さ11~22cmの規模をもつ。南東端はNR1に切られ、北西部分は、SB4・5、SK24に切られる。SB4・5との切りあいから、5期以前に構築されており、5期以後は使用されなかったものと思われる。遺物は出土していない。

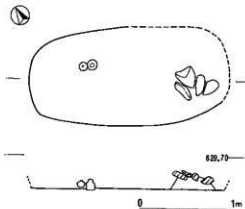
SD 2 位置：南部 図版 6・7

II層中で検出した。覆土は青灰色を帯び、砂を主体とするが、粘土ブロックがかなり入る。溝はほぼ南北方向に約40mほど続き、南端はST2・4付近を通るがSTとの切り合いはない。SK727に南端部の一部を切られる。幅は、場所により広くなったり狭くなったりするが、平均約60cmほどの規模をもつ。掘り方は全体に浅い。壁は斜めに立ち上がり、底はほぼ平坦であるが、凹凸がかなりある。遺物は数点出土しているが小破片のため時期を明確にできない。

エ 墓址

SK743 位置：南部 図版 2

表土除去後の遺構検出段階で灰釉陶器を検出し、遺構の存在を確認した。検出面が低すぎたため掘り方を明確にとらえられなかった。覆土は炭化物を含む褐色土の単層である。東側部分はNR1によると思われる削平を受けているため、全体のプランも明確にとらえられなかったが、平面形は、長軸推定2.1m、短軸1mの長楕円形で、南東部分に四個の集石をもっている。本址発見の緒となった、灰釉陶器短頸壺・小壺は、北東寄りに並んで正位に埋納されていた。4個の集石間からは骨片が数点検出された。2個の灰釉陶器の時期から、本址は6~7期に構築された土葬墓であると判断する。

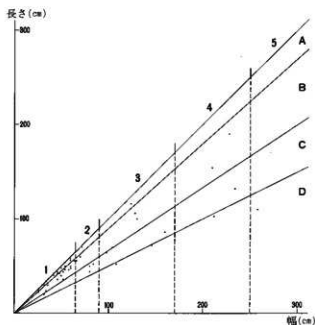


第21図 神戸遺跡SK743実測図

オ 土坑

概観

分類：松本平の統一分類基準にそって、本遺跡より検出された古代に属する土坑を分類すると、以下のようになる。その他、数個の礫を伴う土坑、焼土・炭化物を覆土中に含む土坑、土器・鉄製品等の遺物を伴う土坑等があるが、その数は少ない。



第22図 神戸遺跡古代土坑の長軸と短軸関係図

I 群：方形を基本形とする土坑

II 群：円形を基本形とする土坑

III 群：不整形な土坑

A 類：長短軸比 1 : 1 ~ 10 : 9

B 類：長短軸比 10 : 9 ~ 3 : 2

C 類：長短軸比 3 : 2 ~ 2 : 1

D 類：長短軸比 2 : 1 ~

1 種：長軸 65cm未満

2 種：長軸 65~90cm

3 種：長軸 90~170cm

4 種：長軸 170~250cm

5 種：長軸 250cm以上

形態	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	合計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
I	1	0	1	0	0	2	0	1	1	0	0	2	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	5	
II	18	2	0	0	0	20	15	3	2	2	0	22	1	3	2	1	0	7	0	0	2	1	0	3	52
計	19	2	1	0	0	22	15	4	3	2	0	24	1	3	3	1	0	8	0	0	2	1	0	3	57
III													16											16	
IIのみ													6											6	
計																								79	

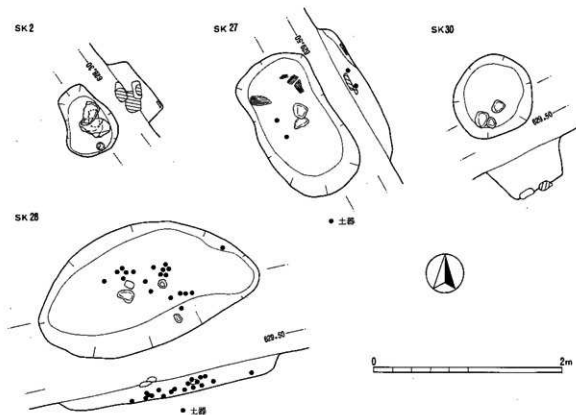
第1表 神戸遺跡古代土坑形態分類表

分布：総数79基のうち、大部分の土坑は南部地区に集中しており、中部地区北端に19基が位置する。南部地区の土坑は大きく分けて、竪穴住居址が密集する南西部分と、掘立柱建物址が位置する北側部分にその中心をもつ。このうちI群の土坑はその数も少なく分布状態に特徴は見られないが、5基中4基が中部地区にある。II群B類1種が最も多く本遺跡土坑の中心を占めるが、全体に散在しており、偏った分布状態を示さない。

時期：遺構の時期を限定出来るような遺物が出土した土坑は極めて少なく、その帰属時期を明確に出来ないものがほとんどである。遺構の切り合い関係、時期判定できた土坑、竪穴住居址等との位置関係から時期判断すると、中部地区の土坑は竪穴住居址との関係から4期に属する土坑ととらえることができ、南部地区の土坑は、4期、6~7期、8~13期に属するものと思われる。

SK 2 (III群) 位置：南部北 図版5、第23図

規模・形状：SB1の検出作業中にははっきりと認められなかったが、床面でもとらえることができた。76



第23図 神戸遺跡古代土坑実測図

×58cmの不整楕円形で、深さ22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、しっかりした掘り方をもつ。覆土は暗褐色砂質土1層で、炭化物・風化礫が散見される。土坑上部には径30cmほどの大形の礫が重なって入れられている。遺物の出土状況：南壁直下より、正位の状態で土師器皿Ⅰが出土した。骨片等は全く見られないが、墓址の性格を強くもっているものと判断する。出土した土師器皿から、11期の土坑である。

SK25 (II群B類3種) 位置：南部南 図版2

規模・形状：SB14のカマド部分を切り構築されていた。130×100cm、深さ20cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、底部はほぼ平坦である。覆土は単層であり人為による埋め戻しがなされたものと判断する。遺物の出土状態：黒色土器A杯・碗、灰釉陶器皿・段皿・碗、須恵器杯、羽釜等が出土した。これらの土器類から11～12期に属する土坑と判断した。

II群B類3種の土坑にはSK103があるが、ほとんどはII群B類1種でありSK5・14・15・18・29・31・58・292・459・633等がある。

SK27 (I群C類3種) 位置：南部南 図版2、第23図

規模・形状：II A層上面で検討した。160×87cmの長楕円形を呈し、深さ19cmを測る。底面は平坦であり、壁はなだらかに立ち上がる。覆土は炭化物・焼土を含む黒褐色で、底面北側部分には多量の焼土・炭化物が堆積する。壁、底面ともに焼かれた痕跡は認められない。土坑中央上面に径15cm大の礫2個が見られる。遺物の出土状態：覆土中より、土師器、須恵器杯の破片が出土しているのみで骨片等はまったく見られなかった。多量の焼土・炭化物の堆積の性格は即断できないが、墓坑の可能性がある。出土土器から5期に属する土坑と考える。I群C類3種の土坑は本址だけである。

SK28 (II群C類4種) 位置：南部南 図版2、第23図

規模・形状：II A層上面で検出した。SB11・16に切られる。236×130cmの楕円形の平面プランをもち、深さは18cmと浅い。底面は平坦で、壁は全体になだらかに立ち上がる。覆土は黒褐色土1層で、上部に拳

大の礫数個が散在する。遺物の出土状況：土坑中央部に集中して検出された。土師器杯・甕、黒色土器A杯・碗・皿・鉢、須恵器杯・甕、軟質須恵器杯、灰釉陶器碗・皿・壺等約30個体分あり、全土坑中最も多くの遺物が検出された（図版41、PL17）。出土土器の様相から8期に属する土坑である。

II群C類4種の土坑は本址のみであるが、II群C類1種にSK9・22・104、3種にSK3・6がある。

SK30（II群A類2種） 位置：南部南 図版2、第23図

規模・形状：SB16の北で検出された。II A層上面を掘り込み、黒褐色土が落ち込む。90×84cmのほぼ円形な平面プランをもち、深さ37cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がりしっかりした掘り方である。土坑底部は平坦で、粘土が厚さ3cmほど貼られた状態で検出された。南西隅に15cm大の礫3個が見られる。遺物の出土状態：土師器、黒色土器、須恵器の小破片10点ほどが覆土中から検出された。出土遺物の帰属時間から8期に属する土坑と判断する。II群A類2種の土坑には、他にSK55があり、II群A類の大部分を占める1種の土坑には、SK10・20・21・102・434・439等がある。

カ その他の遺構

NR1 位置：南部 図版2～4

人為による遺構ではないが、5～7・8・12～14期までの遺物が検出された自然流路である。南部地区南側部分を南南東から北北西の方向に、長さ約40m、幅約3.7～2.4mで走っている。底部まで調査していない関係から、深さを測り得ないが、少なくとも30cm以上の規模をもつものと思われる。覆土は小礫を多量に含む砂質土で、SD1の南端を切る。土師器、黒色土器A、須恵器、灰釉陶器が検出されており（図版41、PL18）、墨書土器も2点出土している（第40図、4・6）。出土した土器類と、SD1を切ることから、4期から5期の段階に河川等の増水があり、本址へ新たに流れ込んできたものと思われる。各期の土器が検出されているが、各時期を通して水が流れていたかどうかは判断できなかった。

南部地区にも自然流路NR2があるが、流路の方向から別の流路である。NR2からは遺物は検出されなかったが、8期に属すると思われるST2・4が流路の影響を受けていることから、NR1より新しく、8期かそれ以後のものと考えられる。

(2) 中世の遺構

ア 掘立柱建物址

概観

分布：中部地区にのみ分布し、北西隅に4棟、中央部東に6棟、南端西に1棟の3グループ計11棟を数える。北西隅の4棟は切り合いもなくそれぞれ独立するが、中央部6棟のうち2棟は重複しており、2時期に分かれて存在したものと思われる。

時期：遺構に伴って検出された遺物はほとんど無く、その時期を限定できないが、建物址の規模・構造等から北西隅のグループは中世1期に、中央部・南端のグループは、ST11の柱穴から内耳鍋が出土していることも考え合わせ、中世2期に属するものと判断した。

構造・規模：中世1期の建物址はそのほとんどがほぼ正方形の平面形態を持ち、総柱建物が多い。4間×3間で内部に土坑を持つ東西棟が1棟、3間×3間、3間×2間、2間×2間のものがそれぞれ1棟ずつある。中世2期の建物址は、そのほとんどが長方形の平面形をもつ掘立柱建物が多い。4間×2間、6間×2間等梁行き2間で桁方向に間数を増やしていくもので占められる。柱穴掘り方は、20～30cmほどの規模をもち、方形のもの8棟、円形のもの3棟ですべてに柱痕跡が認められた。径10～15cmの方形を呈する柱痕跡を持つものが8棟、同規模で円形のもの3棟があるが、時期による差は認められない。面積は、1期の建物址は39㎡以下なのに対し、2期では45～60㎡の規模をもつものが大部分を占める。

ST 5 位置：中部中央 図版23

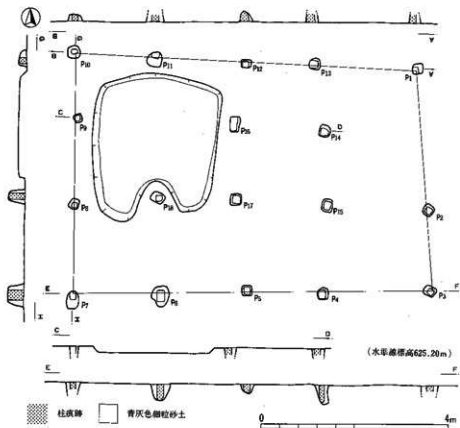
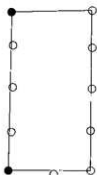
検出：道路建設工事との関係で東側部分と西側部分が別々に調査された。検出面である褐色砂質土と同じ覆土をもつために検出は困難であり、2回に分けた調査でもあったことから東側部分では柱穴を検出できなかった。西側部分の4本の柱穴が隣接するST11～15の精査中に検出された。柱穴：西側桁行4本のみであるが、柱間隔からP2とP3の間にもう1本存在していたと思われ、桁行4間、梁行2間の南北棟の建物址が復元できよう。掘り方は円形で、径10cmほどの方形の柱痕跡をもつ。その形態・位置から中世2期に属する建物址と判断した。

ST 6 位置：中部南端 図版14

検出：本址1棟のみ他の建物址より離れ、南西隅より検出された。黄褐色砂質土を掘り込み、青灰色の細粒砂土の覆土をもつため検出は容易であった。他の遺構との切り合いは無い。柱穴：いずれも30～40cmの円形の掘り方をもち、西側列南北隅の柱穴2本にのみ径10～12cmの方形柱痕跡が認められた。桁行は4間で柱間1.9～2.1m、梁行2間で柱間1.95～2.45mの規模をもち柱筋は通る。北側桁行中央の柱穴は検出できなかった。P2・3・8・9の覆土中に、径15～20cm大の礫2～3個見られたが、柱穴壁際にあるものが多く、柱を固定したものと考えられる。本址に伴う遺物は出土していないが、桁行2間で桁方向に間敷を増やしていく平面形態から中世2期に属する建物址である。

ST 7 位置：中部北 図版27、第24図

検出：黄褐色砂質土を掘り込み、青灰色の微粒砂質土が落ち込む径30cm前後の柱穴掘り方18本と、その柱穴群に取り込まれた北西隅に一边2.7～3mの不整形な土坑1基が検出された。覆土の状況から同一の遺構と判断し精査した。柱穴：4間×3間の規模をもち、掘り方は一边30cm前後の方形で、断面は底面平坦なU字形であり、青灰色を呈す柱痕跡と黄褐色土の混じる青灰色の覆土をもつ。桁行7.6m、梁行5.1mで、柱間はそれぞれ1.4～2.3mを測る総柱の東西棟である。北西隅に位置するSK238はP18を取り囲むように構築される。深さは15cmと浅いが、壁から床面は踏み固められたように固く締まっている。土間か馬屋的な役割をもっていた土坑と推定される。遺物は出土していないが、平面形態から中世1期に属する建物址である。



第24図 神戸遺跡ST 7実測図

ST 8 位置：中部北 図版27

検出：黄褐色砂質土を掘り込み、青灰色砂質土が落ち込む柱穴群を、ST 7 に西接して検出した。桁行3.6m、梁行2.9mを測り、南北桁行の中央部に柱穴は検出できなかったが、2間×2間の規模をもつ建物址と判断した。柱穴：掘り方断面はU字形を呈し、覆土は青灰色砂質土の柱痕跡と黄褐色土が混入する青灰色土に分けられる。平面方形の掘り方内に径12~14cmの柱痕跡をもつが、P1・5には無い。面積10.85㎡と神戸遺跡の中世掘立柱建物址の中では一番小規模である。中部北に位置するグループに含まれることから中世1期の建物址と判断した。



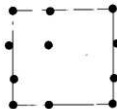
ST 9 位置：中部北 図版27

検出：ST 7 に南接して検出された。いずれも青灰色の砂質土が落ち込む柱穴で、方形の掘り方をもつ、3間×2間の総柱東西棟である。柱穴：掘り方断面はU字形か口形で、ST 7・8と同様の覆土をもつ。東桁行が西のそれより70cmほど長く、また、桁行も北側がやや長いことから不整形方形を呈し、柱筋も通りにくい。覆土の状況やST 7・8と同じ北に位置するグループであることから中世1期の建物址である。

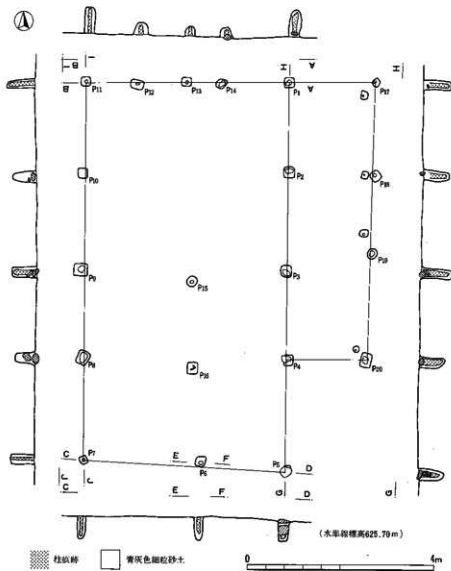


ST 10

位置：中部北
図版25



検出：ST 9 の南に隣接して検出された。青灰色土が黄褐色土に落ち込んでおり、明瞭に柱穴プランを検出できた。北側部分をSK289が接しP10が切られる。柱穴：平面円形の掘り方で、断面U字形を呈し深さ30cm前後の規模をもつ。3間×3間、柱間1.8~2.0mを測るが、東2列目の柱穴は検出されず、柱間が長くなる。P2・8は方形プランよりやや外側に出ることから、横を支える柱



第25図 神戸遺跡ST11実測図

穴とも考えられる。南側柱列1-2列間は1.3mと狭い。位置関係から類推してST7~9同様中世1期に属する建物址と判断した。

ST11 位置：中部中央

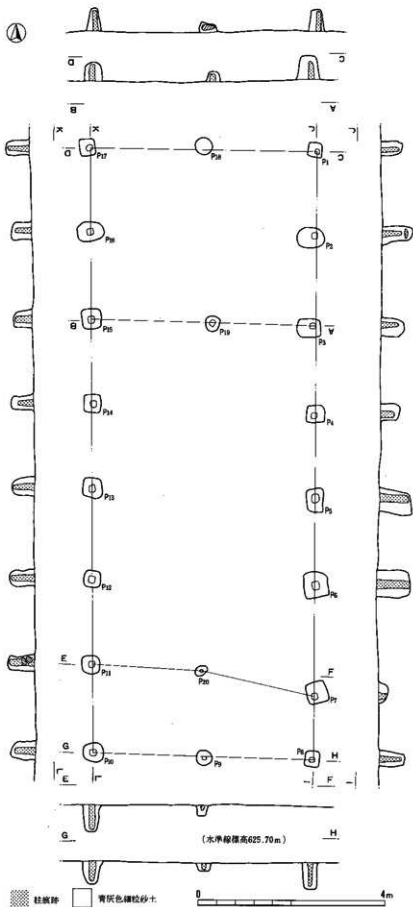
図版24、第25図

検出：黄褐色土中に青灰色土が落ち込む柱穴が東西2間、南北4間の規模で明瞭に検出できた。精査を続けた所、東側部分に3間×1間の張り出し部分が出された。西側柱列のP8・9・10がSK491・503・493をそれぞれ切り、南側P8がSK488を切る。柱穴：ほとんどの掘り方は方形で、径15cmほどの柱痕跡を有する。深さは他の建物址に比べ50~60cmと深くしっかりした掘り方をもつ。P1~5、8・9・14・16の上部には拳大の礫が見られた。東側の東西1間、南北3間の張り出し部分は、下屋と考えた。神戸遺跡では本址のみに見られる構造である。遺物の出土状況：P1に内耳鍋片が意識的に置かれた状態で検出された(図版44-53)。その性格を知り得ないが、本址に属する遺物と考えてよい。内耳鍋の時期から中世2期に属する建物址である。

ST12 位置：中部中央

図版24

検出：ST11に西接して検出された。2間×2間の規模をもつ。柱穴：柱穴掘り方は方形で深さ40cm、径10cmの円形柱痕跡



第26図 神戸遺跡ST13実測図

をもつ。覆土は青灰色を呈す褐色粘土で固く締まっているのに対し、柱痕跡は非常に柔らかい。桁行3.6、梁行3.4mで柱筋は通る。梁行中間列に柱穴は検出できなかった。位置関係から中世2期に属する建物址と判断した。

ST13 位置：中部中央

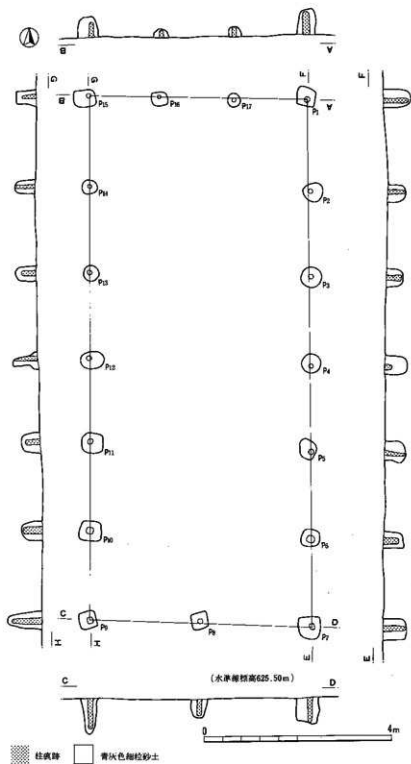
図版23、第26図

検出：他の建物址と同様に、黄褐色砂質土を掘り込み、青灰色砂質土が落ち込む柱穴群をST12に南接して検出した。P5がSK493を、P11がSE2を、P17がST495を切る。柱穴：桁行7間、梁行2間、面積61.82㎡の規模をもち掘立柱建物址中一番大きい。方形の掘り方をもつ柱穴は20本中14本で、梁行中央列の柱穴4本と桁行北2本が円形を呈する。柱痕跡も方形を呈するものがそのほとんどを占め、径10～14cmを測る。先端は丸く尖るものが多い。柱穴の深さは50～70cmあり、深くしっかりと掘り込まれている。P2底部とP10上部に拳大の礫が見られた。間仕切りのためと思われる柱穴P19・20がある。両側の柱穴に比べ深さも10cmと浅い。本址に伴う遺物の出土はない。梁行2間で桁行の間数が多い平面形態から、本址の属する時期は中世2期である。

ST14 位置：中部中央

図版23、第27図

検出：ST13に東接して検出された6間×2間の建物址である。黄褐色砂質土を掘り込み、青灰色砂質土が落ち込む柱穴群が明瞭に見られた。ほぼ同じ棟方向をもつST15と重複しているが、本址の棟方向が2°東に傾く。P6がSK402を切る。中央やや南側をSD4が東西方向に横切るが新旧関係を明確にできない。柱穴：平面円形のもの10本、方形のもの7本と一定でないが、柱痕跡は円形のもの大部分を占め



第27図 神戸遺跡ST14実測図

る。東西両側の桁柱穴が等間隔に並び50~70cmと深いのに対し、南北側の梁行柱穴は南3本、北4本と揃わず、深さも20~40cmと浅い。ST11~13と同じグループである位置関係から、中世2期に属する建物址である。

ST15 位置：中部中央 図版23

検出：ST14と重複して検出された。中央やや南部分をSD4が東西方向に横切る。P6がSK403を切る。棟方向をST13と同じくする6間×2間の南北棟である。柱穴：径40cm前後の方形掘り方をもつものが大部分を占め、柱痕跡は10cm内外の円形で先端が丸くなるものがほとんどである。深さも40~50cmとほぼ同じ規模をもつ。P14の底部にのみ径20cmの平板な碟が置かれていた。重複するST14とは時期を異にするが、同じ平面形態からあまり差はないものと思われる。中世2期に属する建物址である。

イ 溝址

概観

分布：中部地区に、中央をほぼ南北に走るSD6とSD6から東に伸びるSD4・5の3条があり、北部地区には中央部の南と北寄りに、東西方向に走るSD3・7の2条がある。時期：遺構に帰属する遺物の出土は全く無く時期を決定できない。また、遺構の切り合いからも、明確な時期が決定された遺構との切り合いが見られず、所属時期の決定は困難である。しかし、北部にある2条の溝は、そのほとんどが中世2期に属する墓址・土坑に切られることから、少なくとも中世2期に存在していたと考える。構造・規模：いずれも幅0.5~1m前後、深さ20~30cmの規模をもち、長さは各溝により違う。断面U字形で、覆土は概して青灰色を呈す褐色土が落ち込む。常時水が流れていたか否かは不明である。

SD3 位置：北部 図版28

検出：IB層上面で検出した。北部地区中央やや南寄りに位置し、東西方向に延びる。西側は擾乱により切れ、東側はSK164~168に切られる。土坑群より東では検出できなかった。規模・形状：長さ9.5m、幅は一定ではないが40cmほどの規模をもち、東へいく程やや細くなる。断面丸底を呈すU字形で、深さ20cmを測るが、東側は、かなり浅くなる。溝内より遺物の出土はなく、時期を判断できないが、東側を切る土坑群が中世2期に属することから同じ時期の溝址と判断する。

SD4 位置：中部 図版21・23

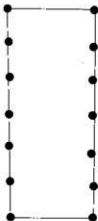
検出：中部地区中央で、SD6に西端を接し東側へ延びる溝址を検出した。IB層を掘り込み、青灰色に褐色土が混じる覆土が落ち込む。SD1・SK482~485、ST13~14に切られる。規模・形状：長さ24m、幅約1mの規模をもつ。東側へ行くほど浅く細くなる。SD6と接する地点で覆土が青灰色の強い土に変っていることから、本址が埋められた可能性がある。遺構の切り合いから中世2期に属する溝である。

SD5 位置：中部 図版25・26

検出：中部地区を南北に走るSD6の北側から東方向に延び検出された。さらに東へ延びていたものと思われるが検出できなかった。規模・形状：長さ1m、幅約80cmを測る。他の溝と同様に、中世2期に属するものと判断する。

SD6 位置：中部 図版17・19・22・25・27

検出：中部地区の中央を東西に分け、南北方向に走る溝を検出した。IB層を掘り込んで構築される。南部は水田址が上層にのり、切られる。規模・形状：長さ約40m、最大幅1m、最小幅50cmを測る。深さ約30cmで、断面は逆台形を呈す。覆土は青灰色の強い褐色土1層で、水が流れていたかどうかは判断出来なかった。中世2期に属する溝と判断する。水田址のアゼル-1と同方向であり、現水田の畦方向ともほぼ



一致することから、水田に関する水路的な機能も考えられるが、決定づける根拠は無く、推論の域を出ない。

SD7 位置：北部 図版29

検出：北部地区北にある土坑群中で検出された。SK46に西端部を、SK628に南壁を切られる。規模・形状：長さ2mほど残存し、幅40cmを測る。その性格は判断できない。中世2期に属するSK46に切られることから、同時期の溝と判断する。

ウ 柵址

SA1 位置：中部 図版24

検出：中部地区中央に位置するST11の北を南北方向に走り検出された。IB層を掘り込み、青灰色土が落ち込む。北川部分かSK337を切る。規模・形状：径30～35cmの円形プランをもつ4本の柱穴により構成され、長さ5.15mを測る。

SA2 位置：中部 図版27

検出：中部地区北に位置する掘立柱建物址群の内の、ST9・10間や東に検出された。IB層を掘り込み、青灰色土が落ち込む。規模・形状：1辺20cm前後の方向プランをもつ柱穴6本により構成され、東西方向に並び、長さ4.5mを測る。柱穴掘り方の深さは6～10cmで、青灰色土が落ち込む。1辺10cmほどの角柱が立てられていたものと思われる柱痕跡が観察された。その位置から、中世1期に属するものと判断する。

エ 井戸址

SE1 位置：中部 図版21

検出：SD4を切り、暗茶褐色砂質土を掘り込んで淡黄褐色土が落ち込む。規模・形状：2.6×2.3mの円形を呈し、深さ2mを測る。他の土坑に比べ非常に深く掘られていること等から井戸址とした。覆土は5層に分層でき、最下部にはごく僅かに泥状の土が堆積しその上に暗灰色粘質土が約20cm堆積する。さらに焼土をまばらに含む暗灰色砂質土、小礫・炭化物を少し含む暗灰色土、最大径20cm以内の礫を含む暗灰色粘質土が順次堆積し、淡黄褐色土がその上を覆っている。数次にわたる自然埋没状況の結果と思われる。遺物の出土は無い。最下部に僅かに堆積する泥状の土からも、長い期間水がたたえられていたものと思われず、また底部以下は砂混りの礫層となることから、保水能力もあまり無かったものと思われ、水溜め程度の機能が考えられよう。

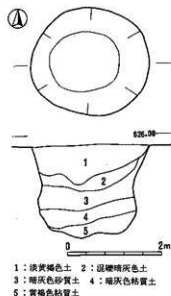
SE2 位置：中部 図版27

検出：SE1の南西に隣接して検出された。規模・形状：SE1と同様の規模をもち、2.5×2.4m、深さ1.9mを測る。覆土は6層に分層でき、下層より小礫・焼土をわずかに含む青灰褐色粘質土、青灰褐色粘質土、灰褐色粘質土、炭化物・焼土を僅かに含む灰褐色土、淡黄褐色土、褐色土の順に堆積する。西に傾斜した堆積を示していることから、東側より埋没していったものと思われる。遺物はまったく出土しておらず、所属時期は判断できない。SE1と同様な使われ方がされていたものと思われる。

オ 墓址

概観

分類：土葬墓、火葬骨取骨墓、火葬施設(墓)に分けられる。火葬骨取骨墓、火葬施設(墓)の数は全体から見ると少なく、土葬墓がその大半を占めていたものと思われる。明らかに墓址と判断できるものの数



第28図 神戸遺跡SE1実測図

は少ないが、墓域であったものと思われることから、ほとんどの土坑が墓址であった可能性が高い。分布：中部地区と北部地区全域に分布する。いくつかの大きなグループに分けて考えることができ、さらにその中の小さなグループにより構成されていたものと思われる。時期：遺物からその帰属時期が判断できる土坑は極めて少ない。覆土分類、遺構の切り合い関係、時期判定された土坑との位置関係などから帰属時期を判断していった。それによると、中世1期、中世2期に属する土坑が全てであり、両者の中でも中世2期のものが圧倒的に多い。

(ア) 土葬墓

SK70 位置：北部北 図版29、第29図

検出：北部地区北に位置する土坑群の南端にあり、単独で検出された。I層中位を掘り込み、炭化物、焼土を僅かに含む暗茶細粒砂土が落ち込む。規模・形状：120×90cmの楕円形プランをもち、東西方向を向く。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平坦である。深さ30cmを測る。覆土中より骨片、内耳鍋片が出土している。中世2期に属する墓址である。

SK106 位置：北部北 図版29、第29図

検出：SK70と同じ地区で検出された。I層中位を掘り込み、構築される。SK562に北壁を切られる。規模・形状：140×120cmの不整形を呈し、深さ50cmを測る。砂を主体とした茶褐色の上層から硬砂岩の大礫2個が検出された。下層は黄色粘土ブロックが入る茶褐色土であり、人為による埋め戻しがなされたものと判断する。骨片と共に内耳鍋片が出土している。中世2期に属する墓址である。

SK157 位置：北部南 図版28

検出：北部地区南土坑群の最北端で検出された。SK156に西側部分を切られる。規模・形状：250×160cmの不整形楕円形を呈し、深さ50cmを測る。覆土は内耳鍋片・大窯天目茶碗の他に、銭貨では水楽通宝3・元祐通宝3・大観通宝1が出土している。中世2期に属する墓址である。

SK240 位置：南部北 図版27、第29図

検出：径20～30cmの礫を多量に含み、青灰色土が方形に落ち込む。南西壁がSK298を切る。規模・形状：262×260cmの方形プランをもち、深さ30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底部平坦である。礫は、底部から2～4cm浮き土坑内全面に1～2個の重なりをもって見られるが、西壁にそった幅70cmの部分には無い。明道通宝1点と鉄製釘1点(図版47)が出土している。中世2期に属する墓址である。

SK274 位置：中部南 図版16、第29図

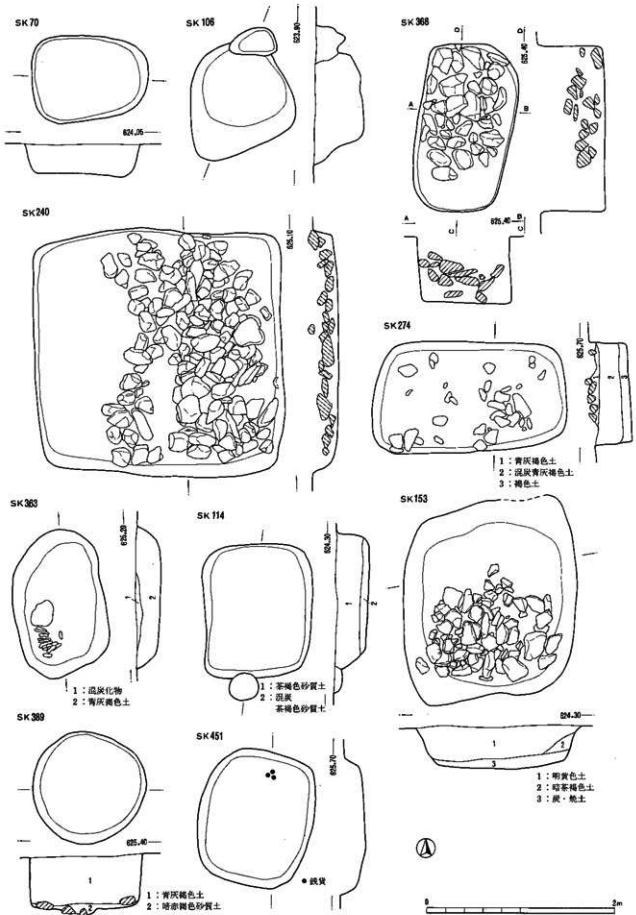
検出：青灰色を呈す褐色土が隅丸長方形に落ち込み、拳大から人頭大の礫が散在していた。規模・形状：東西方向に長軸をもち、204×118cm、深さ44cmの規模をもつ。壁は垂直にしっかりと掘り込まれ、底部は平坦である。上部に集石をもち、3層に分層できるが、いずれにも褐色粘土が混入しており人為による埋め戻しがなされたものと考え。内耳鍋片が出土している。中世2期に属する墓址である。

SK363 位置：中部北 図版25、第29図

検出：青灰褐色土が、南北方向に長軸をもつ楕円形に、地山である黄褐色土を掘り込んでいる。規模・形状：158×100cm、深さ26cmを測る。壁はゆるやかに傾斜し平坦な底部に続く。炭化物層が上面に見られるが、覆土のほとんどは黄褐色ブロックを含む褐色土であり、人為により埋め戻されたものと判断する。西南壁隅には、土坑底部より15cm程浮き、長さ12cm程の石錐17個が並べられた状態で検出され、その北側には30×22cmの平坦な石が置かれていた。他に土錐2点出土している。中世2期に属する墓址である。

SK368 位置：中部中央 図版22、第29図

検出：黄褐色土を掘り込み青灰褐色土が長方形に落ち込む土坑を検出した。規模・形状：南北方向に長軸を持ち178×102cm、深さ48cmを測る。壁は垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。土坑内には人頭大以下



第29図 神戸遺跡中世墓址実測図

の礫が多量に見られたが、南側からは検出されなかった。集石は底部より浮いており、黄色ブロックが混入する青灰褐色土が覆土であるので、一旦埋め戻された後、集石も同時に作られたものと判断する。集石断面の中央部が凹むことから、集石下部に埋納された棺が腐り、集石が陥没したものと思われる。燧金・棒状鉄製品が各1点出土している。

(イ) 火葬骨取骨墓

SK114 位置：北部南 図版28、第29図

検出：北部地区南にある土坑群の北端に位置し、I B層中を掘り込んで茶褐色砂質土が落ち込んでいた。南壁の一部をSK536が、西壁がSK149を切る。規模・形状：140×120cm、深さ34cmの規模をもつ長方形プランで、壁はほぼ垂直に掘り込まれ底部は平坦である。覆土は、径2～3mmの細礫と炭化物・焼土を含む上層と、多量に炭化物を含む下層に分層される。土坑東と南側部分の下層には骨片・骨粉も含まれることから火葬骨を取納したものと判断した。内耳鍋の大きな破片が出土しており副葬品のな性格が指摘できる。内耳鍋から中世2期の墓址である。

SK153 位置：北部南 図版28、第29図

検出：SK152を西壁が切り、北壁の一部がSK130に切られて検出された。I B層中を掘り込み黒色砂質土が落ち込む。規模・形状：2×2mのほぼ正方形を呈し、深さ42cmを測る。壁は僅か傾斜するがほぼまっすぐ立ち上がる。底部直上に炭化物を多く含んだ焼土層があり、さらにその上からは、4個ほどの礫が南側に集中して検出された。礫は硬砂岩系のもので、大きさは10cm以下のものから人頭大のものまであり、一定ではない。底部にかなりの焼土が見られることから、土坑内で火が焚かれた可能性が高いが、壁・床面からは焼かれた痕跡が観察されなかったこともありどちらとも判断できなかった。内耳鍋片と元祐通宝1点が出土している。中世2期に属する墓址である。

SK389 位置：中部北 図版26、第29図

検出：SD6からSD5が分かれる南側から単独で検出された。黄褐色土を掘り込み、青灰褐色土の覆土を持つ。規模・形状：120×118cmの円形を呈し、深さ62cmを測る。壁は垂直に掘り込まれ、底部は平坦で径20cmほどの礫が数個見られる。底面から4～5cmの厚さで炭化物が堆積し、焼土、焼骨片が含まれる。壁及び底部に火を受けた痕跡が無いことから、他の場所で火葬されたものを本址に葬ったものと判断した。覆土中より白磁四耳壺が出土した(図版43-51)。口縁部を欠くがほぼ復元でき、16m北東にあるSK201から出土した破片とも接合した。白磁四耳壺からみて、中世1期に属する墓址である。

SK451 位置：中部中央 図版19、第29図

検出：SD6の南端部東で、黄褐色土中に青灰褐色土が方形に落ち込む土坑を検出した。切り合いは無い。規模・形状：140×122cmの隅丸方形プランをもち、深さ26cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。土坑北側底部には、表面が黒褐色に変色した砂利・炭化材・火葬骨が混入する層が厚さ2～4cmで堆積しており、元豊通宝他計3枚の銭貨も出土している。壁・底部には火を受けた痕跡が見られないことから、他の場所で火葬された骨を本址に埋葬したものと判断した。中世2期に属する墓址と考える。

(ウ) 火葬施設墓

SK48 位置：北部北 図版30、第30図

検出：北部地区北にある土坑群から東に離れ、単独で検出された。I B層中を掘り込み構築され、地山の一部分が焼けていた。規模・形状：主軸方向をほぼ南北方向にもつ。150×76cmの楕円形プランを呈す。深さは20cmと浅い。壁は緩やかに傾斜し、底部はほぼ平坦である。土坑内には、チャート・頁岩・硬砂岩等の礫が約30個ほど配置良く並べられ、北側に置かれた30×20cmの平板な石には、ベンガラ様の赤い塗料

が観察された。礫の多くは火熱を受けており、ヒビが入ったものや、割れているものが多い。出土遺物には、開元通宝・元豊通宝各1点と鉄滓1点、不明鉄製品1点がある。火葬骨が中央より南側にかけて見られた。炭化物と焼土の量がかなり少ないことから考えると、別な場所で火葬されたものを熱いうちに本址に埋葬したか、埋葬する前に火を焚いたかの両者が考えられる。地山の一部が焼けていたことも考え合わせ、火葬施設墓とした。北部地区の土坑は中世2期に属するものがほとんどを占めることから、本址の所属時間も中世2期と判断する。

SK218 位置：中部中央 図版20、第30図

検出：中部地区中央の調査地域東端に単独で検出された。黄褐色土中に焼土が帯状をなしており、はっきりと確認できた。規模・形状：長軸が南北方向を向く130×72cmの隅丸長方形で深さ25cmを測り、西側に突出部をもつ。底部は突出部に続く溝が中央北寄りに掘られ、南側は1段高い平坦面をもつ。この部分を除く北側が火熱を受け焼土化しているが、溝底部と突出部は強い火熱を受けなかったのか焼土化が少ない。炭化物と骨片が焼土化している範囲に多量に含まれていた。他に出土遺物はない。突出部をもつ平面形は火葬施設に見られる特徴的な形であるが、普通中央部に設けられる溝が、突出部へ続き立ち上がるのに対して、本址の場合は突出部で急に立ち上がって段差がつきその様相を異にする。また、同形の火葬施設に見られる底部の石組も本址にはない。骨の量が少ないことから、本址で火葬に付された遺骨は他の場所に埋納された可能性が強い。時期を判断できる遺物が全く無く、遺構の切り合いもないことから時期を判断できない。

SK224 位置：中部南 図版14、第30図

検出：中部地区南端から単独で検出された。黄褐色を掘り込み、淡茶褐色土が落ち込む。東、西壁と思われる箇所には橙色の焼土が帯状に見られた。規模・形状：南北に長軸をもつ隅長方形で、112×76cm、深さ20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、西壁南寄りに僅かな突出部をもつ。東・西壁は火熱を受け橙色に変色しているが、南・北壁には見られない。底部はほぼ平坦面であるが、西側に行くにつれ高くなる。土坑北・南壁下にそれぞれ2個の配石が見られる。強い火熱を受けたためと思われ、全ての石にヒビ割れが生じている。底部から5cmの厚さで炭化物・焼土・骨片・骨粉が混在する層が全面に広がる。この層中に、3枚ずつ重なった銭貨が2か所より出土した。開元通宝、乾元重宝、皇宗通宝、政和通宝、洪武通宝、不明1枚の計6点である。本址も切り合い関係はなく、銭貨のみでは時期の判断はできないが、周辺の土坑が中世2期に属する関係から、本址も中世2期に属するとみてよいであろう。

SK235 位置：中部南 図版15、第30図

検出：中部地区南端、調査区域東境から検出された。炭化物を含む青灰褐色土が楕円形に黄褐色土中へ落ち込む。規模・形状：南北に長軸をもつ楕円形で、西壁と南壁に突出部をもつ。底部中央に掘られた溝は西壁突出部へ続き、なだらかに立ち上がる。南壁突出部は溝を持たずピット状であるが、覆土中より量は少ないもの炭・骨片が出土している。土坑底部に見られる炭化物層には、炭化材・骨片・骨粉が多量に含まれるが焼土は少ない。永樂通宝2点、天聖元宝1点が出土している。中世2期に属するものと判断する。

SK270 位置：中部南 図版15、第30図

検出：中部地区南端で検出された。土坑壁際に、5cm程で焼土が帯状に巡っており、はっきりと確認できた。規模・形状：隅丸長方形のプランに長い突出部が付く。深さは48cmと深い。壁は垂直に掘り込まれ、厚さ5cm程が焼土化し堅く締まっている。底部は丸底状となる。中央部東西に溝が掘られ、西壁の突出部へ続く。溝周囲には10～25cm程の石が埋められていた。底部に石が置かれたものが多い中で、本址の埋められた状態の石は注目される。石は火熱のため赤変している。また、溝内にはための炭化材が多く見られ

た。最下層は炭化材・骨を多く含む。遺物の出土はほとんど無く、銭貨片のみである。覆土中に礫・黄褐色ブロックが含まれていることから、本址を使用した後埋め戻されたものと思われる。時期判断できる資料は無いが、周辺土坑との位置関係から中世2期の墓址と判断する。

SK419 位置：中部中央 図版19、第30図

検出：黄褐色土中を方形に焼土が帯状に巡っており、プランははっきりと確認できた。規模・形状：南北に長い隅丸長方形で、西側に突出部をもち、130×80cm、深さ30cmを測る。壁は、南側と突出部を除きいずれも袋状となる。底部は全体に平坦であるが、4個の石組の中が凹み、あまり火熱を受けていないためかうすすらと赤褐色化しているのみである。底部に比べ壁面のほうが焼土化している。西壁中央の突出部はあまり長くなく、底部より急な角度で立ち上がる。土坑底部には炭・骨が多量にみられ全面に広がるが、特に石に囲まれた範囲に集中する。この部分より、淳化元宝・至道元宝・天禧通宝・熙寧元宝・永樂通宝の5点が出土している。太い炭化材が東壁際にみられた。周囲の土坑との関係から、中世2期に属する墓址と判断する。

SK420 位置：中部中央 図版23、第30図

検出：SK419の北10mに位置し、黄褐色土を掘り込み青灰褐色土が落ち込む。壁際には帯状に焼土がうすすらと見られ検出は容易であった。北3mにおなじ火葬施設墓のSK423が位置する。規模・形状：130×114cmの隅丸方形プランをもち、深さは15cmと浅い。壁は垂直に近い状態で掘り込まれ、底部は平坦である。突出部や溝・石組等の施設はない。底部には厚さ2～3cmで、炭化物・焼土・骨の混在する層が堆積する。この層中から嘉祐通宝等4点の銭貨が出土した。

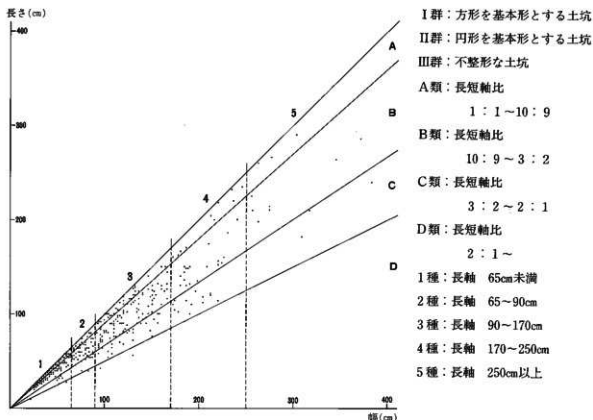
SK460 位置：中部中央 図版18、第30図

検出：中部地区中央南寄りで検出された。黄褐色土を掘り込み、褐色細砂質土が落ち込む。他の火葬施設墓と同様に、切り合いは無く単独で検出された。規模・形状：136×118cm、深さ33cmの規模をもち、平面形は、南北方向に長軸をもつ不整形円形を呈する。南壁は直線的であるのに対し、北壁は弧を描く。壁は垂直に立ち上がり、しっかりと掘り込まれている。底部は平坦であるが、中央部が若干低くなり凹む。底部に20cm大の礫で石組がなされており、石組に囲まれた範囲に焼土・火葬骨片が散在していた。南北には対象的に置かれた礫は、西側に各1個、東側には重ねられた2個が配される。焼土・炭化物の量はさほど多くなく、壁・底部に焼かれた痕跡も顕著に見られませんが、土坑底部に、4個からなる石組を持つことから、火葬施設墓に分類した。骨片以外に出土遺物はなく時期を判断できない。

カ 土坑

概観

分類：本報告書を含む、松本市・豊科町内分遺跡報告書の分類基準によると、本遺跡で検出された中世に属する土坑は、第31図、第2表のように分類される。その他、集石・敷石を伴う土坑、焼土・焼痕を伴う土坑、土器・陶磁器・鉄製品・銭貨等を伴う土坑がある。分布：中部地区と北部地区全域に分布する。墓址の項でも述べたが、墓址とはっきり認定できる土坑の、全体に占める割合は少ないものの、そのあり方からこの両地区は墓城と判断される。大半の土坑は墓址としてとらえられるが、ここでは、墓址とはっきり認定できない土坑を一括して扱うこととする。中部地区における土坑分布のようすは、各群・類・種ともに偏った分布状態を示さず、いくつかの小さなグループによって構成される土坑群の中に散在している。そのような中において、1・2種の小さな規模を持つ土坑は、水田址の東地域と北西隅の地域に集中して見られる。北部地区でも同じような分布状況を示すが、II群1・2種の数が多くなる。時期：遺構の時期が判断できるような遺物が出土した土坑は極めて少ない。覆土分類、遺構の切り合い、時期判定された土坑との位置関係などから帰属時期を判断していったが、それでも判断できない土坑も多数ある。それ



第31図 神戸遺跡中世土坑の長軸と短軸関係図

形態	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	合計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
I	21	6	16	8	4	55	5	6	35	14	5	65	2	0	8	8	3	21	0	0	1	0	0	1	142
II	118	14	27	5	0	164	66	40	56	9	1	172	6	9	17	7	0	39	3	1	3	1	0	8	383
計	139	20	43	13	4	219	71	46	91	23	6	237	8	9	25	15	3	60	3	1	4	1	0	9	525
III												88												88	
II												30												30	
計												643												643	

第2表 神戸遺跡 中世土坑形態分類表

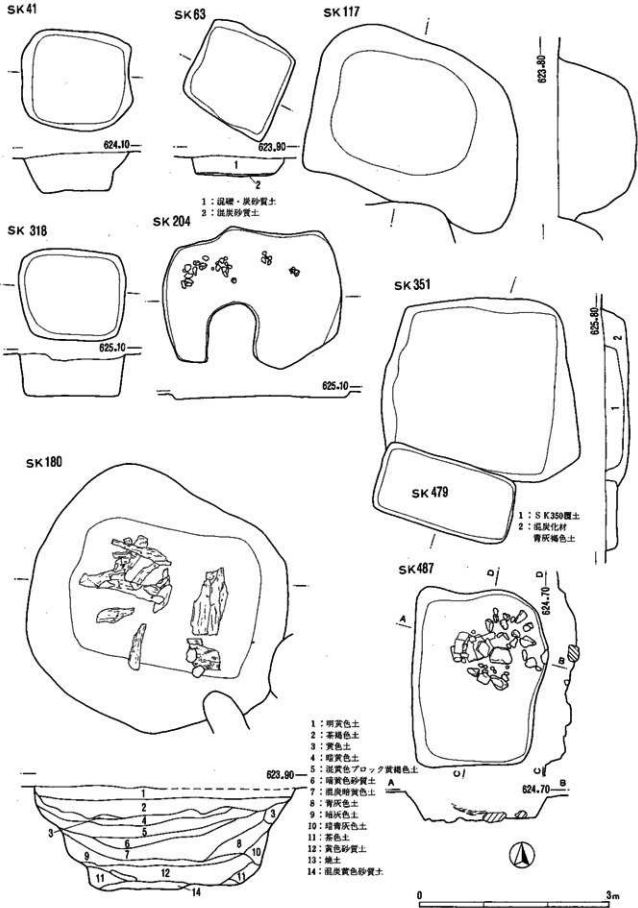
によると、中世1・2期に属する土坑がほとんどであり、そのなかでも2期に属する土坑が85パーセント以上を占めるものと思われる。

SK41 (I群A類2種) 位置：北部北 図版30、第32図

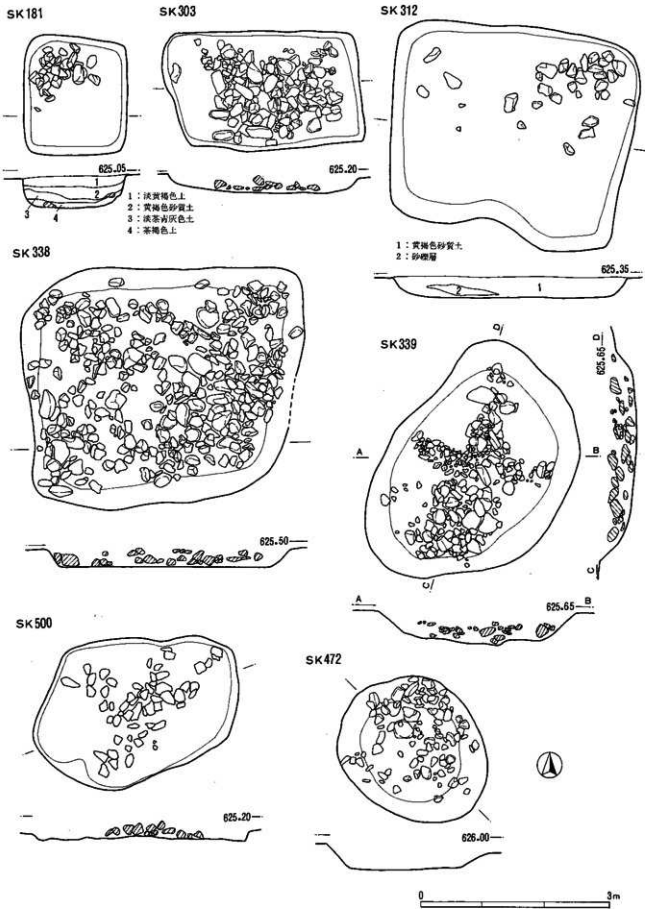
規模・形状：I B層中位を掘り込み、黒褐色土が落ち込むため検出は容易であった。80×80cmの方形プランをもち、深さ30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平坦である。覆土中に炭化物が点在する。掘った土をそのまま埋め戻しているようすが観察される。遺物の出土状況：天福通宝1点、天祐通宝1点が出土しており、上層からは内耳鍋・大窯期皿片が出土した。出土土器の属する時期から、中世2期に属する土坑である。北部地区にあること、出土遺物などから考え、土葬墓と思われる。I群A類2種には、北部地区ではSK162があるのみで、中部地区でもSK345・399・470等その数は少ない。SK318 (第32図) は本址に類似する方形のプランをもっていることから、同じ性格の土坑と思われる。

SK63 (I群A類3種) 位置：北部北 図版29、第32図

規模・形状：I B層中位を掘り込み構築され、SK110を切る。150×150のほぼ方形プランをもち、深さ30



第32図 神戸遺跡中世土坑実測図



cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底部は平坦で地山を床にする。地山はII層中の礫層で、覆土中に礫を多く含んでいるのは、掘った土をそのまま埋め戻した結果と判断される。遺物の出土状況：土坑底部から、炭化した米・麦・チョロギ・ソバと見られる穀類等が相当量出土している。米・麦は土坑北西隅周辺から、チョロギ・ソバと見られるものは反対側の北東隅周辺から出土しており、その出土位置は明確に分けられる。板状鉄製品1点が南西壁近くの上層から出土しており、他に、内耳鍋・天目茶碗・鉀皿等の破片が出土している。出土遺物から中世2期に属する土坑である。炭化した穀類等が多量に出土した土坑は、他にSK112があるが、同じ北部地区北に位置する土坑群中で、東6mの近きにある。墓址としての機能は考えにくく、墓域の中に含まれることから、葬送儀礼に関係した土坑とも考えられるが、類型を知らず、その性格を判断できない。I群A類3種の土坑には、同じ北部地区にはSK36・119があり、中部地区にはSK242・284・294・301・362・373・456・469等がある。

SK117 (III群) 位置：北部北 図版29、第32図

規模・形状：I B層中位で検出された。SK100に切られる。主軸は南東-北西方向で、180×120cmの東側壁が丸く張り出す不整形のプランをもつ。深さは60cmと深い。底部から壁がなだらかに立ち上がり、安定している。遺物の出土状況：底部付近から元豊通宝・天聖通宝・永樂通宝が各1点出土し、他に、内耳鍋・腰折皿・大窯期天目等の破片が出土している。出土遺物から、中世2期に属する土坑であり、土葬墓の性格をもっている。

SK180 (III群) 位置：北部北 図版29、第32図

規模・形状：SK63・117と隣り合い、北部北土坑群のほぼ中心部に位置して検出された。I B層中を掘り込み、中央部が黒色を帯び周囲が黒褐色を呈す円形プランを確認した。北側の一部は、上層の水田の影響のため酸化鉄が集積しており、はっきりとプランの確認は出来なかった。東側の検出面には焼土粒がかたまっている箇所があった。北壁がSK122を切り、東南壁がSK45とSK83に切られる。東西方向に長軸をもつ大型の土坑で、4.2m×3.8mの不整形プランをもつ。底部は平坦で、3×2.1mの方形となり、深さも82cmと深い。壁は地山が露呈し、最初なだらかに落ち込んでいくが、中程からはほぼ垂直に落ち込む。覆土は14層に分けられた。ブロック状に埋められた所もあるが、レンズ状に何度かにわたって埋め戻されている様子が観察された。遺物の出土状況：土坑底部には、大きなもので2mくらいの炭化材が井桁状に組まれ出土した。焼土ブロック・炭化物が多量に認められ、炭化物は互層をなす部分もあった。本社の底部に大きな材を組み火が燃やされたのは確実で、一度埋められた後、ごみ捨て場的な使われ方がなされたとも思える。炭化材の樹種はスギ・針葉樹との鑑定結果を得ている。炭化物の中には繊維状のものもあり、樹皮状でヒノキの皮あるいは単子葉植物の葉との鑑定結果を得た。少しずつ埋められていく過程で入り込んだ遺物では内耳鍋が最も多く、12点がほぼ復元された(図版45、70~81)。他に、青磁碗・青磁壺・大窯期茶入・鉀皿・香炉等の陶磁器類が出土している。鉄製品には刀子2点、燧金4点、鑿状鉄製品3点が出土している。銭貨も9点出土し、皇宗通宝・開元通宝・景德通宝・元祐通宝・元豐通宝・嘉祐通宝・淳化元宝がある。石製品には、石臼・砥石・石錘等がある。人骨等は全くみつからなかったことや本社の規模から火葬施設は考えられず、何のために火が燃やされたものか判断できない。墓址群の中心部にあることから、葬送儀礼に関連した特殊な性格をもっていた土坑ととらえたい。出土遺物から中世2期に属する土坑である。

SK181 (I群B類4種) 位置：中部北 図版27、第33図

規模・形状：黄褐色の地山に青灰褐色土が落ち込む。SK182を切って構築される。188×169cmの隅丸長方形を呈し、深さ50cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底部は平坦である。土坑内の北西部に、径15~30cm大の礫による集石が見られる。底部より10cmほど浮いている。遺物は全く出土していない。土葬墓とも考

えられる。I群B類4種の土坑には、SK193・250・258・305・393・491・495が中部地区に、SK34・38・88が北部地区にある。

SK204 (III群) 位置：中部中央 図版21、第32図

規模・形状：黄褐色土を掘り込み、青灰褐色土が落ち込む不整形な掘り方を検出した。南壁中央部が凹んでおり、切り合いも考えられた。検出面が低いこともあり、深さは7～8cmしかない。平面形から推測すると、ST7の内部施設であるSK238に酷似しており、本址の周辺で掘立柱建物址の柱穴を検出できなかったが、南壁が大きく土坑内へ入り込む部分は、柱穴をさけたものとも考えられる。底部が堅く締まっていることを考えれば、掘立柱建物址に附属する土坑ととらえたい。遺物の出土状況：陶磁器には捏鉢・常滑系甕片があり、鉄製品に釘、銭貨では元祐通宝が出土している。石製品で石硯片が出土した(図版49-11)。本遺跡では唯一の出土品であり注意される。出土遺物から、中世1期の土坑である。

SK303 (I群C類5種) 位置：中部北 図版25、第33図

規模・形状：黄褐色土を掘り込み、青灰褐色土が落ち込む。東西方向に長軸をもつ長方形プランで、深さ28cmと浅い。壁はゆるやかに掘り込まれ、底部は中央部がやや凹むが、全体に平坦である。土坑内には壁際を除き1～2段の重なりをもつ集石がみられる。礫の大きさは径10～40cmほどあり、底部に接している。礫の間に2～5センチ程のやや大きめの炭化物が混じる。遺物は全く出土していない。I群C類5種の土坑は、中部地区にSK289・219が見られるのみである。

SK338 (III群) 位置：中部中央 図版21、第33図

規模・形状：黄褐色土を掘り込み、黄褐色砂質土のブロックが混じる青灰褐色土が落ち込む。東西に長軸をもつやや不整形な長方形のプランで、その大きさのわりに深さは28cmと浅い。壁はゆるやかに掘り込まれ、底部は平坦である。土坑中には10～40cm程の礫が壁際に多く見られ、また、覆土のあり方から礫が投げ込まれた後埋め戻されたものと判断する。覆土中や底部に焼土・炭化物は全く含まれていない。遺物の出土状況：陶磁器には捏鉢があり、鉄製品では刀子片1点、銭貨では皇宗通宝が出土した。出土した陶磁器の属する時期は中世1期であり、人為による埋め戻しがなされていることから考え、中世1期に属する土坑と判断する。本址と同じIII群に属し、集石をもつ不整形な大型土坑にSK339・500(第33図)がある。SK339は本址の南に隣接し、礫は底部より浮いているものが多く、一旦埋め戻された後に石が投げ込まれたものと思われる。出土遺物には内耳鍋・天目茶碗・折縁皿の破片があり中世2期に属する土坑である。

SK351 (I群A類5種) 位置：中部南 図版16、第32図

規模・形状：SK350が入れ子状に本址の中に入り、南壁がSK479に切られる。東壁がやや張り出すが、方形プランをもち、深さ40cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底部は平坦である。底部一面に炭化材が散在しており、壁面には火熱を受け変色した部分が認められる。遺物類、骨は全く出土していない。第32図のSK312も本址と同じI群A類5種に属する土坑である。

SK487 (I群B類5種) 位置：中部北 図版25、第32図

規模・形状：長軸を南北方向にもつ。274×210cmのやや不整形な平面長方形を呈し、深さ44cmを測る。壁はほぼ垂直に地山礫層まで掘り込まれる。そのためか底部は平坦ではなく、かなりの凹凸がみられる。覆土は最下層に砂礫層があり、中層は暗褐色ブロックが混じる黄褐色土、上層が黄褐色砂質土のブロックが混じる暗褐色土で構成される。土坑北東部分には集石がみられる。遺物の出土状況：集石の上部から常滑系大甕(図版46-94)がつぶれた状態で出土した。底部を欠くが、ほぼ完成品に近い形に復元された。使用の状況が推定出来る事項は得られなかったが、この場所に据えられて使用されていたものと考えたい。出土した甕の時期から本址は中世2期に属する土坑である。本址と同じI群B類5種の平面形をもつ土坑は、中部地区にSK197・287・398・710がある。

キ 水田址

SL1 位置：中部 図版4・6、第34～36図

検出状況：テストピットとトレンチで、I B層上部に水田土壌とアゼを確認した。

土壌断面は3層に細分でき、第1層は上位の泥流堆積物（IA層）が混入する溶脱層、第2層は斑鉄が生じた灰色土層、第3層は、鉄の沈積が顕著な集積層である（第35図）。それぞれI B1層・I B2層・I B3層とした。なお、I B3層上面は本遺跡中部地区の中世遺構の検出面である。

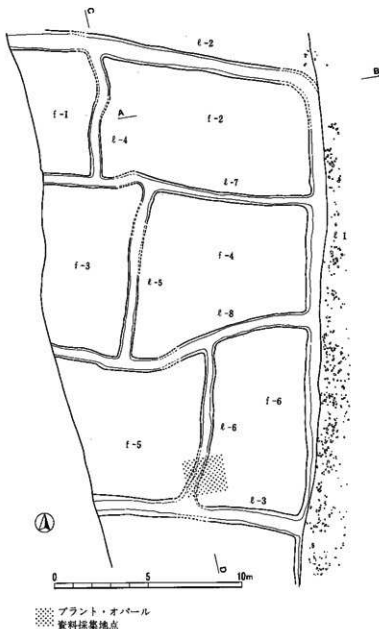
アゼの規模・走向と田面の規模・走向、諸施設の有無・形態を知るために、I B2層上面で平面調査を行った。I B2層上面としたのは、上位のIA層の流下時のエネルギーや荷重が影響したためか、いたるところで小規模な注込と懸濁が発生して、面的にIA・IB層間の境界を捉えることが困難であるのに対し、I B2層上面は安定し、かつ斑鉄を検出の際の指標としたためである。

平面調査の結果、アゼ8と田面6が検出され、それぞれe-1～8、f-1～6とした。また、本址東縁に、本址と直接係わったと思われる溝址が断面で認められたため、これをd-1とした。

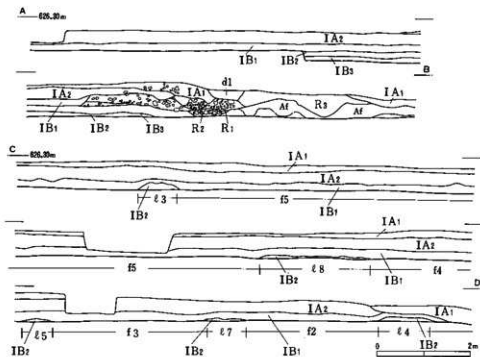
水田土壌とアゼの存在で水田址認定の必要条件是満たされているが、合わせてプラント・オバールの分析を宮崎大学の藤原宏志氏に依頼した。結果(抄)を第36図に示す。I B1層からは4,800～7,000個/ccと多量のイネのプラント・オバールが検出され、I B3層からも6,800個/ccと多量のプラント・オバールが検出された。

検出層位・時期：I B2層上面より検出した。プラント・オバール分析の結果から直下のI B3層上面での水田址の存在が予想されたが、先行トレンチと平面調査の結果、水田土壌もアゼも確認されず、代って土壌群が検出された。このため水田址とは認定しなかった。水田址が認められないにも関わらず、プラント・オバールが多量に含まれていた点について、I B層上限とも懸濁等によりIA層下部にもプラント・オバールが多量に含まれていたと同様に、I r層上面にあった多量のプラント・オバールがI B3層に取り込まれたか、周辺の土壌群の何らかの影響を受けたものと解釈される。

本址耕作土直下のI B3層上面を検出面とすると、土壌群出土の遺物が13世紀から16世紀初頭、I B2層のアゼ



第34図 神戸遺跡水田址実測図



第35図 神戸遺跡水田址土層断面図

	f-1	f-2	f-3	f-4	f-5	f-6
形状	(長方形)	長方形	(長方形)	台形	(長方形)	長方形
面積	(29, 49㎡)	68, 53㎡	(48, 00㎡)	66, 07㎡	(52, 20㎡)	52, 77㎡
標高	625, 537m	625, 539m	625, 535m	625, 536m	625, 553m	625, 578m

第3表 神戸遺跡水田址田面形状・面積・標高表

	ε-1	ε-2	ε-3	ε-4	ε-5	ε-6	ε-7	ε-8
幅	1, 0m	1, 1m	1, 0m	0, 6m	0, 7m	0, 6m	0, 6m	0, 7m
長さ	(26, 0m)	(16, 0m)	(11, 0m)	7, 0m	9, 5m	9, 0m	(14, 5m)	(13, 6m)
進行方向	N-S	N80°W	N84°W	N2°W	N8°E	N8°E	N85°W	N77°E

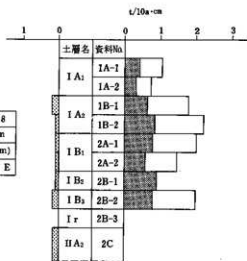
第4表 神戸遺跡水田址アゼの規模・走行方向表

などから出土した遺物が15世紀から16世紀中頃、上位のIA層中の遺物がやはり15世紀から16世紀にまとまりをみせることから、本址の営まれた時期は16世紀初頭から中頃までと推定される。

地形環境：旧水田土壌（特に溶脱層）が最も厚く、また典型的に観察される箇所として本址部分を選択調査したが、同一層位の水田土壌は本址より南へ約100m、北へ約50mの範囲に連続する。この範囲はちょうど、古代に存在したと推測される

2つの微高地を境する低地に当たりIr層・IB層の堆積により、中世後期にはこの一帯に低平地が形成され、その中央に小規模な自然流路が北北東へ流れていたと考えられる。中世の土壌群や掘立柱建物址は、主に小流路北西側に立地する。本址は同一面でこれらの遺構を切り、より南東側へ範囲を広げて営まれた。

中世水田域に当たる低平地は、子細に見ればおそらく中央の小流路に向けて若干傾斜し、小流路付近では幾度か流路変更に従って形成されたわずかな起伏（比高20cm以下）があったと推定される。本址は小流路の直ぐ北西側のわずかな起伏のある地点に位置する。



- 栽培層の地上部乾物量
- 栽培層の根葉(根)乾物量
- ▨ タケ葎科の地上部乾物量

第36図 神戸遺跡水田址プラント・オパール定量分析結果(抄)

アゼの規模・走向：各アゼの様子を第4表に示す。このうち $\ell-1 \sim 3$ が大型で直線的に本址の外縁を構成し、現水田のアゼと位置・走向を等しくする。上面は平らで、人等の通行が行われたと推定される。特に $\ell-1$ は $d-1$ に平行してその脇を走り、内部に人頭大の礫が含まれている。これは上位にある現在の大アゼが礫を裏込めしている事実(第35図)と同様であり、同じ過程で造られた可能性が高い。つまり、 $\ell-1$ は小流路の河道に沿って河岸に盛土して構築されたことを示し、開田にあたって自然流を管理した経緯を物語っている。

$\ell-4 \sim 8$ は、断面がカマボコ型で通行には適さなかったと理解される。高さは4~8cmで「水かがり」の最小必要高であり、機能性以外の性格は持ち合わせていなかったと思われる。 $\ell-7$ と $\ell-8$ は曲りくねりながらも一条で連続するが、 $\ell-4 \cdot 5 \cdot 6$ は $\ell-7 \cdot 8$ と食い違っており、地形が大きく北方へ緩傾斜することと矛盾しない。

田面の規模・形状：各田面の面積・平均標高・形状を第3表に示す。西方のアゼが範囲外のため明確には把握できなかったが、 $f-2 \cdot 4$ が完全に検出されその面積がきわめて近い値をとることから、全体に70 m^2 を若干下まわるくらいの面積にそろえられていた可能性が高い。本址外縁を構成する大型のアゼは、西方のものが位置・走向ともに明らかでない。もしこのアゼが、 $\ell-1 \cdot 2 \cdot 3$ のように現在の大アゼと一致するなら、現在、本址西方50m付近にほぼ南北方向に大アゼがあり、その下位に存在するはずである。この場合、大型のアゼで区画された範囲は1,300 m^2 を越える。この中に70 m^2 を少し欠けるほどの小型水田が20枚前後区画されていたと思われる。

平均標高を見ると、 $f-1 \sim 5$ は値の差が1cmでありほぼ同一の高さとみてよいだろう。 $f-6$ は他より3~4cm高く、面積も他の80%ほどである。 $d-1$ に近いこともあり「水口水田」を想定して精査したが、取入口等は検出されなかった。

以上のような田面のわずかな高低は、開田以前の地形の微妙な起伏を反映したのかも知れない。諸施設： $d-1$ がある。断面で捉えたものの、現在の用水路の直下にあるため擾乱が著しく、平面的に明確には把握していない。断面(第35図)の $R1 \cdot R2 \cdot R3$ は、それぞれ現在の用水路・ $d-1$ ・ $SL1$ 期以前の河床跡である。河床左方の Af は $\ell-1$ の盛土で、右方の Af は左方の基質と同質であることから、一部または大半が人為的に動かされた土と考えられる。とすると、 $SL1$ 開田以前の地表は $IB2$ 層または $IB3$ 層にほぼ平行していたはずで、ゆるやかな微起伏を持ち、比較的広い流路幅を持っていたものと想像される。 $\ell-1$ と対岸の大型アゼ(または堤)は河岸(または流路州)上に築かれ、元来の流路幅を河床の幅に限定し、 $d-1$ としている。この点で $d-1$ を直線状に整備し、曲折した河床の一部は大型アゼや田面に埋没したことも予想される。

$\ell-1$ 南側がほぼ全幅にわたって礫質となっている事実は、このような作業の結果であると解釈する。

$d-1$ は大型アゼと同様に、泥流堆積物(IA 層)に全面をおおわれてもなお同じ位置に同じ走向で造られている。このことは、中世後期(16世紀)に形成された区画や灌水系が現代まで連続と生き続けて来たことを表しており、逆に、本遺跡付近に見られる水田景観の初源が16世紀に遡ることを意味している。

2 遺物

(1) 縄文時代の遺物

ア 土器(図版32-1-9、第5表)

総数114点が出土したが、遺構は確認されず、包含層および古代以降の遺構に混入して検出された。右の表から知れるように、地区によって出土する時期に片寄りがある。中部・北部地区では

	前期	中期	後期	晩期	不明
南部	0	6	53	3	9
中部	0	16	2	0	0
北部	1	14	0	2	8

第5表 縄文土器地区別出土一覧

中期の土器が多く、北部地区から出土した曾利Ⅰ式土器(3)の1点を除き、4(中部)に示したような曾利Ⅴ式土器が占めるようになる。後期になると、南部地区に曾利Ⅴ式土器に継続して図示できなかった称名寺式土器や、少し時間を置いたが、1・5～8に掲げた加曾利Ⅱ式土器が現われる。また、2・9は南部地区から出土した晩期の土器で、2が清水天王山式土器かと思われるもので、伊那市百敷刈遺跡(長野県教委 1973)4号住居址に類似がある。伴出は加曾利Ⅱ式土器で、あるいはこの時期に上げて考えるほうがいいかもしれない。9は大洞C₃式土器あるいは大洞B-C式土器に比定しうるものである。そのほか北部地区から前期の諸磯b式土器が出土している。

イ 石器(図版32-1~7)

石器30点、剥片・砕片68点、石核5点が検出された。出土状況は土器と同じで、包含層および古代以降の遺構に混入して検出された。石器の内訳を見ると、石鏃1点、スクレイパー1点(中部)、ピエス・エスキュー3点(北部2、中部1)、打製石斧17点(北部7、中部4、南部5)、磨石3点(南部)、石皿3点(北・中・南部各1)、礫器2点(北・中部)であった。小形石器の石材は黒曜石が主体を成し、大形石器は砂岩・緑色岩・安山岩・粘板岩・ホルンフェルスなどが見られた。剥片・砕片は北部で48点、中部で2点、南部で18点出土し、石材はチャート4点のほかは黒曜石であった。石核はすべて北部からの出土で、黒曜石製が4点とチャート製が1点であった。

図版32に一部の石器を掲載した。1は茎部を欠損するが、ヒコキ鏃と考えられる。石材は安山岩(下呂石)である。2・3は打製石斧である。4・5は礫器としてとらえた。4は扁平な円礫の周縁に調整を加えたもので、実測図下端には打製石斧の刃部と同様な磨耗痕が認められた。6は打製石斧の未製品とも考えられる。6・7は磨石である。6は片面だけではあるが、光沢をもつほど磨耗している。7は欠損品であるが、おそらくカマボコ状を呈していたと考えられ、その下端の平坦面が磨耗している。

(2) 古代の遺物

ア 土器

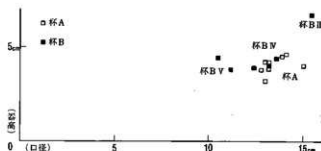
概観

神戸遺跡では4・6・7・8・11・13・15期の土器が出土している。遺物は竪穴住居址と自然流路、土坑からの出土がその大多数である。住居址の重複がはげしい南部の一面では、各遺構の土器群を様相としてとらえることが困難な遺構もあり、特に、8・11・13期の遺物の切り分けが困難な部分があった。

4期の様相はSB22~25に代表される。食器は須恵器を主体としてロクロ調整の黒色土器A杯A、土師器杯Cがそれに若干加わる構成である。主体となる須恵器杯Aの底部切り離しは、大部分が回転系切りであるが回転へら切りも若干残っている。須恵器杯Bは法量による分化をみせ口径と器高によって4法量(Ⅱ:口径15~17cm・器高4~5cm、Ⅲ:口径14.5~17cm・器高5.5~8cm、Ⅳ:口径12~13.5cm・器高3~4cm、Ⅴ:口径11~12cm・器高4~5cm)が看取される。また、量は少ないが須恵器杯Bの蓋に美濃須賀産の製品がある。煮炊具は外面をハケ調整する土師器甕Bと小型甕B、ロクロ調整の小型甕Dを主体に構成され、体部をへら削りする甕C(いわゆる南武藏型甕)がそれに加わる。甕Bは背が高く口縁部が強く短く外反する形態で、内面にハケ目が残る。貯蔵具は須恵器のみである。大形の甕A・中形の甕Dの形態を取ると考えられるもの・長頸甕Bなどがある。

6・7期は4期からの土器様相を受け継ぎつつ、8期に完成する碗・皿中心の食器構成への過渡的な段階である。6期の様相はSB9に見られるが、ここでは食器が須恵器と黒色土器で構成され、量的に黒色土器が須恵器を上まわるようになる。須恵器杯Aは自然な型式変化の結果、底部が小さく体部の開きの強い形態へと変化している。煮炊具も甕B・C、小型甕Dを主体とした構成は4期と変わらないが、全体のプロポーション、口縁部形態に型式変化が見られる。

8期はSB2、10、15などに好資料がある。食器は黒色土器A・ロク口調整の土師器・黒斑の残る軟らかい焼き上りの軟質須恵器・灰釉陶器で構成され緑釉陶器が少量これに加わる。器種は4期が杯Bを代表的器種としていたのに対し、この期では杯Aと椀・皿が食器の構成の中心となる。黒色土器Aは黒色処理する内面を例外なくへら磨き処理する技法をともなっている



第37図 神戸遺跡SB22～25出土須恵器法量分布図

が、8期のものはへら磨きがやや雑になってきており、器面全面に施されることなく放射状の暗文風へら磨きになるものが多い。黒色土器杯Aは器高と口径により大小の2法量（Ⅰ：口径15～19cm・器高4.5cm～7cm、Ⅱ：口径12.5～13.5cm・器高3.5～4.5cm）が認められる。灰釉陶器は東濃産の光ヶ丘1号窯式のものが主体を占めている。煮炊具は土師器甕B、小型甕Dの2器種のみで構成される。貯蔵具は壺類に灰釉陶器が用いられていることを除けば4期の様相と大差ない。

11・13期は安定した資料に恵まれないう、須恵器の消滅、土師器杯Aの小型化、法量分化という動きのなかでとらえられる。

15期のSB1は、8期のものと思われる遺物が混在するが15期の資料としては重要である。土師器杯AⅡは小型化し、大小に法量分化した杯Aと皿A・灰釉陶器の椀によって構成されている。また、遺構からは検出されなかったが中国産の白磁椀が伴う可能性がある。

遺構出土の土器

SB1 (図版33, PL14, 第6表)

食器は、土師器・黒色土器A・灰釉陶器がある。土師器AはⅡとⅢに法量分化し、杯AⅡ（1～3）は口径9～10, 4cm・器高1, 8cmで、器高が非常に低い。杯AⅢ（4～6）は口径14～15, 6cmと大きく、5・6は皿に近い。皿AⅡ（7）は、口径8, 8cm、器高1, 3cmと小形扁平で口縁端部を面取りする。灰釉陶器は3点が図示できた。9は口縁が外反する椀、10は小椀、8は光ヶ丘1号窯式の皿で混入であろう。煮炊具の土師器甕片は4期からの混入、須恵器甕もあるが混入品と考えられる。土師器杯・皿Aの形態により15期の土器群である。

SB2 (図版33・34, PL14・15, 第7表)

食器は、土師器・黒色土器、軟質須恵器・灰釉陶器からなる。土師器杯A（1～4）は口径12, 1～13, 4cm、器高3～4cmで杯AⅡの1法量のみである。椀（5）が1点ある。黒色土器Aには杯A・椀・皿Bがある。へら磨きはいずれも粗く、6・10のように全面の縦へら磨きを省略し、「+」字状の暗文風へら磨きにしたものもある。8は輪花状に口縁を波立たせた皿Bで高台が高い。灰釉陶器（14～24）はハケ塗りで施釉され、図示したものはすべて光ヶ丘1号窯式である。煮炊具は、土師器甕Bと小型甕Dで構成される。28は口縁で「く」の字に折れ短く外反する。内面にも横方向のハケ目を有する。他は、口縁部が直線的に外上方に伸びるもので胴部上半にハケ目の後、横方向の撫でを入れ

種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測割合%
土師器	杯AⅡ	7	165	16 43%	1～3
	AⅢ	6	475		4～6
	皿AⅠ	2	300		
	皿AⅡ	1	30		7
黒色土器 A	杯AⅡ	4	50	7 19%	37 51%
	椀	3	35		
	不明		125		
灰釉陶器	椀	13	185	14 38%	9・10
	皿	1	25		8
煮炊具					
土師器	甕B	11	1160	16 26%	
	小型甕D	5	135		
	不明		580		
貯蔵具					
須恵器	壺	2	25	8 26%	
	甕	5	260		
	灰釉陶器	甕	1		50

第6表 SB1 出土土器構成表

る。底部周辺は手持ちへら削りを行なう。口縁端部は、面取りするものと、丸くおさめるものの二者がある。小型甕Dは、回転糸切りで切り離すが27はその後、指オサエをし胴下部を手持ちへら削りする。貯蔵具は、須恵器と灰釉陶器があり32は須恵器長頸壺A、35・36は灰釉陶器の短頸壺・長頸壺である。32は須恵器甕Dで肩部に断面三角形の凸帯を巡らし、四角形に小さくつまんだ小さい四耳を付す。凸帯の上部肩のあたりに「×」のへら記号がある。34は須恵器甕Aである。8期の土器様相である。

SB3 (図版35)

遺物は全体に少ない。食器は土師器(1~4)・黒色土器A(3)・軟質須恵器・灰釉陶器(4・5)から構成されている。灰釉陶器皿(5)は混入か。食器の構成から8期の土器と考える。

SB4 (図版35)

遺物の量は多くない。土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器があるが、須恵器・黒色土器A杯Aは混入と考えられる。1は12期以降にあらわれる土師器杯AIIIである。杯Aは大小に分量分化しており、図示できないが小型化した杯AIIが5個体ある。2は黒色土器A碗で内面上半をヨコへら磨きする。3は灰釉陶器段皿で底面に糸切り痕が残る。4の碗も底面に糸切り痕が残る。灰釉陶器は九石2号窯式。土器は13期の様相を示す。

SB5 (図版35)

遺物は少ないが、煮炊具の割合が高い。食器は土師器・須恵器があるが、土師器杯Aは小片1片のみで混入であろう。須恵器も蓋が1点図示できたのみである。土師器杯C(1)は底部全面を手持ちへら削りする。土師器甕B(4)は口縁が強く外反する。5は須恵器の短頸壺C。須恵器主体の食器構成で4期の様相である。

SB7 (図版35)

食器は土師器・黒色土器A・黒色土器B・灰釉陶器がある。須恵器・軟質須恵器は混入と考えられる。土師器杯AII(1・2)は口径9.6~9.8cm・器高2.3~2.5cmと小型である。灰釉陶器皿(5・6)・段皿(7)の底面は、6のみ回転糸切り未調整で他は糸切り後へら削りする。碗は8が底部へら削り、9は糸切り痕を残す。5~8は虎浜山1号窯式、9が九石2号窯式である。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕C・小型甕D(10)・羽釜A(11)がある。甕A・B・Cは小片のみで混入であろう。11は胴部下半内外面を縦方向にへら削りする。貯蔵具には須恵器と灰釉陶器はあるが混入の可能性が強い。土器は13期である。

食器						
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測回%	
土師器	杯AII	13	320	14 11%	1~4	
	碗	1	110			5
	黒色土器A	杯AII	46	680	78 58%	6~7
		碗	31	690		
段皿		1	130	61%	8	
不明			205			
軟質須恵器	杯A	5	150	6 5%	12~13	
灰釉陶器	碗	28	780	35	14~17	
	皿	7	670	26%	18~24	

煮炊具					
土師器	甕B	48	14070	60 28%	28~31
	小型甕D	11	820		25~27
	甕B	1	15		

貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	1	2190	25 11%	32
	甕A	11	4620		34
	甕D	2	2320		33
灰釉陶器	長頸壺	9	495	36 35	36
	短頸壺	1	135		35
	不明	1	80		

第7表 SB2 出土土器構成表

第7表 SB2 出土土器構成表

食器					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測回%
黒色土器A	杯A I	3	180	9 23%	1
	杯A II	5	65		
須恵器	杯A	22	775	28 72%	2~4
	杯B III	1	35		
	杯B IV	2	30	64%	
	杯B 壺	3	20		
軟質須恵器	杯A	2	20	2 5%	

煮炊具					
土師器	甕B	8	550	14 23%	5
	甕C	3	240		6
	小型甕D	3	40		

貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	3	220	8 13%	8
	甕A	5	1300		7

第8表 SB9 出土土器構成表

SB9 (図版35、第8表)

食器は黒色土器Aと須恵器・軟質須恵器があるが、軟質須恵器は小片2片のみで混入であろう。杯Aの構成は須恵器22個体、黒色土器A I 3個体・II 6個体である。須恵器杯A (2~4)は口径12cm・底径5~6.1cm・器高3cmと口径に比して底径が小さく器高が低いため体部の開きは強く感じられる。須恵器杯Bは図示できないがIIIとIVがある。煮炊具の土師器甕B (5)は、頸部に強い指ナデを入れ口縁をやや肥厚させている。口縁の外傾は強い。甕C (6)は口頸部を「コ」字状に折りまげている。須恵器杯A・土師器甕類の形態から6期の土器群と考えられる。

SB10 (図版36、PL16)

土師器・須恵器・灰釉陶器があるが須恵器の食器類は重複するSB9からの混入であろう。土師器杯A II (1~4)は口径11.8~12.9cm・器高2.8~3.8cmとやや小型化している。椀 (6)は外にふんばる高台を有する。黒色土器Aの椀 (7)は口縁部の横へら磨きは丁寧に行なうが、体部内面のへら磨きは雑で、へら磨きの間にクロロナデ痕が見える。灰釉陶器 (9~11)は三日月形の高台を有するもので、光ヶ丘1号窯式である。12~14・19は須恵器。15~18は土師器小型甕Dで、15は底部の糸切り痕をナデ消している。8期の土器である。

SB11 (図版36)

食器は黒色土器Aが量的に最も多い。1は土師器杯A IIで口径12.8cm・器高4.3cm、2は黒色土器A杯A II。3は軟質須恵器杯Aである。黒色土器Aは他に椀と皿がある。煮炊具は土師器甕B・甕Cと小型甕Dがある。4・5は小型甕Dで底部回転糸切り、5はひとまわり小さい。甕B (6)は口縁が肥厚して立ち上がるタイプで、口径に比して、器高が低く、胴部下半をハケ目の後ヨコナデする。須恵器はSB6からの混入のため小片である。8期の土器群である。

SB12 (図版36)

図示できる遺物は少ない。1・2は土師器甕B IIで口径9.8~10.2cm・器高2.6cm。4の灰釉陶器椀は、高台の貼り着け面の広い三角高台に近く外に開き気味で、口縁も端部で外反する。釉は薄く施釉範囲等不明瞭である。3の灰釉陶器皿も丸石2号窯式である。土師器甕・須恵器も混入と考えられる。13~14期に属する土器群と考えられる。

SB13 (図版37)

1の土師器杯A IIは口径10.6cm、器高3cmである。3は黒色土器Aの椀。灰釉陶器皿 (4)、椀 (6)は虎渓山1号窯式。7の小型甕Aは不整形の器形で底部には木葉痕が残る。12~13期に属する土器群と思われる。

SB14 (図版37)

食器は土師器 (1~4)・黒色土器A (5~7)・須恵器 (9~11)・灰釉陶器 (12~16)・緑釉陶器 (8)があるが、黒色土器Aの杯Aと須恵器は混入と考えられる。灰釉陶器はいずれも漬掛けで施釉され、虎渓山1号窯式。8の緑釉陶器椀は灰白色の軟質の胎土で、光沢のない濃緑色の釉が掛かる。18は羽釜Aで口径15.5cmと小型である。19は甕Dと考えられる。20は灰釉陶器長頸壺で全面に灰釉を刷毛塗りする。土師器杯A IIの形態から13期の土器と考えられる。

SB15 (図版37、PL10、第9表)

構成表に示すように杯Aは土師器・黒色土器A・軟質須恵器がある。黒色土器Aでは口径によってI (5)とII (2~4)に法量で分けられる。7の黒色土器A椀は内面へのへら磨きを省略し、「十文字」の暗文へら磨きを施しており他の部分はクロロナデのままである。8・9は黒色土器Aの皿Bで直線的に開く体部をもつ。8には底部に回転糸切り痕が残る。6・10は軟質須恵器、灰釉陶器 (13・14)は光ヶ丘

1号窯式である。11・12は緑釉陶器で、11は輪状高台となる柄の高台と思われ、黄味のかかった灰白色を呈する軟質の胎土で、釉はほとんど剥落しているが、光沢のある淡緑色の釉調である。12は淡黄緑色の釉が全体に薄く掛かる柄で、全面をへら磨きしている。胎土は灰色で硬質である。15の土師器盤は脚台に十文字の透かしを施す。8期の土器様相である。

SB16 (図版38)

食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成され、軟質須恵器・須恵器は混入である。土師器杯A・椀は小片で分量不明。黒色土器A椀(4~6)は、内面のへら磨きが省略され、暗文状に形骸化している。4は、口径10.8cm・器高4.4cmの小形である。7は灰釉陶器で底部に糸切り痕を残し、施釉範囲不明。8・9も底部に糸切り痕を残す皿でいずれも虎渓山1号窯式である。10は甕Eで口縁部片、胴部から直線的に開く形態で、ハケ目を施し口縁は断面三角形になる。11の甕は、体部上半を横撫でしている。ハケ目は観察できない。12は小型甕D。13は甕Bで体部外面をハケ目調整、内面は指によるナデアゲをしている。この他に羽釜・足釜がある。甕Cは1片で混入であろう。11期の土器である。

SB17 (図版38)

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器があるが、須恵器は混入と考えられる。杯Aの個体数比では、黒色土器Aが多い。土師器・黒色土器Aは、小片で実測できない。図示した黒色土器A椀(1)はへら磨きが省略され暗文状である。2・3は軟質須恵器で色調は土師器に近い。4・5は灰釉陶器椀で三日月高台、小片で施釉方法は不明。6は土師器小型甕Dで底部の回転糸切り痕を撫で消している。7は須恵器平底の甕で、内面の当て具痕をヨコナデで一部撫で消している。底部は内・外面とも指によるナデアゲである。8期の土器様相である。

SB18 (図版38・39)

遺物は少ない。食器は須恵器のみである。図示した杯BIV(1)のほか杯甕Bが2点ある。蓋のうち1点は美濃須衛窯産である。煮炊具は、4点図示したが2~5は内面に横方向のハケを施すものでいずれも口縁部を短く「く」の字状に外反させるものである。底部周辺を調整するものが多く、2・3は横あるいは斜め方向のハケ調整、5は指ナデアゲで調整する。4期の土器と考えられる。

SB19 (図版39)

食器は土師器・黒色土器A・須恵器・灰釉陶器があるが、須恵器は小片で混入であろう。土師器は、杯A(1~3)・皿A・甕Bがある。皿A・甕Bは混入であろう。黒色土器A杯AII(4~7)は1法量のみ。灰釉陶器は三日月高台・刷毛塗りである。10は須恵器の片口鉢。焼きはやや甘い。煮炊具は土師器の甕B片が多い。甕A・Cは小片。8期の土器群である。

食器		種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測率%
土師器		杯A II	10	260	15 26%	58	1
		椀	4	55			15
		盤	1	75			5
黒色土器A		杯A I	1	177	17 29%	72	2~4
		杯A II	11	892			7
		椀	3	100			8~9
須恵器		杯A	5	75	6 10%		
		杯B 甕	1	40			
軟質須恵器		杯A	13	256	20 35%		6~10
灰釉陶器		椀	5	220			13・14
緑釉陶器		椀	2	20			11・12

煮炊具

土師器	甕 A	2	75	15 19%		17
	甕 B	8	1650			
	甕 C	1	5			
	小型甕D	4	355			16

貯蔵具

須恵器	甕 類	5	140	7 9%		
	甕 類	1	25			
	甕 類	1	5			

第9表 SB15出土土器構成表

SB20 (図版39)

食器は須恵器を主体に黒色土器A・土師器がある。土師器は小片で混入であろう。1の土師器杯Cは底部から体部下半にかけてへら削りを施し、体部内面には放射状の暗文が施される。須恵器杯A(2~5)は、回転糸切りのみで、口径13.6~14.4cm、器高3.8~4.7cm、底径6.0~7.4cmと器高・底径の大きな体部の外傾の弱いものである。特に3・4などは底部内面を平らに広く挽き出しているため、腰の部分折るようにして体部を立ち上がらせており箱形に近い形態である。ロクロナデも丁寧で、ロクロ目は丁寧に消されている。器壁も厚い。杯BはIVとIIIがある。蓋は口縁端部を断面三角形に仕上げるもので、6は口径18.4cmを測る大形である。7・8には「×」印のへら記号がある。煮炊具は土師器甕Bを主体に甕A・C、小型甕Dがある。4期に属する土器群と考えられる。

SB21 (図版39)

食器は土師器・灰釉陶器を主体に黒色土器A・須恵器の小片がある。土師器杯Aは底径が小さく深い杯A II (1)と口径12.3cm・器高2.6cmの杯A III (2・3)がある。灰釉陶器は椀(4・5)と段皿(6)で椀(5)は直線的な体部に横掛けし、高台が外にふんばる。段皿は口縁が外弯するもので底面に糸切り痕が残る。虎渓山1号窯式である。7は土師器の鉢A、8は口縁ですぼまる羽釜Aである。11~12期の土器群である。

SB22 (図版40, PL16)

食器は須恵器を主体に、土師器杯C 3個体、黒色土器A 1個体がある。土師器杯C(1)は、口径10.3cmで、内面に鋸歯状暗文を施し、外面体部下半を手持ちへら削りする。須恵器杯A(2・3)は回転糸切りの未調整。回転へら切り痕を残すものはない。杯BはIII(5・6)・IV(7)・V(8)がある。8は底面に糸切り痕が残る。9は須恵器の甕で、口径19.6cmを測る大型品で口縁は丸みをもって立ち上がる。胎土は白味の強い色調を呈し美濃須衛窯産製品と考えられる。美濃須衛窯産製品には他に杯蓋Bもある。煮炊具は土師器甕Bを主体に甕C、小形甕D(10)がある。甕Bは底部に削りとナデの調整を加え、甕Cは口縁が「く」の字に外反するものである。貯蔵具は須恵器の壺・甕・平瓶があり、壺(13)は小形の短頸壺Cである。4期に属する。

SB23 (図版40)

食器は須恵器を主体に、土師器と黒色土器Aが少量ある。SB22と同様黒色土器A杯A(1)は口径18.2cmを測る杯A Iで、横方向の磨きか内面はかなり下まで及ぶ丁寧な調整である。須恵器杯Aは回転糸切りと回転へら切りが混在している。2のように糸切りの後、手持ちへら削りするものもある。杯BはII(5)とIV(6)がある。煮炊具は土師器甕B・C、小型甕Bがあり、8は内面に刷毛を横に施す。4期に属する。

SB24 (図版40, PL17)

食器は須恵器主体で黒色土器Aが1片のみある。須恵器杯Aは底径が6.1~6.4cmと大きめで、外傾の弱いものですべて糸切り、2は器高4.5cmを測る。杯BはIVのみで、杯蓋Bには美濃須衛窯産製品もある。煮炊具は甕Bが多いが甕Cもある。小型甕Dは少ない。4期に属する。

SB25 (図版41, PL17, 表10)

食器は須恵器を主体に、土師器杯C 4個体、黒色土器A 1片の構成はSB22~24に類似する。土師器杯C(1)は体部外面下半を手持ちへら削りし、底部内面は見込の部分を除いて、放射状に暗文を施す。底面は回転糸切りの後外周をへら削りする。須恵器杯Aは口径13.0~15.0cm、底径6.4~7.8cm、器高3.8~4.2cmの1法量で、いずれも底部内面を平らに見込まで広く挽く形態で、体部の外傾の弱い形状をとる。杯蓋Bは美濃須衛窯産1個体と在産が21個体ある。杯BはIIが4個体、IV(13~15)、V(16)がある。こ

のうち12~15は底面中央に糸切り痕を残す。煮炊具は土師器甕Bと甕C 1点である。甕Bは強く外反する口縁である。小型甕Dは底部に糸切り痕を残す。貯蔵具は長頸壺(19・20)と、甕(21・22)がある。4期の土器様相である。

SK25 (図版41)

黒色土器A杯A II・椀(1)、灰釉陶器皿(3)・段皿(2)・椀、須恵器杯A、羽釜A(4)が出土している。11~12期と考えられる。

SK28 (図版41, PL17)

土師器杯A、黒色土器A杯A(1~3)・皿B(4)・鉢A、須恵器杯A・軟質須恵器杯A(6)、灰釉陶器椀・段皿、土師器甕B・甕C、小型甕Dが出土した。8期に属する。

SK743 (図版41)

灰釉陶器短頸壺(1)と口頸部を欠く長頸壺(2)が出土した。1は完形で底部糸切り後回転へら削り調整で、淡緑色の釉が掛かる優品である。2は角高台を有する長頸壺で頸部を欠く。黒笹14号窯式。6期あるいは7期と考えられる。

ウ 遺構外出土の遺物

NR1 (図版2・3, PL18)

自然流路NR1からは各期の土器が出土している。土師器、黒色土器A、須恵器、灰釉陶器等がある。(1・2)は土師器杯A II、口径9.6cm・器高2.3cmの小型のもので14期、3~5は黒色土器Aの杯Aと椀で8期に属する。6~13は須恵器杯Aで底径の大きい体部の外反の弱い形態の5期のものから、底径が小さく体部の外傾の強い7期のものまでである。14・15は須恵器杯B。16~18は灰釉陶器で虎漢山1号窯式で12~13期に伴うものである。

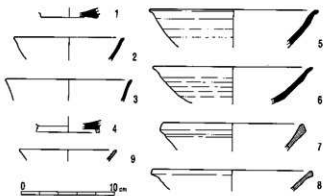
包含層出土の遺物 (第38図, PL18)

中部地区、南部地区の包含層からは古代各期の遺物が出土している。緑釉陶器・中国産白磁を图示した。すべて南部地区の包含層出土である。1~6は緑釉陶器で、1は輪状高台となる椀の高台で、黄味のかかった灰白色を呈する軟質の胎土で、釉はほとんど剥落しているが、光沢のある淡緑色の釉調である。5・6は淡黄緑色の釉が全体に薄く掛かる椀で、全面をへら磨きしている。胎土は灰色で硬質である。2は小椀で須恵質の胎土に濃淡のある緑色の釉が掛かるが、剥落が激しい。3は光沢のある濃緑色の釉が掛かる薄手の椀で、胎土は堅緻で灰色を呈する。9は灰白色の軟質の胎土で、光沢のない濃緑色の釉が掛かる。6は浅黄橙色のやや軟質の胎土に濃緑色の釉が掛かる。7~9は中国産白磁で、7は森田勉氏の種類による椀IV類、8も口縁を断面三角形におさめる椀

食器				器体数比	実測図No
種類	器種	例体数	質量		
土師器	杯C	4	225	5%	1
	黒色土器A	杯A II	1		
須恵器	杯A	31	880	74%	2~8
	杯B II	4	410		11~12
	杯B IV	14	270		13・14
	杯B V	2	60	15	
	杯B蓋	22	375	9・10	
	鉢A	1	230		
	不明		60		

煮炊具				器体数比	実測図No	
種類	器種	例体数	質量			
土師器	甕B	10	1620	12%	16・17	
	甕C	1	50			
		小型甕D	1	250	18	
貯蔵具				器体数比	実測図No	
須恵器	長頸壺A	1	100			20
	皿類	3	200			9
	甕A	1	170			22
	甕類	12	2000	21		

第10表 SB25出土土器構成表



第38図 神戸遺跡包含層出土緑釉陶器・輸入陶磁器実測図

である。9は皿である。

イ 文字関係資料(第39・40図、第11・12表、PL19)

本遺跡出土の文字関係資料には墨書土器6点、刻書土器3点、転用硯4点がある。

(ア) 墨書土器(1~6)

図示した6点がある。土器の種類別内訳は土師器2、黒色土器A3、軟質須恵器1点に分かれ、器種はいずれも杯を対象とし、出土地点は南部調査区に限られる。4・6はNR1から出土しているが、本来は周辺の住居址に帰属すると推定できる。判読できた文字は2~4で「合東」または「金東」、「中」がある。特に、前者は3点を数え、6期の住居址群を象徴する文字として注目できる。「東」の書き方が二種類観察されることから、3・4は同一人物によって、6は別な書き手によると判断できる(第39図)。これは、3・4が土器の口縁を左手に持って文字を書く右横位で、6は正位に墨書することからも書き手が二者あることを裏付ける。SB2から出土した1はほかの墨書土器よりは後出的な遺物である。



第39図 神戸遺跡出土墨書文字集

本遺跡の場合、出土点数が少ないため墨書の対象となった食器の種類、器種、部位などに、土器を選択する際の意図的な特徴は認められない。

(イ) 刻書土器(7~9)

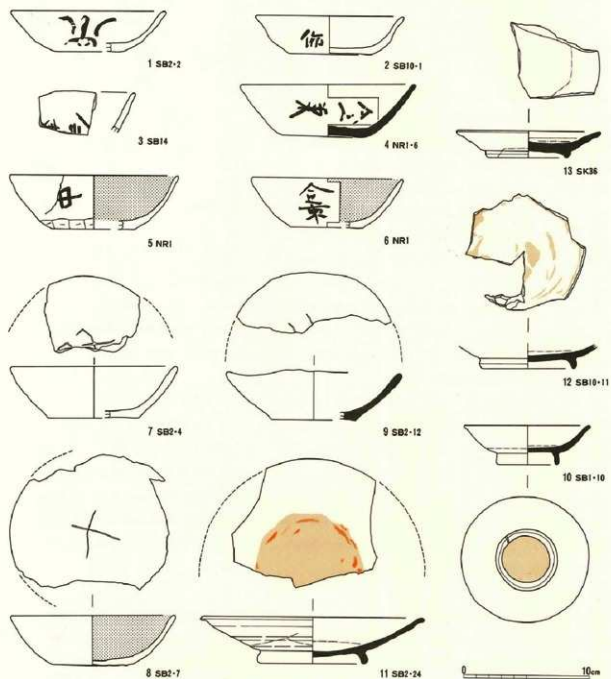
刻書土器とは、土器焼成後に先端の尖った工具を使用して文字などを線刻したものをさし、土器焼成前に刻まれる、いわゆる「へら記号」とは区別する。

このような遺物はSB2から出土した3点がある。土器の種類は土師器1、軟質須恵器1、黒色土器A1点である。器種はすべて杯で、底面内側に刻書される。刻書には先端の鋭利な釘状の工具を用いており、2mm弱のかなり細い、しかも浅い線刻である。8は漢字の「十」とも読み取れる線刻であるが、それが意図されたものであるか否かは不明である。ほかの遺物も文字を意識して刻書したとは考えられず、墨書土器とは基本的に性格が異なる。

(ウ) 転用硯(10~13)

転用硯とは、土器や陶器が本来もつ属性を失い、硯として転用されたものをさす。但し、筆揃えや、墨溜めに使用したとみられる痕跡を残すものは硯との区別が明確でないため、これも含めて広義の転用硯として扱うこととした。加えて、朱の付着がみられる遺物も朱書きに使用した可能性があることから、文字資料とし、転用硯の類に含めた。

本遺跡出土の転用硯は4点がある。このうち確実に転用硯と認定できるのはSK32から出土した13のみである。灰輪陶器の皿に調整を加えないまま硯に転用しており、墨の痕跡は不鮮明なもの、磨滅痕跡が著しく光沢がある。10~12は朱を用いたパレットの類でいずれも灰輪陶器の内、外の底面を転用している。10は高台部の外側に暗赤色の朱が明瞭に観察される。12は柄の体部を打ち欠いて整形した後、内面をパレット面として使用しており、一部外側へ朱がたれた痕跡も認められた。



第40図 神戸遺跡出土文字関係資料実測図

ウ 金属製品

(ア) 鉄製品 (図版42, PL19・20)

本遺跡から出土した古代の鉄製品は、61点を数える。その内訳は、鎌1点、刀子8点、釘9点、斧1点、鐵4点、鐸たか1点、金具類1点、苧おぎ引鉄1点、紡錘車1点、用途不明品34点(うち、棒状品22点、板状品4

整理番号	出土遺構	図版 実測図番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態% 口縁 底部	備考
1	SB 2	2	土師器	杯A	体部	逆位	外	□	床	29 40	(泉)か
2	SB10	1	土師器	杯A	体部	正位	外	□	覆土	40 100	(印)か
3	SB14	—	黒色土器A	杯A	体部	右横	外	合東	覆土	— —	(金)になるか
4	NR 1	6	須恵器	杯A	体部	右横	外	合東	覆土	45 90	(金)になるか
5	NR 1	—	黒色土器A	杯A	体部	左横	外	中	覆土	10 20	
6	NR 1	—	黒色土器A	杯A	体部	正位	外	合東	覆土	15 10	(金)になるか
7	SB 2	4	土師器	杯A	底部	刻書	内	□ カマド		18 35	
8	SB 2	7	黒色土器A	杯A	底部	刻書	内	十	覆土	19 100	
9	SB 2	12	軟質須恵器	杯A	底部	刻書	内	□	床	36 30	

第11表 神戸遺跡 文字関係資料一覧表

整理番号	出土遺構	図版 実測図番号	種類	器種	転用部位	調整痕	層位	遺存状態% 口縁 底部	備考
10	SB 1	10	灰釉陶器	碗	底部 外	なし	覆土	35 100	
11	SB 2	24	灰釉陶器	皿	底部 内	あり	覆土	18 58	
12	SB10	11	灰釉陶器	碗	底部 内	なし	床	— 50	
13	SK36	—	灰釉陶器	皿	底部 内	なし	覆土	10 30	磨痕痕跡明

第12表 神戸遺跡 転用碗一覧表

点)である。また、鉄滓は60点出土し、総重量3,760g計る。

鉄製品が比較的まとまって出土した遺構としては、SB 2の8点、SB16の7点、鉄滓に関しては、SB 10・14の7点などがあげられる。なお、鉄製品・鉄滓は、それ自体から時期を判断するのが困難であり、原則として古代遺構から出土したものを抽出した。ただし、本遺跡の南部地区は、古代の遺構だけであるため、遺構外出土のものも原則として古代に属すると判断し、数に加えた。以下、器種ごとに記述する。

鎌 SB 2から出土した1点のみである(1)。破片のため全体形状は明らかではないが、図上右端がややめくれあがっており、着柄部の折り返しと考えられる。このことから柄と刃部のなす角度は直角に近くなると思われる。

刀子 竪穴住居址から5点(SB 2・5・16・25)、土坑から2点(SK 4・103)、遺構外から1点出土し、4点を図示した(2~5)。図示できなかった4点(SB 2・5、SK 4、遺構外)は、すべて刃部の小破片である。

斧 南部地区遺構外より1点が出土した(6)。いわゆる有袋鉄斧で、袋部上端は欠損しており、全長はさらに大きかったと思われる。重量は128gを計る。

釘 竪穴住居址から5点(SB 2・9・10)、土坑から1点(SK13)、遺構外から3点出土し、うち5点を図示した(7~11)。いずれも鍛造の角釘で、頭部は叩いて平らにして作り出しているが、7・8のように、あまり叩き延ばさず比較的頭部の小さいものと、9・10のようによく叩いて大きな頭部を作り出す二者が見られる。また10は、かなり大形になると思われる。図示できなかった4点(SB10が1点、遺構外が3点)は、いずれも破片で形態不明である。

鎌 4点とも竪穴住居址からの出土(SB 2・15・16・24)で、すべて図示した(12~15)。鎌身が幅広な12・13と、細身の14の二者がみられる。12・13ともに逆刺には刻みがつく。15は、基部のみで全体形状は不明である。鎌か鑿の可能性もある。

鑿 SB16から1点出土した(16)。厚さ2mmほどの鉄板を丸く曲げ、円錐台状に加工したもので、鉄板の

端は、付け合わせただけである。孔はその付け合せた部分にまたがるようにあけられている。舌は検出されなかった。

金具類 SB103より出土している(17)。厚さ12mmほどの鉄板に釘状のものが2本打ち付けられている。破片のため全体形状は不明であるが、留金具とも考えられる。

穿引鉄 SB16より1点出土した(18)。左側縁を大きく、右側縁を若干欠く。

紡錘車 南部地区遺構外より出土した(19)。破片のため形態の細かい観察は不可能である。

用途不明品 棒状品は断面形状で3種に分けられる。Ⅰ類は、断面ほぼ正方形呈す。SB2より2点、SB10・15・20・21より1点ずつ、遺構外より5点出土し、写真図版に20(SB10)、21(SB20)の2点を掲載した。鎌基部、釘などの一部とも考えられる。Ⅱ類は、断面円形呈す。遺構外より1点出土した。Ⅲ類は、断面長方形呈す。SB2より2点、SB9・14・16・20・25より各1点、遺構外より3点出土し、写真図版に22(SB25)、23(SB2)の2点を掲載した。釘、刀子基部とも考えられる。

板状品はSB6・16より各1点、遺構外より2点出土しているが、すべて小破片である。なお、SB6と遺構外の1点は、鋳造品である。鉄鍋等の器物、素材などの用途が想定される。

その他として、24(SB9)・25(SB6)は、鉄板を筒状に加工したものである。25は、孔が1個穿たれており、鐸の可能性が高いが、確定できない。26は遺構外出土で、鉄塊状のもので、素材の可能性があり、重量574gを計る。なお、24・26は、写真図版のみ掲載した。ほかに、SB9・10・14・23から1点ずつ、遺構外から2点出土している。

鉄滓 遺構から43点、遺構外から17点出土した。その内訳は、SB10・14が7点、SB16・20が5点、SB9が4点、SB5・13が3点、SB3・23が2点、SB2・4・7・22・25が各1点であった。鉄滓には大小のパラエティールがあるが、その一部を写真図版に掲載した(27-36)。35(SB16)・36(SB13)は、椀形鉄滓である。

エ 石製品 (図版42・PL20)

砥石2点(1・2)と、石鈔1点(3)が出土している。1・2ともに上下両端を欠損する。1は凝灰岩、2は砂岩を使用しているが、粒子の粗密はほぼ同じで、砥石Ⅱ類(註)に属す。3の石鈔は、SB10の覆土直上のID層からの出土である。破損品のため、全貌は知り得ないが、巡方と思われる。四隅に2孔を1対とする潜り孔をあけている。石材には粘板岩を用いている。

(3) 中世の遺物

ア 土器・陶磁器 (図版43-1~図版46-94、付表4、PL21~25)

概要

遺物は、I B層を中心にしてI層全体から、また、掘立柱建物址、土坑、水田址、古代の竪穴住居址(SB23)からも検出され、そのうち土坑からの出土が主体を占める。SB23出土の遺物は、埋没後、中世の遺構であるSK289・353・354・362・ST10が構築されていることから、混入と考えられる。掘立柱建物址については、ST11のビット1から内耳鍋が1個体出土している。土坑では、117基(北部73基・中部43基・南部1基)から出土し、北部では内耳鍋、中部では陶器の出土が多い。水田址の遺物は小片で散在していた。

出土遺物は、古瀬戸(97片)の天目茶碗・平碗・緑釉皿・腰折皿・卸皿・折縁深皿・鉢・香炉・水注・花瓶・四耳壺、大塚期の製品(96片)に、天目茶碗・丸碗・皿・播鉢・茶入、また、山茶碗(2片)、常滑

(註) 砥石の分類は、粒子の粗密を基準にして粗い方から細い方へとⅠ～Ⅲに分類した。詳細は総論編参照。

系大甕(249片)、捏鉢(28片)、須恵質描鉢(6片)、在地系のものとして内耳鍋(3502片)、土師器皿(8片)、輸入陶磁器(56片)に白磁皿・四耳壺、青磁碗・皿がみられる。出土量は、内耳鍋が圧倒的に多い。

時期的には輸入陶磁器が12世紀代から14世紀中葉に属し、また、古瀬戸でも13世紀から14世紀の所産になるものが存在する。しかし、量的に中心を占めるのは、15世紀から16世紀代のもので、古瀬戸後期様式や大窯期の製品、内耳鍋などである。

(ア) 土器

a 在地系土器(52~89・92・93)

皿 いわゆる「かわらけ」と総称されるもの3個体がある。1個体については図示できないが、ほかの2個体は92・93に図示した。93は手捏ねによるB2類で、口唇部を横に弱くナデている。胎土は緻密で明るい赤褐色を呈している。92は粗雑なつくりのロクロ成形によるA類で、底部には糸切り後の、板状圧痕が観察される。内面は底面から体部の立ち上がりのところをややナデくぼめ、底面見込み中央をおおよそ3cm幅の板状工具でナデくぼめている。砂の混入が多く粗胎で、くすんだ赤褐色を呈してしる。燈明皿に使用されたらしく口唇部の一か所が黒くくすんでいる。93は13世紀後半~14世紀前半、90は15世紀後葉と考えたい。

内耳鍋 法量のわかるものは限られており、破損率の高さと使用頻度の高さが推測される。形態的にはI・IIA・IIB・IIC・IIIの全種類が出土しており、IIBとIIC類が多く、また、I類も少なくない。ヨコナデは通常口縁部内外面と底に近い体部外面に、タテナデは体部内外面に、また底部内面は回転にあわせて円状にナデ痕が残っている。底部外面が砂底になっており、離れ材に砂などを利用したようである。底部は平底で、丸みを呈するものはなく、また、耳部は粘土紐を半環状にして2個を一对にして、縦位に口縁部内側に付している。口縁部直下に穿孔をしたものがいくつかあり、使用時に耳部が欠損した場合、穿孔によって欠陥を補ったものであろう。

I類; 82は体部が内傾しながら立ち上がり、口縁部へいくに従い緩やかに外反している。口唇部は面取りをして水平に整えている。84は、体部と口縁部の境を凹状にして区切りを表出し、口縁部は外反させる。口唇部は82と同様に面取りをしている。体部はわずかに外へ開く。この類には口唇部を面取りしないものも存在する。

IIA類; 59は凹凸をつけた口縁部がわずかに開き、凹凸のあたりにヨコナデを入れて軽く押さえている。そのオサエは弱く顕著ではない。65は内側に一度強くヨコナデを入れて凹状にするため、口縁部が内傾する。出土量は少ないが、ほとんどは後者の形態と同じである。

口唇部は面取りしており、以下IIB・IIC類も例外なく面取りを行っている。

IIB類: 大きく4種類に分類できる。

・口縁部が内傾するもの。54は、二度のナデのうち口唇部に近い方をより強くヨコナデしているため、やや内傾したものである。60は体部下半に丸みがあり、口唇部がやや内傾するものである。85は体部が直線的に開き気味に上がり、口縁部が内傾している。内側のヨコナデは幅広く丸みがある。

・口縁部がやや内傾もしくは直線的に立ち上がるもので、口縁部内側のヨコナデが弱く不明瞭なものである(68・69・72)。

・口縁部がやや開き気味もしくは直線的に立ち上がるもので、口縁部内側のヨコナデは比較的明瞭なもの(53・56・58・62・63・66・71)。中には58のようにヨコナデの不明瞭なものがあり、IIA類に分類した59と似ている。

・口縁部が体部から「く」状に強く折れ曲がるもの。67がそれにあたり、くびれた部分の下に、焼成後径1.5cmくらいの穴がひとつ開けられている。

II C類；口縁部形態の明らかにわかるものなかでは、本類が量的には多い。器形がおおよそ似ており、体部が直線的にやや開き気味に立ち上がる。また、口唇部内側のヨコナデを施しているところはわずかに内傾し、また、口唇部で再び外へ開くか直線的に立っている。口縁部内側のヨコナデはどれも比較的明瞭である(55・57・74-78・86・87)。

III類；体部の全貌をよく知り得る資料はない。図示した70・80・83はいずれも体部から口縁部が一度強く反外するもので、I類と相違して口唇部へ至って直立させようとしている。本類も口唇部を明瞭に面取りする。

(イ) 陶器

a 古瀬戸系陶器(1-34)

天目茶碗 図示した5点(1-5)以外は小片のため時期などの情報はつかみにくい。

1は口縁部が外へ強く「く」状に折れる形態で、器壁は薄めである。釉調は安定した光沢のある濃い茶色で、透明感がある。下半は鉄化粧が施され茶色をおびている。高台脇の段は削り落とさず、若干幅を持たせたまま回転ヘラケズリを体部下半に入れている。

2は1同様薄めの器壁で、口縁部も外へ折れ曲がるが、1ほど強く折れていない。釉調は黒色で表面は釉が発泡し、あばた状の凹凸になっている。下半の高台周辺は鉄化粧を施している。1・2はSK180からの出土で、2はSK63から出土したものと接合する。

3は器壁が厚く、大きな屈折がないまま直立する形となっている。釉調は口縁部にムラが多く、上端は斑状に茶色、ほかは黒色となっている。体部下半は鉄化粧を施している。高台は削出しとなるが、体部下半の回転ヘラケズリは弱く、高台脇の段は1と同様に少し残したままとなっている。

4は、3の断面と似ており、厚めで直立に近い形である。釉調も似ており、釉の上半は茶色、下半は黒色となるが、体部下半に鉄化粧は施さず、高台脇の段もきれいに削り落としている。南部地区のII A層上面からの出土である。

5は口縁部が外へ強く折れ曲がるが、1・2と比べて下方より屈折している。釉調は表面が剥落して白っぽくなり、光沢が失せている。中部地区テストピット16Xから出土している。

1・2は15世紀後半から末葉、3は15世紀前半、4は15世紀初頭、5は14世紀代と思われる。

平碗 底部の小片が出土しており、1点を図示した(6)。削出し輪高台で、高台脇には段を形成させたままとなっている。高台底面には切り込みが1対あり、外底面には「十」のヘラ記号がみられる。図示できなかったものでは、太めの削出し輪高台となるものがある。いずれも包含層からの出土で、内面に緑色の灰釉が施されている。15世紀後半の所産である。

縁軸皿・丸皿 7-14までの8個体を図示した。SK98・194・205・207より出土したもの以外は、中部地区で検出されたものである。法量にばらつきがあるが、とりあえず縁軸皿として分類した。すべて灰釉を掛け、いずれも透明感のある緑色を呈しているが、発色に微妙な差がある。14を除いて底部の残存するのは回転糸切り痕が観察され、体部はロクロナデを行ったままである。14は低い輪状削出し高台で、高台脇にわずかな段をもち、体部下を回転ヘラケズリしている。皿としては器高が高いため、7・11・12・14などは小碗として扱うことも考えられる。15世紀代の所産である。

腰折皿 SK117・157・177から4個体が出土したが、そのうち15・16・17を図示した。4個体とも灰釉を内面と外面上半に濃掛けしたもので、法量も似通っている。高台は削出し輪高台で、露胎となる下半は回転ヘラケズリを行っている。削りのあたりで一度折れ、丸みをもって上へ広がって口縁部を外へ強く反らせる。15世紀末様頃の所産であろう。

底卸皿 SK32より底部破片1点が出土している(18)。付高台の内面底部には放射状になるように刻み

目が入れられており、その間に回転糸切りのあとが窺える。高台は角高台で、幅広い高台径である。内面中央には3本の圏線がみられ、釉は灰釉で透明感のある薄い緑色を呈し、一部が剥落している。胎土は茶色味を帯びている。14世紀前半くらいに属すであろうか。

皿 16個体が出土し、中部地区に多い(19~28)。いずれも破片資料で19から28を実測した。すべてロクロ整形によるものであり、底部片では回転糸切り痕をみることができる。釉は体部上半に灰釉が漬掛けされ、透明感のある緑色を呈している。形態的には、口縁部が角張るもの(24)と、二又状にわかれるもの(21・22・25・27)がある。また、底径が大きめで底部から体部への立ち上がり丸みをおびるもの(20・26)と、底径が小さめで立ち上がり部に強いナデを入れてくぼませているもの(19・23・28)がある。これらは時期差であり、それぞれ14世紀のものと15世紀のものに区別される。

折縁深皿 9個体が出土しているが、ほかに29・30・31を図示した。口縁部の形態に差があり、端部を膨らませて折縁とするもの、折縁の上面を断面山形状にしているもの(31)、外への折りが弱く、また、内側へ折り返して二又状にしているもの(29)があり、それぞれ14世紀前半、中葉、15世紀後半の様相をもつ。そのほか底部の残存破片では、切り離し後、回転へう削りしているものばかりで、なかには三足の付くものもある。灰釉を漬掛けて緑色となっているが、剥落して白っぽくなっているものもある。そのほかに3片みられるが、全体の形状を知り得るものはない。いずれも灰釉が掛けられている。

香炉 SK180より出土した、底部を欠いた32がある。体部はロクロ整形されている。光沢のある濃い茶色を呈した鉄釉が、口唇部内外面から外面中程までにかけてられている。口縁部の器壁は薄く、端部はやや肥厚する。容室期の最末期のものと考えたい。

四耳壺 耳部が伴う肩部破片が1点ある。文様はなく灰釉が薄くかけられるが、あばた状に剥落している。13世紀くらいの所産であろう。

瓶 小片のため全体の形状を知ることができず、瓶類として一括した。底部片が3点、肩部1点のうち、33・34を図示した。33はロクロ整形で底部に回転糸切り痕が観察される。鉄釉が掛けられているようであるが、剥げ落ちて白っぽくなってはつきりしない。SK201のビット3より出土しており14世紀前半くらいかと考えている。34もロクロ整形で回転糸切り痕が残り、鉄釉が内面と体部上半に掛けられている。釉調は濃い茶色となってムラのない安定した色を呈している。15世紀くらいの所産で、壺類として扱うことも考えられる。そのほか底部付近の破片として、底径がおよそ10cm前後となるものがあり、灰釉を外面に漬掛けしている。非ロクロ整形で輪積み痕が内面にみられる。13世紀に遡るであろう。肩部破片では、内面に輪積み痕と指頭圧痕がみられ、外面には灰釉が掛けられている。水注あるいは四耳壺の可能性もある。これも13世紀に遡るものであろう。

b 大窯期の製品(35~40)

天目茶碗・碗 体部の破片で天目茶碗と言いつれないものを含むため、それらを碗として、一応ここであわせて記述していくことにする。碗で灰釉を施している1点のほかは、すべて鉄釉を漬掛けしている。灰釉の碗は透明感のある濃い緑色を呈し、貫入がみられる。胎土は灰色で、底部近くの体部下半は露胎となっている。鉄釉のものでは、釉調はバラエティーに富み、光沢のある黒一色のもの(36・37)、これに茶色が斑状に散るもの、光沢のない茶色のもの、光沢のない鼠色(35)となるものがある。下半は露胎となるもの(35・36)、鉄化粧を施すもの(37)があり、ほとんどは後者に属す。口唇部の断面形は、厚手で直に立ち上がり先端が細く上に尖るもの、「く」状に外へ折れるもの(35・36)、薄手で緩く反折するものがあり、「く」状に折れるものは体部がやや直線的で、そのほかは丸みを持っている。35~37は大窯期でも古手のもであり、図示できなかったものも多くは前半に属すものであろう。

皿 38は稜皿で口唇部が外反し、体部は下半でわずかに段状に折れる部分が残存している。光沢のある鉄

釉で、茶色と黒色が斑状になる。そのほかは灰釉の皿で、40がやや白色味を帯びているほかは、透明感のある緑色となる。口縁部は内湾気味の体部から直に立つもの(39)、体部から丸みをもって上がり、口縁部で緩やかに外反するもの(40)がある。底部は削出し高台で、高台端部は丸みがある。これらも16世紀中葉以前のものと考えられる。

播鉢 北部地区の遺構外で体部破片が確認されている。いずれも胎土は黄白色となる軟質感のあるもので、錆釉が刷毛塗りされている。

茶入: SK180より体部小破片が出土している。残存部での胴径がおよそ4.7cmあり、小形である。薄いつくりで、外面に一条の沈線をつけ、鉄釉を薄くかけて濃い茶色を呈している。15世紀末葉から16世紀初頭のものと考えられる。

c 東海系無釉陶器 (91-94)

捏鉢 いずれも小片で、詳細を知ることは難しい。これらは内面が磨滅して滑らかになっている。口縁部の形状のわかるもので3種類にわけた。

Ⅲ類; 口縁部をやや外反させ、端部を隅丸方形にまとめるものと端部を外へ丸く出しているもの(91)があり、器壁は均一であるもの。

Ⅳ類; 体部から口縁部へ緩やかに開き、口唇部の下3cmくらいのところを強くナデで薄くするもの。

Ⅴ類; さらに強くナデで薄くすることにより、口唇部の丸みを強調し、その端部に沈線を施すもの。などがある。Ⅳ類については、胎土が粗く暗い灰白色となっており、そのほかは緻密な胎土で明るい灰白色を呈している。分類できなかった体部片でみると精胎になるものが占めており、それらは明るい淡黄色となる。底部片は1点しかなく、1.7cmくらいの高めの高台が付けれられ、先端を丸くおさめている。整形は、外面下半を回転ヘラ削りし、その他はロクロナデをしている。

山茶碗 口縁部片が2点出土している。直線的に「 \wedge 」状に開くもので、口唇部は方形におさめ、器壁は薄い。表面は淡黄色でロクロナデ痕が明瞭である。白土原1号窯式から明和1号窯式に比定される。

甕・壺 常滑系の甕・壺が出土している。出土した破片数は249片と多いが、ほとんどは1個体に復原されており、ここにはそれを図示した(94)。底部を欠く甕で、自然釉は掛かず、光沢のない赤褐色と灰白色を呈し、砂粒が多く含まれている。張り出した肩部の下に一周21ないし22個と肩部の上の一部だけに4個の刻印が押されている。口縁部断面をみると、大きく「N」状に折れ曲がって、頸部の上端へ粘土を押し付けて密着させている。これは新しい時期の特徴でⅤ類に分類される。図示できないものの中では、口縁部形態が2種類観察され、頸部から強く外反し、口唇部を上と下へ「 \neg 」状に出すⅢ類と、口唇部を下へ折りかえして、口縁部を「 \neg 」状に作り出すⅣ類のバラエティーとするものがある。

d 産地不明の陶器 (90)

須恵質播鉢・鉢 口縁部(90)・体部・底部と各1点ずつ出土している。口縁部破片と体部破片には描き状の播り目が観察されており、底部片では播り目が見られないため取りあえず鉢(控鉢か)としておく。90は口唇部を断面三角状におさめている。口唇部より2cm下まで横ナデを入れて整えているが、ロクロ使用によるものではない。内面は滑らかとなっており、播り目は何条を一組にしているか不明であるが、残存部より5及び6本くらいを一組にしてまばらに引いている。鉢とした底部片でも内面が滑らかであり、播鉢の様子と大差ない。3点とも胎土は酷似し、灰白色の須恵質となっている。体部外面は不定方向のナデがみられる。底部片では体部外面に縦方向のナデ、底部外面でも精緻なナデがはいっている。

(ウ) 磁器

a 白磁 (50・51)

皿 底部片が1点出土している(50)。底部外面に釉が流れて一部露胎になっているほかは施釉されてい

る。見込み部に削りの沈線がはいり、中央はへう削りで少しくぼめられている。13世紀後半から14世紀前半の所産となるIX類(横田・森田 1978)にあたる。

四耳壺 中部地区のSK201・389から出土し、小破片から図上復元したものである(51)。底部・体部・肩部が残存しており、頸部・口縁部は得ていない。肩は角張り、上端に2本の圏線が引かれ、その上部に耳を付けている。耳部は1個のみ残存していた。

b 青磁(41~49)

碗 文様と形態により6類に分類できる。

C類；底部小片が2点出土している。1点は体部内面と見込み内にわずかに文様が彫られているが、モチーフを知ることはできない。もう1点は高台が断面四角形で底部内面は残存部で露胎となっており、高台内外面・畳付に施釉されている。2点とも胎土がやや灰色味を帯びている。

E類；46・49を図示した。へうで鑄のない太い蓮弁文を粗雑に表現している。46は蓮弁文の片葉だけをへう切りするだけで簡略化している。釉の発色にムラはないが、素地を丁寧に整形していないために表面がこぼこになり、小さな黒斑を観察することができる。見込み部に細い沈線が入っている。畳付の一部と高台内面の一部が露胎となっており、高台断面は端部に丸みがある。42と似ており、あるいはこの類別からはずれる可能性もある。49は46に比して整った太い蓮弁文を表出し、釉も均一である。

F類；この類が最も多く、16個体を数える。但し、口縁部・体部破片ではH類との区別のつかないものがある。図示したものでは45・47・48がここにはいる。いずれも開弁のあることが特徴のひとつとなる。45・47の胎土はやや灰色味があり、48は白色の緻密な胎土となっており、図示できなかった破片についても2種の胎土が存在している。

H類；比較的細めの鑄蓮弁文が描かれ、器壁はE類と比べてやや薄めである。確実にここに属するのは3個体で、そのうち41と44を図示した。41は三角状高台で内面の釉を丁寧に掻き取っている。見込み内には花文がスタンプされている。

I類；内外面無文のものである。5個体があり、うち43を図示した。4個はムラのない青緑色の釉をかけており、白っぽい緻密な胎土をしている。そのうち1個は器壁が薄く、透明感の強いものであり、口唇部がやや外へ反っている。ほかの1個体は釉が厚く、貫入が多い。胎土は灰色味が強い。

K類；細い蓮弁文を、体部外面いっばいに片切彫りするもので4個体を知ることができる。42を図示しており、底面が厚く、高台は長めで丸みのあるものとなっている。底部外面の釉を掻き取って露胎としていたのは釉がかけられている。体部内面に何らかの文様が施されているものと、底部内面の見込み内に花文らしきものを彫る個体があり、その底部外面は高台内中央に釉を残して掻き取っている。口縁部片では蓮弁文の縦線を先に彫り、剣先を後から山状に丁寧に片切彫りする例がある。

杯 体部と口縁部小片の2片1個体が出土している。内外面とも無文で、釉は厚くかけられ、素地の器壁は薄い。体部はやや丸みがあるようで、口縁部は強く外へ折れ、端部は上に挽き出している。

皿 体部小片が1点得られている。内外面とも無文で、「く」状に屈曲している。

壺 体部片2点1個体がSK180から出土している。外面の釉調は黄味がかかった緑色をなし、透明感がある。内面は釉が多く流れ落ち、青緑色となっており、内外面の発色が異なっている。

イ 文字関係資料

(ア) 石硯(図版49・50、PL28・29)

2点が出土した。SK204から出土したIIは粘板岩を石材とし、幅6.1cm、厚さ2.0cmの台形で、側面は垂直に立ち上がる。海部は欠損している。陸部には墨の付着が観察され、中央には使用による凹みが明瞭で、光沢がある。側面、底面には調整の痕跡があるが、裏面への加工はみられない。また、中部調査区の遺構

外から出土した20は平面長方形で、側面はやはり垂直に立ち上がる。周縁には一本の線刻を直線状に巡らす。陸部は使用による摩滅が著しい。裏面は粘板岩の自然面がそのままの状態であり、調整や加工はみられない。

11は出土遺構から確実に中世に帰属する資料となろうが、20は近世に降る可能性もある。

ウ 金属製品

(ア) 鉄製品 (図版47・48、PL26・27)

本遺跡から出土した中世の鉄製品は、90点を数える。その内訳は、鎌2点、刀子8点、鑿3点、鑿・楔4点、釘18点、鉄1点、燧鉄7点、用途不明品47点(うち、棒状品26点、板状品12点)である。また、鉄滓は10点出土し、総重量310gを計る。

鉄製品を多く出土した遺構は、SK180の11点、次いでSK188・190・453の各4点があり、あとは1～2点ずつである。以下、器種ごとに記述する。

鎌 37はほぼ完形で、38は刃部と着柄部が折り返し欠くが、2点ともほぼ同様な形態をもつと考えられる。着柄角(柄の主軸と鎌背線とがなす角度)は45°未満で、背線を折り返している。

刀子 SK180から2点、SK33・53・63・145・221・338から各1点出土している。6点を図示した(39～44)。40は青銅製の把が遺存している。把には沈線による縦縞模様がつけられており、さらに端部近くには刀子本体を固定する青銅製の目釘が打ち込まれている。

鑿 袋状を呈するもの(45)と茎をもつもの(46・47)の二者が認められた。45は、身が強く反り上がっている。45は完形で、46は上下両端を欠くが、両者ともほぼ同規格であったことがうかがわれる。

釘 SK188・453・469から2点ずつ、SK192・193・194・204・240・263・272・275・305・376・399・455から各1点、15基の土坑から計18点出土した。すべて鍛造の角釘であり、比較的遺存度の良い12点を掲載した(48～59。但し51・53・57は写真図版のみ)。脚部の太さは6mm前後が主体を占める。58は約1cm角となる大形のもの、59は脚部断面が長方形を呈している。頭部の作り出しは、叩き延ばして折り曲げるものが主体を占める。

鑿・楔 SK201から2点、SK139・201から各1点出土した(60～63。但し62・63は写真図版のみ)。頭部が著しくつぶれてはいないが、下端が薄くなっており、楔状のものとして認定した。

鉄 SK135より出土した(64)。上下両端を欠くが、握鉄と考えられる。把部から刃部に移行する部分は段を有す。

燧鉄 7点出土し、すべて図示した(65～71)。形状は、65・66のように半月形状の頂部に孔をもつタイプと、67～71のように板状素材の左右両端を引き伸ばし、折り返して中央で接合するタイプの二者が認められる。この二者の違いが何に起因するのかわ定かではないが、65・66・68・69の4点はSK180という同一遺構からの出土であり、これら二者が同時期に使用されていた可能性が強いことだけは指摘できる。

用途不明品 棒状品は、断面形がほぼ正方形を呈するI類が18点で、遺構別に見るとSK188・263から2点ずつ、SK88・162・180・186・190・191・247・266・298・368・371・389・390・398から各1点出土した。断面形が長方形を呈するII類は8点で、SK180から2点、SK190・191・282・286・368・371から各1点出土した。一部を図示した(72～76)。

板状品は鍛造品と鑄造品の二者が認められた。鍛造品は5点で、SK121・146・180・190・201から各1点出土したが、小破片のため全体の形状は不明である。製品の部分、もしくは素材と考えられる。鑄造品は7点で、SK36・132・149・194・317・339・362から各1点出土し、うち6点を図示した(77・78、80～83)。鉄製容器の破片と考えられるが、全体形状は不明である。厚さ3mm前後の薄手のもの(77・78・80)と、厚さ6mm前後の厚手のもの(81～83)の二者がある。

用途不明品は上記の他に9点あり、出土遺構はSK48・88・190・194・251・261・453・463・491であった。79は、炭化材を抱き込んでいる。他は、小破片で形態は分からなかった。

鉄滓 まとまって遺構から出土することなく、SK48・135・162・180・186・188・203・252・371から各1点出土した。

(イ) 銅製品 (図版48、PL27)

本遺跡出土の中世銅製品は、100点を数えるが、銭貨が96点と主体を占め、他に、把が2点、用途不明品が2点であった。84・85の把2点は、欠損品のため全体形状をとどめないが、先に鉄製品の項で示した刀子(40)に遺存していた把と模様などが類似するため、それと認定した。用途不明品2点のうち、86は、蓋、留金具等が想定できようか。87は容器の破片と考えられる。以下、銭貨について若干触れておく。**銭貨** 96点のうち、判読可能のものは83点であり、最も多かったのが北宋銭18種55点(66%)、次いで明銭14点(17%)、唐銭12点(14%)、他に、朝鮮銭「朝鮮通寶」と安南銭「景統通寶」が各1点であった。種類が多い北宋銭のなかでは「元豊通寶」、「元祐通寶」が各8点と最も多く、次いで「皇宋通寶」が6点、「政和通寶」が5点と続く。明銭では「永樂通寶」が12点、唐銭では「開元通寶」が11点と主体を占める。個々の銭貨については遺構別に第12表に示した。また、個別の銭貨で観察されたことは、「開元通寶」の「元」には第一画が長い88と、短い89の二種が見られた。加工銭としては、106の孔が、45°転回して開けられている。

エ 石製品 (図版49、PL28)

本遺跡で中世遺構から出土した石製品は、30点であった。以下、器種ごとに記述する。

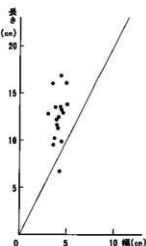
砥石 9点出土し、うち7点を図示した(4~10、ただし10は写真図版のみ)。粒子の粗密が中程度のⅡ類(4~7)と、細粒のⅢ類(8~10)の二種が認められる。Ⅱ類は作業面4面を原則とし、器体中央部が減って薄くなり糸巻状を呈し、中央部で折損する場合が多かったと思われる。4~7はその例である。上下端の処理は、7のように表裏方向におそらく切り出し痕と思われる線状痕がみられるもの、5・6のように研磨による粗い整形をしているものなどがみられる。石質はすべて凝灰岩である。なお、図示できなかつた2点も本類に属すると考えられる破片である(SK180・219より出土)。Ⅲ類は、Ⅱ類よりも硬質で粒子の細かい凝灰質ホルフェンスを用いており、仕上げ砥と考えられる。作業面は表裏2面を原則としており、両側縁は上下方向の線状痕が著しく、切り出し痕をそのまま残していると考えられる。3点ともにSK180より出土した。

石硯 SK204より1点出土した(11)。観察所見は文字関係資料の項参照されたい(P66)。

石臼 粉挽臼の上臼、下臼が各1点出土した。上臼(13)は、3/4残存、復原直径32cm、高さ16cm、多孔質安山岩製である。下臼は、2/3残存、復原直径26cm以上、高さ12cm以上、安山岩製、SK176から出土した。

石錘 SK363より一括して17点出土した(14、写真図版のみ掲載)。長幅比を第41図に示した。重量は、最小90g、最大355gで、平均218gであった。磗そのものに加工の痕跡は認められないが、棒状を呈し、中央部にやや凹部をもつものが多いことから、編み物用の錘と考えた。

不明品 12は、凝灰岩製で、ノミ状の工具で凹部を作っている。裏面・両側面・上面とも研磨により整形されている。下面は折損しているが、粗い研磨が部分的にみられ、折損後も機能していたのだろうか。砥石の転用とも考えられるが、他の凝灰岩よりも目が粗い。



第41図 神戸遺跡出土石錘長幅比グラフ

遺構名	銭貨名	初鋳年	国名	書体	図No.
S K 36	永樂通寶	1408	明		
S K 41	天禧通寶 元祐通寶	1017 1086	北宋 北宋	篆書	95
S K 48	開元通寶 元豐通寶	621 1078	唐 北宋	篆書	
S K 63	不明				
S K 64	開元通寶 天聖元寶 景祐元寶 皇宋通寶 元祐通寶 不明	621 1023 1034 1039 1086	唐 北宋 北宋 北宋 北宋	真書 真書 真書 真書	89
S K 67	景統通寶	1498	安南		114
S K 117	天聖元寶 元豐通寶 永樂通寶	1023 1078 1408	北宋 北宋 明	真書 篆書	96
S K 134	開元通寶 元祐通寶	621 1086	唐 北宋	真書	106
S K 153	元祐通寶	1086	北宋	篆書	
S K 157	元祐通寶 元祐通寶 元祐通寶 大觀通寶 永樂通寶 永樂通寶 永樂通寶	1086 1086 1086 1107 1408 1408 1408	北宋 北宋 北宋 北宋 明 明 明	真書 篆書 真書	108
S K 180	開元通寶 淳化元寶 景德元寶 皇宋通寶 嘉祐元寶 元豐通寶 元祐通寶 天口元寶	621 990 1004 1039 1056 1078 1078 1086	唐 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋	行書 篆書 篆書 篆書 篆書 真書	92 94 100 104 107
S K 204	元符通寶	1098	北宋	行書	
S K 224	開元通寶 乾元重寶 皇宋通寶 政和通寶 洪武通寶 不明	621 758 1039 1111 1368	唐 唐 北宋 北宋 明	真書 真書	90 109
S K 235	天聖元寶 永樂通寶 永樂通寶	1023 1408 1408	北宋 明 明	篆書	112
S K 240	明道元寶	1032	北宋	真書	97
S K 245	元豐通寶 不明 不明	1078	北宋	真書	

遺構名	銭貨名	初鋳年	国名	書体	図No.
S K 263	開元通寶 天聖元寶 嘉祐通寶 政和通寶 永樂通寶 不明	621 1023 1056 1111 1408	唐 北宋 北宋 北宋 明	篆書 篆書 篆書	110
S K 275	政和通寶	1111	北宋	篆書	
S K 338	皇宋通寶	1039	北宋	篆書	
S K 344	開元通寶	621	唐		
S K 366	不明				
S K 371	開元通寶 天禧通寶	621 1017	唐 北宋		
S K 374	開元通寶 景德元寶 不明 不明	621 1004	唐 北宋		
S K 419	淳化元寶 至道元寶 天禧通寶 熙寧元寶 永樂通寶	990 995 1017 1068 1408	北宋 北宋 北宋 北宋 明	行書 行書 真書	91 102
S K 420	嘉祐通寶	1056	北宋	真書	
S K 423	皇宋通寶 不明	1039	北宋	真書	
S K 451	元豐通寶	1078	北宋	真書	105
S K 478	開元通寶	621	唐		
S K 482	元豐通寶	1078	北宋	篆書	
遺構外	開元通寶 朝鮮通寶 至道元寶 至道元寶 景祐元寶 皇宋通寶 嘉祐通寶 治平元寶 熙寧元寶 熙寧元寶 元豐通寶 紹聖元寶 政和通寶 政和通寶 洪武通寶 永樂通寶 永樂通寶 永樂通寶 不明	621 621 995 995 1034 1039 1056 1064 1068 1068 1078 1094 1111 1111 1368 1408 1408 1408 不明	唐 朝鮮 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋 北宋 明 明 明 明	真書 真書 真書 真書 真書 真書 篆書 真書 篆書 篆書 篆書 篆書 真書	88 113 93 98 99 101 103 111
初鋳年は、松原典明 1983「古銭一覽表」「日本考古学小辞典」ニュー・サイエンス社による。					

第13表 神戸遺跡出土銭貨一覽表

オ 土製品 (図版49、PL25)

土鍾は14点(1~13)、土製円板4点(14~17)が出土した。土鍾は、すべて円筒形を呈する管状土鍾で、完形品13点は、すべて図示した。他に破片1点がSK363から出土している。土鍾の重量は最小8.2g、最大17.8gで、平均は11gであった。土製円板のうち14・16は縄文土器片を、15,1は内耳鍋片を用いている。14・16・17は周縁部を擦ることによって四角形~多角形に整形している。15は周縁部を細かく打ち割り、整形している。なお、14・16は縄文土器であるが、中世の遺構から出土していること、14のように縄文時代ではあまりみかけない形態をもつことから、当該期の所産と考えた。

(4) 近世の遺物

ア 土器・陶磁器 (図版50-1~10、第14・15表、PL29)

概観

遺構からの出土は少量で、竪穴住居址2(南部)・土坑2(北部)・水田址(中部)から出土しただけである。それらは混入と考えるほうが妥当であり、ほかはすべて包含層からの出土である。遺物総破片数は515点(南部210点・中部155点・北部150点)であり、ほぼ発掘域の全体にわたってみられる。その器種構成は第10表に示したとおりで、碗・皿を中心として、食生活用具(仲野 1987・88)がほとんどを占める。時間的には瀬戸・美濃系陶器が17世紀から19世紀にわたり、肥前系磁器は18世紀中葉以降、瀬戸・美濃系磁器は19世紀代のものである。在地産と考えられるものは、産地の限定は困難であり、時間的には19世紀中葉から後葉の新しい時期に比定される。その他の産地については、燈明皿で5片が信楽系かと指摘できるもののほかは不明であり、中には在地産とすべきものもあると思われる。以下は図示したものおよび主なものを中心に報告していくことにする。

a 土器

小片のためと磨滅が著しく器種を知ることができない。いずれも同一器種で灰黄褐色を呈し、やや硬質感がある。

b 陶器(1~7)

碗：瀬戸・美濃系 天目茶碗は口縁部片が2点出土しており、2点とも体部が直線的に広がり、口縁部のくびれが強く「く」状に屈曲する。ほかは体部下半の破片で露胎となる。体部の調整は回転横ナデで削りはみられない。いずれも17世紀代に属す。

鑑茶碗は、体部下半に小札文様を押圧によって連続して施し、例外なく黒色を呈する鉄釉を掛け、施文部のある外面は拭き取っている。3はそのひとつで南部地区の包含層より出土したものである。これらは小札文様の間隔に広狭があり、18世紀代と考えられる。3はおおよそ18世紀後葉から末葉くらいのものであろう。

拳骨茶碗も小片ながら確認されており、釉調は光沢のある茶色味がかかった黒色を呈するものがみられ、体部中程を大きく凹ませている。4は底部片で、高台端部を拭き取ったあと「壽」の印が押されている。これらはおおよそ18世紀代のものである。

丸碗は豊富に出土しているが、完形になるものなどはなく小片ばかりで、形態の詳細不明な碗もここに含めている。釉は灰釉系のものが多いが、鉄釉系のものも見られる。わずかに1点のみ長石釉系のももの含まれており、白色を呈する無地の志野碗と思われ、時期は18世紀頃に下るものであろうか。灰釉系・鉄釉系の釉調の発色はバラエティーに富み、いわゆる御深井釉も多く確認されている。これらのほとんどは18世紀以降のものである。

碗：肥前系 碗の底部片が1点確認された。釉は灰釉系の透明釉で色調が全体的に黄味がかっている。高

台径は比較的狭い。胎土は黄白色となるやや軟質感のあるもので、粒子は緻密である。17世紀後半に比定できよう。

碗：その他の産地 すべて産地不明である。灰釉系の釉調を呈するものがほとんどであり、黄色味のあるもの、白濁色となるもの、透明釉で磁器にみられるような光沢のあるものが認められる。鉄釉系のものは光沢のない錆釉のものがある。

皿：瀬戸・美濃系 丸皿として数えた25点のうち20点は志野織部で、ほかは小破片のため実体のつかめないものである。志野織部は鉄銹を施し、その様相のわかる1・2を取りあげると、1は見込み部分に二重の圈線を、口唇部内側には一重の圈線を描き、圈線間には草文様を配置している。2も同様に二重の圈線がみられ、その周囲に文様を描いている。図示できなかったものの中には無文のものもみられる。また、形態的には口縁部形状の知れる1をみると、内湾(直立)および外反することはなく、体部から自然に広がっている。1・2は17世紀前半、ほかの破片には17世紀後半に下るものも見出せる。

燈明皿は錆釉を掛け、外面の下半から底面を露胎としており、底面は糸切り痕が残存し、ロクロナデが明瞭にみられる。

皿：その他の産地 燈明皿が確認されている。5点については、信楽系かとも考えられるもので、濃い茶色が発色した錆釉が掛かるものと、乳白色の灰釉系のものがある。体部のカーブに丸みがなく直線的に上がることから19世紀代のものであろう。

鉢：瀬戸・美濃系 明るい茶色が発色する錆釉の摺鉢が出土している。胎土は白っぽい軟質感のあるもので6に代表されるが、瀬戸・美濃系ではない可能性もある。

鉢：その他の産地 摺鉢の出土があり、瀬戸・美濃系と釉調は似ているが、光沢ははぶく、胎土に赤味のあるものがある。在地産との指摘もあるが、現状では産地を特定できない。

小鉢と思われる破片が出土している(5)。光沢のある鉄釉を施し茶色を呈す。丸みのある口唇部をもち、その直下からロクロナデを行っている。

鍋：在地系 全体を知る土鍋はない。外面の下半と底面が露胎となり、釉調は濃い緑色を呈し、釉は灰釉と思われるが実体はわからない。胎土は赤味を帯びている。佐久市川越石焼か飯田市富田焼のいずれかの可能性が高い。

その他：瀬戸・美濃系 香炉が確認されている(7)。灰釉系の透明釉の上に鉄釉で文様を描いている。内面の突出部から下が露胎となっており、緻密な胎土で硬質感がある。

c 磁器(8-10)

碗：瀬戸・美濃系 碗については、ほとんどのものが幕末から明治時代に属す。摺絵技法によるものと銅版転写によるものが多くみられ、新しいものが主体を占めていることがわかる。小碗・杯も時期的には変わらず、文様のないものが多い。

碗：肥前系 碗・小碗ともに18世紀代と考えられる。8は小碗で、いわゆる湯飲み茶碗である。円形文の周りに手描きによる条線を斜格子にいれ、内面には幾何学文様を描いている。そのほか、草花文などの染付をほどこすものや、見込み中央にコンニャク印判による五弁花文もみられる。

皿：肥前系 碗と同様に草花文を染付ける製品が多い。また、特に見込み中央にコンニャク印判による五弁花文を施していることも同じである。9は型押しによってつくられた菊皿で、やはり草花文が見られる。

鉢：肥前系 10は火入れと思われる。口唇部を肥厚させ、口唇部と体部内外面に文様を施している。

(5) 遺構外の遺物

本遺跡の北部・中部地区は古代・中世の遺構が重複して確認されており、遺構外出土の金属製品および

陶器	瀬戸・美濃系陶器 336			肥前系陶器 1			磁器	瀬戸・美濃系磁器 56		
	碗	皿	鉢	碗	皿	鉢		碗	皿	鉢
382	天目茶碗	12		碗	碗		109	碗	碗	25
	煎茶碗	6						小碗	杯	8
	拳骨茶碗	13		在地系陶器 9				杯	鉢	11
	丸碗	123		鍋	土鍋	6		皿	皿	8
	丸皿	25		瓶	土瓶	3		鉢	鉢	1
	燈明皿	2		その他の産地 36				瓶	急須	1
	播鉢	16		碗	碗	17		その他	香炉	1
	片口鉢	3		皿	燈明皿	7		肥前系磁器 53		
	向付け	1		鉢	播鉢	5		碗	碗	38
	壺	2		鉢	播鉢	5		小碗	小碗	5
	壺	10		鉢	鉢	3		皿	皿	7
	香炉	1		鍋	土鍋	2		鉢	火入れ	1
	壺	4		瓶	土瓶	2		鉢	鉢	1
	不明	118			土瓶	2		その他	仏瓶	1
土器	産地不明			器種不明 4						

第14表 神戸遺跡近世土器・陶磁器器種構成表

※分類は仲野氏の成果(1987・1988)に従う

用途	産地	陶 器				磁 器		土 器	合 計	%
		瀬戸・美濃系	肥前系	在地系	その他不明	瀬戸・美濃系	肥前系			
食生活用具	食卓用具類	149	1		20	35	46		251	51
	調理・煮沸	19		9	9				37	7
	貯蔵用具類	12							12	2
嗜好用具	喫茶・喫煙	31				9	5		45	9
	飲酒用具類					11			11	2
神 仏 具		1				1	1		3	1
燈 火 具		2			7				9	2
そ の 他		122					1	4	127	26
合 計		336	1	9	36	56	53	4	495	
%		68	0	2	7	11	11	1		100

第15表 神戸遺跡近世土器・陶磁器産地別用途構成表

石製品はいずれの時期に属するのかわ定できなかったため、ここでまとめて扱うこととする。

ア 金属製品 (図版50 P.L29)

すべて鉄製品で、北部からは、刀子2点、釘2点、用途不明品7点(うち棒状品5点)の総数11点が検出された。中部からは鎌1点、刀子3点、釘2点、楔5点、鎌1点、鋏?1点、燧鉄1点、用途不明品24点(うち棒状品15点、板状品7点)の総数38点が検出された。115は鎌の基部である。116は鎌と思われる。非常に薄く、鎌身には2カ所の孔をもつ。117~121は楔である。122は燧鉄で、半月形状の頂部に孔をもつタイプである。123~127は用途不明棒状品で、125・126は特に細身のものである。なお、123は写真図版のみ掲載した。128は環状を呈するもの、130は包丁状の鉄製品であるが、いずれも用途は不明である。129は南部地区からの出土であるが、I層であるためここで扱う。皿と考えられ、推定口径は25.5cmを測る。

イ 石製品 (図版50・51 P.L29)

紡錘車1点(地区不明)、砥石7点(北部1、中部5、地区不明1)、石硯1点(中部)、石臼9点(北・中部)が検

出された。15は蛇紋岩製の紡錘車である。表面は未貫通の孔が2か所に認められる。製作途中に何らかの原因で放棄されたものと考えられるが、このことから、紡錘車の製作は先ず穿孔して中心部を決め、それにあわせて形状を整えたことがうかがわれる。16~19は砥石である。古代・中世の項で述べた分類に従えば、16はⅡ類、17~19はⅢ類である。なお、17は、写真図版のみ掲載した。20は石硯である。詳細は文字関係資料(P65)を参照されたい。21~29は石臼である。個々の資料が北部、中部のいずれに属するかは不明であるが、南部からの出土はみなかった。完形品はなく、いずれも破損した状態で出土している。21~27は粉挽臼で、21~23が上臼、24~27が下臼である。28・29は茶臼で、28が上臼、29が下臼である。石臼の石材はすべて安山岩であった。なお、22は写真図版のみ掲載した。

第4節 調査の成果と課題

今回の調査で神戸遺跡からは、古代・中世を中心とした遺構と遺物が発見され、縄文時代前期から晩期までの土器・石器や、近世以降の遺物も得られた。近接する牛の川遺跡・くまのかかわ遺跡からは縄文時代中期の集落が確認されており、このことは、遺跡が立地する奈良井川左岸に形成された沖積地が、古くより人々によって利用され、生産や居住の地としての大切な生活の場であったことを物語っている。

本報告書は、神戸遺跡で調査・検出された遺構・遺物についての事実報告を主たる目的とするが、ここではその成果をまとめるかたちで、時代をおって述べていくこととする。

1 古代遺構の推移

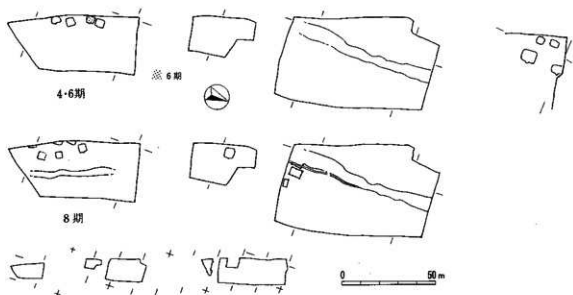
南部地区に4期以前の遺構SD1があるが、神戸遺跡が居住域として本格的に利用されるのは、4期になってからである。

4期に属する竪穴住居址は、南部地区にSB5・18・20の3軒と、中部地区にSB22~25の4軒がある。両地区は500m離れており、中間に奈良井川の分流が流れていたことから、それぞれこの地へ開拓に入った別のグループであった感が強い。そのことは、中部地区の竪穴住居址が、40~60cmの深い掘り方をもち比較的大型で、テラス・4柱穴等の内部施設も豊かであるのに対し、南部地区のそれは比較的小型で掘り方も30~40cmと浅く、内部施設はみられない等の差があることから窺うことができる。中部地区の4軒は、カマドの方向を異にする2軒ずつの単位でとらえられる。東カマドをもつ2軒が、4軒から出土した土器の各35パーセントを占め、鉄製品の数も多いのに対し、西カマドをもつ2軒は、土器の量がそれぞれ20パーセント以下で、鉄製品も1点と遺物の量にも差がみられる。南部地区においても、竪穴住居址の主軸方向を同じくするSB18・20のグループと軸線を異にするSB5に分けることができる。

4期以後中部地区に古代遺構はなく、南部地区にのみ居住域が限定される。

5期の遺構は検出されず、6期になり、SB9と墓址であるSK743が現れる。集落の東端のみの調査であるため、さらに西方へ広がる可能性をもつ。

8期は神戸遺跡における面期であったことが、竪穴住居址数からとらえられる。SB3・10・11・15・17・19と北に離れたSB2とST1~4の2グループにより構成される。南のグループは主軸方向の近似から、SB3・10とSB11・15・17・19に分けられる。カマドの位置・構造にも若干の差が認められ、SB3・10が東壁中央壁外へやや掘り込み構築しているのに対し、後者は、東壁南の壁内に構築する。また、それぞれのグループ内では遺物の出土量に差がみられ、SB10がSB3より、SB15・17がSB11・19より多い遺物量をもつ。鉄製品が検出された住居址はSB10・15であり、SB10からは墨書土器・転用硯も出土している。北に離れるSB2とST群が1グループを形成している。SB2は本遺跡中で最も多くの遺物を出土



第42図 神戸遺跡時期別古代遺構分布図

しており、鉄製品・墨書土器・刻書土器・転用硯等種類も豊富である。これらのことから8期の竪穴住居址群は3つのグループに分けて考えることができ、遺物の量・種類からSB2・10が核となっていたことも推測される。SB11・15・17・19はその位置関係からさらに、SB15・19とSB11・17に分けることも可能である。

11期の竪穴住居址はSB16・21の2軒が検出されている。竪穴住居址の重複が激しいことや、竪穴を完掘できていないことからその全容をとらえられない。カマド方向を異にしていることから2グループの存在が推定される。

13期に再び住居址数が増加する。SB4・7・12~14の5軒で、北東隅にカマドをもつSB4・7・13と、南西部にカマドをもつSB12・14の2グループに分けられる。主軸方向はほぼ近似するが、SB7のみ西に振れることから別のグループの可能性もある。遺物の出土量はSB7・14が多く、SB4・11・12が少ない。以上のことから、13期の住居址群はSB4・13、SB12・14、SB7の3グループに分けられよう。

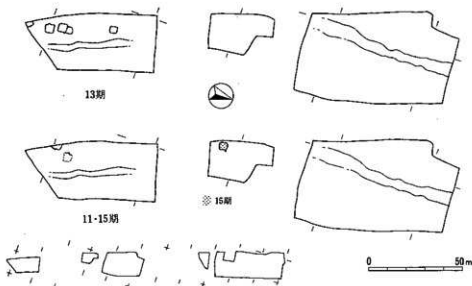
15期(12世紀初)のSB1を最後に神戸遺跡の古代遺構は絶える。

各時期の竪穴住居址は、調査区東を南北に走るNR1の方向に合わせ縦一列に並ぶ。流路によりその居住域が画されていた結果と考えられ、流路内には住居址と同時期の遺物が見られることから、各期を通じて機能していたものと思われる。

2 中世遺構の推移

神戸地籍は、文治2年(1186)3月、源訪下社領であった小俣郷から分かれたもので、長享2年(1488)・永禄9年(1566)・天正6年(1578)各々源訪下社奉仕の記事が源訪下社史料に見られる。神戸遺跡から発見された、中世に属する遺構は、中部地区と北部地区に構築されており、出土遺物の時期から、中世1期と中世2期に大きく分けられるが、時期を決定できる遺構の数は少ない。検出された遺構には、掘立柱建物址・溝址・櫓址・井戸址・墓址・土坑・水田址がある。

中世1期の遺構は中部地区に分布する。調査区北西に位置するST7~10を中心とし、墓址・土坑が点



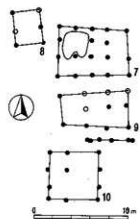
第43図 神戸遺跡時期別古代遺構分布図

在するがその数は少ない。4棟の掘立柱建物址は、ほぼ棟方向をそろえて南北に並ぶ。ST 8を除く3棟は総柱の建物で、面積は、ST 7が39.8㎡、ST 8は10.4㎡、ST 9が27.3㎡、ST10が26.0㎡で、ST 8のみ小形となる。内部施設を伴う建物址はST 7だけであり、これらの規模・形態から、ST 7・9・10が住居、ST 8は納屋的な建物址であろう。ST 9の南に柵址が設けられていることから、ST10は別時期の建物址と思われ、ST 7～9で1グループを構成していたものと考えたい。土坑は、白磁四耳壺が出土したSK201・398が先行すると思われるが、13世紀中頃以降の土坑がほとんどを占める。

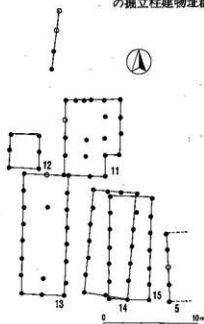
中世2期になると遺構数は激増する。そのほとんどが墓址・土坑であり、時期を変えながら墓域として利用されていたものと思われ、その範囲は北部地区にまで広がる。

中部地区中央北寄りに掘立柱建物址群がある。ST 5・11～15の6棟が検出されたが、総柱建物で下屋をもつST11と梁行2間で桁行方向に長く延びるST 5・13～15、納屋的なST12の3タイプが見られる。その位置関係から、ST11・12、ST13・15・(5)、ST 5・13・14の3グループに分けることができ、3時期にわたる2回の建替えがなられたと判断する。中世1期に見られる総柱建物のST11が先行し、その後、ST 5・13～15が建てられたものとする。この建物址群の南部100mの地点からST 6が1棟のみ検出されたが、その位置関係から別の掘立柱建物址群が存在していたものと思われる。

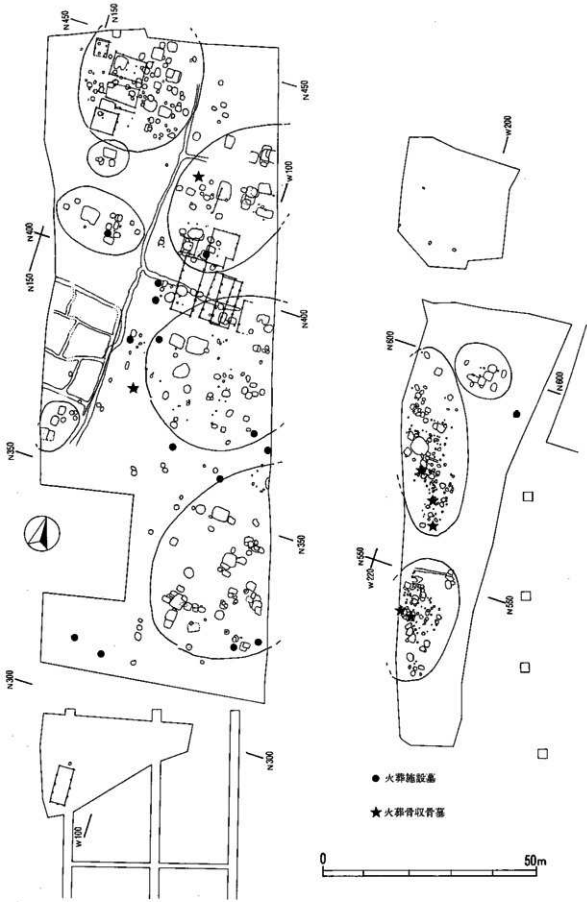
両地区に展開する土坑群はそのほとんどが墓址である。出土した遺物の時期からみると、中部地区に墓址が先行して作られ、その後の時期にばらつきが見られるのにたいし、北部地区の墓址は15世紀以後に集中する傾向をもち、短期間に営まれた墓址群としてとらえられる。土葬墓・火葬骨取骨墓・火葬施設墓があるが、



第44図 神戸遺跡中世1期の掘立柱建物址群



第45図 神戸遺跡中世2期の掘立柱建物址群



第46図 神戸遺跡中世墓址分布図

調査所見からその大部分は土葬墓と思われ、火葬骨収骨墓・火葬施設墓の数は少ない。墓址はいくつかの大きなまとまりをもち、さらにその中もいくつかの小さな群で構成されている。火葬骨収骨墓・火葬施設墓はそのような中で、大きなまとまりの周辺部か、それより外れた場所に位置している。火葬施設墓の大部分は中部地区に点在するが、北部地区には1基あるだけである。それに反して、火葬骨収骨墓は北部地区に多くみられるのに対し、中部地区には少ない。この分布上の違いが何に起因するものか判断できないが、今後究明されなければならない問題の一つとなろう。

中部地区を南北に走るSD6と他の遺構との切り合いが認められない。このことは、中世を通し溝址が機能していたことを物語っており、その性格を知る上で興味深い。また、南端にある水田址は溝の上層に作られており時期を異にするが、現水田址のアゼ方向とほぼ一致することなどから、現水田景観がこの時期にまで遡ることができることを意味している。遺物の時期から、北部地区墓址群と同時期に存在していたことが考えられ、神戸遺跡は墓域と生産域として利用され、近世へと続いていく。

第5節 小 結

神戸遺跡は、古くより縄文土器・土師器・灰釉陶器等が広い範囲から採集されてきており、縄文時代、奈良・平安時代を中心とした遺跡であることが知られていた。このことは、昭和54年園場整備事業にかかる発掘調査が松本市教育委員会により実施され、平安時代の竪穴住居址2軒、鍛冶址及び関連遺構、墓址等を含む土坑21基の発見により実証されつつある。今回中央道長野線にかかる神戸遺跡の調査箇所は、そこから300m東へいった地点であり、広範にわたり、縄文時代・古代・中世・近世の遺物が採集されていることを考え合わせれば、いくつかの集落址が点在し、神戸遺跡が形成されているものと判断される。今回の調査は、神戸遺跡の東端部分を確認できたことになり、遺跡の範囲を知る上でも有意義な調査であったといえる。

限られた範囲の中にその占地場所を移動しながら営まれている古代集落址と、それに続く中世遺構の検出が中心となっている。その中でも、居住域・墓域・生産域がまとまって発見された中世遺構が注目されよう。現在まで調査例は少なく、該期を理解する上で好資料が提供できた。「松本市・塩尻市・東筑摩郡誌」によると、今回の調査地点から約400m西方にある長照寺は、かつて現地の東方にあり、「天正(1573-92)の騒乱」により焼失し、後この地を領した丸山将監貞政が中興開基したが火災にあい、元禄7年(1694)、僧観国が開山したとある。中部・北部両地区から発見された墓域の存在を考える上で興味深い。

近世遺物の検出も、中世から近世・現代へと続く集落の歴史の中で重要な意味をもっている。現在の集落と重なり、解明されづらい一面をもっているだけに、神戸集落での歩みを知る上でも今後大切になってくよう。今後の資料の増加を待ちたい。

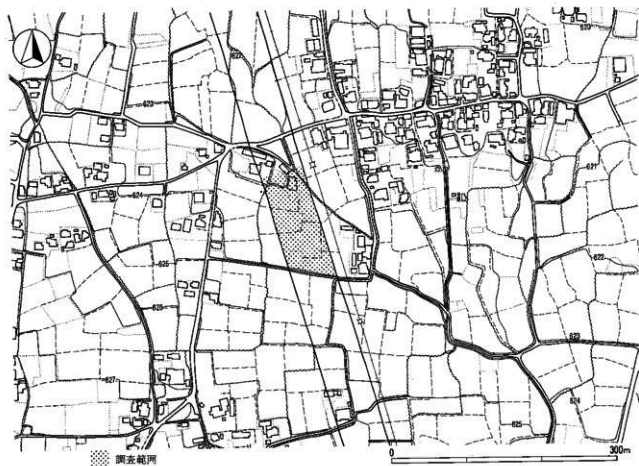
第2章 かみふたごいせき 上二子遺跡 (EKF)

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は松本市の西南部、笹賀上二子地籍にあり、現上二子集落を含む一帯が遺跡の範囲である。中央自動車道長野線にかかる部分は遺跡の西端にあたり、周辺に広がる水田のうち4,231-3番ほかが調査区を中心となる。

遺跡は奈良井川左岸の、現河床に続く第三段丘の沖積地上にあり、現河床との比高差5~6m、標高623~624mを測る。奈良井川は東800mを北流しているが、川にそって南から柏木古墳、今村遺跡、牛の川遺跡、神戸遺跡、上二子遺跡と続き、東にくまのかわ遺跡、さらに、北へ中二子遺跡、下二子遺跡、町神遺跡、下神遺跡、大久保工業団地遺跡と続く。これらの遺跡からは、弥生時代を除き、縄文時代から近世までの遺構・遺物が発掘・採集されており、古くより、奈良井川左岸に形成された自然堤防上に人々の営みがあったことが知れる。特に古代頃よりこの地域は奈良井川の離水域となり、神戸遺跡・下神遺跡に



第47図 上二子遺跡付近地形図 (1:5000)

は該期の大集落が営まれていたことが、発掘調査により明らかにされつつある。

上二子遺跡はそれらの遺跡の中では遺跡範囲も狭く、昭和59年度の予備調査などから、大規模な展開を見せる遺跡ではないことが予想されていた。

2 調査の概要

東接するくまのかわ遺跡の園地整備事業にかかわる発掘調査が、昭和59年松本市教育委員会により実施されている。縄文時代中期中葉の竪穴住居址1軒、遺物集中出土地点1カ所、同後期初頭の遺物集中出土地点1カ所、奈良・平安時代の竪穴住居址7軒、近世墓址4基が検出されており、上二子遺跡も同様な内容をもつ遺跡であろうことが予想されていた。昭和59年11月26日、調査員3名により発掘調査に着手し、翌60年8月28日にすべての調査を終了した。調査面積8,800㎡、調査期間は延49日間である。

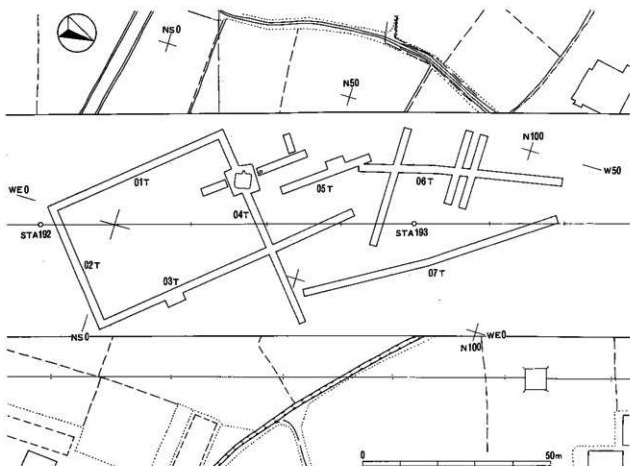
昭和59年度の調査

北東に緩く傾斜する地形に直交させ2m×35mの01トレンチ一本を設定し、遺構の存在、遺物包含層の有無を調査した。冬を迎えた時期でもあり、11月26日から11月30日の5日間で調査を終了した。

この結果、確認された層序は7層あり、II～III層を中心に土師、須恵器、灰釉陶器片が出土し、IV層から縄文時代後半の土器片が出土した。しかし、全体的に遺物は少なく、また、土層は砂層と礫層が複雑に重なりあっていることもあり、II～IV層は、安定した遺物包含層ではないと思われた。

昭和60年度の調査

4月22日に調査を開始した。前年度調査した01トレンチの直角方向へ02・04トレンチを、平行させて03



第48図 上二子遺跡トレンチ、遺構配置図 (1:1000)

トレンチを設定し、さらに、北へ05～09トレンチを設定した。04トレンチに竪穴住居址が認められたので、周辺を精査するために3本のトレンチを入れた。その結果検出された遺構は、竪穴住居址1軒、土坑1基、遺物集中区1箇所である。他は礫層に覆われており、遺構の存在は無いと判断し、用地買収が解決していない部分を残り6月5日に終了した。

残地部分については、8月22日より2本のトレンチを設定して、遺構の有無を調査したが、大部分は礫層で遺構は検出されず、8月28日、本遺跡にかかる発掘調査のすべてを終了した。

測量は、工事用センター杭STA192+20を基準に、STA192+60を結んだ線上から座標北を求め、これを基準として50m区画の大地区A～Eを設定した。STA192+20の座標値は、X=19958,6611、Y=-50112,0784である。標高は前述した基準杭頭の623,300mを使用した。遺構の測量は遣り方測量を用い、トレンチ遺物の取り上げは、各トレンチを5m間隔に区切ってA～Zを冠し、その範囲を一括した。

整理は59年12月より図面整理を中心に断続的に行った。この間、「動長野県埋蔵文化財センター年報1」に59年度調査分を、同年報2に60年度調査分の概要を報告した。遺物整理、実測、図作成、原稿執筆等の本格的な整理とまとめは62年9月より行い、本報告に至った。

3 調査の経過

昭和59年度

- 11月26日 発掘調査開始。01トレンチ設定、掘り下げ。
11月29日 01トレンチ掘り下げ完了。縄文中期土器片、須恵器、土師器、灰釉陶器片が出土するが、その量はわずかであり、遺物包含層とは認め難い。
11月30日 土層観察、実測図取り、写真撮影を行い、昭和59年度の調査を終了する。

昭和60年度

- 4月22日 発掘調査再開。本遺跡に東接し、松本市教育委員会によって発掘調査された、くまのかお遺跡との関連について松本市教育委員会と打ち合せを行う。
4月23日 02～04トレンチ設定。
4月30日 調査開始式の後、約40名の作業員で02トレンチを手作業で掘り下げる。調査員8名。
5月1日 03トレンチ掘り下げ。遺物はほとんど出土しない。02トレンチはほぼ完了。
5月10日 03トレンチ完掘。長野県農業試験場梅村先生より土壌の指導をうける。
5月15日 北地区のトレンチ完掘。相変わらず遺物の出土少

ない。

- 5月17日 04トレンチの掘り下げに入る。
5月21日 04トレンチC・Dグリットに落ち込みを確認。灰釉陶器、土師器片が散見される。周辺の拡張を始める。
5月22日 04トレンチの落ち込みを竪穴住居址と確認し、SB-1とする。一辺4m。04トレンチに直交させトレンチを設定、掘り下げにはいる。
5月27日 SB-1床面まで調査進む。壁高25cm、床は黄色土で貼り床されている。南壁近くの床に長脚甕が一個体分出土。
5月31日 SB-1調査終了。実測。
6月3日 SB-1写真撮影。実測終了
8月22日 残地部分の調査始める。トレンチ2本設定し、掘り下げを行う。
8月26日 トレンチ精査終了。土層観察、実測、写真撮影を行う。
8月28日 実測終了。上二子遺跡調査のすべてを終了する。

第2節 基本層序と微地形

1 基本層序

I B層 ぶい褐色含礫泥層。上二子遺跡で見られる自然堆積土層の最上位にあり、一部盛土におおわれる。全面に分布し、神戸遺跡北部地区のI B層に連続する。層厚は20~40cmで、南・北方へ厚く堆積する。小礫・風化礫を含みシルトの基質から成る。

南縁の低地部では最も厚く堆積し、下位が細砂の川原砂となっている。この土層をI r層とする。上位は全面が水田耕作土で、本層には鉄・マンガンが集積する。

II A層 明赤褐色シルト層。III層またはIV層をおおい、I B層またはI r層におおわれる。粗粒のシルト(5φ)に中央値を持ち、礫を含まない。全面に分布し、層厚は10~40cmである。

III層との境界は小刻みな凹凸を持ち、凹部では本層が厚くなっている。上限には部分的に腐植層が見られるが、こうした箇所は上面がわずかに凹んでいる部分である。色調がやや赤味を帯び、土質(粒度)も共通し、層序的にも対比でき、明らかに神戸遺跡中・北部地区のII A層と連続する。

III層 明黄褐色またはオリーブ褐色シルト層。IV層を不連続におおい、II A層におおわれる。淘汰良好なシルト層で、上位II A層より細粒域(6φ)に中央値を持つ。全面に点在し、層厚は0~40cmである。

南縁の帯を除くと全体に明黄褐色を呈するが、低地である南縁では明黄褐色とオリーブ褐色のセットが2単位認められ、南方へ緩傾斜する。色調の変化面はきわめてシャープで漸移帯が観察されないで、明黄褐色シルトが母材となって上部が現位置で腐食したのではなく、そのような色調の土が運搬されて来たと解釈する。とすれば、厳密に細分しなければならないが、遺構と関わらないので命名は行わなかった。

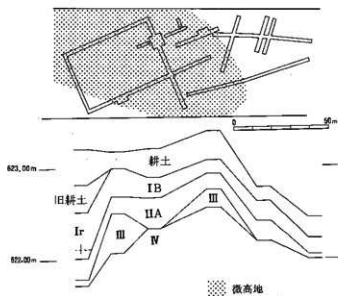
IV層 礫層。本遺跡の基底を構成し、上面は尾根状の高まりを持つ。円磨された大礫から成り、基質は粗砂である。礫種は隣接する神戸遺跡と共通する。

上面の尾根状の高まりの頂部はほぼN-S方向に軸を持ち、東方へ比較的急に、西方へ緩やかに傾斜する。低部と頂部との比高は1m弱であり、中央道長野線内を通してみるときわめて規模が小さい部類に入る。

2 遺構切込面の微地形

遺構切込面は、検出所見からII A層上面が平安時代初頭と推定されている。

本遺跡は、神戸遺跡中の北部地区、中二子遺跡、くまのかわ遺跡(松本市教育委員会1982)が立地する微高地内の小凸地に位置する。小凸地の東南側には神戸遺跡・くまのかわ遺跡と境する小凹地が、西北側には中二子遺跡と境する小凹地が存在したと思われる(第49図)。2つの小凹地に水が流れていたかにつ



第49図 上二子遺跡土層概念図

いて、南縁の低位にI r層があり、これらが神戸遺跡側で砂礫層に変化すること、II A層が南側（正確には東南東）へ傾斜して堆積していることから、少なくとも東南側の小凹地は流路となっていた公算が強い。ただし、恒常的に流水があったか否かは不明である。SB1はこうした地形に挟まれた小凸地の頂部のやや西寄りに存在した。

第3節 遺構と遺物

1 遺構

(1) 古代の遺構

ア 竪穴住居址

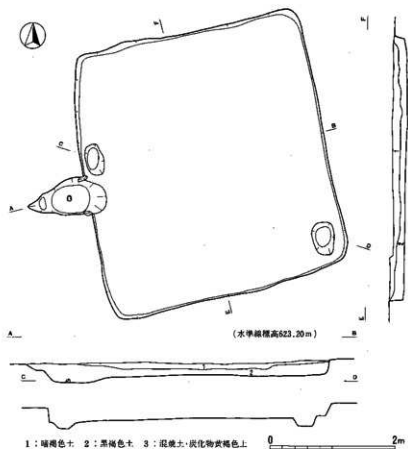
SB1 (第50図、PL31)

検出：調査区のほぼ中央に、南西から北東方向へ設定した04トレンチを掘り下げ中、遺構覆土と思われる褐色土中より長胴甕を検出した。遺構の存在が予想されたので周辺を拡張し精査した。検出面にマンガン集積層があり、プラン確認は容易ではなかったが、一辺4mの隅丸方形プランをもつ竪穴住居址を検出した。切りあう遺構はない。セクションベルトを十字方向に残し住居址内を掘り進めたところ、検出面より15cmほど下の西壁中央部にカマド袖石と思われる2個の直立した河原石を検出、さらに掘り進めたところ、10cm下に固い黄褐色土

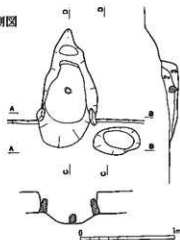
の床面を認めた。覆土はマンガン含有の多少により2層に分層出来るが、基本的には1層としてとらえられる。

カマド：カマドは西壁中央に位置し、石組粘土カマドである。壁を三角形に掘り込んでおり、火床は壁の外側へ出る。袖石一対と支脚石が残存している。カマド壁はオーバーハングした状態で検出され、かつてはトンネル状に覆われていたものと判断された。

床：床面はほぼ平坦であるが、カマド方向に約5cmの緩い傾斜をもつ。床面に2個のビットを検出した。P1はカマド北に接し、50×



第50図 上二子遺跡SB1、カマド実測図



30cmの長円形を呈し、深さ10cmを測る。覆土中に焼土と炭粒を含み、土器片が若干混入していた。P2は東南隅壁直下であり、P1と同程度の長円形プランをもつが浅い凹みである。柱穴・周溝等の内部施設は認められなかった。遺物の出土状況：遺物の出土はきわめて少ない。土師器甕片4個体分と、他に須恵器有台杯片1が床面とカマド内から出土した。灰釉陶器低部片1片が出土しているが、検出面からの出土であり、本址には帰属しない。第52図-1の長胴甕が南壁際の床土よりつぶれた状態で出土した。本址の帰属時期である2期に属する遺物であるととらえられる。

イ 土坑

SB1の北西2mで検出された。II A層上面を掘り込み、黒褐色土が単層で落ち込む。平面形は60×50cmのほぼ円形で、中から拳大の礫3個が検出されたのみで、遺物は出土していない。断面はタライ状を呈する。

ウ 遺物集中区

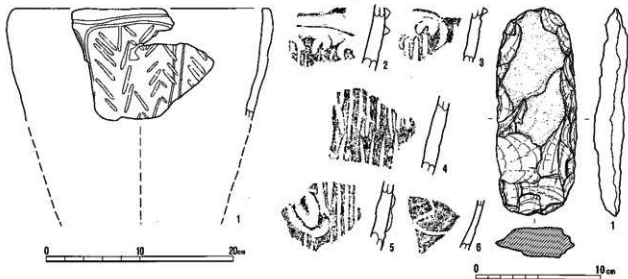
SB1が検出されたため周辺地域を精査した段階で、05トレンチから検出された。検出面はSB1と同じII A層上面であり、遺物は約5m四方の範囲に散在していた。掘り込み等は見られない。付近に遺構等は存在しない。出土遺物には、土師器、黒色土器、須恵器があり、そのうちの92%は美濃須衛窯産の須恵器である。これらの遺物は2期に所属するものが大部分であり、SB1と同時期の所産と判断する。

2 遺物

(1) 縄文時代の遺物

ア 土器 (第51図1~6)

95点が確認され、ほぼその半数が小片の上、無文であることなどから時期を知ることができない。時期を知ることができるものでは、角押文で構成される中期の勝板I式土器(下総考研 1985)が1点あるほかは、中期末葉から後期初頭に集中し、曾利V式土器(37点)、称名寺式土器(10点)が確認された。1~5は曾利V式土器で、2~5は同一個体である。6は称名寺式土器でJ字文をみることができる。



第51図 上二子遺跡出土縄文時代遺物実測図

イ 石器 (第51図-11)

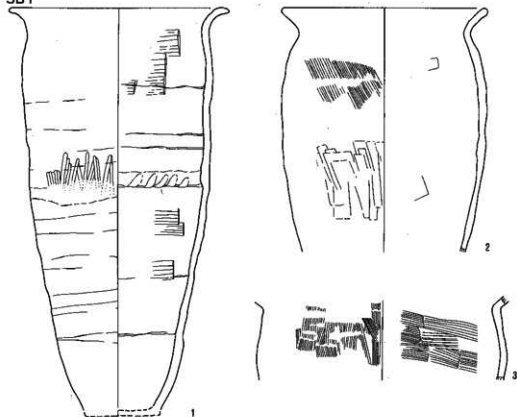
石器が12点、黒曜石製の剥片が1点出土した。出土状況はすべて遺構外の包含層であった。石器の内訳は、石鏃1点(黒曜石)、スクレイパー1点(黒曜石)、打製石斧7点(砂岩・緑色岩・ホルンフェルス)、磨石2点(砂岩)、石皿1点(砂岩)であった。1は緑色岩製の打製斧である。

(2) 古代の遺物

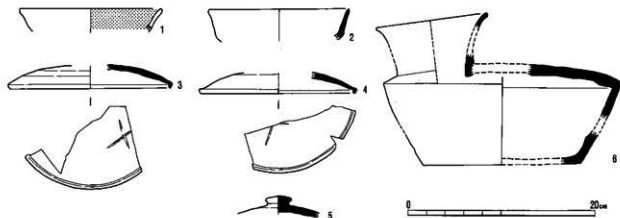
ア 土器

SB1 (第52図) 1~3はSB1、4~9が遺物集中区から出土した。1の土師器甕Aは低部を欠くが、ほぼ完形に近い。残存器高43cm、口径23cmをもつ。胎土には長石・雲母を多く含み、焼成は良好である。

SB1



遺物集中区



第52図 上二子遺跡出土古代土器実測図

器面全体に輪積痕が残り、体部の内外に製作技法が顕著に観察される。体部内面は幅3~4cmの板状工具による横方向のナアがみられ、外面は縦方向のヘラナアにより調整される。体部下半は、内・外面ともにヘラによるナアで、胴中央部は、内部を指おさえし、外部をヘラで丁寧にナアで輪積痕を消している。2も同様の手法により整形されている。体部下半を欠くが、口径21cmを測り、1と同程度の大きさに復元できよう。3の土師器甕は口縁・胴下半を欠くが、口径30cm程に復元できる。器面は幅2cm程の縦方向のハケ目が全面に見られ、内部は同様の工具により胴中央部のみ横方向のハケ目が施されている。

遺物集中区(第52図)

1は黒色土器杯A Iで、口径15cm、右回転のロクロにより形成された内面にはヘラのミガキが観察され、外面にはロクロナア痕が残る。焼成は良好で堅緻である。2は須恵器杯Bで、口径15cmを測る。右回転ロクロによる調整で、内外面ともにロクロナアが観察される。灰白色を呈し焼成は良い。3~5は杯蓋Bで、いずれも右回転ロクロにより調整され、天井部に回転ヘラケズリが、口縁部、内面にかけてはロクロナアされている。口径17cm前後、器高2.2~2.5cmを測る。3・4の内面にはヘラによる「十」字のヘラ記号が施こされている。口縁端部は小さく折り曲げられる。6の平瓶は小片から復元されたもので、口径12.2cm、低径17cm、推定器高16cmをもつ。口端から胴半部にかけ淡黄灰色の自然釉が全面に付着するため調整技法は観察出来ないが、底部は回転ヘラケズリにより整形されている。図示した須恵器はすべて搬入品と考えられ、1~5は美濃須衛窯産である。

(3) 中世以降の遺物

ア 土器・陶磁器(第53図1・2)

中世の遺物として古瀬戸の水注・壺、青磁碗、大窯期の皿、捏鉢、内耳鍋がみられる。内耳土器は95点という圧倒的な量を持ち、壺2点のほかは各1点ずつとなる。包含層からの出土でII層を中心として全域にわたるが、南半部に比較的多い。いずれも小片で、そのうち青磁碗、大窯期の皿を図示した。1は、外面に細連弁文をもつ青磁碗で、棒状工具により縦線を入れ、ヘラ状工具か棒状工具でその沈線を連結するように弁先を入れて連弁文を描出している。釉は薄く掛けられ、透明感のある青緑色を呈し、貫入が多い。口径約14.7cm、小片のため誤差はあろう。本論編で分類したI類にあたり、時期は15世紀後半から16世紀頃と考えられる。2は大窯期の丸皿で、ロクロ調整、釉調は透明感のない乳白色、口径10.2cmとなる。図示できなかった水注は底部破片で、鉄釉が掛かり、外面近くは露胎、ロクロ調整で底部に糸切り痕が残る。14世紀後半から15世紀頃の所産であろう。壺はひとつが短頸壺で、頸部から体部の破片、非ロクロ成形、釉調は透明感のある緑色となるが、ほとんど剥げ落ちている。13世紀頃のものと考えられる。もうひとつの壺は体部小片で非ロクロ成形である。内耳鍋は法量の知れるものはなく、口縁部の形態の分かるものほとんどない。そのなかで、頸部の形態が「く」状に開くと思われるI類と、外へクランク状に張り出すIII類が確認される。II類に属す形態のものもありそうであるが抽出できない。

近世の遺物は98点が出土し、多器種にわたる。包含層からの出土で、I層を中心にII層からもみられ、発掘域の全域に広がる。SB1から陶器皿、磁器碗が各1点出土しているが、混入である。いずれも小片で図示できるものはない。時期的には、確実に18世紀代と考えられる肥前系磁器碗が3点みられるほかは不詳であり、ほとんどが19世紀以降と思われる。器種は磁器碗6点・皿1点・香炉1点・陶器碗18点・皿1点・燈明皿1点・土瓶2点・蓋1点・捏鉢1点・溜鉢6点・甕1点、土器甕1点のほか不明である。食生活用具(食卓容器類、調理・煮沸容器類)が中心を占める。そのほか、明治時代に属す銅版転写の磁器碗



第53図 上二子遺跡出土中世土器・陶磁器、土製品実測図

2点が出土している。

イ 土製品 (第53図1)

中世の所産と思われる土製円板が出土している。内耳土器の体部破片を利用しており、径3.0~3.4cmの円形に作出している。松本平では松本市神戸遺跡 (本書所載)、塩尻市吉田川西遺跡 (長野県教委1989) に類似が知られる。

第4節 小結

上二子遺跡からは、縄文時代中期、奈良・平安時代、中・近世の各時期にわたる遺物が出土した。しかし、検出された遺構は、奈良時代に帰属する竪穴住居址1軒と遺物集中区1ヶ所のみである。東接するくまのかわ遺跡からは、縄文、奈良・平安時代の遺構と土器・石器が検出されている。第2節でも述べたように、奈良井川が形成したいくつかの自然堤防のうち、本遺跡と神戸遺跡が同一の自然堤防上に、くまのかわ遺跡は東の自然堤防上に立地していることを考えれば、この付近一帯は奈良時代に開発されはじめ、以後、平安時代、中世へと開発が続けられていったことが推測される。そのなかにおいて、中央自動車道にかかる上二子遺跡は、開発初期の所産であり、単独での竪穴住居址の存在は、前述したくまのかわ遺跡、神戸遺跡、中二子遺跡と関連させ考えていく必要があろう。そして、これ以後、上二子遺跡には遺構が継続して営まれていないことは、この時期の開発経営が不安定であったことを示しているものとも考えられる。

遺構は発見されなかったが、縄文時代の遺物の存在も注意される。沖積地に営まれた縄文時代遺跡が、どのような内容で広がりをもっていたのか本遺跡も新しい資料を提示できた。このことは、縄文時代、奈良井川の流路変更により、本遺跡の土地が安定してきていることを示しており、さらに、平地部における縄文時代の遺跡の様相を解明していく資料となろう。

第3章 なかふたご いせき 中二子遺跡 (ENF)

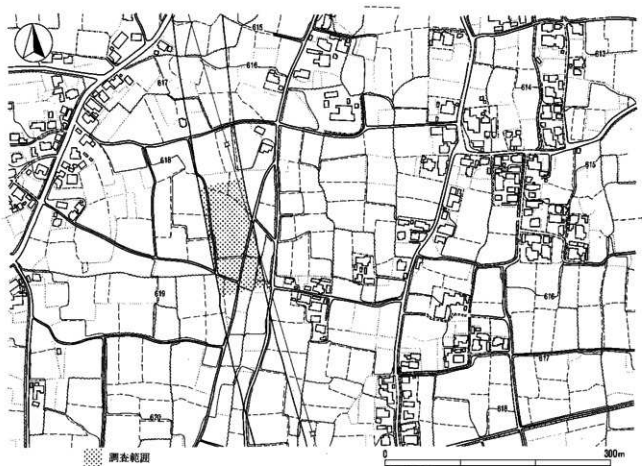
第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

中二子遺跡は松本市の南西部に位置する大字神林地籍に所在し、現中二子集落と西方に広がる水田地帯一帯が遺跡の範囲である。北流する奈良井川が鎮川と合流する地点から南約3kmに位置し、中央道長野線にかかる部分は、松本市大字神林東原2,220-2番地の水田を中心とし、遺跡の西端にあたる。

本遺跡は、奈良井川左岸に形成された、北東に向い緩傾斜をもつ自然堤防上にあり、現河床との比高差7~8m、標高617~618mを測る。奈良井川は東800mを北流しているが、川に沿って本遺跡の南に上二子遺跡、神戸遺跡、東から北にかけて、くまのかわ遺跡、下二子遺跡、下神遺跡、西に南荒井遺跡が存在する(第1回)。いずれも奈良時代から平安時代を中心とする集落遺跡であり、松本平南西部がこの時期に開発されていたことを物語っている。

中二子遺跡はその中において、今回新しく発見された遺跡であり、この付近一帯に間断なく続く集落遺



第54図 中二子遺跡付近地形図(1:5000)

跡の解明に、新しい資料を提供することとなった。

2 調査の概要

中二子遺跡は、当初遺跡として登録されていなかったが、中央自動車道建設に伴うカルバート・ボックス工事により竪穴住居跡の一部が露呈されたため、確認調査を実施した。その結果、新たに遺跡登録され、発掘調査契約を結び調査に入った。

昭和60年5月21日確認調査のためのトレンチを設定、10月8日すべての調査を終了した。この間、調査に7名の調査研究員があたり、調査期間は延べ110日間、調査面積は10,000㎡であった。

調査には、上二子遺跡を担当している第4班が当たることとなり、上二子遺跡の調査終了後、本遺跡の調査を行うこととなった。5月14日の現地踏査の結果STA-200から北にかけて遺物が採集できることから、この範囲を中心として発掘区を設定することにした。先行トレンチをSTA-200-201にかけ東西調査区域と中央の南北方向に各1本と、東西方向に1本設定し調査した。その結果、遺構面は表土下30～100cmに存在することが判明したため、この面まで重機による表土除去を行い、その後手掘りにより遺構検出作業と遺構内精査を行った。遺構番号は検出順に付した。

測量基準点は、日本道路公団工事用杭STA199+00 (X=20612.0465, Y=-50300.3880) を用い、この点をNS=0、WE=0とし、50m四方の大地区を設定した。遺構の測量は、座標に合わせた杭を用い、簡易遣り方によった。遺構分布図は、セスナ機による写真測量で作成されたものを、手書き図により補正した。標高も公団工事用杭を基準にして調査区内に独自のベンチマークを設定した。

整理作業のうち、遺物の水洗のほとんどを現場の発掘作業と並行させて行い、残りの水洗と注記、土器復元作業はセンターで行った。そのほか、図面類の整理、調査所見の記載等は発掘調査終了後の冬期間に行い、遺物の実測は次年度の62年1月7日より始め同3月末終了した。報告書刊行にむけての諸整理は62年4月より遺構図版の作成を行い、他は63年4月より行い本報告に至った。

3 調査の経過

昭和60年度

4月23日 中二子集落の西約300m南北に走る農道のカルバート・ボックス工事中に、遺物の出土とカマド石と思われる河原石が露呈されたため、工事の中止を申し入れ、石の周囲を精査する。竪穴住居跡と判断し、県教育委員会文化課、道路公団等の機関へ連絡する。

4月25日 県教委文化課、道路公団、松本市教育委員会、朝長野県歴史文化財センターの四者による現地協議を行い、新登録遺跡として発掘調査を実施することとなる。

5月14日 現地踏査実施。STA200-201にかけて遺物が採集され、この付近一帯を中心として発掘調査することとなる。

5月21日 先行トレンチ01、03を調査区域東境へ80m、西境に05トレンチを50mそれぞれ南北に設定し、表土除去を始める。並行して、STA99+00を基点 (NS=0、WE=0) とし50m四方の大地区を設定する。01、03トレンチの表土部分から土師器、須恵器、灰桶陶器の破片が出土しはじめる。

5月27日 並行させて行っていた上二子遺跡の調査がほぼ終了したので、主力を中二子遺跡におき本格的な調査にはいる。表土下25cmくらいのところに黒色土

用水路ボックス下より検出された遺構内の精査にはいる。

6月27日 調査区南部は、砂礫の広がりが大きくなり自然流路と判断する。遺構数は少ない。

7月16日 調査区南部の表土除去を12日に終了し、竪穴住居跡9軒、堀立柱建物跡8軒、土坑多数を検出する。用水路下にかかる遺構の調査を終了する。

7月31日 調査区南部の遺構精査をほぼ終了する。北側部分の表土除去作業を終了。竪穴住居跡17軒、堀立柱建物跡7軒、溝、土坑等が検出された。

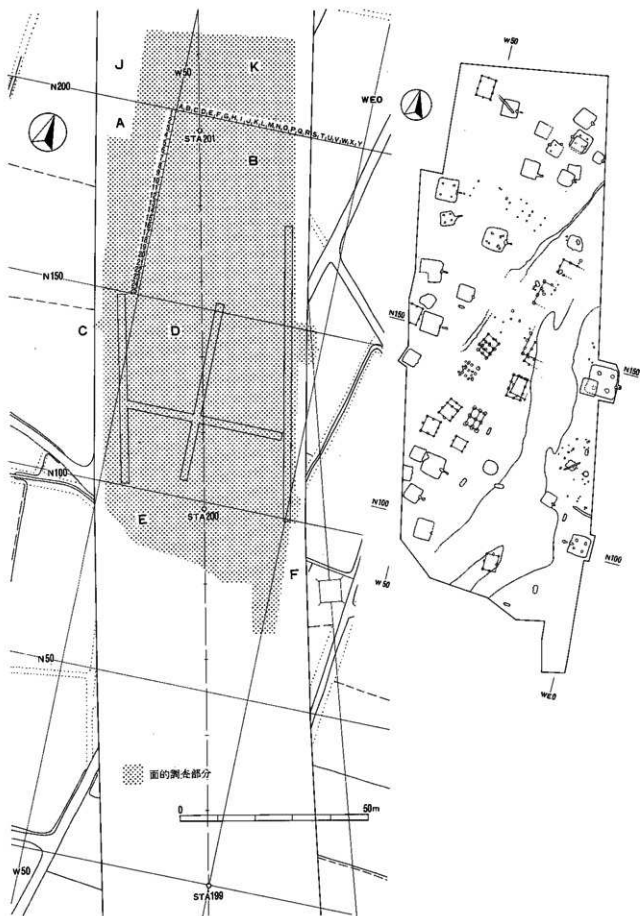
8月19日 遺構全体図作成のため、セスナ機による航空撮影を行う。遺構の調査は原則に進んでおり、本日より作業員の半数を神戶遺跡の調査に振り分ける。

8月26日 本日より調査研究員3名と、神戶遺跡へ応援に行っていた作業員が、三の宮遺跡の確認調査へ出向くこととなった。数軒の竪穴住居跡、土坑、流路等の精査を調査研究員4名、作業員20名で行うこととなる。

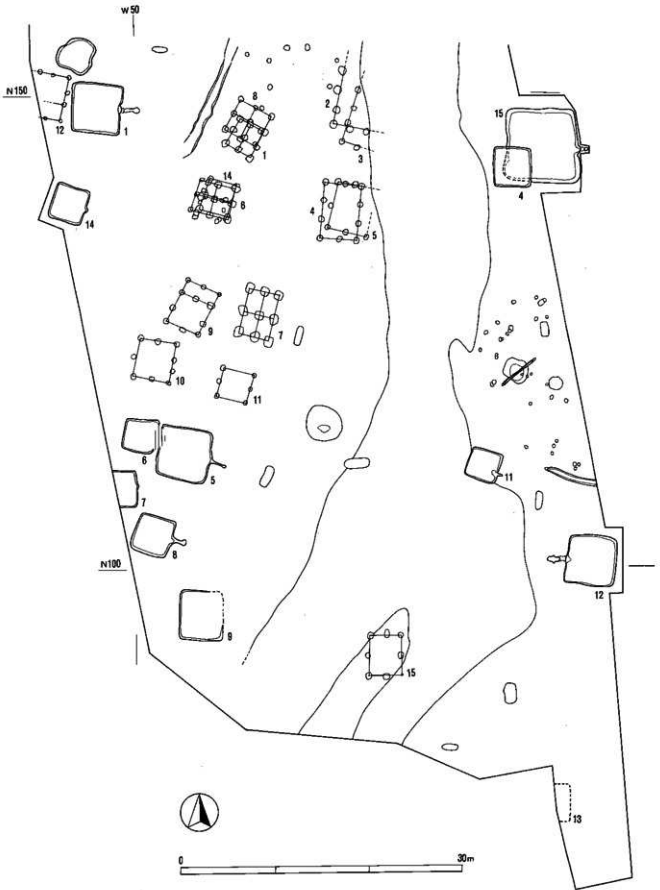
9月17日 仮用水路下の調査を本日より始める。堀立柱建物跡、土坑等新たな遺構が検出される。

10月2日 遺構の精査が進み、3軒のカマド・床等の調査を残すのみとなる。

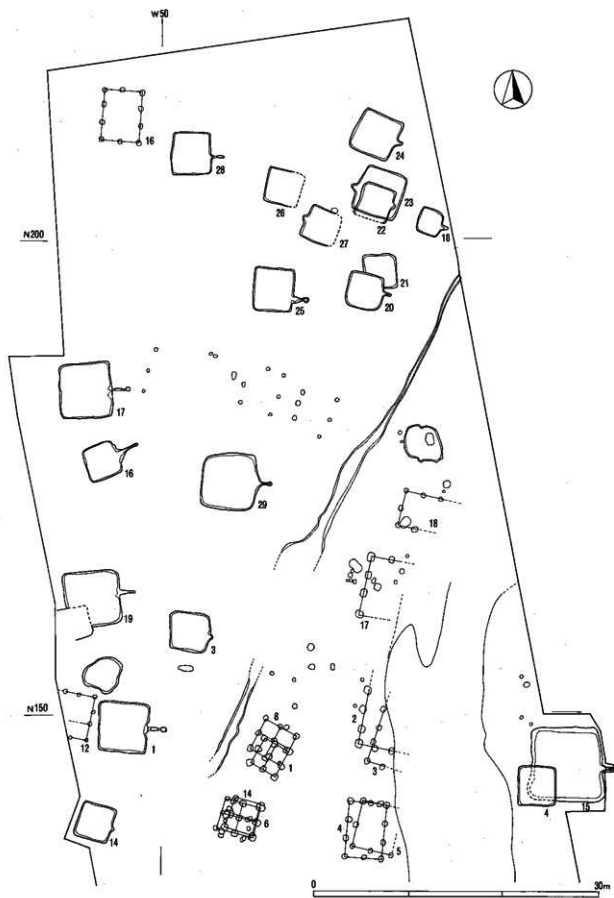
10月8日 残る竪穴住居跡2軒の実測を終了し、すべての発



第55図 中子遺跡トレンチ・グリッド、遺構配置図 (1:1000)



第56図 中二子遺跡遺構分布図 (1:400)



第57図 中二子遺跡遺構分布図 (1:400)

- 層があり、そのなかから遺物がまどまって出土している地点もあり、遺物包含層かどうかの確認が必要となる。
- 5月30日 01、03レンチの掘り下げ終了。黒色土の遺物包含層が部分的に残っている状態である。05レンチの掘り下げを開始する。遺物の出土量が増加し、落ち込みも数か所検出され、竪穴住居址の存在が確認される。
- 6月30日 本日より重機による表土除去作業を始める。現段階で十数軒の竪穴住居址が確認されており、かなりの数の遺構の存在が予想される。
- 6月17日 D区を中心に掘立柱建物址の検出が相次ぎ、竪穴住居址の空白部分に展開する状況が確認された。STA201以北には遺構等ほとんど検出されない。

掘削土の作業を終了する。

- 12月16日 整理作業開始。遺構全体区の修正、図面類の整理、点検、写真類の整理、遺構所見カードの作成を行う。3月12日終了。

昭和61年度

- 1月～3月 古代土器の計測と実測を調査研究員5名で行う。3月31日終了。

昭和62年度

- 4月～6月 遺構図版組を調査研究員1名で行う。

昭和63年度

- 4月～11月 報告書刊行に向けて、遺物図版レイアウト、遺物写真撮影、焼き付け、写真図版組み、遺構・遺物図版トレース、原稿執筆を行う。

第2節 基本層序と微地形

1 基本層序

IA層 よい赤褐色含礫泥層。中二子遺跡で見られる自然堆積層の最上位にあり、全面に分布する。層厚は現耕作土も含めて20～30cmである。基質はシルトで、小礫を塊状に含む。また、黄色で円磨された砂岩などの小礫大の風化礫を多量に含む。

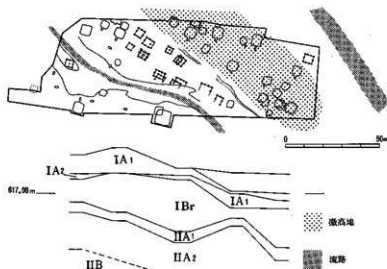
中央部でしばしば盛土におおわれ、北西部では人為的な削平や攪乱を受けていることが多い。基質・捕獲物ともに神戸遺跡のIA層と共通し、一連の堆積物である可能性が高い。

I r層 褐色シルト～砂礫層。II A層をおおい、IA層におおわれる。全面に分布し、層厚は10～60cmである。

層相の側方変化が著しく、本遺跡を外れて南・北へ礫の含有率が増して砂礫層となる。これが本遺跡と上二子遺跡、本遺跡と下神遺跡の間に分布し、現地形でNNS-SSW方向の帯状の微低地を形成している。また、特に本遺跡・上二子遺跡間では、本層による切り込みが深部に達し、II A層下部またはIII層までが浸食を受けている。本遺跡内では主としてシルト～細砂から成り、中央部で上面に高まりを構成する。断面では、南東部や北西部に川原砂や腐植層によるレンズやブロックが含まれ、ときに直下のII A層の腐植層が「注入」様の構造を示すことがある。

II A層 褐色シルト層。III層をおおい、I r層におおわれる。粗粒のシルトに中央値を持ち、礫は含まない。全面に分布し、層厚は60～80cmである。

上面は緩やかな起伏を持ち、中央部が幅広い小凹地に、北西部がやや尾根状の小凸地になっている。いずれもNNE-SSW方向に軸を



第58図 中二子遺跡土層概念図

持つ。また、起伏と無関係に、全面を被覆するように約15cm厚の腐植層が認められる。II A層の粒度分析結果では中央値4.1~4.3φと集中度0.60~0.68で、隣接の上二子遺跡のII A層と同様に4.4~4.5φと0.25~0.53（下神遺跡のII A層は5.1~5.2と0.37~0.43）ときわめて近い値をとり、対比可能と判断した。なお、下限は底部で細砂~川原砂または砂礫層に変化する。

III層 オリーブ色または褐色シルト層。IV層をおおいII A層におおわれるオリーブ色と褐色のシルト層の互層で、層厚は40~150cmである。

褐色部とオリーブ色部のセットは3回が認められ、それぞれの境界は比較的シャープである。オリーブ色部に対して褐色部がやや粗粒の傾向にあり、これは褐色部がオリーブ色部の腐植層と仮定したとき、一般に言われる土壌化・風化による表層部の細粒化とは相反する事実である。したがって、境界面の状況・粒土の特性から、2つの色調の土粒が運搬されて来て、本地点で堆積したと解釈する。また、遺構との関連がなかったため全面にわたる資料が得られなかったが、南西縁部での観察では、本層は北西方へ緩傾斜し、上面は平坦な地形を形成していると思われる。

IV層 礫層。本遺跡の基底を構成し、地表下3m付近に出現する。III層同様、部分の観察で詳細は明らかでないが、大~中礫から成り分級の程度が低い。礫種は硬砂岩・砂岩・チャートが主体で、頁岩・珪岩も若干高い比率で含まれる。

上面は他の遺跡と同様に波状の凹凸を持つと思われるが、それらの地点等の詳細は不明である。

2 遺構切込面の微地形

遺構切込面は、検出所見からII A層上面が奈良~平安時代前期とされている。また、神戸遺跡の土層との対比からI A層は中世末期の堆積と推定される。

古代、本遺跡周辺には、軸をNNE-SSW方向にとる紡錘形の微高地が存在したと推測される。微高地は周囲を奈良井川の分流で囲まれて島を作り、頂部は南東縁部に偏って、北西斜面が小規模な起伏を繰り返しながら緩やかに傾斜していた。本遺跡はこの微高地北西縁部、分流の流路に近い最も低い位置にある。遺跡は、南半の幅広い小凹地と北半の小凸地から成り、小凹地の中央には北北東流する小流路があった。検出された竪穴住居址・掘立柱建物址群の多くは、上記小流路に面した小凸地上に立地する。

当時、本遺跡の南側には小規模な高まりが連続し、居住に適した地形が広がっていたと考えられるが、後のI r層堆積に先立つ河道の浸食を受け、地形が大きく変化すると理解される。そしてこの事変に引き続き、元来が低い帯にあった本遺跡は完全に流路内に入ってしまい、厚いI r層に被覆されることになる。I r層上部が土壌化していないことから、おそらく中世を通して流路内にあり、I A層の堆積で平坦な地形が形成されるまで、本遺跡の位置する地点は、増水時には水をかぶる中洲状の荒地となっていたと推定される。

第3節 遺構と遺物

1 遺構

(1) 古代の遺構

ア 竪穴住居址

概観

分布：調査区のほぼ中央を、南西から北東方向に1条の溝が走っており、この溝の北を北部、南を南部と

した。竪穴住居址27軒のうち17軒が北部に、10軒が南部にあり、北部に集中する傾向にある。集落は、さらに東西方向に広がるものと思われる。北部では大きく2つのまとまりに分かれており、南部でも自然流路を挟んで東西2つのグループに分かれる。

時期：2期から7期まで続く。北部の17軒のうち2期7軒、3期2軒、4期3軒、5期4軒、6期1軒と古い時期の竪穴住居址が大部分を占める。南部は2期3軒、3期1軒、5期3軒、7期3軒と各時期の軒数はほぼ平均した分布を示す。

構造・規模：床面積から大・中・小型の三種に分類されるが、大は3軒、小2軒で、ほとんどが中型に属する。時期別の差は顕著にみられないが、2・3期の住居址は大型と中・小型が併存する傾向が見られ、6・7期の住居址は小型のものしか存在しない。カマドは粘土カマドが大部分を占め、煙道が長く壁外へ延びるタイプが多い。石組カマドは7期にのみみられる。床は貼床されているものが多い。柱穴を持つ住居址は7軒と少なく、2・3期の住居址だけにみられる。周溝をもつ住居址も2期だけにみられ、2軒ある。埋没状況は、人為的に埋め戻された住居址が12軒と多く、埋没途中で河川の氾濫により一気に埋ったと思われる住居址が4軒存在する。

SB1 位置：北部 図版58、第59図

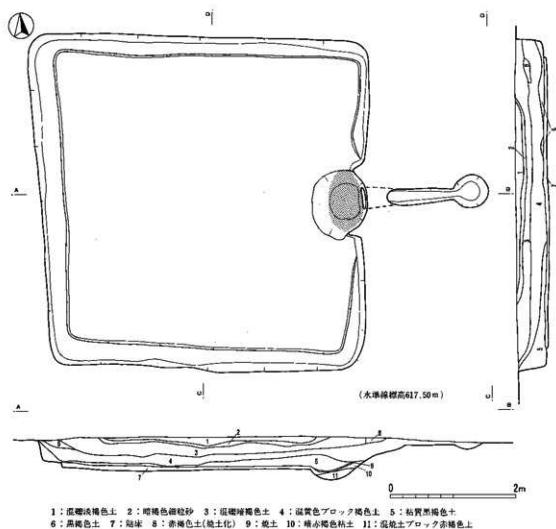
検出：II A層を掘り込み、径1cm未満の小礫を多量に含む淡褐色の土が落ち込む。床面の精査により新旧一度の建て替え・拡張がなされていることが判明した。カマド：粘土カマドで壁面を丸く掘り込む。煙道は壁外に長く延び、煙道先に径50cm、深さ10cmほどのピットをもつ。旧カマドの燃焼部は深さ25cmに掘り込まれ、焼土が15cmほど堆積している。新カマドは旧カマドを再利用し、燃焼部に暗褐色土を貼って使用しており、厚さ3cmほど焼土が堆積している。床：旧床は、主軸方向4.65m、直交方向4.65mの方形で、深さ50cmを測る。カマドのある東側へ向かいやや低くなるが、全体に平坦で堅緻である。中央南寄りに焼土の広がりが見られる。新床は旧床の5cm上に、粘性の強い黄褐色土で全面に堅い貼床をしているが、拡張された幅30cmの部分には見られない。埋没状況：壁際に黒褐色土が断面三角形に落ち込み、そのうえに黄褐色ブロックを含む褐色土が堆積する。以後逆三角堆土が続くことから、住居址廃絶後しばらくして人為的に埋め戻され、その後、自然埋没していったものと判断する。遺物の出土状況：覆土下層から床面にかけほぼ全面に遺物が散乱するが、北西壁際部分に比較的多く集中する。遺物の接合関係では、離れているものの接合や、接合されないものも多く、投棄された結果と思われる。土師器甕、須恵器杯・蓋・甕の他、鉄製品には刀子3点が出土している。土器の様相から、旧住居址は4期、新住居址も4期内に属するものと判断した。

SB3 位置：北部 図版60

検出：II A層を掘り込み黒褐色土が落ち込む。切り合いはなく単独で検出された。カマド：粘土カマドで、壁を丸く掘り込み煙道がわずかに延びる。火床、両袖壁、煙道部は赤く焼土化している。燃焼部の掘り込みは10cmと浅い。床：カマドに向かい低くなっており、南半はやや凹凸があり平坦ではない。全体に堅緻な床であるが、特にカマド側部分が堅く締まっている。埋没：壁際に黒色土が三角形に落ち込み、黄褐色のブロックが混じる暗黄褐色土がその上に堆積していることから、住居址廃絶後しばらくの間放置された後、人為的に埋め戻されたものと解釈したい。遺物の出土状態：ごく少量の土師器甕片と須恵器杯・甕片が検出されただけで特記すべき遺物はない。床面より出土した美濃須賀瀬産須恵器杯などの土器から、2期の竪穴住居址と判断した。

SB4 位置：北部 図版59、第60図

検出：II A層を掘り込み、指頭大の礫が混入する砂質土や細粒砂質土が、一辺4mの範囲に落ち込む。SB15の南西壁コーナー上に構築され、SB15を切る。カマド：石組カマドで、本遺跡では唯一の北カマド



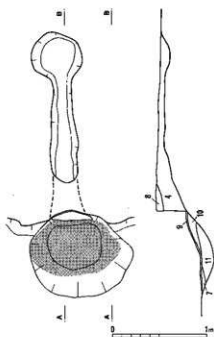
第59図 中二子遺跡SB1、カマド実測図

である。右軸芯材の河原石が立てられた状態で4～5個遺存しているだけで他は破壊されている。火床は僅か残る。床：砂質土を床とし貼床はされていない。SB15を切りその上に構築されているため、床は軟弱である。埋没状況：住居址を東西に二分して、東側には指頭大の礫が混入する砂質土が、西側には細粒砂質土が堆積していることから、河川の氾濫等による洪水により埋没したと思われる。カマドは破壊されているが壁の遺存状態が良好であることから、洪水による埋没時期にはカマドはすでに破壊されており、本址が廃棄されてまもなく水没したものと判断した。遺物の出土状況：床面近くから多く検出され、全面に平均して散在する。土師器甕・黒色土器A杯、須恵器杯・蓋・鉢・甕・長頸壺があり、黒色土器A・須恵器の量が多い。他に石錘が15点出土している。本址の属する時期は、住居址内より出土した黒色土器Aから7期に属するものと判断する。

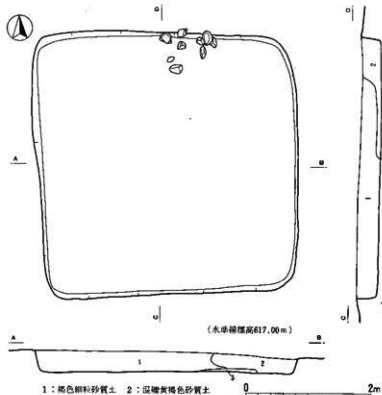
SB5

位置：南部

図版54、第61図

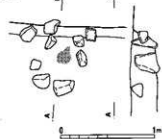


検出：II A層を掘り込み、川砂に近い砂質土が落ち込む方形プランが確認された。SB 6のすぐ東にあり西壁北半部分が後世の攪乱により破壊されている。カマド：煙道が壁外へ長く延びる粘土カマドで、煙道付け根の両脇に石組を持つ。遺存状態は良く、大礫を三個それぞれ縦に積みあげている。煙道出口部分はトンネル状の上部が粘土で作られており、一部そのままの状態が残っていた。床：中央部が僅かに高いが、全体に平坦であり、床全面は黄褐色土により堅く貼床が施されていた。周溝・柱穴などはなかった。埋没状況：覆土は2層に分層される。下層は黒褐色土に黄褐色土のブロックが混入する。上層は川砂に近い砂質土で、河川の氾濫により堆積したものと思われる



第60図 中二子遺跡SB4、カマド実測図

ことから、住居址廃絶後埋め戻され、その後河川の氾濫により埋没したと判断する。遺物の出土状態：ほとんどの遺物は床から10cmほど浮いた状態で出土し、床面上から出土したものは少ない。5期に属する須恵器の杯・蓋・甕・壺類がほとんどで、土師器甕類が若干出土している。全体の量は少ない。出土した遺物から5期に属する住居址と判断した。

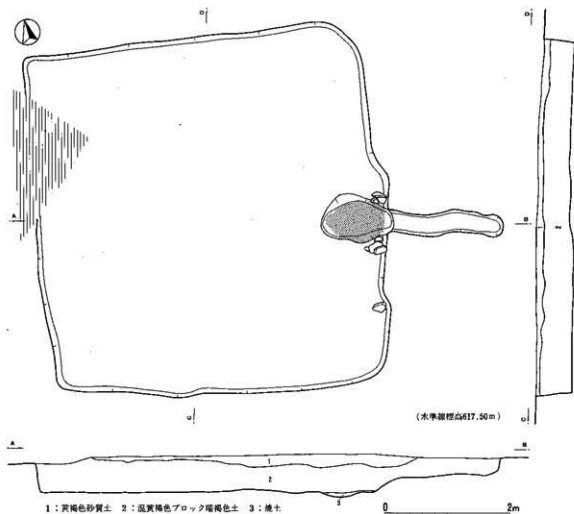


SB 6 位置：南部 図版54

検出：II A層を掘り込み、暗褐色土が落ち込む。覆土上面に廃棄されたと思われる大小の礫が径2mの範囲に散乱していた。東にSB 5が隣接するが、後世の攪乱により東壁は破壊されている。カマド：後世の攪乱により破壊されているが、焼土の一部が東壁中央やや南寄りに認められることから、この位置にカマドが構築されていたものと思われる。石組カマドか粘土カマドかは判別できなかった。床：ほぼ平坦である。指頭大の礫が混入する。柱穴・周溝・ピット等内部施設は無い。埋没状況：覆土は暗褐色を呈す細粒砂土1層で、上部に礫の投棄がみられることから、住居廃絶後人為による埋め戻しがなされたものと考えた。遺物の出土状況：覆土中から床面にかけて散見される程度でその量は少ない。住居址東側に比較的集中しており土師器甕片がカマド付近に多く見られる。須恵器杯・蓋・甕等の破片が10点程出土している。7期に属する竪穴住居址である。

SB 7 位置：南部 図版54

検出：II A層を掘り込み、暗褐色の細粒砂が落ち込む。トレンチ調査時に落ち込みが検出され、全面表土除去の際1辺4mの竪穴住居址であることが確認された。住居址西半分は調査区域外にあるため調査できなかった。カマド：東壁中央に構築されているが、径20cm、深さ5cmの凹みを持つ火床部と右軸の一部が残存しているのみで既に破壊されていた。カマドから前方の床面にかけての範囲に人頭大の河原石の散乱が見られることと、本住居址の属する時期が7期であることを考え合わせれば、石組カマドの可能性が強



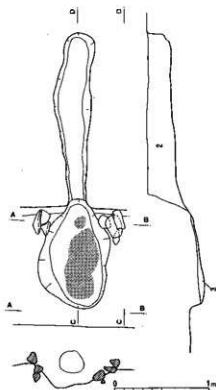
第61図 中二子遺跡SB5、カマド実測図

い。床：全体に平坦で、中央部には指頭大の小礫を混ぜた堅い貼床が施される。他の範囲にはあまり堅くない貼床が認められる。床面下の精査時に、カマド南寄りの床面7～8cm下より薄い貼床が検出された。同じレベルの壁際には幅10～20cmで地山掘り残しが見られることから、拡張されていると思われる。埋没状況：覆土が暗褐色の細粒砂一層であることと、地山の層と同一の砂層であることから人為による埋め戻しと判断する。遺物の出土状況：床面上から床面上10cmの範囲からほとんどの遺物が出土した。土師器甕片の量が最も多く、出土土器の大部分を占める。黒色土器A杯・須恵器杯片が2～4個体分あり、須恵器杯の2点には墨書がみられる（第83図）。鉄製品では、鎌と思われる破片が南壁近くの覆土中から出土している。出土土器、住居址の規模、石組カマドと思われること等より、7期に属する竪穴住居址と判断した。

SB8

位置：南部

図版54



検出：II A層上面で検出した。地山の黄褐色土を掘り込み、小礫が混じる黒褐色土の落ち込みが明瞭に認められた。カマド：東壁中央にある。原形は崩れていたが、左軸部分はわずかに粘土が残存しており、その部分にのみ焼土が明瞭に認められた。壁外に長く延びる煙道先に径55cm、深さ30cmのビットをもつ。床：ほぼ平坦であるが、カマド方向に向いやや傾斜する。全面堅く締まっているが、貼床は認められなかった。中央部分の約1㎡の範囲に、繊維質状の炭化物が床面に密着して検出された。カマド前面の床上に焼土炭化物の散乱が見られる。埋没状況：覆土は、小礫の混じる黒褐色土1層で黄褐色土のブロックが入り込む。自然埋没か人為的な埋没か判断できなかった。遺物の出土状況：カマド内より数片の土師器甕片が出土したほかは須恵器杯片が数点あるのみで、器形のわかる遺物は皆無の状態である。カマド内の土師器甕片、須恵器杯片、カマドの形態から2期に属する住居址と判断する。

S B 9 位置：南部 図版53

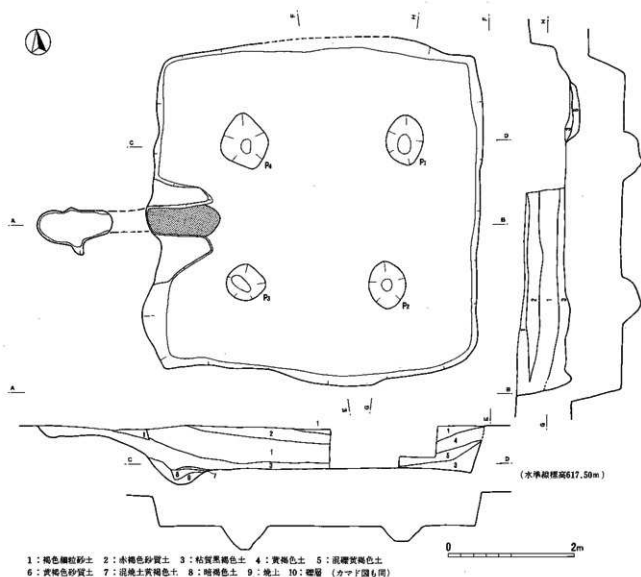
検出：II A層を掘り込み、わずかに焼土を含む褐色の砂層が落ち込む。一辺約5mの規模をもつが、住居址東北部分の四分の一は工事により既に破壊されていた。カマド：破壊された東壁中央部分に焼土の痕跡が認められたことから、カマドは東壁中央部分にあったと思われる。石組カマドか粘土カマドかは分からなかった。床：破壊された部分が多いために全体をとらえられないが、平坦でやや東側に傾斜をもつ。壁際を除き黄色土を厚さ3～5cm突き固めた堅い貼床が施されている。埋没状況：覆土は3層にわけられた。住居址の廃絶後褐色の砂層である2層が自然堆積し、その後、河川の氾濫による堆積が進み、さらに、住居址南側部分が再び河川の氾濫により破壊埋没されたものと観察される。遺物の出土状況：覆土中から10数点の土師器・須恵器の破片が検出され、床面上より須恵器蓋・杯片等が数点出土したのみでその量は少ない。糸切り底部をもつ須恵器杯の占める割合が高いことから、5期に属する住居址である。

S B 11 位置：南部 図版55

検出：調査区南西方向から北東へ流れる自然流路の一部を切って、礫を多く含む黒褐色土の落ち込みを検出した。1辺3m程であり、東壁と思われる箇所に焼土・炭化物が見られ、カマドと断定した。カマド：煙道が壁外部へやや長く延びる。礫を混入させた黄色土で袖部分を構築しており、右袖部分が残存するのみで、構造・形状等明確にとらえられなかった。床：地山の礫層上に、黄色砂質土により貼床された部分が若干残っている。その下の礫は径2～3cmのものが多く、意図的になされたものと思われる。埋没状況：壁際に礫と黄色土ブロックを含む暗褐色土が断面三角形に落ち込み、炭化物と礫を多く含む暗褐色土が中央部分を凹ませて住居址全面に厚く堆積する。さらに、その上に褐色の砂層がのる。住居址廃絶後自然堆積により埋没した結果と判断する。遺物の出土状況：覆土が15cm程度しか残っていないためにはっきりと分布状況をつかめなかったが、住居址南側に比較的多く出土している。床面よりヘラ切りの須恵器杯が出土している。本址の属する時期は、土師器甕、須恵器、美濃須衛窯産須恵器杯等から、2期に属する住居址である。

S B 12 位置：南部 図版55、第62・63図

検出：トレンチによる確認調査の段階で、03トレンチから検出された。II A層を掘り込み構築される。覆土は、床面上に黒褐色土が堆積し、その上に砂層が厚く堆積する。カマド：西壁中央にあるが、本遺跡での例は少なく、3例を数えるのみである。煙道が壁外に長く延びるタイプで、両袖部分が僅か残存する。燃焼部分は20cmほど掘り凹められ、焼土が充満しているが、その上部は厚さ3cmほど粘土が貼られている。火床を上げるためのものと理解した。火床から40cmほど上部の奥壁に煙道口が楕円形に開けられる。壁外へ55cmほど延びる煙道先に径40cmのビットが掘られる。床：北東から南西に向いやや低くなるが、ほぼ平坦に貼床される。全体的に堅緻で良好な床面である。中央部と南西部の床面上に焼土が見られる。柱穴4本が検出された。いずれも径60～80cmの楕円形で、深さは30cm程度で浅い。埋没状況：覆土下層に厚さ



第62図 中二子遺跡SB12実測図

10cmの黒褐色土が堆積するが、壁際は三角形に落ち込む。その上に、粒子に大小ある砂層が2層堆積することから、住居址廃絶後しばらくの間自然埋没が続き、その後西側を流れる自然流路の氾濫により埋没したと思われる。カマド内より須恵器杯・土師器甕が出土し、そのほか須恵器有台杯、同壺、土師器甕等本遺跡の住居址中でまとまった量の遺物が出土している。土器以外では鉄製品と石製品があり、刀子2点と棒状のものがカマド前で、鉄滓4点と砂岩製の砥石が床面上から出土している。カマド内遺物や床面から出土した遺物、美濃須衛窯産須恵器の存在等からみて、3期に属する住居址である。

SB13 位置：南部 図版52

検出：カルバート・ボックスの工事中に本址のカマド石が露呈され、中二子遺跡発掘の緒となった住居址である。工事の都合一旦埋め戻さざるをえず、再発掘したが煙道部は破壊されてしまった。東壁際に1対のカマド石が残存するのみで、住居址の構造・規模等明確にできなかった。わずかに検出された遺物から5期に属する住居址と思われる。

SB14 位置：北部 図版58

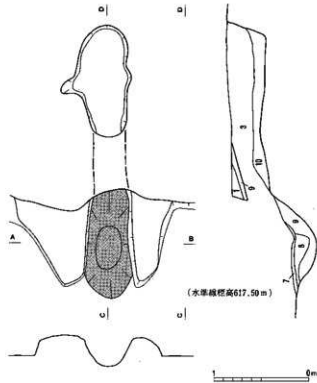
検出：II A層を掘り込み黒褐色土が落ち込む。カマド：壁外へ半円形に掘り込むが、ほとんどの部分は破壊されており原形に復し得ない。火床部分は7cmほど掘り凹められ、中に焼土・炭化物を含む焼土が落ち

込んでいる。床：カマド側に向いやや低くなるが、ほぼ平坦である。全体に堅い床であり、特に、中央から東へかけての部分が堅い。埋没状況：覆土は黒褐色土1層であり20cmと浅いため、自然埋没か人為による埋没が明確にできなかった。遺物の出土状況：住居址中央から南半部分ですべての遺物が出土した。土師器甕、須恵器有台杯・蓋・甕、石鍾があるものの、その量・種類共に少ない。カマド内より須恵器杯・蓋片が、石鍾は住居址南西部の床面から5点とまって出土した。出土土器はすべて須恵器であり、その出土状況から本址に帰属するものと判断し、5期に属する住居址としてとらえた。

SB15 位置：南部

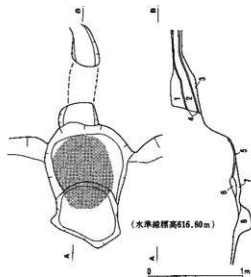
図版59、第64・65図

検出：トレンチによる確認調査の段階で落ち込みが認められていたが、表土除去の関係で一旦埋め戻し、再発掘した。II A層を掘り込み、一辺8mの方形の範囲に黒褐色土が落ち込み、その上に粘質土、砂層が一辺約6mの範囲にのる。南西隅をSB4に切られる。SB4の覆土は礫が混入する砂質土で、河川氾濫に起因する層である。住居址東側部分は調査区境界線にかかるため、煙道部と北東壁の一部は調査できなかった。カマド：東壁中央に構築される。両側壁下部は残存しており、壁は真っ赤に焼土化していた。奥壁も同様に赤化している。燃焼部内には灰・焼土が充満していた。煙道が壁外に長く延びる。床：床面はなだらかな凹凸をもち、北側半分の床は1cmほどの厚さで貼床される。カマド前の床面には約2m四方の範囲に焼土が散乱する。壁際には、幅約20cm、床面からの高さ10cm内外の規模をもつ平坦面がつけられる。ピットは7基床面に検出された。P1-P4が支柱穴で、P5・6はその位置から支柱穴と判断した。貼床下を精査したところ、新たにピット4と、北壁を除いた壁直下に幅70cm、深さ10cmの周溝が検出された。また、南壁側と北東壁隅に幅20cm、長さ1m内外の板状炭化材が計10枚検出された。その一部は南壁に斜めに倒れかかる状態で出土しており、その用途、性格は分からなかったが、壁材としての機能も考えられる。埋没状況：壁際から落ち込み床面上を覆う暗褐色土の上に、粘質土、砂層、砂利層が堆積していることから、住居址廃絶後、しばらくの間自然埋没が続くが、自然流路の氾濫等で水没した時期に粘質土の堆積が土の大半を占める砂層・砂利層からの遺物出土は皆無で、すべて床面を覆う暗褐色土と床面上より出土しあり、その後再び氾濫による砂層・砂利層によって全体が覆われたものと思われる。遺物の出土状態：覆て



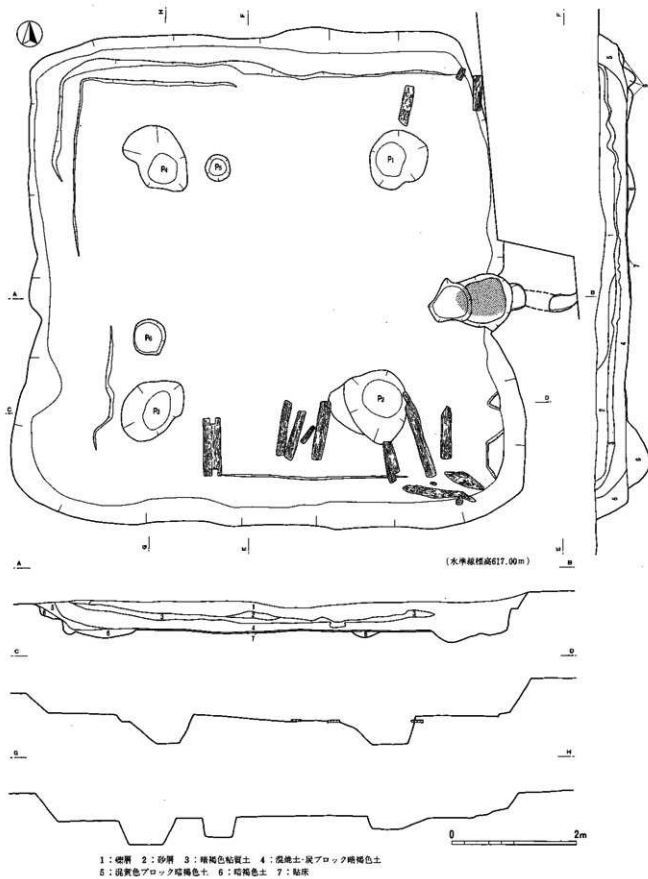
第63図 中二子遺跡SB12カマド実測図

は調査区境界線にかかるため、煙道部と北東壁の一部は調査できなかった。カマド：東壁中央に構築される。両側壁下部は残存しており、壁は真っ赤に焼土化していた。奥壁も同様に赤化している。燃焼部内には灰・焼土が充満していた。煙道が壁外に長く延びる。床：床面はなだらかな凹凸をもち、北側半分の床は1cmほどの厚さで貼床される。カマド前の床面には約2m四方の範囲に焼土が散乱する。壁際には、幅約20cm、床面からの高さ10cm内外の規模をもつ平坦面がつけられる。ピットは7基床面に検出された。P1-P4が支柱穴で、P5・6はその位置から支柱穴と判断した。貼床下を精査したところ、新たにピット4と、北壁を除いた壁直下に幅70cm、深さ10cmの周溝が検出された。また、南壁側と北東壁隅に幅20cm、長さ1m内外の板状炭化材が計10枚検出された。その一部は南壁に斜めに倒れかかる状態で出土しており、その用途、性格は分からなかったが、壁材としての機能も考えられる。埋没状況：壁際から落ち込み床面上を覆う暗褐色土の上に、粘質土、砂層、砂利層が堆積していることから、住居址廃絶後、しばらくの間自然埋没が続くが、自然流路の氾濫等で水没した時期に粘質土の堆積が土の大半を占める砂層・砂利層からの遺物出土は皆無で、すべて床面を覆う暗褐色土と床面上より出土しあり、その後再び氾濫による砂層・砂利層によって全体が覆われたものと思われる。遺物の出土状態：覆て



1：暗褐色土 2：赤褐色土 3：暗赤褐色土 4：炭 5：混成土
6：暗褐色灰層 7：焼土 8：炭焼土・灰暗褐色土

第64図 中二子遺跡SB15カマド実測図



第65図 中二子遺跡SB15実測図

いる。美濃須衛窯産須恵器の出土が多く、杯(2・3・8・9)、蓋(4・5)、甌(12)の他に甕・長頸壺・短頸壺等があり、ほとんどが床直上から出土している。他に、鉄鉢1点、棒状鉄製品2点がある。美濃須衛窯産須恵器が多いこと等出土遺物から、2期に属する住居址である。

SB16 位置：北部 図版62

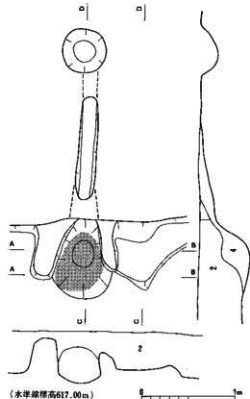
検出：II A層を掘り込み、黄褐色土ブロックが混じる黒褐色土が落ち込む。切り合いはなく単独で検出された。カマド：東壁中央にあり、煙道が長く壁外に延びる粘土カマドである。両袖の一部が残存していた。床：ほぼ平坦であり、全体に堅い。カマド前と西壁中央下の床面は、径60cmの範囲で小礫が混じる。周溝がカマド南から南壁、西壁、北壁の一部にめぐらされる。深さ3～5cm、幅5～25cmを測る。主柱穴は4本あり、ほかにカマド左右の壁直下に2本認められる。埋没状況：焼土を若干含む黒褐色土が床面に薄く堆積し、南壁際には沙質土が断面三角形に堆積する。その上に黄褐色土のブロックを含む黒褐色土が厚く堆積することから、住居廃絶後しばらく自然埋没が続き、その後、人為的に埋め戻されたとと思われる。遺物の出土状況：床面より10～20cm上に散乱するが、カマド前部に集中し検出された。土師器甕類がその大部分を占め、須恵器杯、土師器杯Cが若干認められるが、全体としてその量は少ない。出土土器より3期に属する住居址である。

SB17 位置：北部 図版62、第66・67図

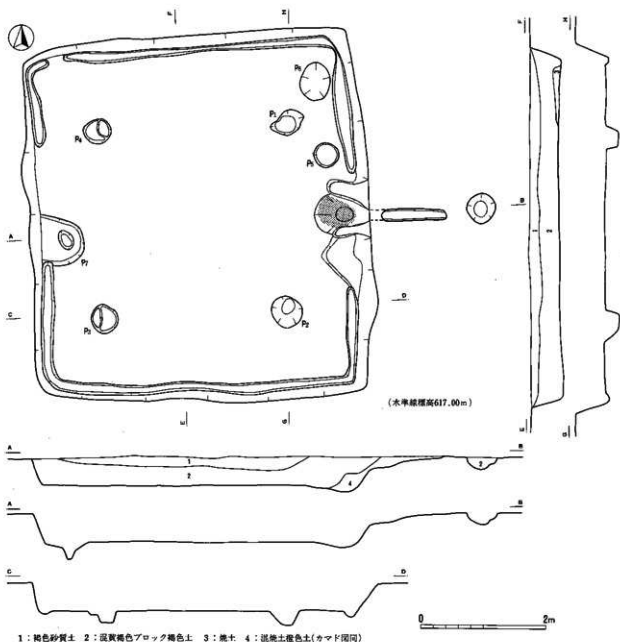
検出：表土除去の段階から、II A層を掘り込み褐色土の落ち込みが明瞭に観察された。一辺5～6mの規模をもつ大型の竪穴住居址であると判断した。カマド：東壁中央に構築される。火床は10cmほど掘り凹められ、両袖の一部が残存する。煙道は壁を丸く掘り込み構築され、壁外へトンネル状に長く延び、径45cmほどの煙道先ピットをもつ。床：全面に貼床され、ほぼ平坦で堅緻である。西壁の一部を除き、周溝がめぐらされる。幅10～28cm、深さ3～7cmの規模をもつ。西壁中央下に深さ28cm、径70cmのピットが構築されておりSB16とその構造が類似する。主柱穴は4本あるが、いずれもその深さは20cmと浅い。カマド北側にピットが2基ある。床面には、焼土、炭化物が張り付いた状態で数か所確認され、北西隅の壁直下には約10cmの厚さで焼土が堆積していた。焼失家屋とも考えられるが、焼土・炭化物は部分的に見られるのみであり、その可能性は低い。埋没状況：床面上に、黄褐色ブロックが混じる褐色土が厚さ30～40cm堆積し、さらに砂質土が堆積することから、人為的に埋め戻され、さらに、河川の氾濫により砂質土で覆われたものとする。遺物の出土状況：住居址全面より出土するが、そのほとんどは2層からの出土であり、床面に近いものはカマド前部に集中する。土師器甕、須恵器杯・蓋・甕、美濃須衛窯産須恵器杯・甕がその中心となるが、煮炊具が65パーセントを占める。他に鉄製品も2点出土している。出土遺物の様相から3期に属する住居址である。

SB18 位置：北部 図版65

検出：表土を除去した段階で、カマド煙道部の落ち込みと先端部に焼土を認めた。さらに検出を続けたところ、一辺3mの方形プランを確認し、竪穴住居址と認定した。II A層を掘り込み、暗褐色土が落ち込む。



第66図 中子遺跡SB17カマド実測図



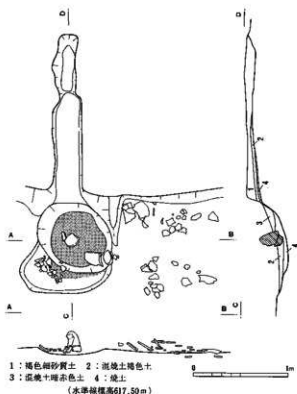
第67図 中二子遺跡SB17実測図

カマド：壁を丸く掘り込み構築される。右袖基部に、長さ30cmの礎が下半部を床面に埋めて立てられ、その上には、カマド内側へ斜めに落ち込む平板な礎がのり、床面には半割した礎が1個ころがる。左袖基部には、40×20cm、深さ15cmの石抜き取り痕があり、右袖同様礎が立てられていたことが分る。火床部には焼土が大量に見られ、炭層が床面上に見られる。床：黄色地山を床にしているが、全体に柔らかく、はっきりしない。北東壁下に100×50cm、深さ22cmの大型のピットが構築されている。焼土がみられることから、灰溜めととらえられる。埋没状況：黄色ブロックが混じる暗褐色土一層で、人為による埋め戻しと判断する。遺物の出土状況：住居址西側で6点と、カマド内から土師器甕片が検出されただけで、その量は少ない。土師器甕破片がそのほとんどを占め、須恵器杯・甕片がわずか見られる。土器のほかに、砂岩製の礫石1点が中央西床面から出土している。土師器甕、須恵器杯の時期から4期に属す住居址である。

SB19 位置：北部 図版60、第68図

検出：II A層に黒褐色の砂質土が1辺6mの方形に落ち込んでおり、住居址と判断した。切り合いはない

が、西半分が側道、南半分が仮用水路にかかるため、2回に分けた調査を実施せざるをえず、なおかつ、南西部4分の1は工事との関係で調査できなかった。カマド：東壁中央にある。煙道部が壁外へ長く延び、煙道先にビットを持つ。右袖部にわずかに粘土の高まりが見られ、その前に15cmほどの河原石があることから、小形の礫を芯にした粘土カマドであったと推定される。燃焼部中央に支脚石が残存する。火床は径70cmの範囲が10cmほど掘り凹められ、焼土が5cm堆積する。床：地山の黄色土を床とする。貼床は認められず、全体に凹凸が見られるがほぼ平坦である。埋没状況：黄褐色ブロックが混じる黒褐色土単層であり、壁もしっかりしていることから、住居址廃絶後の早いうちに埋め戻されたと判断する。遺物の出土状況：中二子遺跡の竪穴住居址中で最も遺物の量が多い。土師器甕がその9割を占め、わずかに食器類・貯蔵具類の土器が見られるだけである。土師器甕は、カマド南にそのほとんどが集中し、7個体分以上が認められた。土師器甕、須恵器杯の他に美濃須衛窯産須恵器杯・蓋が出土しているが、土器以外の遺物は出土していない。土師器甕の形態、美濃須衛窯産須恵器の存在から、2期に属する住居址である。



第68図 中二子遺跡SB19カマド実測図

土師器甕、須恵器杯の他に美濃須衛窯産須恵器杯・蓋が出土しているが、土器以外の遺物は出土していない。土師器甕の形態、美濃須衛窯産須恵器の存在から、2期に属する住居址である。

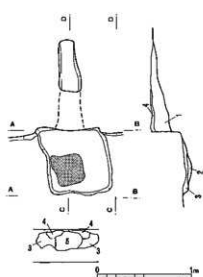
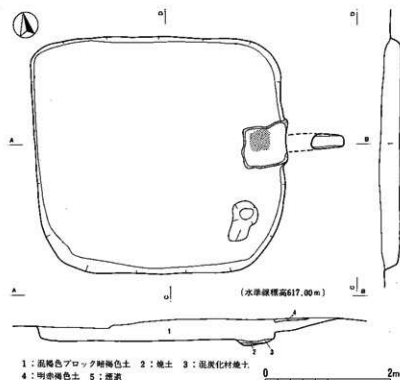
SB20 位置：北部 図版64、第69図

検出：表土除去後の検出作業中、IIA層を掘り込み暗褐色土が1辺4mの範囲に落ち込む箇所を検出し、東壁外にカマドと思われる焼土がみられることから住居址と断定し精査した。住居址北東隅がSB21を切っている。カマド：東壁中央をやや壁外へ函形に掘り込み構築される。煙道は、壁を掘り込みトンネル状に壁外へ長く延びる。袖部分等は破壊され痕跡もない。床：全体に平坦で堅緻である。全面に貼床され、カマド南側部分に径40cm、深さ20cmの不整形のビット1基が検出された。灰溜めビットと思われる。埋没状況：黄褐色ブロック・焼土が混じる褐色土単層で、壁際に崩れ込みも認められないことから、廃棄後すぐに埋め戻されたと考えられる。遺物の出土状況：カマド周辺と西壁際の2か所に集中する。カマド周辺には、土師器甕、須恵器杯・蓋が、西壁中央南には石鍾がかたまって22個検出された。他に棒状鉄製品がある。出土土器の様相から、4期に属する住居址である。

SB21 位置：北部 図版64

検出：IIA層を掘り込み、暗褐色土が落ち込む。SB20と切り合って検出され、西南部4分の1をSB20に切られる。カマド：SB20に切られた部分にも痕跡は認められず、他に焼土等も認められないことから、カマドはなかったものと思われる。床：地山を床とする。堅く締まった面は無く、全体に柔らかく大きくうねる。埋没状況：覆土は、褐色土のブロックが混じる暗褐色土の単層であることから、廃棄後すぐに埋め戻されたものと思われる。遺物の出土状況：覆土中より土器片が3片出土しただけで他には全く無い。4期に属するSB20に切られることから、2・3期に属するものと考えられるが、住居址としての機能をもっていたかどうか疑問である。

SB22 位置：北部 図版65



第69図 中二子遺跡SB20、
カマド実測図

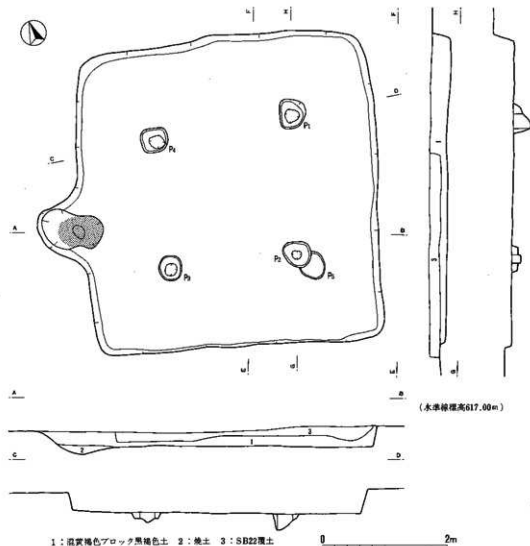
1：黒褐色ブロック層褐色土 2：焼土 3：混炭化材焼土
4：明赤褐色土 5：煙道

検出：黒褐色土がII A層を切って落ち込む。落ち込みの東西2か所からカマドに起因すると思われる焼土の存在を認めたので精査したところ、2軒の切り合いが認められ、本址がSB23を切り構築されていた。カマド：東壁中央を壁外に丸く掘り込み、火床は壁外へ半分程出る。両袖基部に石が据えられており、カマド内へ数個の石が落ち込んでいた。カマド石のまわりに、貼床土と同じ粘性を持つ黄色土が薄く張り付いており、カマド構築材であったと思われる。火床は5cm掘り凹められ、焼土が厚さ3cm程堆積している。床：黄色土を用い1cmの厚さで床面全体が貼床される。中央部とカマド付近が高く壁際は低い。南東壁隅から河原石が6個かたまって検出された。埋没状況：検出面から床面まで10cmと浅く、耕作による攪乱も進んでいたため埋没の状況はつかめなかった。遺物の出土状況：床面上からの遺物の出土が多く、全面に散乱する。土師器甕が全出土量の70パーセントを、食器類が25パーセントを占める。カマド内から土師器甕がつぶれた状態で出土した。他に刀子1点が出土している。出土土器の様相から、6期に属する住居址と判断した。

SB23 位置：北部 図版65、第70図

検出：SB22と切り合って検出された。黒褐色土がII A層を切って落ち込む。西壁中央に半円状の張り出し部があり、焼土も見られることからカマド部分と判断し掘り下げた。カマド：西壁中央やや南に壁を丸く掘り込み構築される。破壊されたものと思われ、カマド石、袖部粘土等一切検出されなかった。火床部は10cmほど掘り凹められ、焼土が充満していた。煙道は、この時期に見られる壁外へ長く延びるタイプではなく、その痕跡を認めない。床：厚さ1.5cmの堅い貼床が全面に施される。ほぼ平坦で4柱穴をもつ。南東に位置するP2のみ支柱穴をもつ。深さはいずれも15~25cmと浅い。埋没状況：黄褐色ブロックが混じる黒褐色土単層で、住居廃絶後埋め戻されたものと考え。遺物の出土状況：床面上に散在する。食器類は少なく、煮炊具が出土量の大半を占めるが、貯蔵具の占める割合が他の住居址に比べやや高く、美濃須衛衛産須器の横瓶も含まれる。2期に属する住居址である。

SB24 位置：北部 図版65



第70図 中二子遺跡SB23実測図

検出：II A層の黄色土中に黒褐色土が方形に落ち込み検出された。切り合いはない。東壁中央が壁外へ三角形に張り出し、焼土も見られたことからカマドと判断し住居址とした。カマド：東壁中央を半円状に掘り込み、煙道が50cmほど壁外へ延びる。袖芯材と思われる拳大の石が左袖部に1個残存するだけであり、粘土等も認められないことから破壊されたものと判断した。床：中央部分がやや高くなり、きわめて堅い床面である。南東隅に径60cm、深さ15cmの不整形ピットが掘られている。焼土・炭粒・土器片が見られることから、灰溜めピットと考えた。埋没状況：検出面より床面まで20cmと浅いため、埋没状況はつかめなかった。遺物の出土状況：床面上に散在する。土器には土師器甕、須恵器杯・蓋があり、煮炊具が70パーセントを占める。他に鉄滓1、砥石1が出土した。南東部と西南部床面上の2か所から、石錘合計21個出土している。床面より出土した食器類、土師器甕の形態から、5期に属する住居址である。

SB25 位置：北部 図版64

検出：II A層を掘り込み、褐色土が落ち込む。カマド：東壁中央南に位置し、壁を函形に掘り込み構築される。煙道は壁外に長く延びトンネル状に掘られているが、天井部は崩れていた。煙道先に径50cmほどのピットをもつ。床：地山を床とする。貼床は認められず、全体に柔らかい。他に住居址内施設はない。埋没状況：褐色土の覆土中に黄褐色土がまだらに入ること、上層には焼土が見られることから、住居廃絶後に埋め戻されたものと判断する。遺物の出土状況：床面全面に散見され、カマド内とその周辺に集中す

る。須恵器杯、土師器甕の形態から2期に属する住居址である。

S B 28 位置：北部 図版65

検出：II A層に暗褐色砂質土が落ち込む。東側部分に火床らしき焼土も検出され住居址と判断した。切り合う遺構はない。東から南側部分は攪乱により破壊されており、正確なプランはつかめなかったが、1辺3.5mの方形プランをもってものと推測される。カマド：耕作による破壊で位置、形状、規模をつかめないが、火床と思われる焼土が東壁中央南に見られることから、この位置をカマド部分と推定した。床：全体に柔らかく明確にとらえられなかったが、地山を敲いて床にしている様子が観察された。カマド部分に向かいやや低くなるが、全体に平坦である。南壁下が幅60cmで低くなっており、焼土・炭化物がみられる。床面からは4基のピットが検出された。南壁中央下に3基並ぶ最南部のピット内には、焼土ブロックが厚さ5cm程堆積しており、灰溜めピットと判断した。埋没状況：覆土は耕作による攪乱のため15cmしかなく判断できないが、褐色土と暗褐色土が混在した単層であることから、住居が廃絶された後埋め戻されたものと考えたい。遺物の出土状況：床面上にわずかに散見されるのみであるが、土器片から本址の所属時期を2期とした。

S B 27 位置：北部 図版64

検出：II A層上面で焼土を検出し、付近を精査したところ約4m四方の範囲に褐色土の落ち込みを検出した。西側部分のプランは明瞭にとらえられたが、東側部分は工事により既に破壊されており、プランをつかめなかった。カマド：西壁中央を半円状に掘り込む。左袖部に粘土が若干確認されたのみで、芯材の石等はない。火床は5cm程掘り凹められ、炭化材が堆積しその上に焼土が10cmのる。床：カマドに向かいやや低くなるが、全体に平坦で堅い。貼床は認められないので、地山を敲き締めたものと思われる。カマド前に2基のピットが検出された。その位置から4本柱の構造と思われるが、東側は工事による破壊のため検出できなかった。深さ20～30cmと浅い。埋没状況：褐色土に黄色土が混じる覆土から、埋め戻されたものと判断する。遺物の出土状況：カマド付近に集中する。カマド前部を半円形に囲うように土師器甕片が散乱している。出土土器のほとんどを土師器甕が占め、須恵器杯がわずかに見られる。2期に属する住居址である。

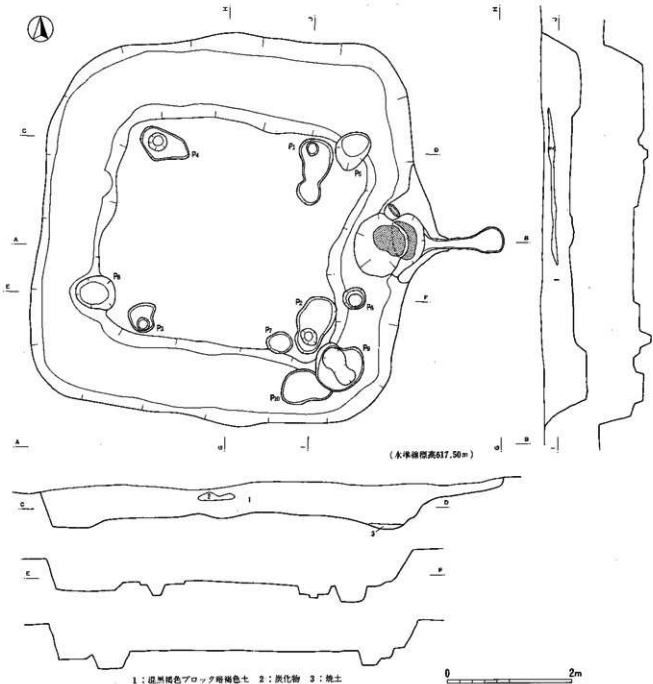
S B 28 位置：北部 図版66

検出：II A層に暗褐色砂質土が方形に落ち込むプランが明瞭に検出された。他の遺構との切り合いはないが、後世の暗渠排水溝により、北西隅から中央部まで幅60cm幅で破壊される。カマド：東壁中央に構築される。袖部を地山の土と似た土で作り出し、燃焼部の3分の1は函形に壁外へ掘り込まれる。煙道は、壁外を掘り下げ、上部に土を盛ってトンネル状にしたものと思われる。火床部は15cm程掘り凹められ、焼土が15cm堆積する。奥壁も焼土化しており、良く使用された状況が観察される。床：ほぼ平坦であり、厚さ3～5cmの堅い貼床がほぼ全面に施されている。特に中央部が堅緻である。カマド南から西側を中心に、人頭大の河原石が数個床面上に散在する。埋没状況：黄色ブロックを含む褐色土に暗褐色土が混入する単層の覆土で、壁際に崩れ込みも見られないことから、廃絶後埋め戻されたものと判断した。遺物の出土状況：住居址東側部分とカマド付近の床面に集中する。カマド内から土師器甕1個体分が出土している。土師器甕、須恵器杯・蓋・長頸壺・四耳壺・鉢の他に鎌1、砥石1が出土している。出土土器の様相から5期に属する住居址である。

S B 29 位置：北部 図版62、第71・72図

検出：II A層に暗褐色土が1辺6mの方形に落ち込んでおり明瞭に検出できた。カマド：東壁中央に構築される。火床部が上下2枚検出されたことから作り直しが考えられる。古いカマドは壁内に火床部をもつが規模・形状はわからない。新しいカマドは壁外へ火床部が2分の1張り出す。地山を利用した両袖部の下位のみ残存する。左袖内に人頭大の礫1個がみられることから、礫を芯にした粘土カマドであったと思

われる。煙道口は高い位置に設けられ、壁外へ長く延びる。床：地山を床とする。平坦であるが全体に柔らかい。壁直下に幅1m、深さ20cmの掘り方が全周し、覆土と同じ土により埋められていた。ピットは12基検出された。P1・4・7・9を支柱穴、P5はP4の、P8はP7の支柱穴、P2・3はカマド部の上屋を支える柱と考えた。カマド南に位置するP10・11は、内部に焼土が見られることから灰溜めピットと思われる。埋没状況：覆土は黒褐色土に黄色ブロックが混入する。間層に炭化物混入層が入ることから、住居址廃絶後埋め戻されたものとする。遺物の出土状況：カマド周辺に土師器甕が集中して出土する。特にカマド北側に多い。土師器甕の他に須恵器杯があるが、90パーセントは煮炊具によって占められる。他に砥石1があり、カマド周辺に石錘が散在していた。床面やカマド周辺より出土した土器の様相から、2期に属する住居址である。



第71図 中二子遺跡SB29実測図

イ 掘立柱建物址

概観

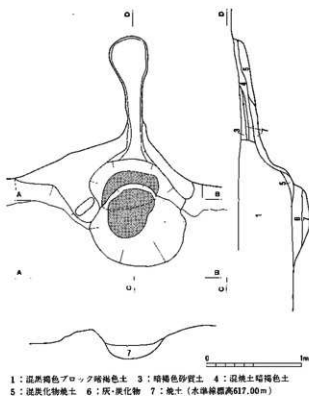
分布：中二子遺跡から検出された合計17棟の掘立柱建物址は、2棟を除いてSD1の南にそのほとんどが分布し、棟方向をほぼ揃え、SD1に沿うように構築されている。

時期：明確に掘立柱建物址に伴う遺物は検出されず、時期が決定できない。しかし、ST1～6、17の検出面や柱穴掘り方内より、土師器甕片、須恵器甕片、美濃須衛窯産須恵器杯・甕の破片が出土しているところから、一群の掘立柱建物址は2～3期の間に存在していた可能性が高く、少なくとも2回にわたる建て替えがあったと思われる。また、これらの建物址の掘り方覆土とは違う覆土をもつ一群もあり、竪穴住居址の位置関係から、5期に属するものと考えられる掘立柱建物址の存在も指摘できる。

構造・規模：17棟のうち総柱建物址7棟、側柱建物址10棟に分けられ、総柱建物址の内2間×2間の規模をもつもの5棟、3間×2間のもの2棟であるのに対し、側柱建物址では、3間×2間ものが7棟、2間×2間が2棟、2間×1間1棟とその種類が増える。建物址を面積別に見ると、10㎡までのもの1棟、11～15㎡7棟、16～20㎡3棟、21㎡以上のもの6棟であり、16㎡以下の建物址のほとんどは総柱建物址によって占められる。柱掘り方は円形・方形の平面形をもち、また、その規模は1辺80cmを越す大形のものから、40cm内外の小形なものまでであるが、50～60cmを平均とし、方形の掘り方のほうが大形となる傾向をもつ。掘り方の深さも同様で、方形の平面形をもつもののほうが概して深い。柱痕跡から推定される柱の太さは15～20cmで、先端が丸く尖るものが多い。建物址内部に施設をもつものは皆無である。

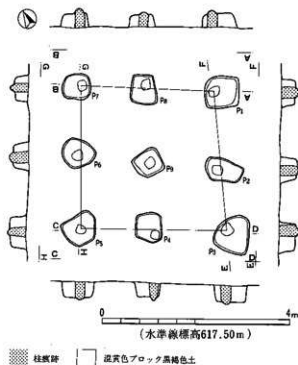
ST1 位置：南部 図版58第73図

検出：表土除去作業の段階で、炭化材・土師器破片が3m四方の範囲に集中している箇所が検出された。土の色も黒く、焼失遺構の存在が考えられた。精査したがプランは明確にはとえられず、15cmほど検出面を下げたところ、IIA層を掘り込み炭化材を多く含む黒褐色土の掘り方を9本検出した。各掘り方の中には炭化材を極めて多く含む柱痕が明瞭に認められた。柱穴の配列から2間×2間の総柱建物を想定した。ST8と切り合うが、本址がST8を切っていることは、本址のP1・



1：黒褐色ブロック暗褐色土 3：暗褐色砂質土 4：混雑土暗褐色土
5：混雑土暗褐色土 6：灰・炭化物 7：焼土（水準標高617.00m）

第72図 中二子遺跡SB29カマド実測図

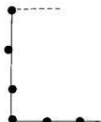


第73図 中二子遺跡ST1実測図

P2がST8のP8・P9を切ることから明確にとらえられ、また、ST8の覆土は黒褐色土であることから2棟の存在が確認できた。南約1mへ建て替えられたことがわかる。柱間寸法は、桁行き・梁行きとも145~160cmのほぼ等間隔であり、南東隅の柱穴が若干東へそれるがほぼ柱筋は通る。掘り方は50~80cmで不整形のものもあるが、ほとんどは方形に近い。柱痕跡は方形で1辺20cmの規模をもち、柱の先端が片側より削られたように、断面が三角形を呈する。遺物の出土状態：検出面に美濃須衛衛産須恵器甕片、土師器甕片が散乱していた程度で、本址に確実に属するものは見当たらない。検出面での遺物の出土状況から2期に属するものとする。

ST2 位置：南部 図版59

検出：表土除去の際、掘り方の跡がいくつか見られたので精査したところ、IIA層を掘り込み黒褐色土が入りこむ掘り方を検出した。軸を異にする2棟の存在が知れ、柱穴どうしの切り合いはないが、その位置関係からST3と切り合うことが判明した。東側部分を自然流路により破壊されている。柱穴：掘り方はST3より大きく、1辺60~80cm、深さ50cmの規模をもつことから、ST3の掘り方とはっきり区別できる。柱痕跡は方形で1辺約20cmを測る。黄褐色ブロックが掘り方に入るが、柱痕跡は砂質の黒褐土で明瞭に区別された。P1~P5の先端は尖り、P4を除き柱痕が掘り方底面を抜く。遺物の出土状況：美濃須衛衛産須恵器、土師器甕が検出面より出土しており、P6より美濃須衛衛産須恵器片が出土している。土器の出土状況から2期に属する建物址ととらえられる。



ST3 位置：南部 図版59

検出：ST2の検出に際し、IIA層に黄褐色ブロックの入る黒褐色土が落ち込み、そのなかに黒褐色の柱痕跡が見い出された。東側半分はNRにより破壊されている。柱穴：柱痕跡はST2と同様砂質の黒褐色土で、掘り方覆土と明瞭に区別できた。P1、3、4は柱先端が底面に突きささり、先端は尖る。3間×2間の規模をもつ掘立柱建物址と推定され、位置関係からST2の建て替えと判断した。遺物の出土状況：P12より土師器甕片が出土したのみで他にはない。時期は2期と考える。



ST4 位置：南部 図版59・第74図

検出：表土除去の際掘り方が確認されたので、数cm掘り下げたところ、3間×2間の竪柱建物址が2棟分検出された。柱穴：いずれもIIA層中を掘り込んでおり、柱痕跡は方形で約20cm、掘り方は40~58cmと多少ばらつきがあるが、平均50cm内外での規模をもつ。柱の先端が尖るものはP1・3・4・5・6・9、尖らないものP2・7・8・10・11・12と一定ではない。柱間は、桁行192~214cm、梁行192~220cmでほぼ柱筋は通る。遺物の出土状況：検出面より美濃須衛衛産須恵器甕片と土師器甕片が多数検出され、P1・5・6・10内から土師器甕片が出土している。時期は2期に属すると思われる。

ST5 位置：南部 図版59

検出：掘り方どうしの切り合いはないが、位置関係からST4と切り合い検出された。ST4より東へ6度主軸をふる。東側は自然流路により破壊されるが、2間×2間の竪柱建物址と思われる。柱穴：柱痕跡は方形を呈し、1辺20cmで先端は尖るが、P1・3・6・2・4・5は平らである。柱間は桁行248~256cm、梁行264~220cmでほぼ柱間はそうだが、柱筋は少しずつずれてまっすぐには通らない。遺物の出土状況：P2より美濃須衛衛産須恵器片が、P4柱痕跡内より土師器甕片、P5より土師器甕片が出土した。出土土器より2期に属する建物址と判断する。



ST6 位置：南部 図版58

検出：II A層に黒褐色土が落込むピット群が検出された。総柱で2間×2間の規模を持ち、ST14を切る。



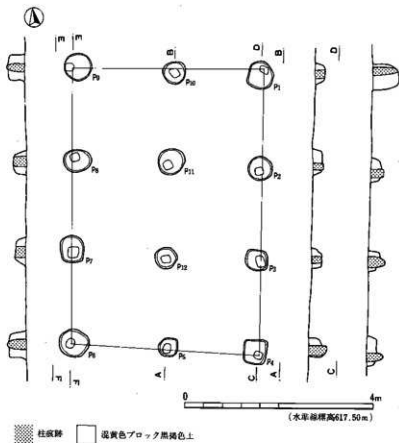
柱穴：方形の掘り方を持ち、いずれも柱痕跡をもつ。柱痕跡は15~20cmの方形で、先端は丸く尖る。掘り方は深さ40cmを測るが、P4のみ20cmと浅い。柱間は、桁行160~180cm、梁行190~200cmとほぼ等間隔で柱筋は通る。4×3.3mと東西にやや長い。遺物は出土していないため時期を特定出来ないが、ST1~5・8の切り合いや本社のST14の切り合い、位置関係から2期に属するものと判断する。

ST7

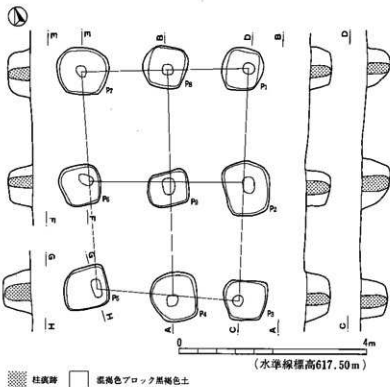
位置：南部

図版56

検出：表土除去の際、DH-11グリッド付近に1辺6mの範囲で遺物を含む粘質の黒褐色土があらわれたため、竪穴住居址を想定した精査を行ったが、2間×2間の総柱建物跡であることが判明した。柱穴：掘り方はいずれも1辺80cm以上あり、本社で検出された掘立柱建物址中で最大の規模をもつ。いずれの掘り方にも径25~30cmの柱痕跡が認められる。桁行482cm、梁行352cmで、柱間寸法は桁行230~250cm、梁行170~180cmとほぼ等間隔であり、柱筋も揃っている。掘り方は平面形の大きさに対し、深さも50~60cmと深い。各掘り方は黄褐色ブロックが混入する黒褐色度の覆土をもち、底面は平坦であるが、P1のみ丸くなる。柱痕跡は方形で先端は丸く面取りされている。遺物の出土はなく時期を判断でき



第74図 中二子遺跡ST4実測図



第75図 中二子遺跡ST7実測図

ないが、掘り方規模、位置等から2期に属するものと考えたい。

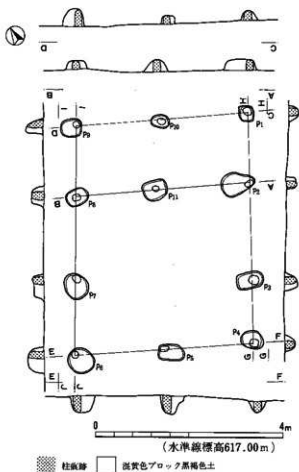
ST 8 位置：南部 図版58

検出：ST 1の検出時に炭化材のまじらないビットが重複して検出された。いずれも覆土は黄褐色土ブロックが混じる黒褐色土であり、炭化材は混じらず、ST 1の覆土・柱痕跡とは明瞭に区別された。P 1～10がST 1に切られる。柱穴：柱間寸法は桁行185～190cm、梁行180～190cmと等間隔であり、柱筋は揃っている。柱痕跡は砂質の黒褐土が落ち込んでおり、掘り方覆土とは明瞭に判別される。柱痕跡から判断すると柱は方形で径15cmの規模をもち、柱先端は丸くなるものが多い。掘り方は1辺30～60cmとST 1に比べると小規模であり、柱痕跡もひとまわり小さくなる。遺物の出土状況：土師器、須恵器の小片が検出面に数点みられたのみで時期決定できるものはない。ST 1との切り合いから2期に属する建物址と考える。



ST 9 位置：南部 図版56

検出：表土除去の段階で、小石混じりの粘土層中に黒褐色土が5m×3mの範囲に広がる箇所があり、精査したところ、3間×2間の掘立柱建物址であることが判明した。柱穴：30～80cmの方形ないし長方形の掘り方をもち、柱間隔は、桁行北・南のそれぞれの2列間が狭く、中央列間は広くなるのに対し、梁行はP 8・11間を除き190cmとほぼ等間隔である。掘り方の壁に添うように建てられた柱痕跡が多く見られる。P 1・9・10は規模も小さく浅いことから庇の掘り方と思われる、東西方向に棟をもつ掘立柱建物址と判断した。遺物の出土はない。



第76図 中二子遺跡ST 9実測図

ST 10 位置：南部 図版56

検出：表土除去の段階で建物址の掘り方と見られるビットが確認できたので、さらに数cm掘り下げ精査したところ、2間×2間の9本の掘り方を検出した。



柱穴：掘り方はいずれも礫まじりの黒褐色土を掘り込み、褐色粘質土が落ち込む。柱痕跡は先端が丸く尖っており、黒色土が落ち込んでいる。柱間は、桁行200～215cm、梁行88～196cmであるが、東側は3間となりP 2・3間が狭く入口部を思わせる。桁行P 6～8は柱筋が通らず真中の柱のみが出る。遺物の出土はなく時期を決定できないが、覆土の違いと竪穴住居址との位置関係から、5期に属する掘立柱建物址と考えたい。

ST 11 位置：南部 図版56

検出：表土除去の際ST 10の東側で、3m四方の範囲に2間×1間の建物址のものと思われる掘り方6本を検出した。柱穴：36～42cmの円形の掘り方をもち、径10cmの円ないし方形の柱痕跡が認められる。柱間は桁行142～152cmとほぼ等間隔に並ぶが、西



側列の中央柱が西へ出っぱり、北側梁行がやや開く。柱痕跡先端は丸く尖る。遺物は全く出土していないが、ST10と同じ覆土を持つことと軸方向がほぼ同じことから5期に属する建物址と考える。

ST12 位置：南部 図版56

検出：SB1とSX3の検出中にビット群が西側に検出された。SX3近くで西に直角に曲がることから掘立柱建物と判断した。調査区域外へ半分が出るため計7本のビットしか検出できなかったが、3間×2間の規模をもつ建物址であると思われる。柱穴：柱間は桁行1486~176cm、梁行130cm~172cmと等間隔ではなく、柱筋もやや通らない。掘り方は最大24cmと浅い。遺物の出土状況：P3の柱痕跡より土師器甕断片が出土しているが、時期を明確にできない。



ST14 位置：南部 図版58

検出：ST6に切られ検出された。覆土はST6の覆土と似るが、掘り方規模に相違があり、本址の掘り方が小規模であることが明瞭に区別できた。2間×1間の規模をもつ。柱穴：柱間は、桁行166~178cm、梁行280~300cmと両者ともほぼ等間隔で柱筋も通る。掘り方平面形は楕円形で、長軸64~90cmと一定ではないが、深さは、35~40cmと同程度である。柱痕跡はP1・3・5に観察されるが、いずれも径15cmの円形で先端が丸く尖る。遺物の出土は無く所属時期を判断できないが、ST6と切り合うことから2期の建物址と考える。



ST15 位置：南部 図版53

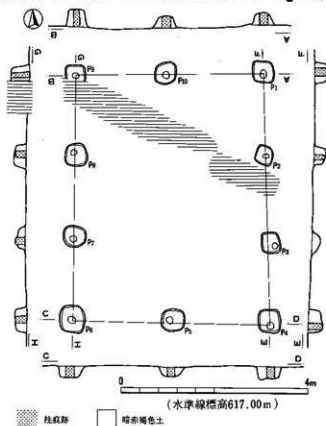
検出：調査区南端で検出された。黄褐色土の基盤に黒褐色土が落ち込むビットを計7本検出し、2間×2間の掘立柱建物址と判断した。単独検出であり、他の掘立柱建物址群とは離れる。自然流路の分岐する地点に位置するため流路の影響を受ける。柱穴：掘り方覆土は褐色砂質粘土で、柱痕跡は円形をなす。掘り方は方形でP6を除いて1辺約80cmと大形である。柱痕跡も20~25cmと太いものが多く先端が丸く尖る。P2・P7の柱痕跡先端は掘り方底部にくいこんでいる。遺物の出土状況：P8の掘り方から土師器甕片1片が出土したのみで、時期を決定できるものはない。



ST16 位置：南部

図版66、第77図

検出：調査区北西隅で検出された。II A層を掘り込み、黒褐色土が落ち込むビット群を検出した。一部を後世の暗渠排水溝で破壊されるが、3間×2間の建物址である。柱穴：柱間は、桁行164~192cm、梁行188~200cm、ほぼ等間隔であり、柱筋は通る。掘り方は1辺40~58cmの方形で、平均1辺50cmの規模をもち、柱痕跡は径15cmで一定の大きさをもつ。底部はP3・10を除き平坦であり、各コーナーの柱痕跡は30~40cmと他のものより深く掘られている。遺物の出土はないが、構築された位置から5期に属する建物址と判断した。



第77図 中二子遺跡ST16実測図

ST17 位置：南部 図版61

検出：自然流路沿いに、黒褐色土がII A層に落ち込む掘り方が検出され確認出来た。西側桁行1列と北側梁行で2本掘り方が検出されたのみで、東側部分を調査したが他の掘り方を明確にできなかった。3間×2間の建物址と判断した。柱穴：P1～P5の中で、柱痕跡が確認できたのはP1～3までで、P4・5には認められなかった。掘り方はいずれも方形で大きく、径20cmの柱痕跡が認められる。P1・2の柱痕跡は掘り方底部から突き出る。P3・4から焼土が検出された。P3では検出面から25cm下で、P4では上層ではレンズ状に、下層では全面に焼土がみられた。遺物の出土状況：P3より土師器甕片が、P4底部からも土師器甕の底部が出土したが時期等判別できないが、P4から出土した土師器甕底部に木炭痕がみられることから2期に属するものと判断した。



ST18 位置：南部 図版63

検出：II A層を掘り込み、黒褐色土が落ち込む。方形に並ぶ掘り方6本を検出した。南東部は自然流の影響のためか2列とも検出できないが、桁行の柱間が3間であることから、3間×2間の規模をもつものと判断した。P2をSK15が切っている。柱穴：柱間隔は桁行き180～214cm、梁行き188×198cmとやや間隔はあくが柱筋は通る。掘り方は深さ平均40cmを測るが、P4は58cmとほかに比べ深い。柱痕跡は径15～20の円形で先端は丸く尖る。P4・6の柱痕跡は掘り方底部を突き出る。遺物の出土状況：P1・4から土師器甕片が出土している。ST17との位置関係や覆土の類似、出土遺物から2期に属する建物址と判断する。



ウ 溝址

SD1 位置：北部～南部 図版58・60・63・64

検出：調査区を南北に分けるように、南西から北東方向へ斜めに走る溝址が検出された。黒褐色土を掘り込み、指頭大の礫を含む砂礫層を覆土とする。中央部分と南西側とはぎれる箇所もあり明確に検出できなかったが、連続していたものと思われる。規模・形状：北東部は幅45cm、深さ5cmを測るが、南へ行くに従い次第にその幅を広げ、中央部では、幅4m、深さ10cmの規模をもち、再び幅を狭め、南西端では幅1m、深さ3cmと浅くなりそれ以南は検出できなかった。遺物の出土状況：溝が幅を広げる中央部北寄りの部分から土師器甕片がまとまって出土し、ほかの箇所にも僅かずつではあるが2～6期にかけての遺物が検出された。遺物の時期から2～6期に存在していたものと思われるが、常に溝内を水が流れていたかどうかは判断できなかった。本址の軸線に方向を合わせるように堀立柱建物址が存在することから、少なくとも2期には機能していたことがわかる。

SD2・3 位置：南部 図版57・55

検出：SD2は、調査区南東境で検出された。SX2を切り、幅30cm、長さ4.5mを測る。N52°Eを向く。SD3はSB12の北から単独で検出された。幅70cm、長さ6mで調査区域外へ延び、SD1・2と直交する方向をもち、N72°Wを向く。

エ 墓址

概観

分類：土葬墓のみが検出された。隅丸長方形ないし長方形の平面形をもつものがほとんどある。分布：調査区南部を南北に走る自然流路近辺に分布し、流路方向と土坑の長軸を同じくするものが多い。流路の東

に位置するSK6・7と対称的に、流路西にSK3・4が位置している。時期：出土遺物からその所属時期を判断できる土坑に、SK4・7・12がある。SK4・7からは、いずれも11期に属する土師器、灰輪陶器が出土している。SK12からは2～3期の須恵器が出土している。他に時期を判断できる土坑はないが、平面形態に共通性が認められることから、11期の墓址と判断したものがほとんどである。

SK3 位置：南部 図版56、第78図

規模・形状：黒褐色土を掘り込み、淡黄細粒砂土が落ち込んでおり明瞭に確認できた。平面プランは204×58cmの長方形で、深さ24cmを測る。壁は垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。遺物の出土状況：覆土中より須恵器1片が出土したのみで他には全く無い。時期の判断は出来ないが、平面形とその位置から、11期に属するものと判断した。

SK4 位置：南部 図版54、第78図

規模・形状：SK3の南13mに位置する。黒褐色土を掘り込む。掘り方には褐色ブロックの混じる黒褐色土が落ち込んでおり、明瞭に検出された。240×88cmの規模をもち、深さ54cmを測る。壁は垂直にしっかりと掘り込まれており、底部は平坦で堅い。遺物の出土状況：土坑北部分の底部より土師器杯3点・柄1点、灰輪陶器碗・皿各1点の計6点（図版72）が重なるようにまとまって出土した。すべて口縁部を上に向け西に傾いた状態で検出された。南壁近くには土師器のミニチュア土器が底部よりやや浮いて出土した。土器のあり方から副葬品と判断した。覆土の状態や遺物の時期からみて、11期に属する土葬墓である。

SK5 位置：南部 図版54、第78図

規模・形状：自然流路内を掘り込み、褐色細粒砂土が落ち込む。長軸は流路の方向と直交し、260×112cmの長楕円形平面プランをもつ。深さは20cmと浅いが、流路による影響のためと考える。壁はほぼ垂直に掘り込まれていたものと思われるが、東壁は流路により破壊されたためかなだらかに落ち込む。底部は傘大から人頭大の礫であり平坦ではない。遺物はまったく出土していない。時期を判断できないが、平面形・位置から11期に属する土坑と考えたい。

SK6 位置：南部 図版57、第78図

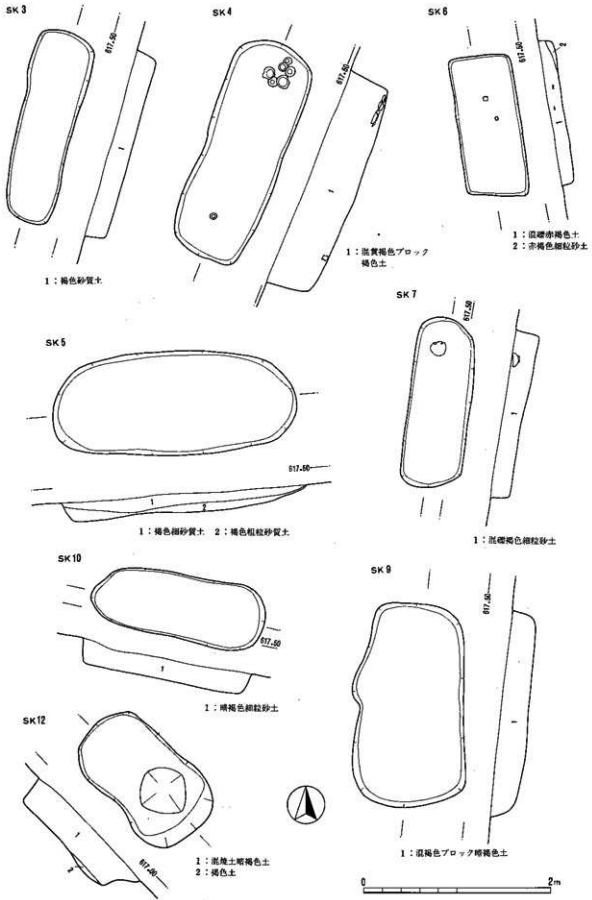
規模・形状：自然流路東の調査区域境に検出された。黒褐色土中に同じ覆土をもち構築されていたため、検出は困難であったが、覆土に細礫を含むためプランが確認できた。南北方向に長軸をもつ長方形のプランで、150×78cm、深さ15cmを測る。壁は垂直に立ち上り、底部は平坦である。北壁下に褐色粘土層が断面三角形に落ち込む。遺物の出土状況：底部より5cm程浮き、土坑中央北寄りから石帯2個が南北に並び出土した（図版73-6・7）。他に、土師器・須恵器小破片が3点出土している。遺構の所属時期をはっきりと判断できないが、位置等から11期の土坑と考える。

SK7 位置：南部 図版55、第78図

規模・形状：SB11と12に挟まれ、自然流路東に位置する。褐色細砂質土を掘り込み、細礫混じりの土が落ち込む。182×63cm、深さ25cmを測る。長楕円形プランをもち、壁は垂直にしっかりと掘り込まれる。底部は平坦で堅い。遺物の出土状況：土坑北壁近くの上層より緑輪陶器碗（図版72）が出土し、碗の西南下部より、下顎右第1臼歯を含む歯片が3点出土した。生骨との鑑定結果を得ている。11期に属する土葬墓である。同じ規模をもつ土坑にSK10（第78図）がある。本址とは直交する方向を向く。

SK12 位置：南部 図版61、第78図

規模・形状：他の土坑より離れ、SD1中央部南に位置する。黄褐色土を掘り込み、暗褐色土が落ち込む。壁は、南東部がややなだらかであるが他は垂直に掘り込まれている。底部は平坦であるが、南東部分が5cm程凹む。遺物の出土状況：底部より浮くが、全面より土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土して



第78図 中二子遺跡古代墓址実測図

いる(図版72)。美濃須衛窯産須恵器も含まれていることから、2～3期に属する土坑である。

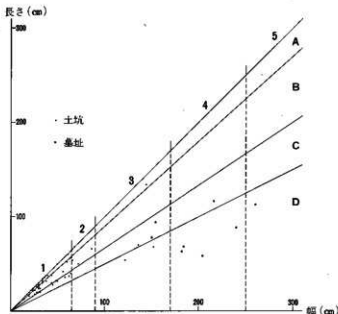
オ 土坑

概観

分類:分類基準により、本遺跡で検出された土坑は第79図のように分類される。墓址に比べると小規模な土坑がそのほとんどを占める。分布:大半を占める1種の土坑は、SD1をはさむ北西と南東部、南部東の調査区域域に集中する。僅かにみられる他の土坑も同じ地域に散在する。時期:墓址を除き、時期が判断できる土坑はない。ただ、調査地区南東境にあるSK71より中世に属する土師器皿が出土していることから考え、1種の小ピットは中世に属する土坑の可能性が高い。

SK14(II群A類3種) 位置:南部 図版57

規模・形状: SX2の東に位置し、144×134の円形プランをもつ。深さは14cmと浅いが、本遺跡ではこのような大型の円形土坑は本址のみである。覆土は、黒褐色砂質土が上層にあり、下層は同じ土に2cm大の礫が混じる。遺物の出土は全く無く時期を判断できないが、SX2に近接することや大型であることから



- I群: 方形を基本形とする土坑
- II群: 円形を基本形とする土坑
- III群: 不整形な土坑

- A類: 長短軸比 1:1~10:9
- B類: 長短軸比 10:9~3:2
- C類: 長短軸比 3:2~2:1
- D類: 長短軸比 2:1~

- 1種: 長軸 65cm未満
- 2種: 長軸 65~90cm
- 3種: 長軸 90~170cm
- 4種: 長軸 170~250cm
- 5種: 長軸 250cm以上

第79図 中二子遺跡古代土坑の長軸と短軸関係図

形態	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	合計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
I	5	0	0	0	0	5	4	1	0	0	0	5	0	1	1	1	0	3	0	0	0	2	0	2	15
II	34	1	1	0	0	36	16	2	0	0	0	18	8	0	2	0	0	10	0	0	2	2	1	5	69
計	39	1	1	0	0	41	20	3	0	0	0	23	8	1	3	1	0	13	0	0	2	4	1	7	84
III																							6		6
Iのみ																							1		1
IIのみ																							2		2
計																									93

第16表 中二子遺跡古代土坑形態分類表

古代に属する土坑と考える。

カ その他の遺構

SX 1 位置：南部 図版63

検出：黄褐色土を掘り込み、黒褐色土が明瞭に落ち込む。本址を切り、中央やや東北部にSK11が位置する。規模・形状：500×360cmの不整形を呈す平面プランをもち、深さは20cmと浅い。壁はややなだらかに落ち込み、底部は平坦となる。遺物の出土状況：南部にやや偏りをみせるが、土坑内のほぼ全面より遺物が出土した。すべて破片であるが、土師器甕、須恵器杯・蓋等がある。ほとんどの遺物は底部から浮いて出土している。出土遺物から、古代2期に属する遺構であるが、その性格を判断できない。

SX 2 位置：南部 図版57

検出：南東部の調査地区境と自然流路にはさまれた地区に位置する。SD 2とSK 80～81に切られる。黄褐色土を掘り込み黒褐色土が落ち込む。260×220cmの不整形を呈し、深さ10cmを測る。遺物の出土は少なく土師器小破片が数点認められたのみである。他のSXに比べ小規模でありその時期・性格を判断できない。

SX 3 位置：北部

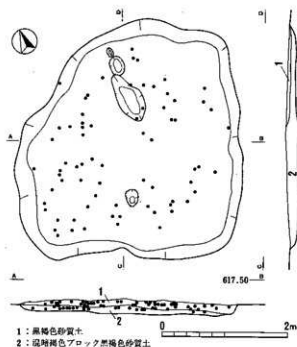
図版60、第80図

検出：調査地区中央西境から検出された。竪穴住居址が集中する地域のため、当初はSBとして扱ったが、平面形が不整形であることからSXに変更し精査した。黄褐色土を掘り込み、黄褐色ブロックが混じる黒褐色土を覆土とする。規模・形状：440×365cmの不整形を呈し、深さ15cmを測る。西壁中央に焼土・炭化物が集中してみられた。遺物の出土状況、底部より浮いた状態で出土している。須恵器杯・高杯・甕、土師器甕が多く、22個体分ある。遺物の属する時期から、古代2期に属する遺構である。

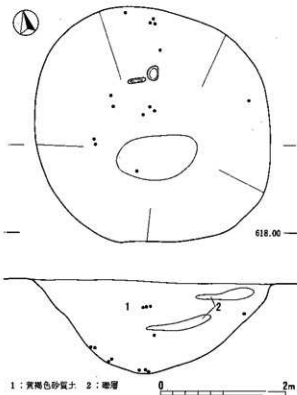
SX 4 位置：南部

図版54、第81図

検出：黄褐色土を掘り込み、黄褐色砂質土が落ち込む。417×378cmの円形プランをもち、深さは12



第80図 中二子遺跡SX 3実測図



第81図 中二子遺跡SX 4実測図

0cmと最も深い。壁は摺り鉢状に落ち込み、地山の礫が露出する。覆土中には礫層がレンズ状に入り込んでおり、東を流れる流路による自然埋没が考えられる。遺物の出土状況：底部から出土しているものが多い。須恵器杯がその大部分を占め、古代5期に属する遺構であると判断する。

(2) 中世の遺構

ア 墓址

SK11

位置：南部

図版63、
第82図

検出：SX 1の北東部を切り構築される。覆土は褐色土で、プランにそって焼土化しており、明瞭に検出できた。136×70cmの長楕円形を呈し、深さ25cmを測る。西壁に突出部がある。壁はやや斜めに掘り込まれ、かなりの火熱をうけ焼土化している。底部中央は東西方向に幅40cmで掘り凹められ、南北壁下に10～20cm大の石が2～3個ずつ配されている。底部は焼土化していない。遺物の出土状況：南半分は焼土・炭化材が多く出土し、中央部に骨片が集中する。焼骨は鑑定の結果、頭蓋骨各部・仙骨・肋骨・鎖骨・上腕骨・大腿骨・指骨の各部位が認められ、一体分の人骨が残存していることが分かった。他に銭貨が3点出土しているが、火熱のために文字を判読できない。平面形、銭貨の出土から中世に属する火葬墓である。

イ 小ピット群

検出：北部SD1の北と南東部、南部東の調査区域境の3か所に小ピット群が集中する。そのあり方から古代に属するものと思われず、SK71からは中世の土師器皿が出土していることから、ピット群は中世に属する柱穴と考えたい。それぞれの柱穴は規則的に並んでいないが、何らかの建物があったと推測させる。

2 遺物

(1) 縄文時代の遺物

ア 土器

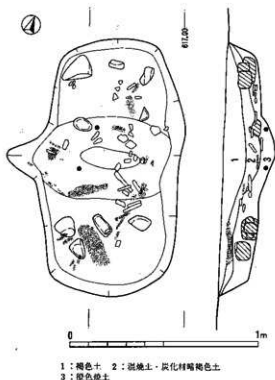
わずかに7点が確認されている。SB3から曾利V式土器の同一個体破片が5点、SB4から勝坂式土器？と唐草文系土器？が各1点出土している。いずれも遺構に直接伴うものではなく、混入したものである。

イ 石器

石鏃1点（チャート）、小剥離痕のある剥片1点（黒曜石）、打製石斧4点（砂岩・緑色岩）、破片3点（黒曜石）が、包含層および古代の遺構に混入して検出された。

(2) 古代の遺物

ア 土器



第82図 中二子遺跡中世火葬墓実測図

概観

中二子遺跡における古代土器は、2・3・4・5・6・7・11期に属する土器群である。2～7期の土器群は竪穴住居址・土坑・溝址などから出土し、11期は墓址と考えられる土坑から出土している。竪穴住居址から出土する土器は全体に量が少なく、それぞれの土器群の所属する時期を峻別するのに困難な遺構が多かった。

2期の土器群は、SB15・19・27などに認められるが、遺物が少量で中でも食器は非常に少ない。食器は土師器が非常に少なく、須恵器がその大部分を占めている。土師器杯は非ロクロ調整の杯Dである。須恵器は杯Aと杯B・杯蓋Bがある。杯Aは口径14cm以上と、口径12～13cmの2法量に分かれる可能性がある。杯BもIV（口径12～13.5cm・器高3～4cm）、II（口径14.5～17cm・器高4～5cm）の二者がある。また須恵器のなかで、美濃須衛窯産製品の占める割合が高いのもこの期の特徴である。煮炊具は厚手で器表をナデ調整で仕上げる土師器甕Aが主体で、他に外面ハケ調整の甕B・小型甕Aなどがある。

2期から3期・4期への変化は非常に漸移的である。即ち、須恵器杯Aの底部切り離し手法がヘラ切りから糸切りへと漸移的に移り変わる。また、ロクロ調整による黒色土器Aの出現も3～4期のなかにあるものと思われる。煮炊具でもこれらの時期を通してその主体は、土師器甕Aから甕Bへの交代が行なわれる。小型甕ではこの時期にロクロ調整の小型甕Dが出現する。5期はこれらの変化が完成する段階である。食器では須恵器が主体であることは変わりないが、美濃須衛窯産製品が消滅し、在地産須恵器を主体として黒色土器A杯Aと土師器杯C（いわゆる甲斐型杯）が少量これを補う構成をとる。黒色土器A杯Aでは大小の2法量、I（口径15～19cm・器高4.5～7cm）・II（口径12.5～13.5cm・器高3.5～4.5cm）が観察できる。3期はSB12・17、4期はSB18・20、5期はSB5・24の遺構に各期の土器群がある。

6期・7期は5期で確立した様相に変化が表われ始める段階である。食器における新たな器種である高台付の椀と皿Bが登場する。土器の種類でも食器では6・7期をとおして黒色土器Aが漸増し7期では遂に須恵器を凌駕するに至る。さらにこの動きと前後して灰釉陶器が移入され始める。6期はSB22、7期はSB4・6にそれぞれの期の土器群がある。

SK4に代表される11期の土師器と灰釉陶器の段階までにはかなりの空白がある。SK4の資料は墓坑の資料として高い一括性がある。

各遺構出土の土器

SB1（図版67、第17表）

須恵器杯Aは図示できないが、回転ヘラ切り・回転糸切りが共存し、個体数はヘラ切り1個体に対し糸切り5個体で糸切りが圧倒的に多い。煮炊具は土師器甕A・B・C、小型甕C・Dがあり甕Bは内面にハケ目を施すものが多い。4期の土器様相である。

SB3（図版67）

図示できる遺物は少なく、美濃須衛窯産の須恵器杯A1点のみ図示した。須恵器は、底部ヘラ切未調整である。美濃須衛窯産製品が多い。2期の土器様相である。

SB4（図版67、PL43、第18表）

杯Aの土器種類間の比率は、黒色土器A67%・須恵器33%で黒色土器Aが須恵器を上まわる。黒色土器Aは杯AII(6)口径15cm・器高6cm、と杯AI(1～5)口径13cm・器高3.5～4cmの2法量がある。須恵器杯A(7)は底径5.2cm・口径15.6cm・器高4.3cmで底部

食器							
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測回%		
土師器	杯C	2	40	13%	16		
	杯A	6	69				
	須恵器	杯BIV	5	230		87%	3・4
		杯蓋B	2	190			
	鉢A	1	5				
煮炊具							
土師器	甕A	2	290	33%	9		
	甕B	3	1300				
	小型甕C	2	220				
	小型甕D	2	140				
	不明		630				
貯蔵具							
須恵器	甕類	2	785	27%			

第17表 SB1出土土器構成表

回転糸切り、外傾が強く直線的に体部の開く器形である。土師器杯Dがあるが、小片で混入であろう。土師器甕Cは頸部が垂直に立ちあがり、口縁部で開くいわゆる「コ」字状口縁を呈する。7期の土器様相である。

SB5 (図版67)

食器は20個体中黒色土器Aが1個体で、残りすべてを須恵器が占める。地元産須恵器と美濃須衛窯産須恵器の両者があるが、美濃須衛窯産製品は食器全体の10%に過ぎない。須恵器杯A(1・2)は回転糸切りで切り離すが底径が6.5~7cmと大きく、体部の外傾は強くない。黒色土器A杯は図示し得ない。煮炊具は土師器甕B・C・小型甕Dの組み合わせとなる。貯蔵具の須恵器甕には甕D1個体が含まれている。5期の典型的様相である。

SB6 (図版67)

杯Aは黒色土器A・須恵器(1)がほぼ同量で、それに須恵器杯BIIIと蓋が加わる。須恵器杯Aは底径5.8cmと小さく体部の外傾も強い形態である。須恵器の甕と思われる小片もある。土師器の甕Aの把手があるが、2期の遺物の混入であろう。須恵器貯蔵具には甕Dがある。7期に属する遺物である。

SB7 (図版67)

杯は土師器杯C、黒色土器A杯A I(3)・杯A II、須恵器杯Aで構成され他はない。黒色土器Aと須恵器の個体数はほぼ同量である。須恵器杯A(2)は底径が小さく5.8cmで外傾は著しい。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの2者で構成されている。須恵器貯蔵形態はなかった。6~7期の土器群である。

SB8

遺物は少なく小片で図示できない。食器は在地産須恵器のみで杯Aと杯Bそれぞれ1片のみ、杯Aの底部切り離し技法は不明。煮炊具は土師器甕Aが甕Bを量的に大きく上まわる。貯蔵具は長頸壺Aの破片のみである。土師器の甕の状況より3期以前と考えられる。

SB9 (図版67)

食器は須恵器・黒色土器Aで構成され、杯Aでみれば須恵器が黒色土器を大きく上まわる。須恵器杯A(1・2)はすべて回転糸切りで、底径の大きな体部の外反の弱い箱形の形態である。須恵器杯B II(3)は美濃須衛窯産。灰釉陶器皿は混入と考えられる。煮炊具・貯蔵具は非常に少ない。食器構成より5期の土器様相と考えられる。

SB11 (図版67、第19表)

食器は須恵器のみ、杯A1点・杯B1点と杯蓋B1点である。1は口径15cm、底部回転ヘラ切りの大振りな杯Aで、2は底面中央が高台より下がる「出尻」型の杯B IIで体部は外反気味に開く。美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕AがBを大きく上まわり、小型甕Bもある。貯蔵具は地元産須恵器甕が主体で、横瓶もある。土師器甕・須恵器杯の形態からみて2期の土器様相である。

食器					
種類	器種	個体数	重量(g)	個体数比	実測図No
土師器	杯D	1	40	14%	6
	杯A I	1	90		
	杯A II	12	700		
黒色土器A	杯	1	35	50%	1~5
	杯A	6	255		
須恵器	杯B IV	4	125	12%	7
	杯蓋B	1	10		
	杯A	1	10		
灰釉陶器	瓶	1	5	14%	
煮炊具					
土師器	甕 B	2	95	3%	8
	甕 C	1	285		
	不明		270		
貯蔵具					
須恵器	長頸壺A	2	150	6%	
	甕 A	4	580		

第18表 SB4出土土器構成表

食器					
種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No
須恵器	杯A	1	125	3%	1
	杯B II	1	205		
	杯蓋B	1	10		
煮炊具	甕 A	8	1020	11%	2
	甕 B	2	140		
	小型甕B	1	30		
貯蔵具	甕 瓶	8	925	6%	
	横 瓶	1	230		

第19表 SB11出土土器構成表

SB12 (図版68, PL44, 第20表)

本遺跡中で遺物量の最も多い住居址である。特に土師器の甕の量が多く注意される。

食器は在地窯産・美濃須衛窯産(5・7~9)双方の須恵器によって構成され、土師器の類は皆無である。杯Aは个体数で回転へら切り7:回転糸切り2とへら切りが糸切りを上回る。へら切りの1~3の法量は口径13.8~15.7cmと大形で体部の外傾は弱い。糸切りの4も底径7.5cmを測る。杯Bは在地産・美濃須衛窯産とも器高4cmを越えるものではなく杯BIIと杯BIVがある。9は底部にへら記号を有する。煮炊具は土師器甕A・B・D、小型甕A・B・Dである。甕Aは図示していないが量が最も多く、底部に木業痕をもつものが多い。甕Bは体部外面に施されるハケの1単位が短い縦

方向の連続で、内面にもハケ調整を施すものが多い。12・13は叩き技法で調整した甕A・Dで、12は叩きの後クロ回転を利用したカキ目をほどこし、13は指撫で調整する。16は小型甕Dで底部に回転糸切り痕を残す。17・19は美濃須衛窯産、18は在地窯産の須恵器である。須恵器杯Aの構成より3期の土器様相と考えられる。

SB13

遺物は小片で図示できない。食器は地元窯産須恵器のみである。杯Aは切り離し方法不明。貯蔵具は美濃須衛窯産・地元窯産の両者があり、長頸壺Aがある。5期の土器である。

SB14 (図版69)

遺物は少ない。特に煮炊具が少なく、師器甕Cが1片あるのみである。食器は須恵器のみで杯BIV(2・3)と杯蓋B(1)を図示した。杯Bは高台の内側が高い形態であり、杯蓋Bは口縁端部をくちばし状に折り返す形態で、5期に属する土器群である。

SB15 (図版69, PL43)

土器全体のなかで須恵器の占める割合が非常に高く、中でも美濃須衛窯産製品の割合が高い。美濃須衛窯産製品は食器25個体中12個体、貯蔵具9個体中7個体で在地産須恵器の量を上回る。図示した須恵器のうち6・7のみが在地産、他は美濃須衛窯産と考えられる。杯Aは底部にすべて回転へら切りによる切り離し痕をもつ。杯Bは2法量、II(8・9)とIV(7)である。杯蓋Bも大小の2者がある。黒色土器A杯AII(1)は混入であろう。10は小型甕D、カマドから出土している。2期の土器様相であるが、小型甕は新しい様相を示す。

SB16 (図版69)

遺物の量は少ない。食器は須恵器のみ。底部へら切りの杯A(1)と杯BIII(2)が1点のみ。煮炊具は土師器甕Aが甕Bの量を上回る。須恵器杯BIIIの存在より3~4期の土器様相と考えたい。

SB17 (図版69, PL43)

須恵器杯Aは回転へら切り(3・4)と回転糸切り(2)が共存する。へら切り6個体に糸切り2個体の比である。3・4は口径14~14.8cmと杯Aのなかでは大形である。杯BIV(6・7)は美濃須衛窯産。8の小型甕Bは底面にまでハケ目を施す。9の鉢Aは灰白色・焼成軟質の須恵器である。須恵器杯Aのへら切りと糸切りの共存の割合は3期の様相を示している。

食器				
種類	器種	個体数	重量	実測個数
須恵器	杯A	9	725	24 24 100% 45% 7%
	杯BII	2	335	
	杯BIV	6	300	
	杯蓋B	4	139	
	鉢A	3	960	
煮炊具				
土師器	甕A	9	5500	22 42%
	甕B	8	2500	
	甕D	2	3500	
	小型甕A	1	160	
	小型甕B	1	140	
	小型甕D	1	240	
貯蔵具				
須恵器	甕A	4	1000	7 13%
	甕C	3	1640	

第20表 SB12出土土器構成表

SB18

遺物は小片で図示できない。須恵器杯Aは切り離し技法不明。煮炊具は土師器甕Aを甕Bがうわまわる。3期～4期の様相と考えられる。

SB19 (図版69・70、PL45、第21表)

食器は須恵器がほとんどで土師器杯Dが1点ある。土師器杯D(4)は非クロロの調整で体部外面下半と底部を手持ちへら削りし、内面は全面をへら磨きする。須恵器杯Aはすべてへら切りで口径11.3～12.5cm(2・3)と口径17cm(1)の大小がある。5は美濃須衛窯産である。煮炊具は土師器甕A(8～10)小型甕A(11・12)が多く、口縁が強く外反する小型甕C(14)もある。7は甕Gで、体部ハケ調整、胎土は精良で堅緻な焼きしまりである。土器は2期の様相を示す。

SB20 (図版70、PL45、第22表)

食器は須恵器のみで構成される。杯Aは回転へら切り1個体に糸切り6個体の割合である。杯BはIII(7)とIV(6)がある。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Bで、甕B(9)は体部内外面を縦方向のハケ目調整の後、底面外周と底部付近に手持ちへら削りを行ない、胴部上半には横方向のハケ撫でを施す。ハケ目の1単位は比較的短く切れている。小型甕B(8)も甕Bと調整方法が共通しており、体部外面を横方向のハケ目調整の後、体部下半から底部にかけて手持ちへら削りを行なう。土器は4期の様相を示す。

SB22 (図版70、第23表)

食器は黒色土器Aと須恵器・土師器杯Cで構成され、中でも須恵器杯Aが多い。須恵器杯A(1～3)

は底部回転へら切りで底径が6.2～4.7cmと小さく、器壁は薄くクロロ目が顕著で体部の外傾が強い形態である。4の須恵器短頸壺は非常に堅緻な胎土、褐色を呈する色調より在地産ではないと思われる。須恵器杯Aの形態的特徴は6期のものである。

SB23 (図版70)

全体に遺物は少ない。この中では、煮炊具が多く食器・貯蔵具は少ない。須恵器杯Aはすべて回転へら切りである。2期の土器群である。

SB24 (図版71、PL46)

食器は黒色土器A・須恵器・土師器で構成される典型的5期の様相である。1は土師器杯Cで、体部外面手持ちへら削り、内面はクロロナア、底面には糸切り痕が残る。須恵器杯Aはすべて回転糸切りで体部の外傾は弱い。黒色土器A杯(2)は器高4.7cmと深い。須恵器杯Bは器高の高い杯BIII1点(6)とIV1点(5)である。煮炊具も土師器甕B・甕C・小型甕Dの三者で構成され、甕B(7・8)は口縁が強く短く外反する5期の特徴を示している。

食器

種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No
土師器	杯D	1	60	10%	4
	杯A	6	155		
須恵器	杯BIV	2	55	37%	5・6
	杯B	2	75		

煮炊具

土師器	甕A	8	5500	56%	8～10
	甕B	4	1300		
	甕G	1	1030		
	小型甕A	3	940		
	小型甕C	1	350		14

貯蔵具

須恵器	甕類	2	630	27%	
-----	----	---	-----	-----	--

第21表 SB19出土土器構成表

食器

種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No
須恵器	杯A	7	358	50%	1～4
	杯BIII	1	135		
	IV	1	100		
	杯B	1	160		

煮炊具

土師器	甕B	5	1266	35%	9
	小型甕B	2	406		

貯蔵具

須恵器	甕類	3	50	315%	
-----	----	---	----	------	--

第22表 SB20出土土器構成表

食器

種類	器種	個体数	重量	個体数比	実測図No
土師器	杯C	1	30	10%	10
黒色土器A	杯AII	2	55		
須恵器	杯A	7	390		

煮炊具

土師器	甕A	2	158	40%	8
	甕B	5	800		
	甕C	1	372		

貯蔵具

須恵器	短頸壺A	1	25	2%	4
	甕類	1	10		

第23表 SB22出土土器構成表

SB25 (図版71)

須恵器杯Aはすべて底部回転ヘラ切りで、口径13.3cm(1)と15.5cm(2)の大小がある。1は底部をヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削りをする。煮炊具は土師器甕B(4)・甕G(5)・小型甕B(3)があり、甕Gは厚手では内面に輪積みの跡が残る。小型甕Bは胴部下半を横方向のハケで調整する。2～3期の様相である。

SB26

遺物少なく、土器様相をあきらかにし得ない。時期不明。

SB27 (図版71)

食器は須恵器1点のみ(1)、杯BⅡの底部破片である。底径が大きく高台は低く断面三角形で外に開く形態をとる。底面は高台より下に突き出す。色調は赤褐色を呈する。煮炊具は、土師器甕Aと甕B・甕G(3)があり、甕Gが多い。2期の土器である。

SB28 (図版71, PL46)

遺物は少ない。食器は黒色土器Aと須恵器で、黒色土器Aは杯AⅡの糸切り未調整。須恵器杯Aは2点あるが1は外傾が強い。他の1点は美濃須衛窯産である。3は須恵器鉢Bで口縁部を強く内側に湾曲させている。胴下半部は厚手で回転ヘラ削りを行なう。貯蔵具には図示した須恵器長頸壺A(4)の他に須恵器甕Dがある。5期の土器である。

SB29 (図版72)

食器は土師器と須恵器で構成される。1の土師器杯Dは非クロク調整で、内面をハケ撫でたもので、底部を手持ちヘラ削りする。須恵器杯Aは全て回転ヘラ切り、図示した2は口径12.4cmで厚手である。杯BⅡ(4)は口径15.7cmで体部の外傾が大きい。煮炊具は土師器甕Aが多く甕Bを凌駕する。土師器甕Aは体部を削りっぱなしにしたものが多い。(8)貯蔵具は在地産須恵器と美濃須衛窯産の両者があり、在地では長頸壺Aと甕。美濃須衛窯産の長頸壺と壺0がある。2期に属する。

SK4 (図版72, PL46)

出土遺物はすべて図示できた。土師器杯AⅡ(1～3)は口径10～10.7cm、器高3.2～3.6cmの1法量のみで、1・2は体部が直線的に伸び、3はやや体部が張る形態である。椀(4)は体部が直線的にのびる。小壺(5)は底部回転糸切り。灰釉陶器皿(6)は口径11.3cm・器高2.0cm、底部回転ヘラ削り、釉は漬け掛け。椀(7)は腰の強く張るもので高台は直線的に伸び、底部ヘラ削りの後体部最下部まで釉を漬け掛ける。皿・椀ともに虎渓山1号窯式である。11期の土器様相を示す。

SK7 (図版72)

灰釉陶器椀1点のみの出土である。腰の強く張る形状で、高台も外方にやや開き気味、底面をヘラ削りする。釉は漬け掛け、虎渓山1号窯式である。11～12期の土器群に伴う。

SX1 (図版72)

食器は須恵器のみで、在地と美濃須衛窯産が相半ばする。1の杯Aは美濃須衛窯産で底部回転ヘラ切り、2も美濃須衛窯産、3は内外面をハケ調整する土師器小型甕Bで底部に木葉痕が残る。2期の土器群である。

SX3 (図版72)

図示できる遺物は1点のみであるが、須恵器杯Aはすべて回転ヘラ切りである。土師器甕はAとBで、個体数比では同数であるが、重量比では甕Aが甕Bをうまわる。須恵器杯Aの形態より2期の所産と考えられる。

SX4 (図版72)

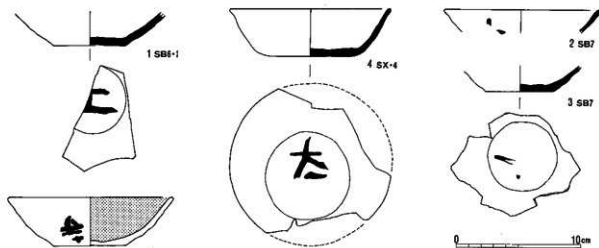
無台の杯は黒色土器A・須恵器・土師器杯Cがある。黒色土器A杯A I (3) は内面の磨きが丁寧で、底面に手持ちへう削りを施す。須恵器杯A (4・5) は回転糸切りで底径6.5cmを測り外反は弱い。須恵器杯Bは図示した2個体で、IV (7)・V (6) である。土師器杯C (1・2) は、1は内面に鋸歯状文が観察できるが、2はクロコ撫でのみで暗文は見えない。煮炊具は土師器甕B 1片のみである。杯Aの構成と須恵器杯Aの形態より5期の遺物である。食器・煮炊具などのあり方は竪穴住居址の土器と似た構成をなしている。

SK 3・12 (図版72)

SK 3からは須恵器杯A (1) が、SK12からは須恵器杯Aと杯蓋B (2)・土師器甕A (3) が出土した。

イ 墨書土器 (第83図)

図示した5点がある。1～4は住居址からの出土遺物であるが、5はトレンチから出土した遺物である。1～4はいずれも須恵器の杯の体部と底部に墨書されているが、文字が不鮮明であったり、欠損のために判読しづらい。1は「土」、または「上」が推定できる。4は「太」または「大」が考えられるが断定はできない。5は黒色土器Aの杯で、体部には「寺」と太い字で墨書されている。付近に寺の存在をうかがわせるとともに、信仰と関連した資料として、遺跡の性格を考えるうえでも注目される。



第83図 中二子遺跡出土墨書土器実測図

整理番号	出土遺構	図版 実測図番号	種類	器種	部位	書き方	内・外	文字	層位	遺存状態% 口縁 底部	備 考
1	SB 6	1	須恵器	杯A	底部	—	外	□	—	—	〔上、土か〕
2	SB 7	—	須恵器	杯A	体部	正位	外	□	床	—	
3	SB 7	—	須恵器	杯A	底部	—	外	□	覆土	—	
4	SX 4	—	須恵器	杯A	底部	—	外	太	床	—	〔大か〕
5	01T	—	黒色土器A	杯A	胴部	逆位	外	寺	—	3 28	

第24表 中二子遺跡 墨書土器一覧表

ウ 金属製品

(ア) 鉄製品 (図版73、PL47)

本遺跡から出土した古代の鉄製品は49点を数える。その内訳は、鎌1点、刀子9点、釘2点、鏃1点、

用途不明品36点(うち、棒状品26点、板状品6点)であった。また、鉄滓は18点出土し、総重量790gを計る。

鉄製品が多く出土した遺構としては、SB12の5点、SB1・15の3点、鉄滓に関してはSB12の8点、SB17の3点がある。また、遺構外出土の遺物も34点ある。しかし、中世以降の遺構が明確に捉えられていないため、遺構外のものも含め古代の所産として扱った。以下、器種ごとに記述を行う。

鎌 SB28から出土した1点のみである(1)。図上右端は着柄部折り返しの近くと考えられ、刃部と着柄部が直角に近くなる形態と考えられる。

刀子 SB1より1点、SB12より2点、SB22より1点、遺構外より3点出土しており、遺存度の良い4点を図示した(2~5)。2・3は基部の幅が、6~8mm前後で、比較的小形のものと考えられる。それに比べ、4などは基部幅が1cmを越えており、形態に大小の差があると推測される。なおSB1・12の刀子については、写真図版のみ掲載した(6はSB1、7・8はSB2)。

釘 遺構外より2点出土したうち1点を図示した(9)。頭部の残りは悪いが、折り釘である。

鏃 SB29の遺構検出面より出土した1点がある(10)。身幅があり、逆刺が深く入る形態を呈している。

用途不明品 棒状品のうち、断面形がほぼ正方形になるI類は14点あり、SB15より3点、SB12より2点、遺構外より9点出土した。なかでも比較的残りが良く、遺構から出土した4点を図示した(11~14)。12などは銼基部の可能性がある。断面円形のII類は、遺構外から4点出土した。断面長方形のIII類はSB20から1点(15)、遺構外から2点出土した。他に、針状の極細のもの2点と、錆化が著しく断面形が判別できなかったものが3点、遺構外より出土している。

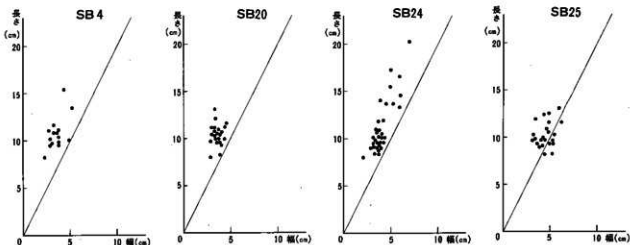
板状品はSB7より1点、他の5点は遺構外より出土した。すべて破片のため確かな形状は不明である。厚さは5mm前後が多いが、なかには1cmを越えるものもある。6点とも鍛造品である。

その他の用途不明品として、16は厚さ3mmほどの薄い鉄板を曲げたものである。17は、不整形円鉄板に長方形の孔が開けられている。鉄銹の可能性もあるが、類例が少なく評価には慎重を期したい(註)。

エ 石製品(図版73、PL47・48)

本遺跡から出土した古代の石製品は、106点を数えるが、その多くは石錘であった(98点)。以下、器種ごとに記述を進める。

砥石 5点出土し、遺構外出土の小破片1点を除き図示した(1~4)。粒子の粗い砂岩製のI類(1)と凝灰岩を用いたやや粒子の細かいII類(2~4)に大別される。作業面はすべて4面である。1・3・4は下



第84図 中子遺跡出土石錘長幅比グラフ

(註) 龜田 博氏の調査によれば、宮城県と埼玉県でそれぞれ1点ずつ出土しているのみである(亀田 博 1983)。

半部を欠く折損品。2は上端を破損した後も使用されたと考えられ、破損面が擦れている。

軽石製品 SB17から出土。下端部を一部欠損、29gを計る。用途不明である。

石鈔 SK 6より巡方2点が出土した(6・7)。6は4.8cm×5.0cmで粘板岩製である。7は推定約5.0cm四方で粒状結晶質石灰岩製である。両者とも四隅に2孔を1対とする潜り穴をあけている。

石鏝 棒状を呈し、とくに加工の痕跡は認められないが、遺構内から一括して出土した礫を石鏝と認定した。おそらく編み物用の鏝と考えられる。5軒の竪穴住居址から出土しており、10点以上出土した4軒については長幅比を第85図に表わした。SB 4は15点で、最小40g、最大395g、平均143gを計る。SB20は22点で、最小66g、最大220g、平均145gを計る。SB24は33点で、最小36g、最大970g、平均268gを計る。SB25は23点で、最小78g、最大358g、平均212gを計る。SB14からは5点出土しているが、平均重量397gと大形の礫を利用している。この350gを越えるような大形の礫の一群は、SB24の一部に見られ(長幅比グラフ長さ15cm前後の一群)、石鏝のなかにも、長さ10cm前後、重量200g前後の標準タイプと、それよりひとまわり大きく重いタイプがあったと思われる。

(3) 中世以降の遺物

ア 土器・陶磁器(第85図1)

中世の遺物としては、図に掲げた土師器皿が1点SK71より確認されているだけである。底面は板状圧痕によってナデつけられ、体部外面は指オサエをしている。内面はヨコナデ痕が顕著に残る。硬質感のあるもので、本論編で分類した手捏ね成形のA2類に属す。

近世の遺物は50点出土した。いずれも包含層のI・II層出土で、発掘域全体に散らばる。小片のため図示できないが、磁器碗2点・皿2点・香炉1点・徳利2点、陶器碗12点・皿1点・燈明皿1点・播鉢2点・土瓶3点・蓋1点・甕と思われるもの2点・天目茶碗1点でほかは不明である。時期的には天目茶碗が17世紀に属すと考えられるほかは、18世紀後半から19世紀の所産となる。

そのほか、明らかに明治時代のものとして磁器碗8点・皿2点が出土している。



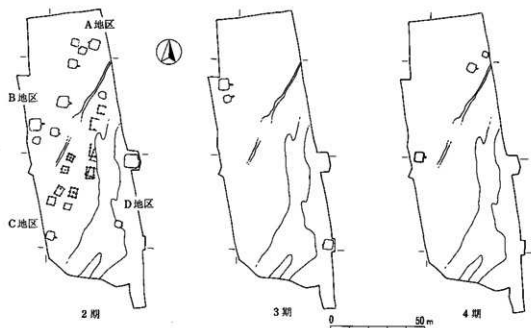
第85図 中二子遺跡出土
中世土器実測図

第4節 調査の成果と課題

中二子遺跡からは、古代2期から11期に属する遺構・遺物が主として検出され、縄文時代・中世・近世以降の遺物と中世遺構がわずかにみられた。ここでは、本遺跡の中心となる古代遺構について、前節までの事実報告をまとめるかたちで述べていくこととする。

1 竪穴住居址の推移

中二子遺跡に人々の生活の跡が最初にしるされるのは、2期になってからである。2期に属する遺構には、竪穴住居址・掘立柱建物址・溝址等があり、竪穴住居址群は、調査区を北東方向から南西方向に走る溝址によって南部と北部に2分され、北部はさらに北東部(A地区)と南西部(B地区)に分かれ、南部は西(C地区)と東(D地区)に分かれ、調査区を四分する形で営まれている。それぞれの場所は2期だけでなく、各期を通して竪穴住居址が構築され続けていく。それに対し掘立柱建物址は、溝址の南部に位置し、溝の方向に棟方向を合わせて構築され、2期ないし3期で消滅する。それ以後、掘立柱建物址が構築された場所には遺構は作られず、遺構空白地域として残されていく。中央部を斜めに走り、竪穴住居址や掘立



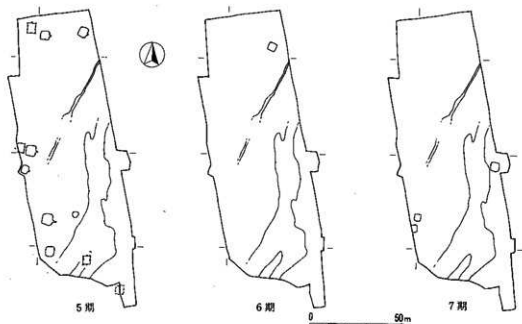
第86図 中二子遺跡時期別古代遺構

柱建物址を規制している溝址からは2～6期の遺物が主に出土しており、各時期を通して機能していたものと思われる。それは、2～7期まで続く各期の遺構が、本址と全く切り合うこと無く構築されていることから窺うことができ、生活用水など日々の生活と密接な関わりをもつ水路であったととらえたい。

2期の竪穴住居址は、主軸方向を東西方向に持ち、煙道を壁外に長く延ばす東カマドをもった大型住居址のSB5・29と、中型の住居址SB3・8・11・19・23・25・27とで構成される。住居址はさらに、東カマドをもつSB3・8・11・19・25のI群と、西カマドをもつSB23・27の2群に分けられる。

A地区にはSB23・25・27の3軒がある。SB23・27は西壁中央部にカマドをもち、主軸方向は2°ずれるだけであり、ともに4本の主柱穴をもち、壁外へ半円状に掘り込まれるカマド構造も類似する。出土した遺物の量はSB27の方が多く、特に煮炊具の出土重量には2倍以上の差がみられる。A地区南西端にあるSB25は、東壁南寄りに壁を方形に掘り込むカマドをもち、SB23・27とは別の1群としてとらえられる。1軒のみ存在するが、北に位置する時期不明のSB26と関連する可能性がその位置関係から考えられる。B地区には、SB3・19・29の3軒がある。大型のSB29、中型のSB19、やや小型となるSB3と規模の違う住居址で構成され、SB19の南にはSX3がある。SB19・29のカマドは、壁外に長く延びる煙道や、袖に礫を芯材として入れるなど構造に共通点が見られるが、主柱穴の有無や床面の構造からSB29のほうが充実しており、SB19は後出的であるといえる。C地区にはSB8が1軒のみ認められるが、南西端に竪穴住居址が集中することから、調査区外に同時期の住居址が存在している可能性が強い。D地区には大型のSB15と中型のSB11が位置する。SB15が自然流路の影響を受け埋没しているのに対し、SB11は自然流路を切って構築されていることから、同時存在していた可能性は少ない。壁外へ長く延びる煙道をもつ東カマドが一般的であり、壁を半円状に掘り込む西カマドと対象的である。4主柱穴、周溝を持つのは大型の住居址に限られる。

3期の竪穴住居址はB・Dの2地区に存続する。集落は調査区外の東西に広がりをもっていたことが予測されることから、A・C地区にも同時期住居址の存在を推定できる。B地区にあるSB16・17は主軸方向を約20°異にするが、カマド・主柱穴・周溝・西壁下に入り口部と思われる施設をもつなど、同じ内部施設をもつ。D地区のSB12は西カマドをもつ中型の住居址で、本遺跡中最も多くの遺物が出土している。



第87図 中二子遺跡時期別古代遺構

鉄製品も多く、D地区の中核的な住居であった可能性が高い。全ての住居址が主柱穴をもち、壁外に長く延びる煙道をもつカマドが存続する。

4期の竪穴住居址は、溝の北、A・B地区にのみ存在する。A地区のSB18・20はほぼ同じ主軸と内部施設をもつ一群で、B地区のSB1に比べると大型で掘り方も深く、カマド構造にも差が認められる。長い煙道のカマドは存続するが、この時期より柱穴を持たない住居址がすべてを占め、周溝等の内部施設も見られなくなることから、建物の構造に変化のあったことが窺える。

5期になると、A・C地区に各2軒、B・D地区に1軒ずつと、再び遺跡全面に住居址が展開し、大型のSB5と中型の住居址5軒で構成され、3・4期に比べ住居址数が増加する。煙道を壁外に長く延ばすカマドに加え、壁外へ半円形に掘り込まれる東カマドがあらわれる。

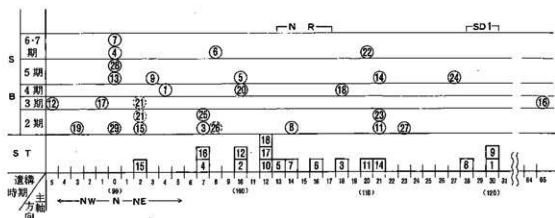
6期の住居址はA地区にSB22が位置しているだけであり、住居がこの時期減少したか移動のあったことが指摘できる。半円形に壁を掘り込むカマドをもっている。

7期になると、溝址南のC地区にSB6・7、D地区にSB4の計3軒が占地し、わずかではあるが住居址数が増加している。SB6・7とSX4から他時期に見られなかった墨書土器が初めて出土している。カマドの形態は、壁を半円形に掘り込む粘土カマドが引き継がれているが、SB4には石組カマドが北壁に構築されており、カマドの形態と位置を異にする一群が現われてきたことを示している。この時期以後本遺跡には古代の竪穴住居址は構築されず、集落は消滅する。

再び中二子遺跡に人々の生活の跡が見出されるのは11期になってからであり、数基の土葬墓が、遺跡の東に位置する自然流路沿いにのみ構築され、墓域として利用される。以後、中世も同じ状況であり、居住域としては全く利用されなくなっていく。

2 掘立柱建物址

中二子遺跡から検出された17棟の掘立柱建物址は、3棟を除くすべてがほぼ溝方向に建物の向きを合せ、溝址に沿って南側に並ぶ。このことは、掘立柱建物址群が溝に規制されていた結果であり、さほど時期を逸えず短期間に営まれたことを物語っている。また、掘立柱建物址の柱穴掘り方内の覆土が、黒褐色土に



第88図 中二子遺跡竪穴住居址・掘立柱建物址・主軸(直交軸)方向

黄褐色ないし暗褐色のブロックが混じる砂質土であることから同様なことがいえよう。遺構に伴い、時期を判断できる遺物は出土していないが、ST1～5・8・17の検出面や2～3の柱穴掘り方内から土師器甕A、美濃須衛窯産須恵器壺等の破片が出土していることから、2～3期に存在したものであることは間違いない。

溝址に沿って建てられた14棟には、総柱建物(ST1・4・5・6・7・8・14)と掘立柱建物(ST2・3・9・10・11・17・18)の両者があり、総柱建物群の中央部に位置する傾向をもち、ST7を除く6棟が切り合う。他に切り合う建物址にST2・3があり、ともに群の中央部に位置する。この中央部に位置するグループの北にST17・18、南にST7・9・10・11の2つのグループがあり、3群により構成されている。ST1・8とST6・14の切り合いから、ST1と6が新しく、ST8・14が古いグループとしてくられる。この4棟の柱穴掘り方は、新しいST6の方が大型であり、古いほうが小さい。このことを根拠として、ST2・3とST4・5の切り合いをみると、ST2・4、ST3・5に分けられ、ST8・14・3・5とST1・6・2・4の2グループに分けることができ、後者が建て替えられたグループである。建物址の規模・構造から、それぞれのグループは2棟の倉庫と2棟の掘立柱住居によって構成されていたものと考えられる。しかし、この2グループ内の建物址棟方向は一定ではなく、それぞれにずれがみられる。ST1・6間が12'と最も大きく違うが、ST2・4、8・14、3・5間は4～7'の間であまり差がないの比べ、倉庫のST1・6と住居であるST2・4、同じくST8・14とST3・5間の差は前者で21～24'、後者が10～15'とかなりのずれが見られる。同時期と判断される建物址の棟方向のずれは、時期や地形、集団規制の強弱等に左右されるものであろうが、どの程度までが許容範囲なのか今後の課題となろう。北に位置するST17・18は4'ずれるだけでほぼ同じ棟方向をもつ。その位置からも同時期の可能性が考えられる。また、この2棟とほぼ同じ棟方向をST3・5がもっており、ST8・14・3・5のグループと同じ時期に営まれていた可能性をもっている。このことは、ST17・18・3・5が流路の影響を受け、東側部分が破壊されていることからある程度証明されよう。

北・中央の2群からはそれぞれ同時期の遺物が検出されているが、南の4棟からは全く出土していないことから、南に位置するST7・9・10・11は別のグループであると考えられる。北・中央にある建物址は、3間×2間、2間×2間の形態に限られ、それぞれの規模もほぼ同じであるのに対し、南のそれは、北に廂をもつST9、最も大きな掘り方をもつST7、2間×2間で東に入り口部を思わせる柱穴をもつST10、倉庫であるST11と、規模・形態の全く違う建物址によって構成されていることも別のグループであった感を強くさせる。

ST2・3・5・17・18は東側を流れる流路により破壊されている。掘立柱建物址の属する時期と同じ

2～3期に、流路の影響を受けた竪穴住居址にはSB15とSB12がある。両者の位置関係から見るとSB15のほうがより近い位置にあり、その結びつきが強かったことを示していると思われる。溝址の南に位置する掘立柱建物址群はSB15が存在した時期か、それとあまり隔たらない時期に営まれていたものと考えたい。

第5節 小 結

中二子遺跡は、今回新たに発見された遺跡である。このことから、現水田下に埋もれ、中二子遺跡同様に我々の目にふれないままの遺跡も多数あることが推測される。そのような中で、中二子遺跡の発見は古代集落の解明に新しい資料を提供することになり、集落の分布、構造を知る上で重要な発見となった。

8世紀前半に、忽然とあらわれた中二子遺跡の古代集落は9世紀中頃その姿を消す。切り合いの少ない遺構からも一定期間に営まれたことが知れ、一本の溝に沿って構築された掘立柱建物址群と竪穴住居址群が当時の集落のあり方を伝えてくれる。今回発掘調査された遺跡からは、種々な集落のあり方が観察でき、本遺跡も含めそのような集落によって松本平南西部の沖積地が開発されていったものと思われる。しかし、その一方、当該期の遺跡には吉田川西遺跡・南栗遺跡等にみられるような、その地域内の中心的な集落であったと考えられる集落の存在もあり、それら集落と本遺跡のように一定期間に営まれた遺跡との結びつき等の問題を解決していく上で好資料となろう。

第4章 結 語

今回の発掘調査で、3遺跡から縄文時代の土器・石器、古代に属する遺構・遺物、中世の遺構・遺物、近世以降の遺物がそれぞれ発見された。このことは、この場所が人々の絶え間ない生産活動の場であったことを示しており、特に古代から中世にかけて最も盛んであった人々の営みを残してくれている。

各遺跡における成果は、それぞれの第3節で述べられている通りであるが、最後に時代別に成果をまとめ結語としたい。

1 縄文時代

3遺跡より、土器・石器の遺物が少量検出されているが、遺構は発見されなかった。時期的には縄文時代前期・中期・後期・晩期と各時期の土器がみられるが、中心となるのは中期であり、特に神戸遺跡からの出土数が多い。近接する、くまのかわ遺跡、牛の川遺跡では集落址が営まれており、これらを含め、周辺遺跡との関係から今後さらに詳しく究明していけば、山麓部と沖積地に営まれる縄文遺跡のあり方の違いや共通点が解明されていくものと思われる。今回の調査で得られた資料は、沖積地における縄文時代遺跡の様相を解明していく一助となろう。

2 古代

3遺跡から発見された遺構・遺物の中心となる時期である。この地が最初に居住域として利用されるのは2期になってからであり、中二子遺跡に竪穴住居址と掘立柱建物址、溝址で構成される集落が出現する。同じ時期に上二子遺跡でも竪穴住居址が営まれるが1軒のみであり、次の時期には存在せず不安定な様相を示しているのに対し、中二子遺跡では7期まで継続し消滅する。神戸遺跡では4期になり集落が営まれ、途中とぎれながら15期まで続く。3遺跡で多少の違いはあるが、3・6・9・10・12・14の各期には遺構数が減少するかとぎれ、反対に、2・4・5・8・13期に増加する傾向がつかめた。このことは他の遺跡においても同様な傾向を示すことが解明されつつあり、大きな流れのなかで各遺跡が動いていたことが知れる。そのなかにあって、中二子遺跡は、鎮川南部に位置し、5期から7期に大集落を形成する下神遺跡に先行して集落が形成され、この地を開発した遺跡として注目される。

個々の問題としては、集落内における小集団のあり方がある。本報告書では、松本市内分調査遺跡の古代土器分類基準を元に時期区分し、それをベースにして一部検討してきた。その結果、各時期の竪穴住居址は2～3軒を単位としていた様子をつかむことができた。さらに各遺跡でのあり方と比較検討し、集落の構造を解明していくのが今後の課題となる。また、中二子遺跡から検出された掘立柱建物址のあり方も当時の集落構造を知るうえで貴重な発見となった。十分な検討はできなかったが、竪穴住居址との併存関係や、同時存在する建物址の主軸方向の許容範囲も残された問題となった。その解明の作業も松本市内・豊科町内分遺跡の整理作業の中で継続されている。

3 中世

神戸遺跡から検出された中世遺構には、掘立柱建物址・溝址・柵址・井戸址・墓址・土坑・水田址等があり、中世遺構の報告例が少ない長野県の中で、各種の遺構を報告できた。それとともに、居住域・墓域・生産域のあり方もとらえられてきている。発掘例の少ない、中世水田址の検出は注目されよう。大型のアゼで区画され、この中に70㎡を少しかけるほどの小型水田が区画されている様子は、当時の農業生産形態を知るうえで貴重な資料を提示してきたといえる。

今回多量に検出された墓址も多く問題点を含んでいる。土葬墓、火葬墓に大きく分けられるが、各々、バラエティに富んだ形態をもち、その内容も多種・多様であることや、大きく墓址ととらえられる中が、さらに小さな群を構成していること等が報告できた。しかし、被葬者による墓址の差や集落址と墓域、村落における墓址のあり方等等々解明していかなければならない問題は大きい。

そのようななかにあつて中世獨立柱建物址は、中世1期と2期により差があることが明らかになってきており、本報告でもその事例を示すことができた。今後の積み重ねのなかでさらに詳しい分析が成されていく予定である。

中世に属する遺物の分析も多くの成果を納めている。特に内耳鍋の分類は現在まで余りななされていなかったが、今回さらに積み上げられた分類がなされた。神戸遺跡から出土した数多くの内耳鍋の分析によるところが大きいといえる。

参考文献一覧

- 小穴 喜一 1987 「土と水から歴史を探る」
 各務原市教育委員会 1984 「美濃須術古窯跡群資料調査報告書」
 亀田 博 1983 「袴帯と石帯」『考古学論叢』関西大学考古学研究室
 岐阜市教育委員会 1981 「老洞古窯跡群発掘調査報告書」
 斎藤 孝正 1981 「猿投・尾北・美濃窯における灰輪陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
 1988 「中世猿投窯の研究 一編年に関する一考察一」『名古屋大学文学部研究論集』C I 史学 34
 下総考古学研究会 1985 「特集 勝取式土器の研究」『下総考古学』8
 山口 昭二 1982 「美濃の灰輪陶器と緑輪陶器」『考古学ジャーナル』211
 1983 「美濃窯にける白瓷と山茶碗」『美濃陶磁歴史館報』II
 長野県教育委員会 1973 「百敷刈遺跡」『長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近—』1989 「吉田川西遺跡」
 仲野 泰裕 1987 「江戸時代中・後期の瀬戸窯—研究の現状と今後の視点—」『江戸遺跡情報連絡会会報』No10
 1988 「江戸時代中・後期の瀬戸窯—研究の現状と今後の視点—」『物質文化』50
 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食器」『信濃』III—39—4
 藤澤 良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号
 1984 「古瀬戸」概説『美濃陶磁歴史館報』III
 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民族資料館 研究紀要』V
 藤原宏志・杉山真二 1985 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析法による水田址の探査—」『考古学と自然科学』I
 藤原 宏志 1987 「プラント・オパール分析の現状と課題」『土壌学と考古学』博文社
 前川 要 1984 「猿投窯における灰輪陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要』III
 松本市教育委員会 1980 「松本市文化財調査報告 18 松本市笹賀牛の川遺跡」
 1981 「松本市文化財調査報告 21 松本市笹賀牛遺跡」
 1982 「松本市文化財調査報告 24 松本市笹賀くまのかわ遺跡」
 1984 「松本市文化財調査報告 31 松本市島内遺跡群」
 松本市・塩尻市・東筑摩郡土資料編纂会 1957 「松本市・塩尻市・東筑摩郡誌」第1・2巻
 松本盆地研グループ 1977 「松本盆地の第四紀地質」『地質学論集』14
 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4
 若尾 正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報

発掘調査及び執筆等の分担一覧 (五十音順)

1 発掘調査担当及び発掘調査記録の整理とまとめ

神戸遺跡 (59年度)	市沢英利	春日雅博	小林俊一				
	(60年度)	飯沼 潤	井口慶久	市沢英利	市村勝巳	岡村秀雄	河西克造 春日雅博
		近藤尚義	田川幸生	寺島俊郎	中野亮一	中村千尋	
上二子遺跡	井上城典	尾川秀吉	春日雅博	小林 上	斉藤正善	田中正治郎	中島経夫
		百瀬新治					
中二子遺跡	井上城典	尾川秀吉	春日雅博	小林 上	斉藤正善	田中正治郎	中島経夫
		百瀬新治					

2 執筆担当者

青沼博之	第1章	第1節、第3節1、第4節、第5節
	第2章	第1節、第3節1、2(2)ア、第4節
	第3章	第1節、第3節1、第4節、第5節
	第4章	
市村勝巳	第1章	第3節2(2)イ
	第3章	第3節2(2)イ
大竹憲昭	第1章	第3節2(1)イ、(2)ウ・エ、(3)イ～エ、(5)
	第2章	第3節2(1)イ
	第3章	第3節2(1)イ、(2)ウ・エ
小口 徹	第1章～第3章	第2節
	第1章	第3節1(2)カ
小平和夫	第1章	第3節2(2)ア
	第3章	第3節2(2)ア
野村一寿	第1章	第3節2(1)ア、(3)ア、(4)ア
	第2章	第3節2-(1)ア、(3)
	第3章	第3節2(1)ア、(3)、(4)

3 その他

遺物実測	石上周蔵	伊藤隆之	伊藤友久	大竹憲昭	太田典孝	岡沢秀紀	小平和夫
	竹内 稔	野村一寿	福島厚利	松田青樹	和田文人		
遺物写真撮影・現像	・焼き付け	・遺構写真焼き付け			岡沢秀紀		
土層総括	小口 徹						
石質鑑定	大竹憲昭	小口 徹					
金属製品保存処理	大竹憲昭	小林 上	小松 望				
編集	青沼博之	宮沢恒之					

付表1 神戸遺跡整穴住居址一覧表(古代)

() =推定値、- =なし

No.	位置	平面形状	主軸方向	規模				方 向						建 設		調査年度								
				規模の類型	主軸×寛軸 m	床面積 ㎡	深さ m	床面高 m	位置	構築	壁への傾斜		傾道		傾道口の深さ m		その他	柱間 間隔 m	その他					
											形	大きさ	向き	長さ m						傾斜				
01	東部	隅方	N88° E	中1	4.60×3.90	15.40	0.30	627.90	東壁中央	石組	-	-	N70° E	1.00	10°	0.15	-	-	両側の 灰壁	15	5			
02	東部	隅方	N85° E	中2	4.80×4.65	22.35	0.40	627.75	東壁中央	石組	-	-	N85° E	-	-	-	-	-	大層敷込みあり 床中央部	8	5			
03	東部	隅方	N74° E	中1	3.25×3.10	10.08	0.30	628.90	東壁中央 南	石組	-	-	N74° E	-	-	-	-	-	壁中央部	8	3			
04	東部	隅方	N77° E	中1	3.30×3.05	10.07	0.40	628.50	北壁中央	石組	-	-	N53° E	-	-	-	-	-	カマド方向主軸とずれる	-	-	壁中央部	13	4
05	東部	隅方	N85° E	中1	3.90×3.75	14.43	0.35	628.90	東壁中央 南	不明	-	-	N85° E	-	-	-	-	-	床上5cm焼土 4ヶ所	4	4			
07	東部	隅方	N58° E	不明	不明	不明	(0.5 0)	629.10	東壁北隅	石組	-	-	N58° E	-	-	-	-	-	カマド中にΦ10-20mm隙は いる	-	-	13	2	
09	東部	隅方	N90° E	中1	3.60×3.80	13.68	0.55	628.50	東壁中央 南	土組	-	-	N90° E	-	-	-	-	-	南にΦ60mmのビット(遺物 やや多くはいる)	-	-	壁中央部	6	4
10	東部	隅方	N85° E	中1	3.50×3.70	12.95	0.50	629.30	東壁中央	石組	-	-	N95° E	0.70	15°	0.27	-	-	陥家わずか	-	-	6	4	
11	東部	隅方	N90° E	小中	4.20×(1.8)	(20.50)	0.10	629.10	東壁南隅	石組	-	-	N90° E	-	-	-	-	-	-	8	3			
12	東部	隅方	N95° W	小中	4.65×不明	不明	0.10	629.50	不明	不明	-	-	N95° E	-	-	-	-	-	-	13	3			
13	東部	隅方	N92° E	中2	4.45×(1.8)	(21.80)	0.10	629.10	北東壁隅	石組	-	-	N69° E	-	-	-	-	-	うすい組床 床北半室	-	-	13	3	
14	東部	隅方	N99° W	中2	4.40×4.50	19.80	不明	不明	西壁南隅	石組	-	-	N99° E	-	-	-	-	-	部分の粘土	-	-	12	2	
15	東部	隅方	N91° E	不明	1×?	不明	不明	不明	東壁中央 中央南	石組	-	-	N91° E	-	-	-	-	-	-	-	-	8	3	
16	東部	隅方	N89° E	不明	不明×4.20	不明	0.20	629.10	東壁中央 中央南	石組	-	-	N89° E	-	-	-	-	-	-	床一部欠	-	-	11	2
17	東部	?	N?° E	不明	不明	不明	0.45	628.85	不明	不明	-	-	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	8	2	
18	東部	長2	N60° E	中1	3.45×4.85	16.73	0.30	629.00	東壁南隅	石組	-	-	N60° E	-	-	-	-	-	カマド石敷瓦	-	-	壁中央部	4	3
19	東部	隅方	N89° E	不明	不明×4.40	不明	0.30	627.50	東壁	石組	-	-	N89° E	-	-	-	-	-	-	-	-	8	3	
20	東部	隅方	N57° E	中II	(4.7)×4.45	(21.80)	0.40	628.70	東壁中央	石組	-	-	N57° E	-	-	-	-	-	灰層?	-	-	4	3	
21	東部	?	N?° E	不明	不明	不明	不明	不明	西壁北隅	石組	-	-	不明	-	-	-	-	-	カマド部分のみ	-	-	11	3	
22	中部	隅方	N89° W	中1	3.70×3.80	14.16	0.40	624.70	西壁中央	石組	-	-	N89° E	0.90	水平	0.52	-	-	東部分のぞきテ ラスまわる P1-2部	11	4	4	11	
23	中部	隅方	N84° E	大1	6.50×6.55	42.38	0.60	624.45	東壁中央	石組	丸	1/5	N84° E	1.50	15°	0.40	-	-	礎石大部分ぬかれる	-	-	階壁にテラス P1-6	4	11
24	中部	長2	N95° W	中1	3.05×4.10	12.51	0.50	624.50	西壁中央	石組	-	-	N95° W	0.50	15°	0.36	-	-	西面壁隅テラス 組床	-	-	4	11	
25	中部	隅方	N88° W	中2	(4.45)×(1.8)	(20.40)	0.50	624.50	西壁中央	石組	-	-	N88° E	0.50	15°	0.46	-	-	60cm北面に壁道もう1本	11	4	2,52 3,12	4	12

付表2 神戸遺跡掘立柱建物一覧表

古代

No.	位置	棟方向	規 模			柱 間 間 隔		柱穴掘り方			時期	備 考 付属施設・遺物等	図版 No.
			桁行×梁行	桁行×梁行	面積	桁行	梁行	形	規模				
									径	深さ			
1	南部	N 5° E	3間×2間	600cm×405cm	24,30㎡	235~185cm	220~190cm	丸	40~45cm	40cm	8期か	柱底丸10~12cm P 8 内より土脚壁 SK723にきられる	6
2	南部	N 10° E	3間×不明	562cm×不明cm	不明	200~162cm	195~184cm	丸	40~42cm	30cm	8期か	柱底丸10~12cm	6
3	南部	N 82° E	2間×1間	432cm×205cm	8,86㎡	230~205cm	225~185cm	丸	35~44cm	38cm	8期か	柱底丸14~16cm	6
4	南部	N 3° E	3間×不明	500cm×不明	不明	不明	196~145cm	丸	38~42cm	50cm	8期か	柱底丸16~18cm P 2 内礎石あり	6

中世

No.	位置	棟方向	規 模			柱 間 間 隔		柱穴掘り方			時期	備 考 付属施設・遺物等	図版 No.
			桁行×梁行	桁行×梁行	面積	桁行	梁行	形	規模				
									径	深さ			
5	中部	N 6° E	(6)×(2)間	720cm×不明	不明	不明	175~160cm	丸	30~46cm	45cm	中世2	柱底方10~12cm SD 4	23
6	中部	N 6° W	4間×2間	820cm×438cm	35,92㎡	245~195cm	210~190cm	丸	30~40cm	68cm	中世2	総柱建跡址 柱底方14~16cm P 2・8・9 内に 小礎	14
7	中部	N 10° E	4間×3間	762cm×510cm	38,86㎡	210~140cm	230~148cm	方	18~45cm	45cm	中世1	柱底方12~18cm 土礎付属	27
8	中部	N 7° W	2間×2間	360cm×294cm	10,85㎡	(284~290) cm	205~160cm	方	20~30cm	40cm	中世1	柱底方12~14cm SK291・293・509 ・631	27
9	中部	N 92° E	3間×2間	698cm×393cm	27,43㎡	230~160cm	250~208cm	方	18~40cm	25cm	中世1	総柱建跡址 柱底方10~14cm	27
10	中部	N 2° W	3間×3間	500cm×520cm	26,00㎡	196~180cm	190~130cm	丸	22~35cm	45cm	中世1	総柱建跡址 柱底方12~14cm	25
11	中部	N 2° W	4間×2間	823cm×430cm	45,34㎡	250~180cm	240~185cm	方	15~30cm	72cm	中世2	柱底方12~14cm 下 層あり, SK488・49 1・493・503をきる P 8 内に内瓦跡	24
12	中部	N 1° W	2間×2間	360cm×344cm	12,28㎡	(344~340) cm	190~160cm	方	18~28cm	50cm	中世2	柱底丸 8~10cm SK495・497・498	24
13	中部	N 1° E	7間×2間	1288cm×460cm	61,82㎡	290~230cm	190~175cm	方	34~55cm	65cm	中世2	柱底方10~14cm	23
14	中部	N 3° E	6間×2間	1120cm×470cm	52,64㎡	238~235cm	195~183cm	方	32~45cm	75cm	中世2	柱底丸10~16cm SK402・482・680	23
15	中部	N 1° E	6間×2間	1108cm×475cm	52,63㎡	475~430cm	210~165cm	方	30~48cm	55cm	中世2	柱底丸 8~14cm SK402・403・482・ 486	23

付表4 中・近世土器・陶磁器出土遺構一覧表

遺 構	中・近世出土遺物 (所属時期、掲載図版番号、() 内は破片数)	備 考
SB2	近世陶器碗18C後～(1)	古代の遺構
4	近世陶器碗18C後～(1)	古代の遺構
23	内耳鍋(100) 図版44-52、大窯天目茶碗16C(1)、土師器皿(1)	古代の遺構
ST4	古瀬戸不明15-16C?(1)	古代の遺構
11	内耳鍋II B類(1) 図版44-53	
SK32	内耳鍋I・II B類(6)、古瀬戸底即目皿(1) 図版43-18	
34	内耳鍋II A類(2か)(35)	SK36内耳II A接合
36	内耳鍋II A・B類(40) 図版44-54、大窯天目茶碗16C(1)・皿(1)	SK34内耳II A接合
38	内耳鍋(1)	
41	内耳鍋II A類?(15)、大窯皿16C?(3)	
43	内耳鍋(9)、不明(1)	
44	内耳鍋(16) 図版44-55	
46	内耳鍋II C類(12)、大窯天目茶碗15米～16C初(1)	SK117と同一固体か?
47	内耳鍋(2)	
53	内耳鍋(8)	
60	内耳鍋II C類?(25)	
62	内耳鍋II BかII C類(25)、青磁碗H類(1) 図版43-41、近世碗(1)	
63	内耳鍋II C類(19)、古瀬戸天目茶碗(1) 図版43-2、即皿(1) 図版43-19	天目SK180と接合
64	内耳鍋(6)	
65	内耳鍋(3)	
67	内耳鍋(3)	
68	内耳鍋II B類(12) 図版44-56	
69	内耳鍋II C類(64) 図版44-57	
70	内耳鍋(10)	
71	内耳鍋(11)	
72	内耳鍋(24)	
73	内耳鍋(1)	
77	内耳鍋I類?(9)	
78	内耳鍋(7)	
82	内耳鍋(2)	
84	内耳鍋(15)	
87	内耳鍋(1)	
88	内耳鍋II B類(1か不明)(36) 図版44-58・59・60	SK107と接合
91	内耳鍋(1)	
93	内耳鍋(4) 図版44-61	
98	古瀬戸緑釉皿15C(1) 図版43-7	
103	内耳鍋(1)	
106	内耳鍋(5)	
107	内耳鍋II B類(12) 図版44-60	SK88と接合
109	内耳鍋II A類?(3)	
110	内耳鍋(2)	
113	内耳鍋(2)	
114	内耳鍋II B類(20) 図版44-62、63、大窯天目茶碗15米～16C初(1)	
117	内耳鍋II類?(80) 図版44-64、古瀬戸腰折皿15C末(1) 図版43-15、大窯天目茶碗・丸碗15米～16C初(各1)	大窯天目SK46と同一固体か?

遺 構	中・近世出土遺物 (所属時期、掲載図版番号、() 内は破片数)	備 考
SK118	内耳鍋II B類? (39)、大塚天目茶碗15米~16C初 (2)	
119	内耳鍋 (14)	
120	内耳鍋II類 (9)	
121	内耳鍋II C類 (32)	
126	内耳鍋 (7)	
128	内耳鍋 (4)	
131	内耳鍋 (2)	
134	内耳鍋 (1)	
136	内耳鍋 (25)、近世御器丸碗18C~ (1)	
139	内耳鍋 (4)	
142	内耳鍋 (7)	
143	内耳鍋 (1)	
146	内耳鍋 (20)	
147	内耳鍋 (1)	
149	内耳鍋II B類 (4)	
150	内耳鍋 (7)	
151	内耳鍋I類? (14)	
153	内耳鍋I類? (19)	
156	内耳鍋 (3) 図版44-65	
157	内耳鍋 (7)、古瀬戸腰折皿15C末 (2) 図版43-16、大塚碗15米~16C初(1) 図版43-37	
156・157	内耳鍋II B類? (41) 図版44-66、大塚天目茶碗15米~16C初 (1)	
160	内耳鍋I類 (6)	
161	内耳鍋II B類 (2) 図版45-67	
162	内耳鍋I・II B類 (22) 図版45-68・69、大塚天目茶碗15米~16C初 (1)	
164-68	内耳鍋II C類? (7)、大塚碗? 15米~16C初 (1)	
171	内耳鍋 (2)	
177	古瀬戸腰折皿15C末 (1) 図版43-17	
180	内耳鍋II C・II B・I類? (380) 図版45-70~81、青磁碗I類(3) 図版43-43・碗K類(1) 図版43-20・壺(2) 15C後、古瀬戸卍皿14C? (1) 図版43-20・天目茶碗15C中~末(4) 図版43-1・2・香炉15C末(1) 図版43-32・壺15C後(2)、大塚茶入(1)	古瀬戸天目茶碗SK63と接合、内耳片土製円板1
189	須恵質控鉢 (1)	
191	古瀬戸折縁深皿14C (2)・卍皿15C (2) 図版43-21・22・23、大塚天目茶碗15米~16C初 (1)	
192	古瀬戸折縁深皿14C (2)・卍皿15C (2) 図版43-24、控鉢 (2)、不明 (1)	
193	内耳鍋 (1)	
194	古瀬戸腰折皿? 15C末 (1)・縁輪皿 (1) 図版43-8、白磁口禿牙皿13後~14C前 (1) 図版43-50	
197	大塚丸皿15米~16C初 (1) 図版43-40	
198	古瀬戸折縁深皿15C (1)	
200	控鉢 (1)	
201	古瀬戸水注14C前 (1) 図版43-33、白磁四耳壺12~13C (1) 図版43-51	白磁SK389と接合
202	古瀬戸鉢15C (1)、控鉢 (1)	
203	古瀬戸卍皿14C (1)	
204	控鉢 (1)、常滑系壺 (7)	
205	古瀬戸折縁輪皿15C (1) 図版43-9	
207	古瀬戸折縁輪皿15C (1) 図版43-10	
215	内耳鍋 (1)	

遺 構	中・近世出土遺物 (所属時期、掲載図版番号、() 内は破片数)	備 考
SK220	内耳鉢 (2)	
221	土師器皿ⅡA類 (5) 図版46-92	
234	内耳鉢 (3)	
251	大甕皿 (1)、不明 (1)	
274	内耳鉢Ⅰ類 (25) 図版45-82	
278	古瀬戸四耳壺13C前 (1)	
287	青磁碗F類 (1)、控鉢Ⅳ類 (1)	
333	須恵質控鉢 (1) 図版46-90	
338	控鉢Ⅵ類 (1)	
339	内耳鉢Ⅰ類 (21) 古瀬戸天目茶碗15C (1) 図版43-3・折縁深皿15C (1) 図版43-30	
340	内耳鉢 (1)、常滑系甕 (1)	
359	内耳鉢 (3)	
361	青磁碗H類 (1) 図版43-44	
389	白磁四耳壺12~13C (11) 図版43-51	SK201と接合
390	古瀬戸折縁深皿14C前 (1) 図版43-31	
397	控鉢 (1)	
410	青磁碗F類 (1) 図版43-45	
414	内耳鉢 (3)	
416	内耳鉢Ⅰ類 (4) 図版45-83、控鉢 (1)	
441	不明 (1)	
445	内耳鉢 (1)	
452	内耳鉢 (9)	
463	大甕丸皿 (1)	
468	内耳鉢 (8)	
469	内耳鉢 (6)	
487	常滑系大甕V類 (120) 図版46-94	
492	古瀬戸印皿14C前 (1)	
500	控鉢 (1)	
526	内耳鉢Ⅰ類? (30)	
543	内耳鉢 (1)	
641	内耳鉢 (7)	
647	内耳鉢 (1)	
SL1-1	内耳鉢 (2)、古瀬戸鉢15C (1)	
-2	内耳鉢 (24)、古瀬戸花瓶15C (1)、常滑系甕 (1)	
-3	近世陶器輪辻付皿17C~ (1)・碗18C~ (1)、磁器碗? (1)	
-4	内耳鉢 (19)、古瀬戸折縁深皿 (1) 図版43-29・鉢15C (2) 常滑系甕 (1)、明治期磁器急須? 19C後~	
SL検出	内耳鉢 (13)、土師器皿ⅡB2類 (1) 図版46-93、近世碗19C~ (5)・鉢? 18C後~ (1)	

付表5 中二子遺跡整穴住居址一覧表(古代)

() = 推定値、- = なし

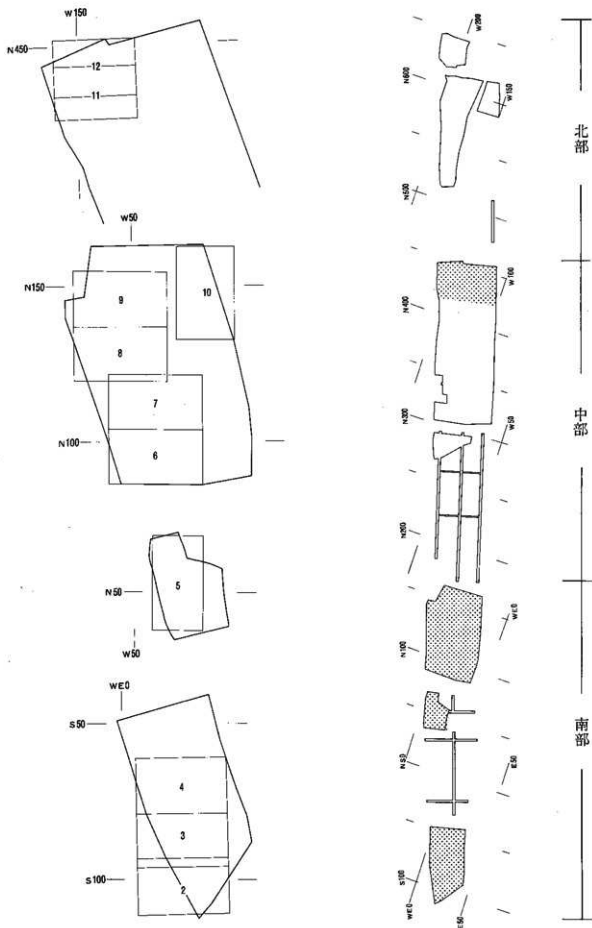
No.	位置	方位	主軸方向	集				竪				ワ						築造		時期	位置				
				規模の形状	土輪×重文輪 m	床面積 ㎡	高さ m	床高 m	位置	壁への幅込		構造		扉道の 高さ m	その他	柱穴	位置 m	その他							
										形	大きさ	主軸	長さ m						向き						
01	北部	隅方	N04° E	中2	5.05×5.20	26.26	0.50	616.64	東壁中央	粘土	丸	1/3	N04° E	2.10	水平	0.30	掘造先ビット	-	-	全部粘土 構築	4	58			
03	北部	隅方	N07° E	小	4.05×3.70	14.99	0.50	616.64	東壁中央 やや南	粘土	丸	1/5	N07° E	0.30	水平	0.25	-	-	床面カマドに向 い張りな	2	60				
04	南部	隅方	N 0° E	中2	4.00×4.00	16.00	0.30	616.55	北壁中央	石組	-	-	N 0° E	-	-	-	-	-	-	-	7	59			
05	南部	隅方	N111° E	大1	5.50×5.50	30.25	0.55	616.86	東壁中央	粘土	-	-	N111° E	1.90	水平	0.30	-	-	床全部粘土	5	54				
06	南部	隅方	N 00° E	中1	□, 6 × 3.45	(11.90)	0.20	617.05	東壁中央?	?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	54			
07	南部	隅方	N90° E	中1	不明×3.90	不明	0.25	617.05	北壁中央	不明?	-	-	-	-	-	-	-	-	下層にカマド痕	-	-	床中央粘土	7	54	
08	南部	隅方	N104° E	小	3.65×3.50	12.78	0.35	616.95	北壁中央	粘土	方	1/3	N104° E	1.35	水平	0.40	掘造先ビット	-	-	床中央炭化セシ ン物	2	54			
09	南部	隅方	N93° E	中2	(4.6) × 4.85	(22.06)	0.40	616.56	(東壁中央)	?	-	-	-	-	-	-	-	-	丸床のみ	-	-	壁跡粘土貼床	5	53	
11	南部	隅方	N111° E	小	3.20×3.25	10.40	0.25	616.76	東壁中央 南寄	粘土	-	-	N111° E	0.90	10°	0.40	-	-	-	-	2	05			
12	南部	隅方	N85° W	中2	3.10×4.26	25.25	0.60	616.35	西壁中央	粘土	丸	1/8	N85° W	1.00	水平	0.55	掘造先ビット	土	2.20 2.50	粘土	3	05			
13	南部	隅方	(南)° E	不明	不明	不明	不明	不明	東壁中央	不明?	-	-	不明	不明	不明	不明	不明	不明	カマドのみ	不明	不明	5	52		
14	北部	隅方	N111° E	中1	3.40×3.70	12.58	0.20	616.75	東壁中央 やや南	粘土	丸	1/2	N111° E	-	-	-	-	-	-	-	-	P 1 (床下)	5	58	
15	南部	隅方	N92° E	大2	6.80×7.30	49.64	0.60	616.06	東壁中央	粘土	丸	1/3	N92° E	0.90	10°	0.35	-	-	床4 床3	3.70 3.80	粘土・ララス・ 層造	2	59		
16	北部	隅方	N65° E	小	3.20×3.20	10.56	0.40	616.45	東壁中央	粘土	丸	1/3	N65° E	2.16	10°	0.25	-	-	土 中 2.00	1.80	東壁粘土厚薄全 面	3	02		
17	北部	隅方	N89° E	中2	5.05×5.45	27.52	0.50	616.00	東壁中央	粘土	-	-	N89° E	2.05	水平	0.40	掘造先ビット カマド北にP 2	土	4	3.90	粘土	3	02		
18	北部	隅方	N108° E	小	2.65×3.85	7.55	0.30	616.35	東壁中央	粘土	丸	1/1	N108° E	0.75	水平	0.15	-	-	-	-	-	床跡	4	05	
19	北部	隅方	N87° E	中1	4.20×4.35	18.21	0.30	616.86	東壁中央 やや南	粘土	-	-	N84° E	1.35	5°	0.20	-	-	土	4	2.60 3.00	P11	2	00	
20	北部	隅方	N101° E	中1	3.85×3.80	14.66	0.20	616.30	東壁中央	粘土?	-	-	N101° E	0.95	10°	0.25	-	-	-	-	-	床跡	4	04	
21	北部	隅方	N92 7° W	-	3.10×3.30	10.23	0.20	618.30	なし	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	64		
22	北部	隅方	N110° E	中1	3.50×3.25	11.38	0.10	616.25	東壁中央	石組	丸	1/2	N110° E	-	-	-	-	-	-	-	-	-	粘土	6	05
23	北部	隅方	N69° W	中1	4.60×4.70	21.62	0.35	616.20	西壁中央 やや南	?	丸	1/2	N69° W	-	-	-	-	-	土	4	2.00 2.20	粘土	2	05	
24	北部	隅方	N117° E	中2	4.15×4.25	17.64	0.20	616.30	東壁中央	粘土	方	1/2	N117° E	0.40	水平	0.25	-	-	-	-	-	北壁 床面 中央部高い	5	03	
25	北部	隅方	N97° E	中1	4.10×4.40	18.04	0.40	616.33	東壁中央 南寄	粘土	方	1/2	N97° E	1.20	水平	0.25	-	-	-	-	-	-	床跡	2	04
26	北部	隅方	N 7° E	小	3.65×不明	不明	0.15	616.50	東壁中央 南寄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P 3 床跡	2	05	
27	北部	隅方	N67° W	中1	不明×3.75	不明	0.15	-	西壁中央	粘土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(2)	1.90	床跡	2	04
28	北部	隅方	N90° E	中2	4.15×4.20	17.43	0.25	616.35	東壁中央 やや南	粘土	方	1/4	N90° E	1.10	15°	0.40	-	-	-	-	-	-	粘土中央部	5	06
29	北部	隅方	N90° E	中2	5.50×5.20	28.60	0.50	616.35	東壁	粘土	方	1/2	N90° E	1.90	10°	0.35	-	-	土	4	2.50 2.95	掘下層1mで掘 り方逐る	2	02	

付表6 中二子遺跡古代掘立柱建物一覧表

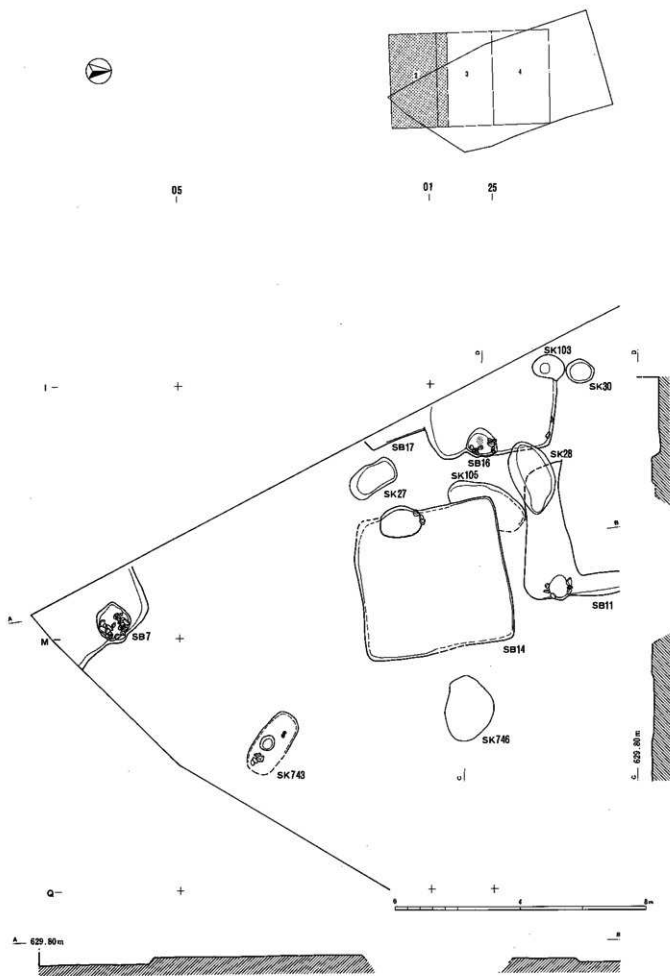
() =推定

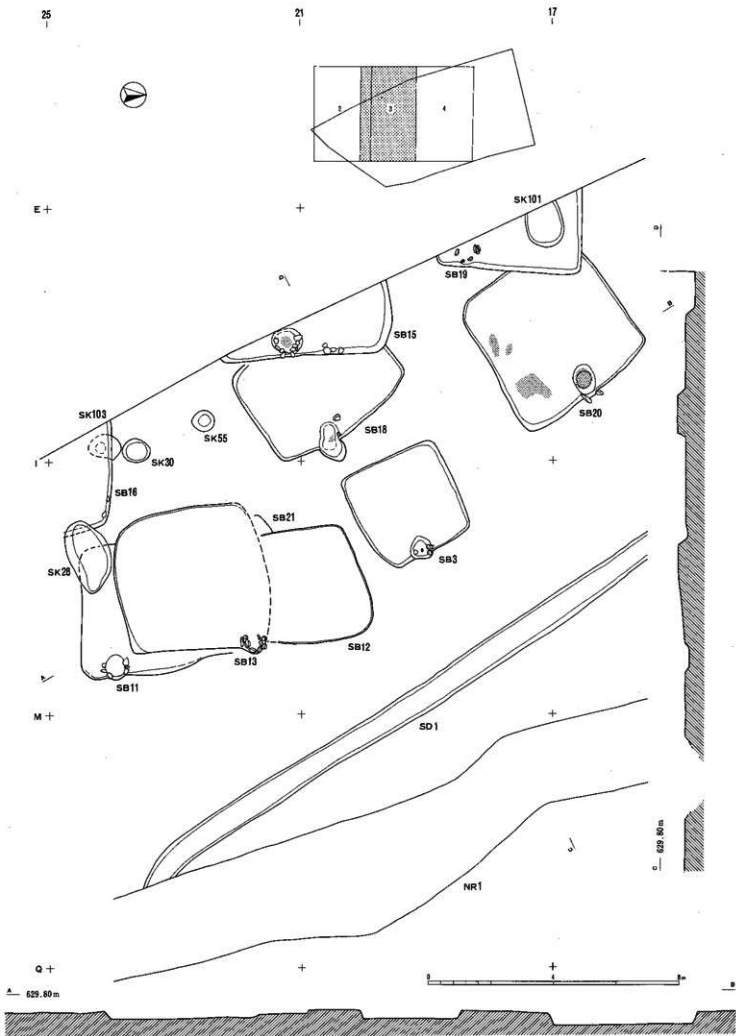
No.	位置	棟方向	基 礎			柱間隔		柱穴掘り方		時期	備 考	PL No.	
			桁行×梁行	桁行×梁行	面 積	桁 行	梁 行	形	規 模				深 さ
1	南部	N30°E	2間×2間	292cm×293cm	8.56㎡	145~160cm	145~160cm	方	50~80cm	45cm	2か	総柱建物址 焼失 ST3を切る 柱底方 20cm 柱先尖る 検 出面より美濃須重	58
2	南部	N10°E	3間×2間	590cm×370cm	21.80㎡	180~210cm	180~190cm	方	60~80cm	50cm	2か	川が東側破壊 ST3 と切りあう 柱底方20cm	59
3	南部	N18°E	3間×(2)間	570cm×(360)cm	(20.52)㎡	180~200cm	190~ cm	方	50~54cm	50cm	2か	川が東側破壊 柱底方20cm P2より土師壺片	59
4	南部	N7°E	3間×2間	590cm×395cm	23.31㎡	192~214cm	192~220cm	丸	40~58cm	40cm	2か	総柱建物址 P1・5・6・ 10・12より土師壺片 ST3と切りあう 検出 面より美濃須重	59
5	南部	N13°E	2間×2間	500cm×474cm	23.70㎡	248~256cm	204~220cm	方	50~62cm	54cm	2か	総柱建物址 P2 美 濃須壺底 P4・5・ 12より土師壺 ST4と切りあう 柱底方20cm	59
6	南部	N16°E	2間×2間	344cm×384cm	13.21㎡	158~176cm	180~208cm	方	48~86cm	44cm	2か	総柱建物址 柱底方15~20cm	58
7	南部	N14°E	2間×2間	482cm×352cm	16.97㎡	232~252cm	132~180cm	方	88~ 116cm	62cm	2か	総柱建物址 柱底方25~30cm	56
8	南部	N28°E	2間×2間	374cm×345cm	12.90㎡	185~190cm	180~190cm	方	30~60cm	40cm	2か	総柱建物址 検出面 土師壺壺底片 柱底方15cm	58
9	南部	N30°E	2間×2間	340cm×348cm	11.83㎡	136~208cm	168~194cm	方	34~70cm	38cm	2か	柱底方20cm	56
10	南部	N12°E	3間×2間	422cm×386cm	16.30㎡	124~216cm	188~196cm	丸	46~52cm	34cm	5か	柱底方20cm	56
11	南部	N20°E	2間×1間	318cm×330cm	10.50㎡	142~152cm	306~342cm	丸	36~42cm	26cm	5か	柱底方110cm	56
12	南部	N10°E	3間×不明	480cm× (302) cm	(14.50)㎡	148~176cm	130~172cm	丸	32~48cm	24cm	5か	柱底方15cm	56
14	南部	N21°E	2間×1間	358cm×284cm	10.17㎡	166~178cm	280~300cm	丸	64~90cm	28cm	2か	柱底方15cm	58
15	南部	N2°E	2間×2間	418cm×364cm	15.22㎡	196~220cm	170~180cm	方	46~88cm	32cm	2か	土師壺 柱底方・門 20~25cm	53
16	南部	N7°E	3間×2間	528cm×408cm	21.54㎡	164~192cm	188~206cm	方	40~58cm	40cm	5か	柱底方15cm	66
17	南部	N12°E	3間×(2)間	642cm× (216) cm	(13.48)㎡	180~228cm	(210~) cm	方	54~84cm	46cm	2か	P4底土師壺 P3土 師壺 P2・3埴土 柱底方20cm	61
18	南部	N12°E	2間×2間	394cm×386cm	13.23㎡	180~214cm	188~198cm	丸	48~60cm	54cm	2か	柱底方15~20cm	68

圖 版

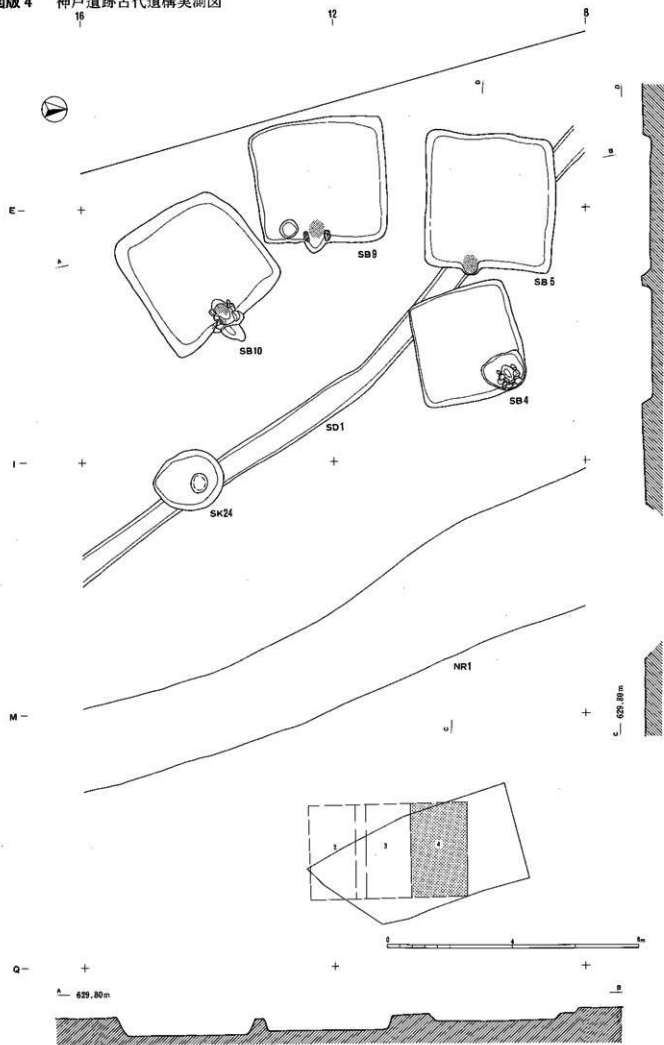


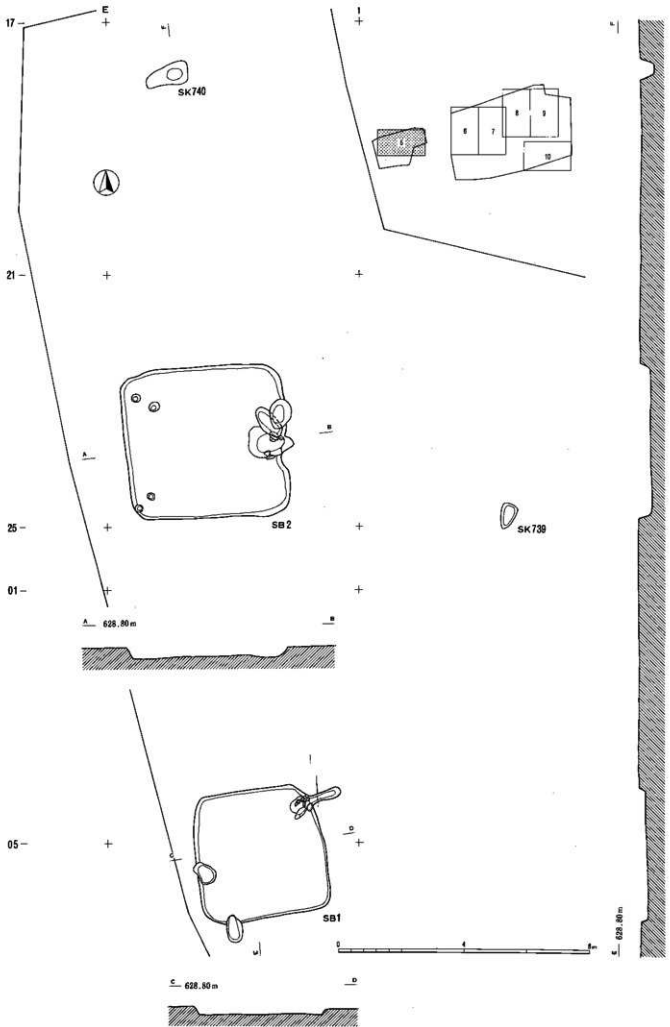
図版2 神戸遺跡古代遺構実測図



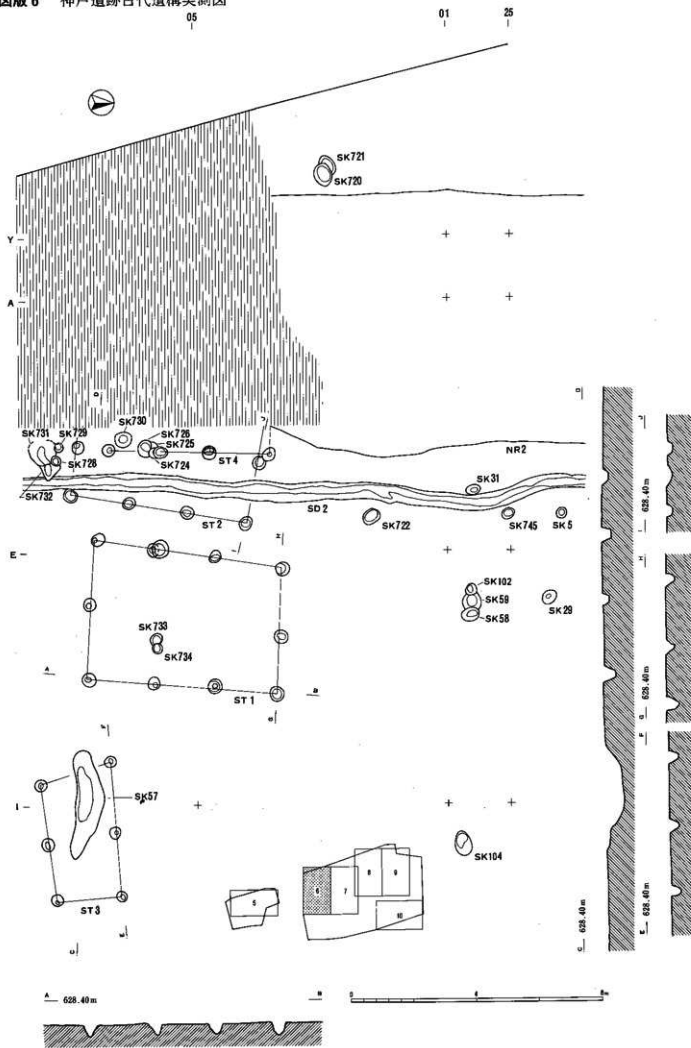


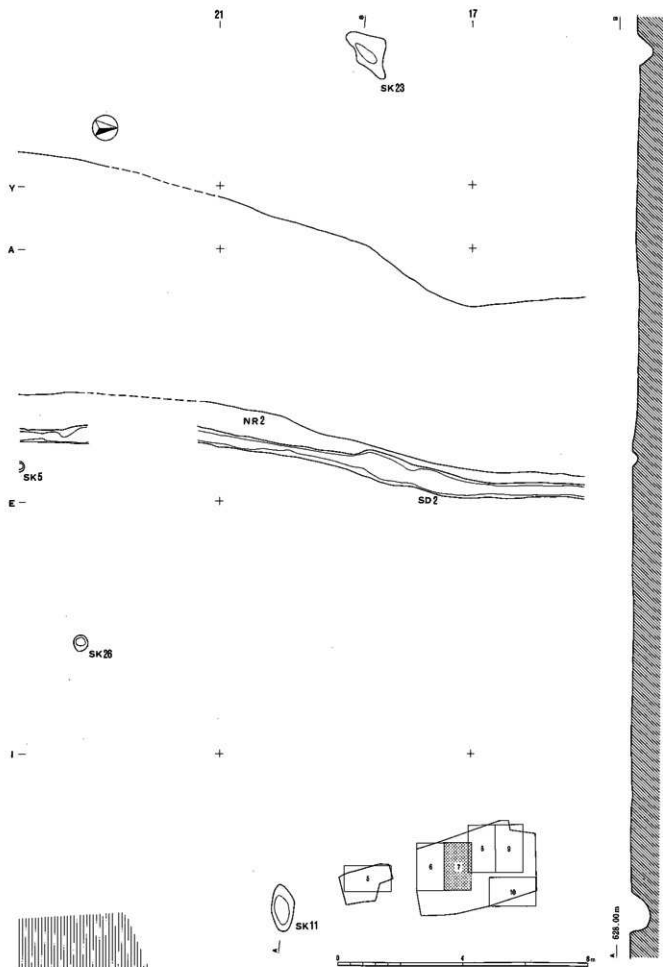
図版 4 神戸遺跡古代遺構実測図



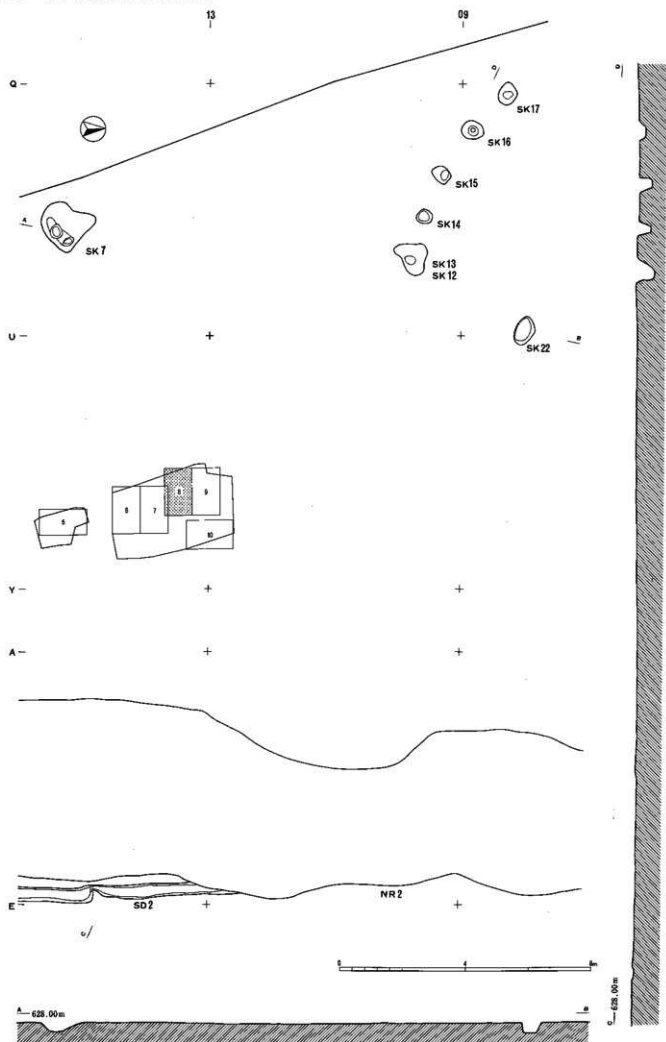


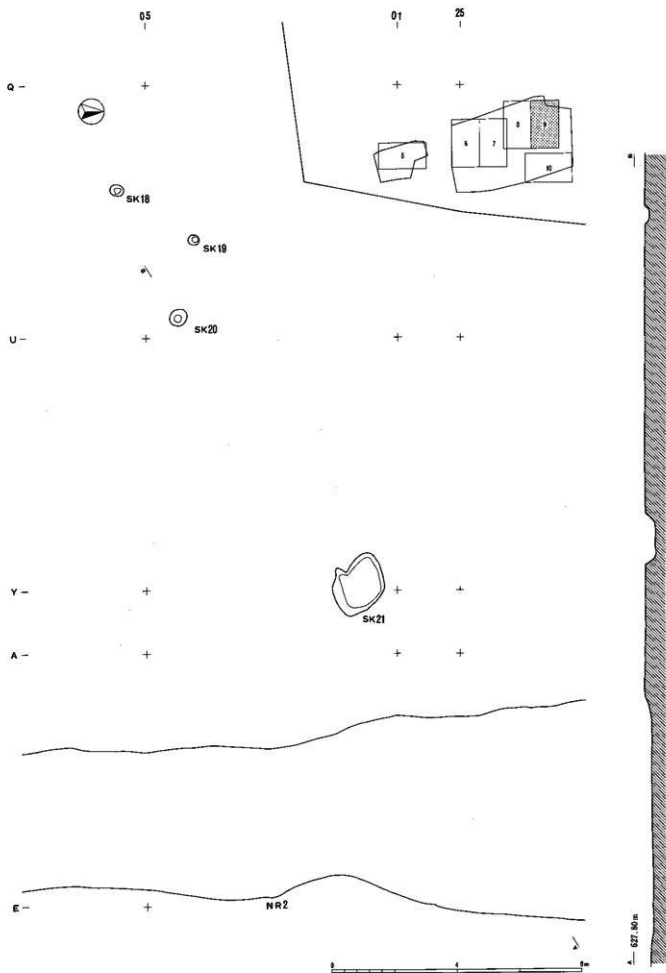
図版 6 神戸遺跡古代遺構実測図



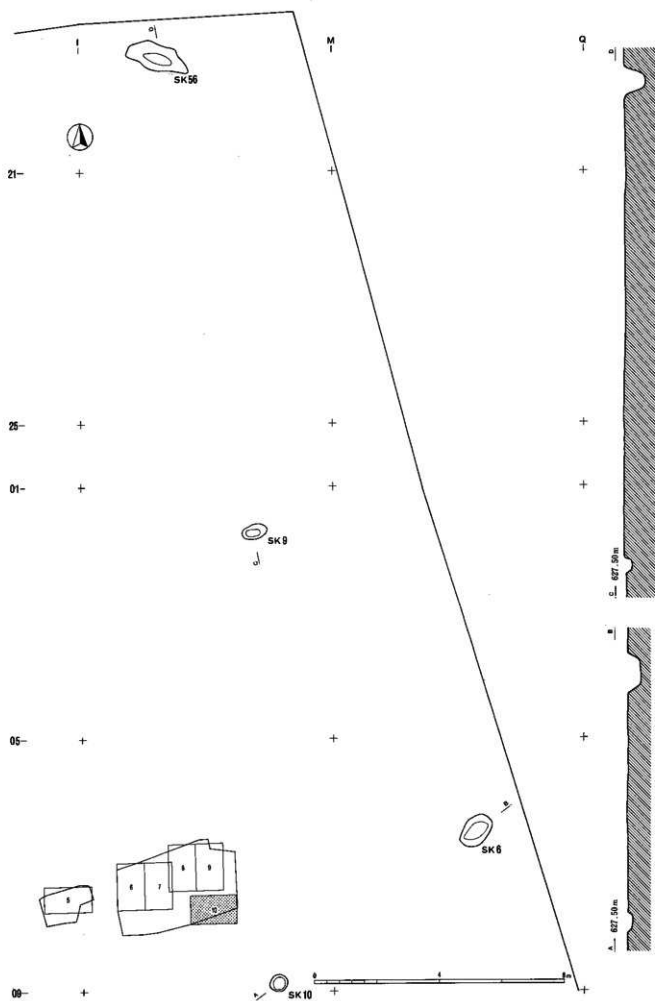


図版 8 神戸遺跡古代遺構実測図

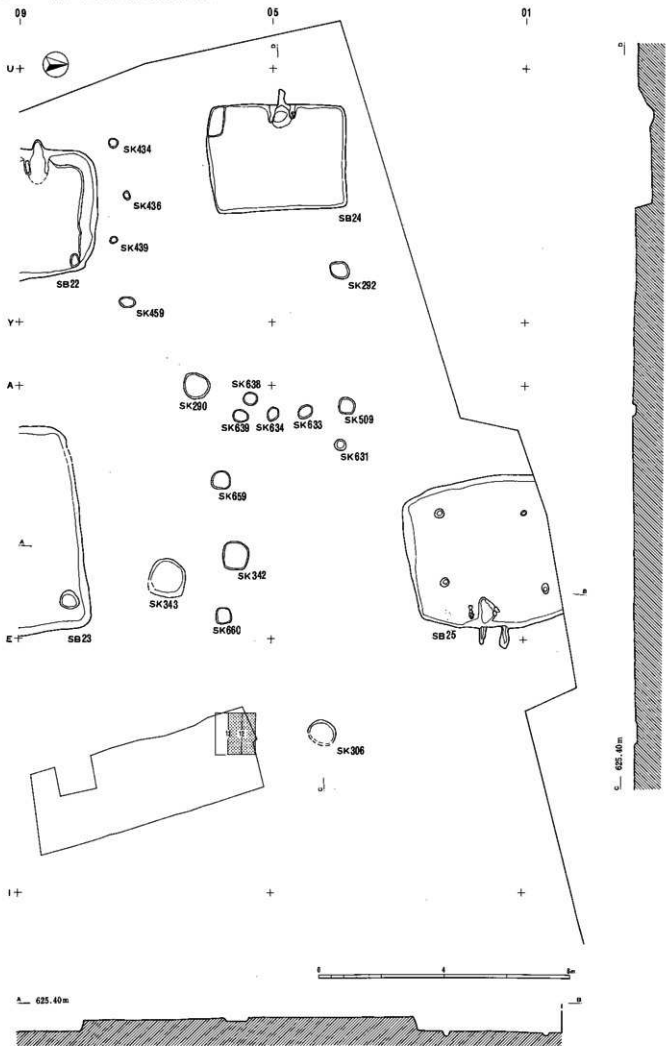




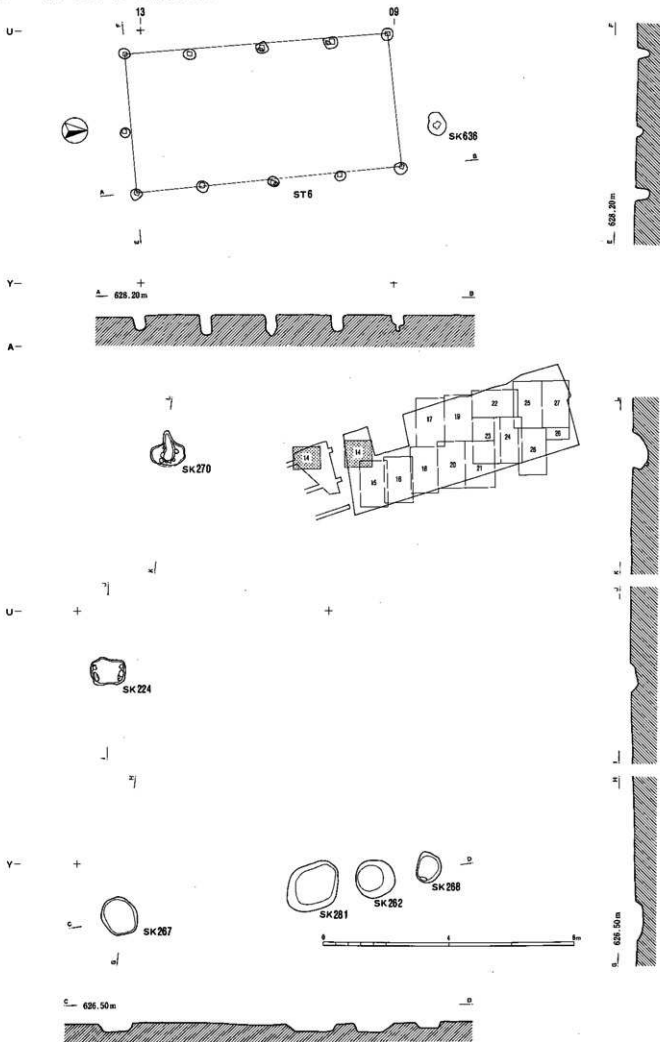
図版10 神戸遺跡古代遺構実測図

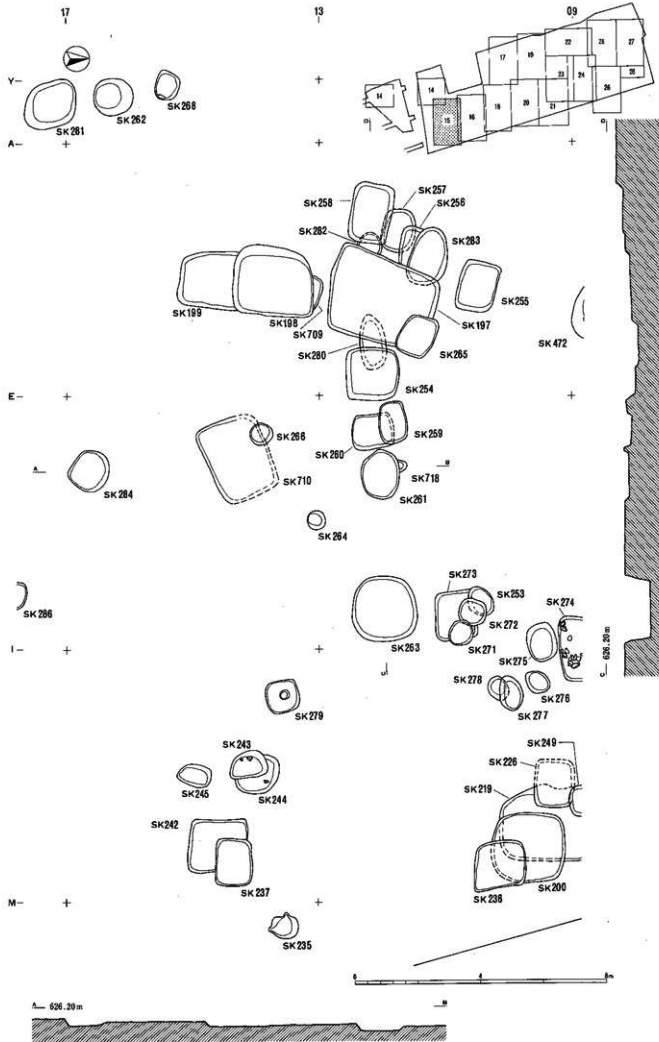


図版12 神戸遺跡古代遺構実測図

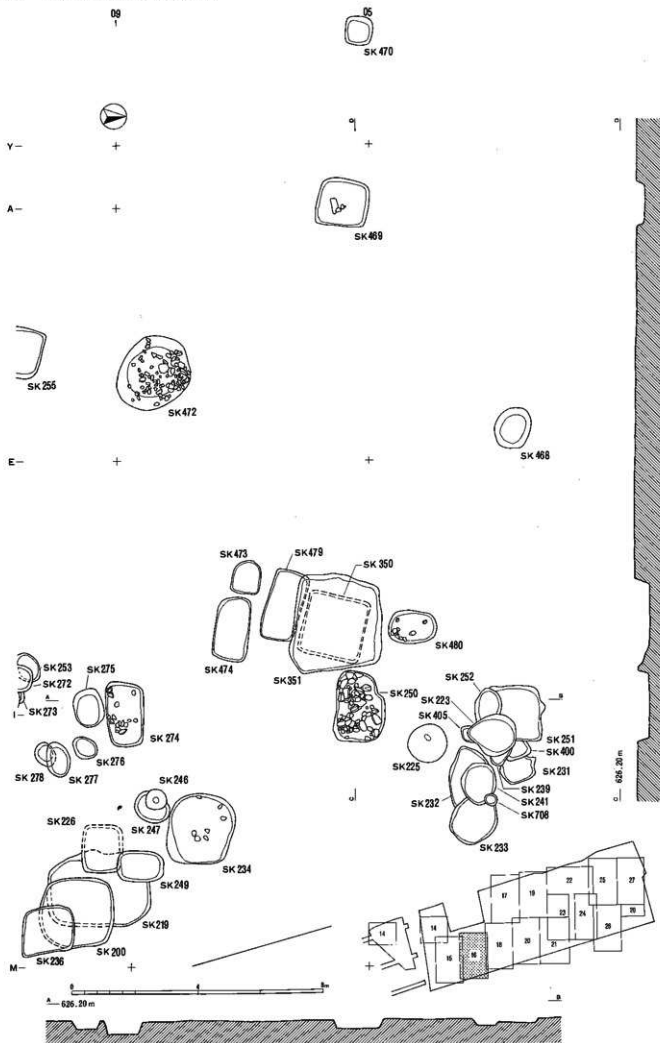


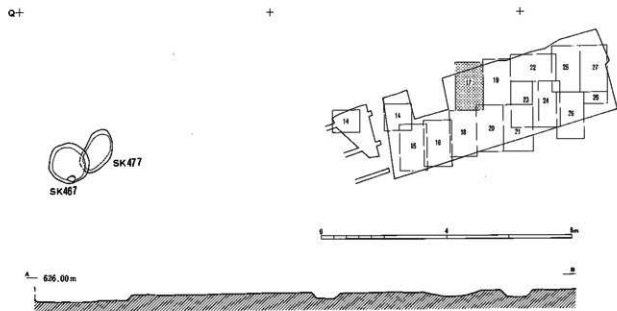
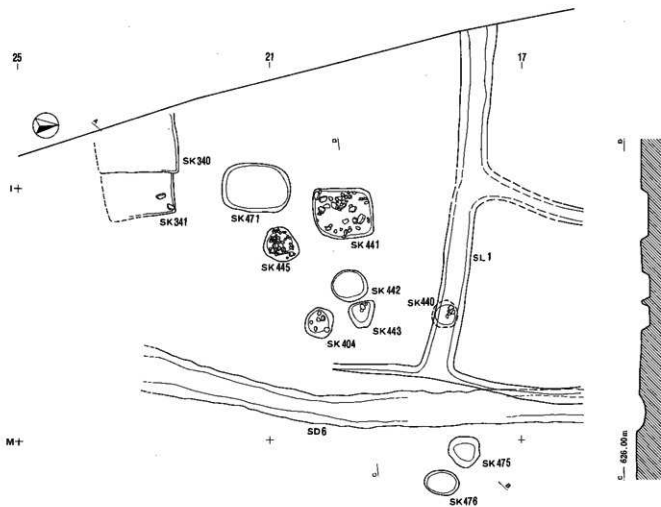
図版14 神戸遺跡中世遺構実測図



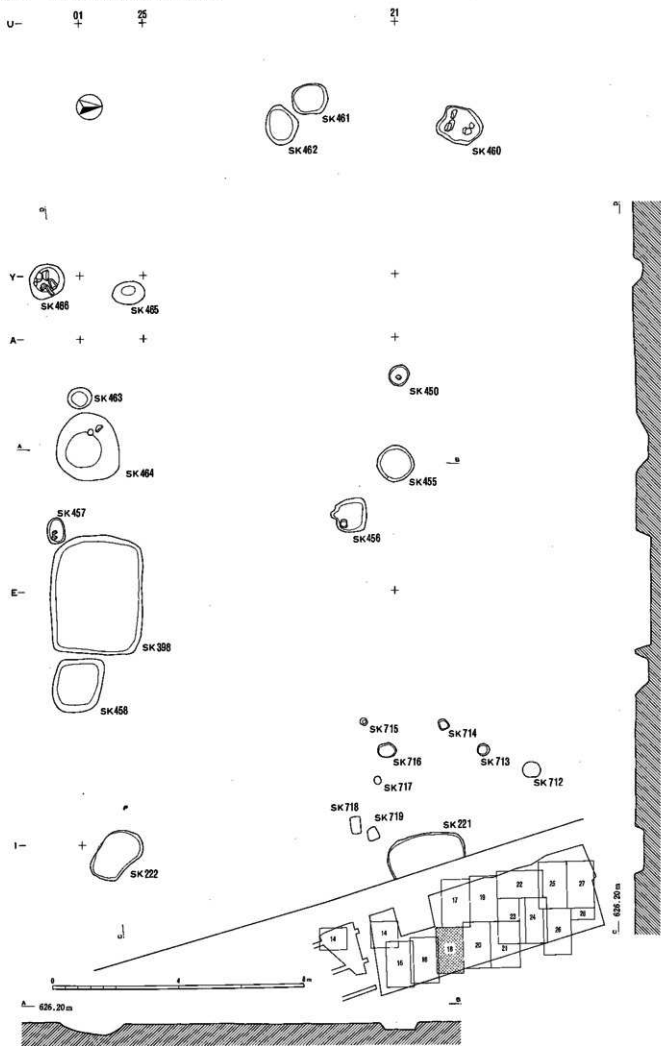


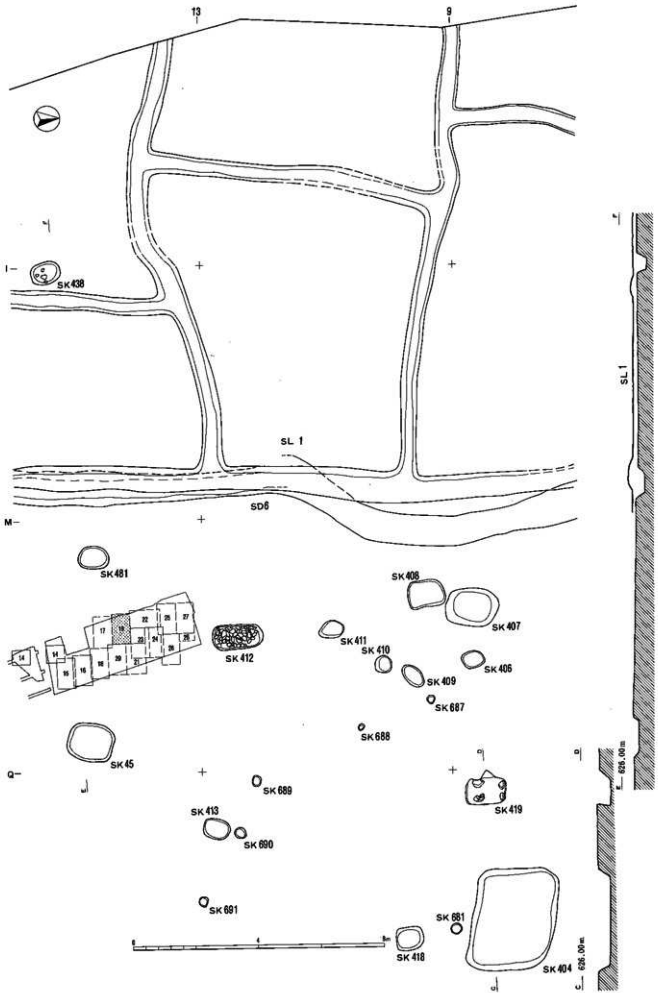
図版16 神戸遺跡中世遺構実測図



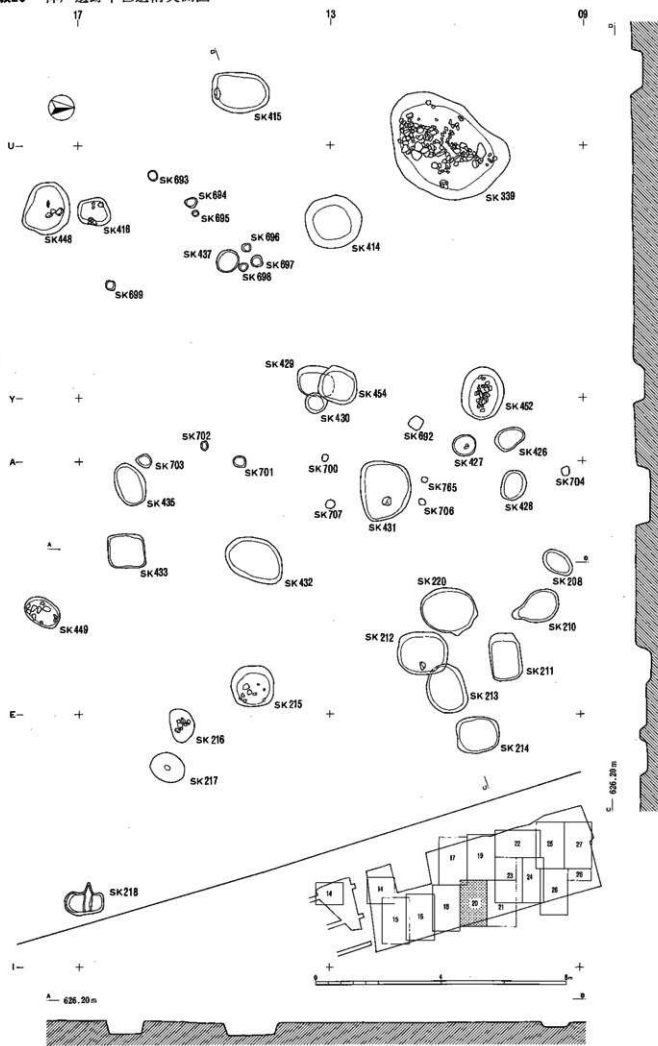


図版18 神戸遺跡中世遺構実測図

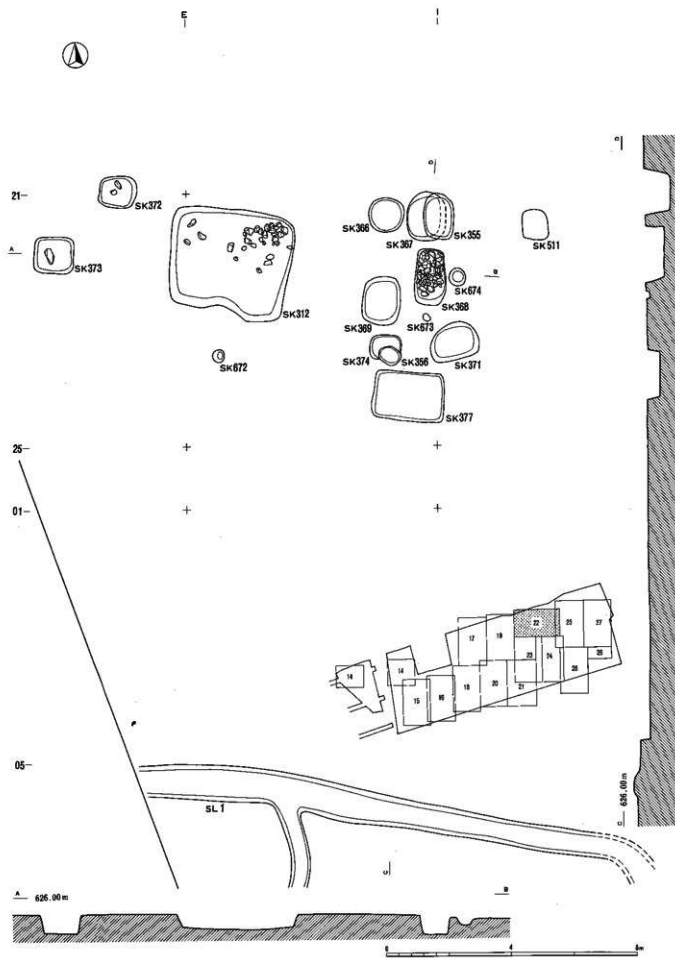




図版20 神戸遺跡中世遺構実測図



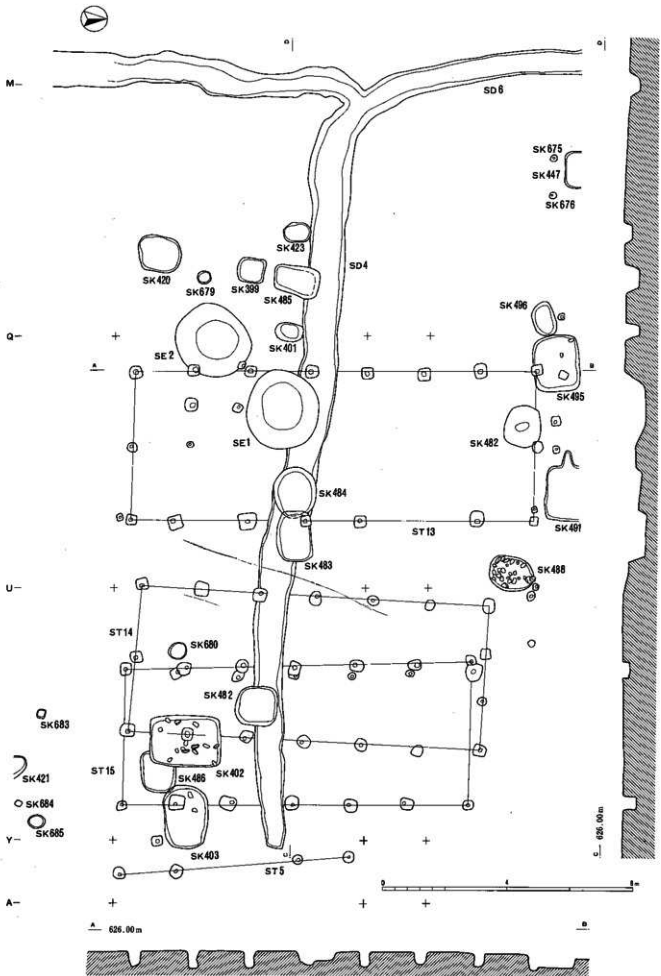
図版22 神戸遺跡中世遺構実測図



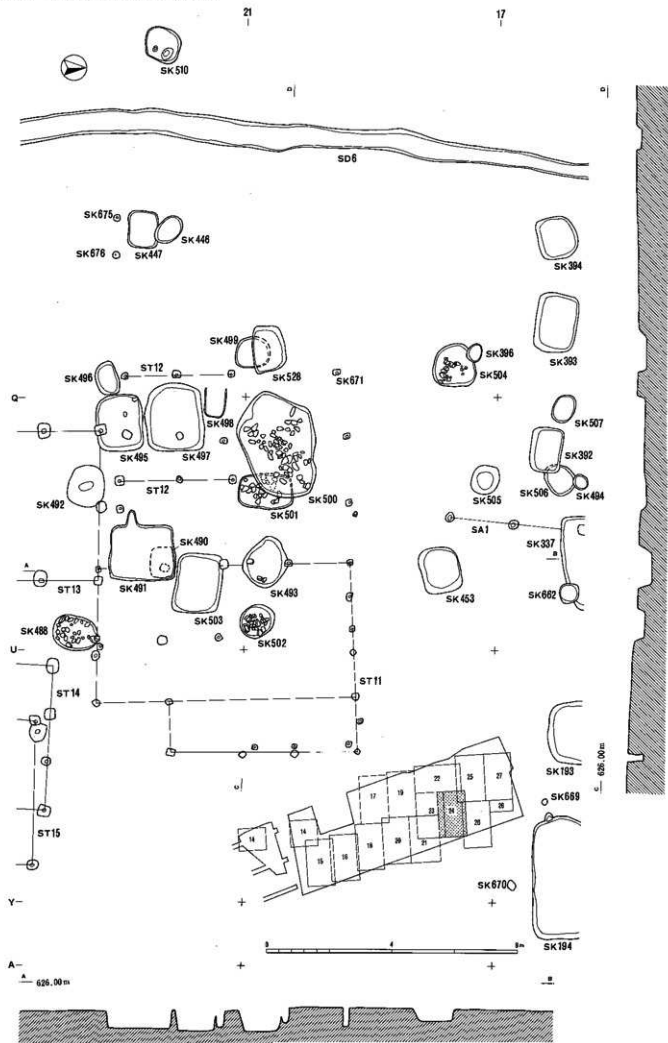
05

01

25



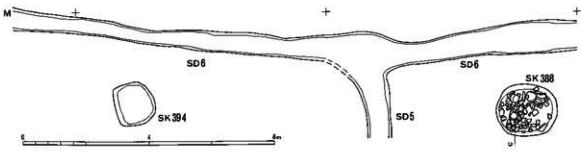
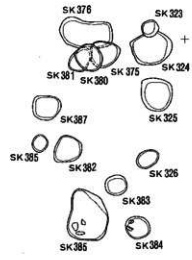
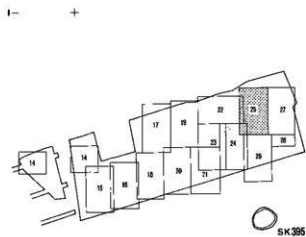
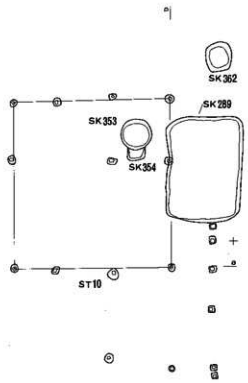
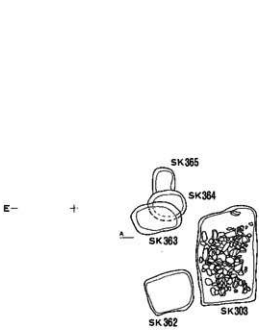
図版24 神戸遺跡中世遺構実測図



17

13

09

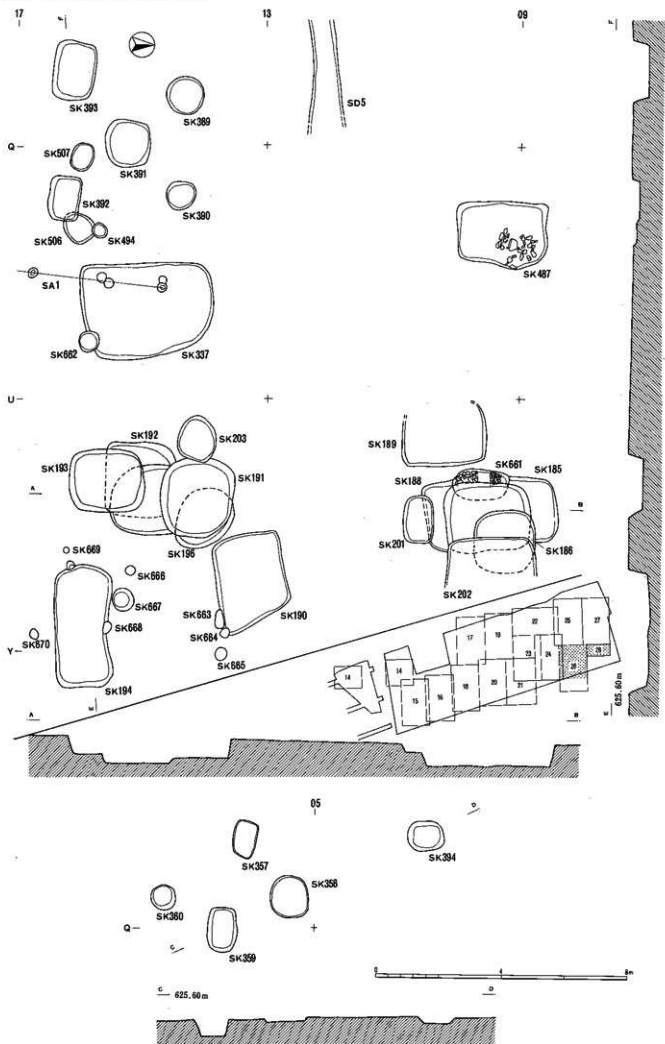


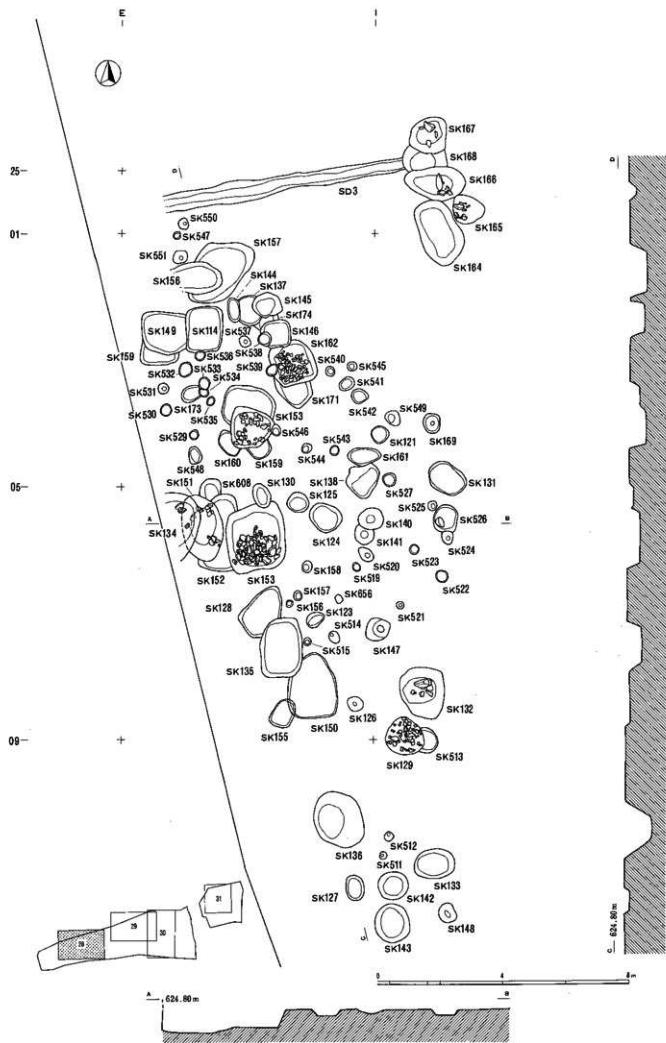
1:625.60m

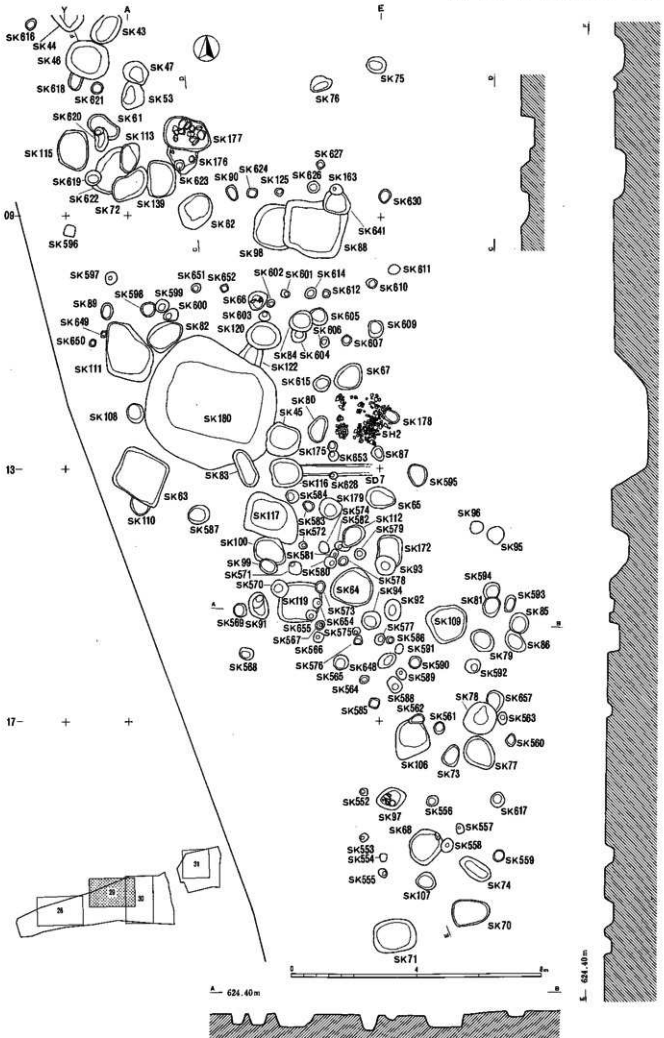
1:625.60m

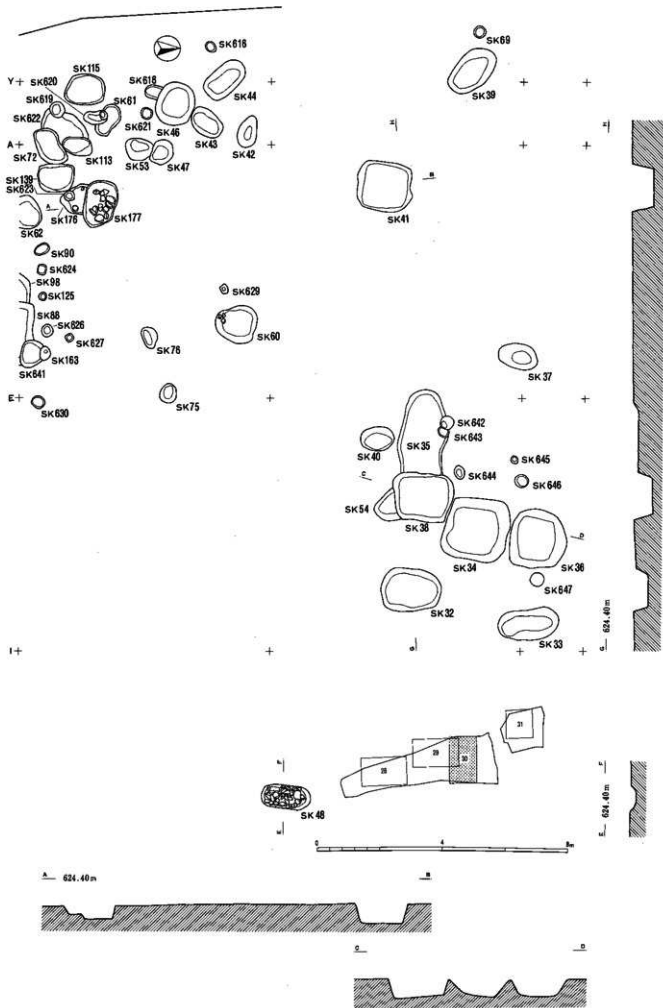


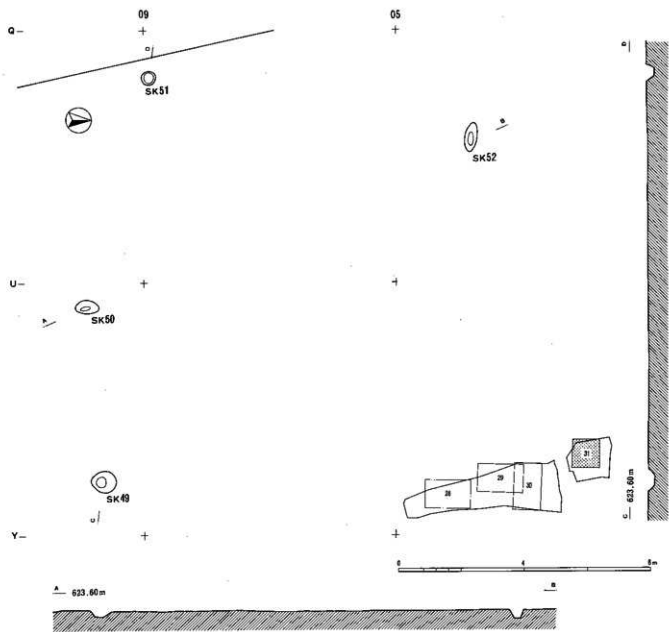
図版26 神戸遺跡中世遺構実測図

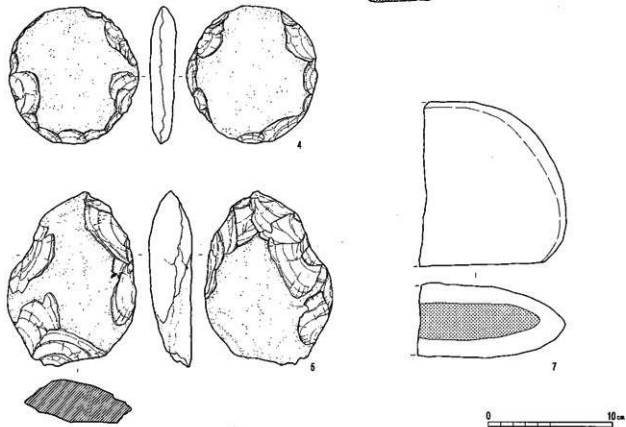
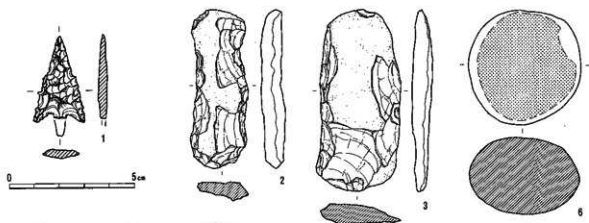
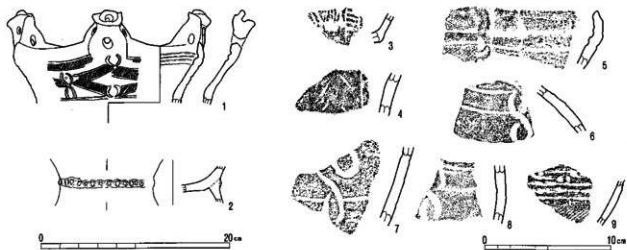




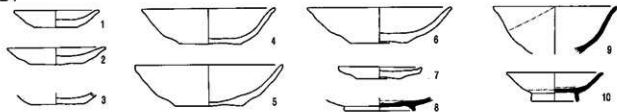




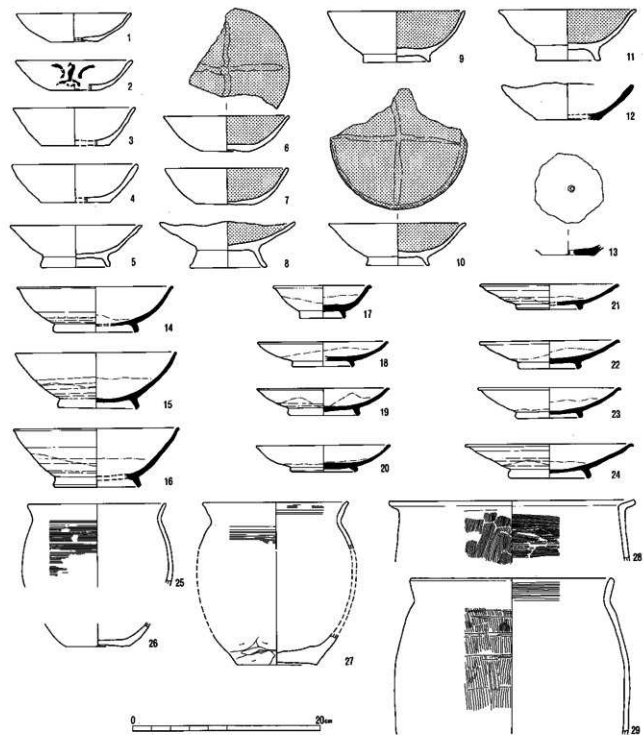




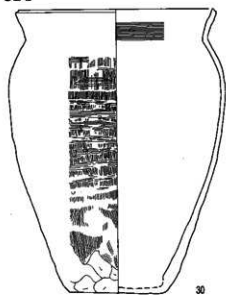
SB1



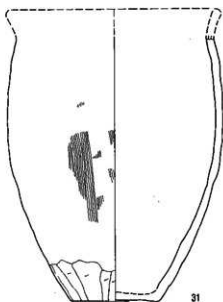
SB2



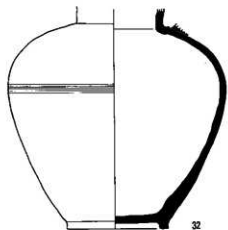
SB2



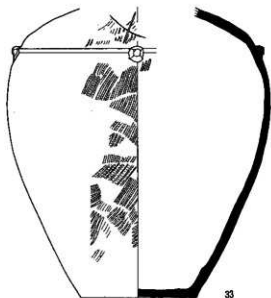
30



31



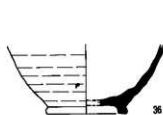
32



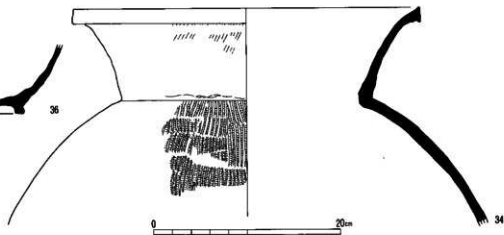
33



35



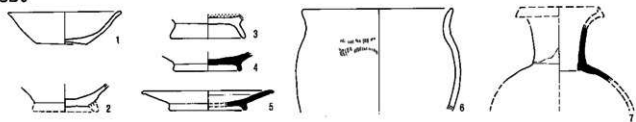
36



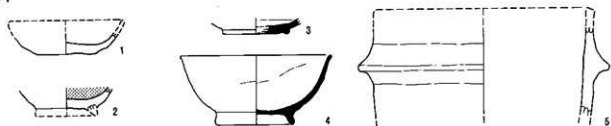
0

20cm

SB3



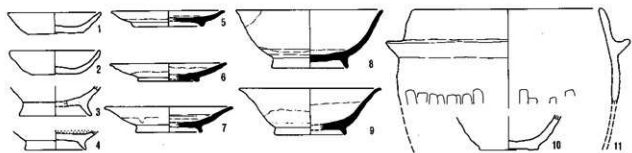
SB4



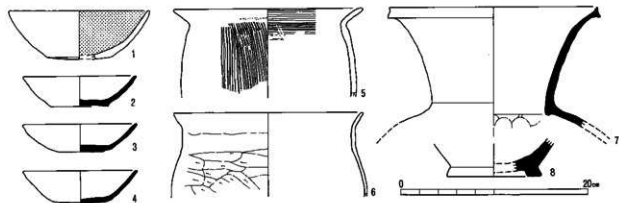
SB5



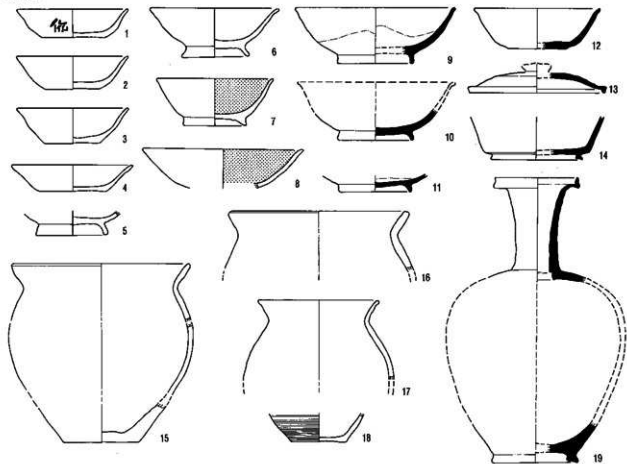
SB7



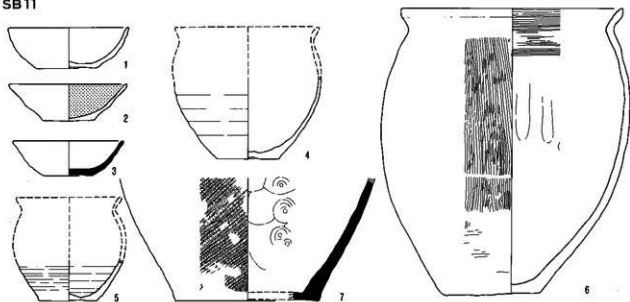
SB9



SB10



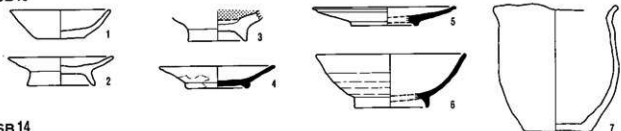
SB11



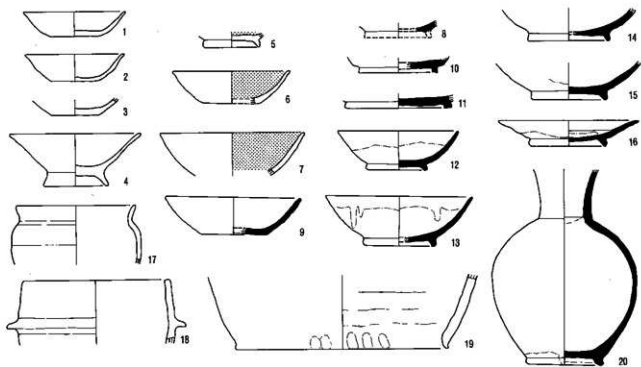
SB12



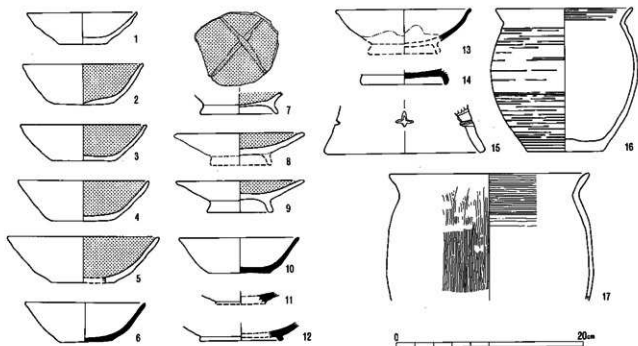
SB13



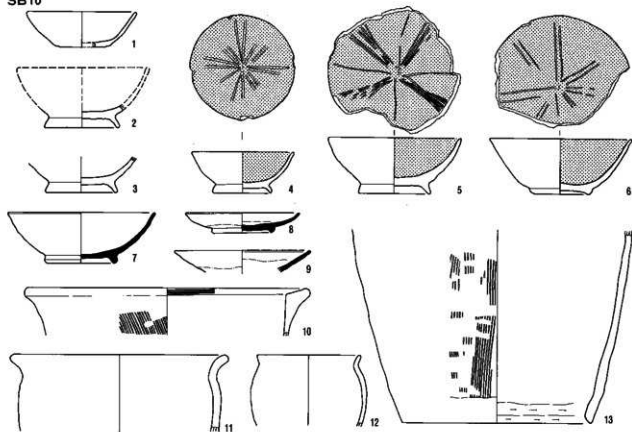
SB14



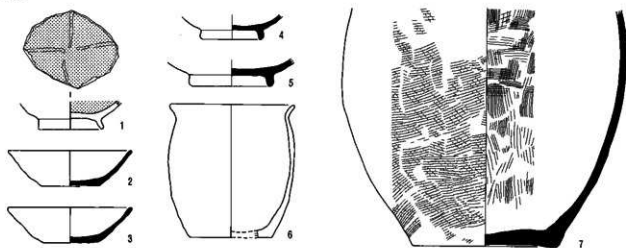
SB15



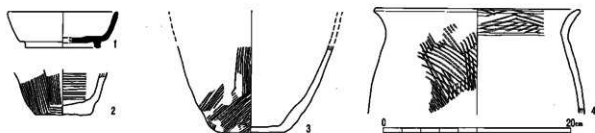
SB16



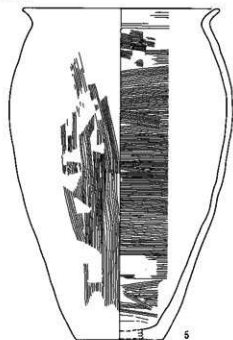
SB17



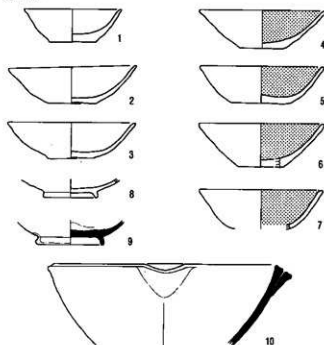
SB18



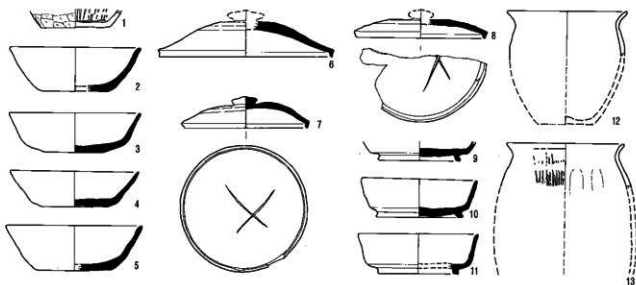
SB18



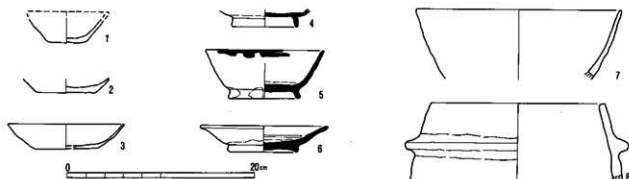
SB19



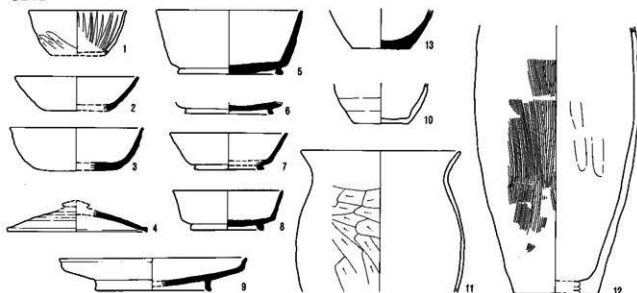
SB20



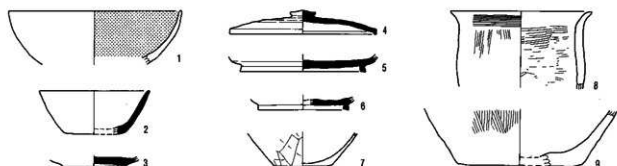
SB21



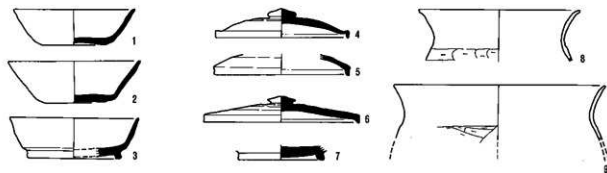
SB 22



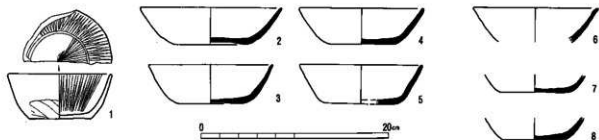
SB 23



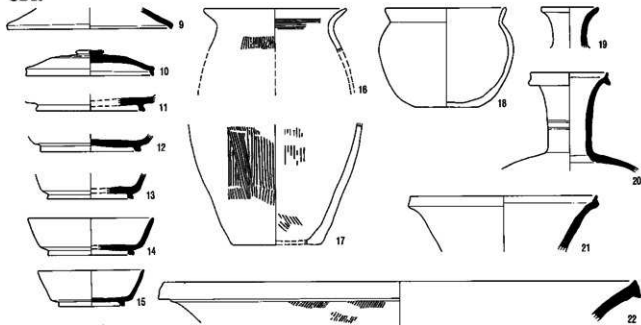
SB 24



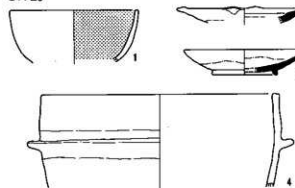
SB 25



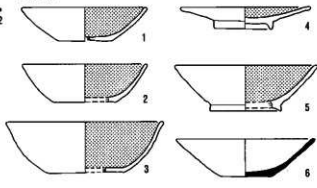
SB 25



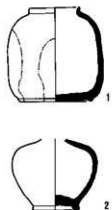
SK 25



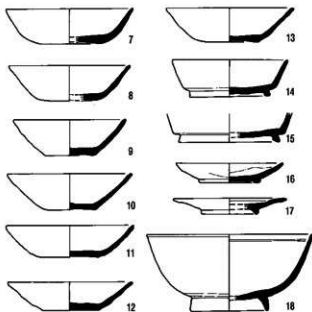
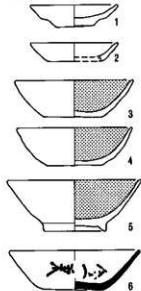
SK 28



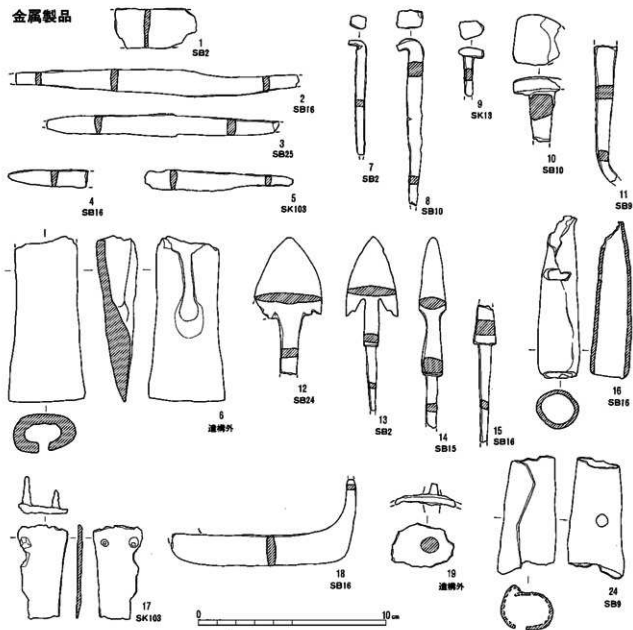
SK 743



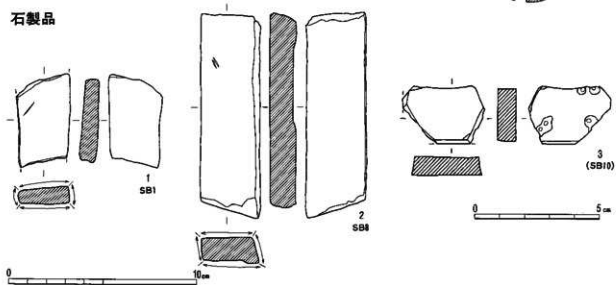
NR 1

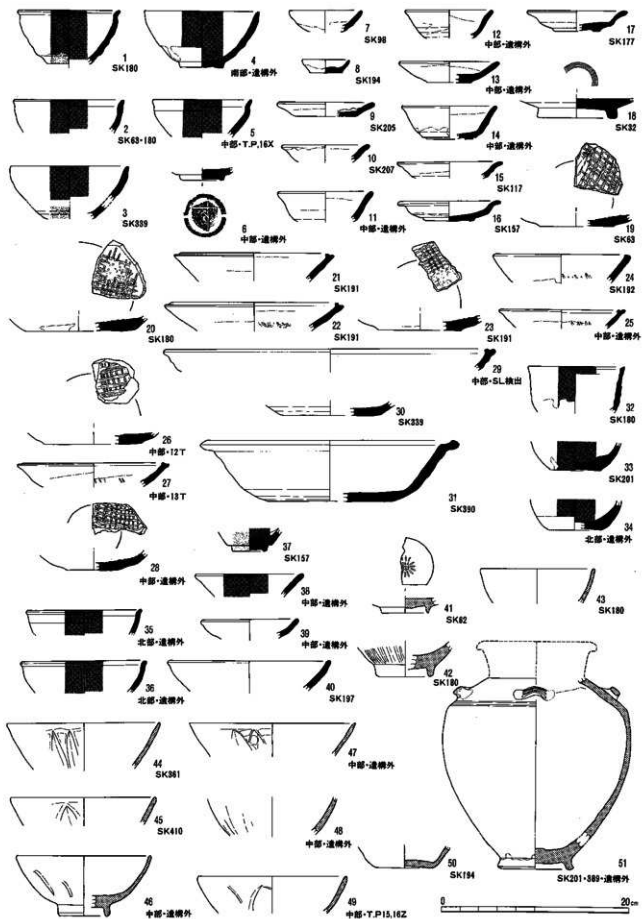


金属製品

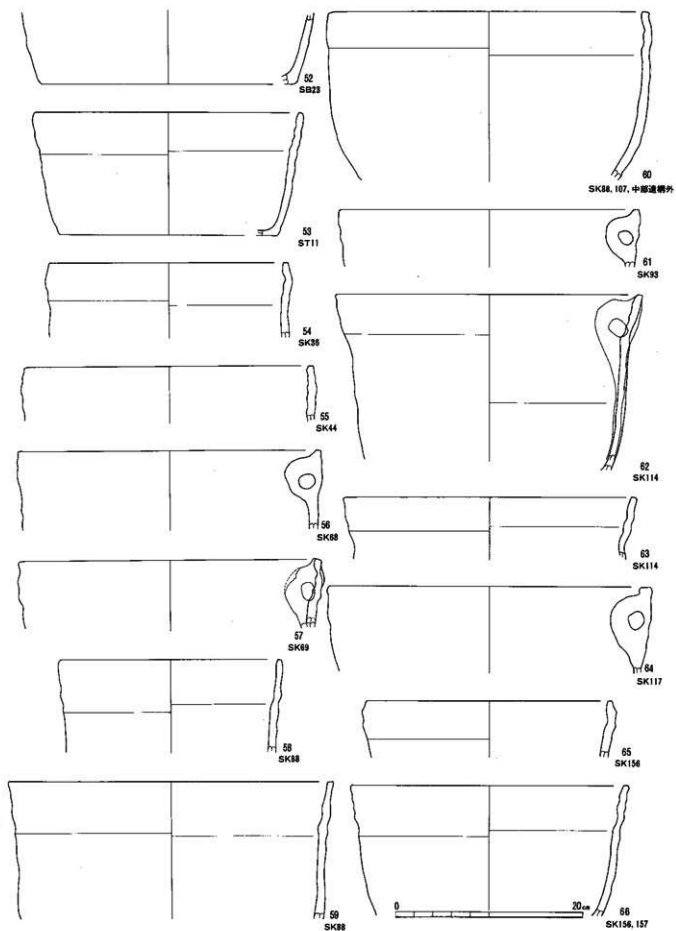


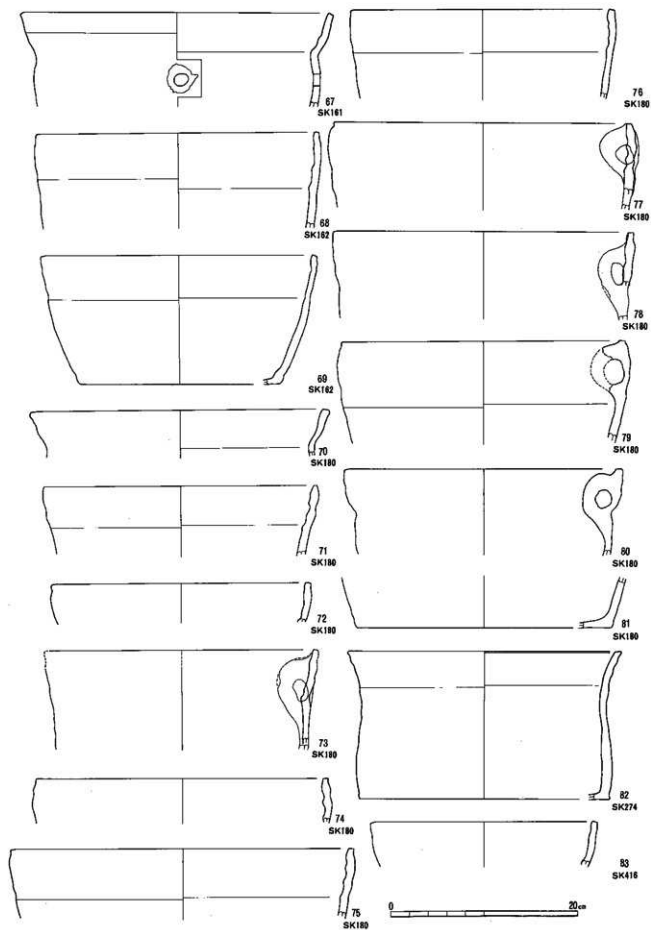
石製品

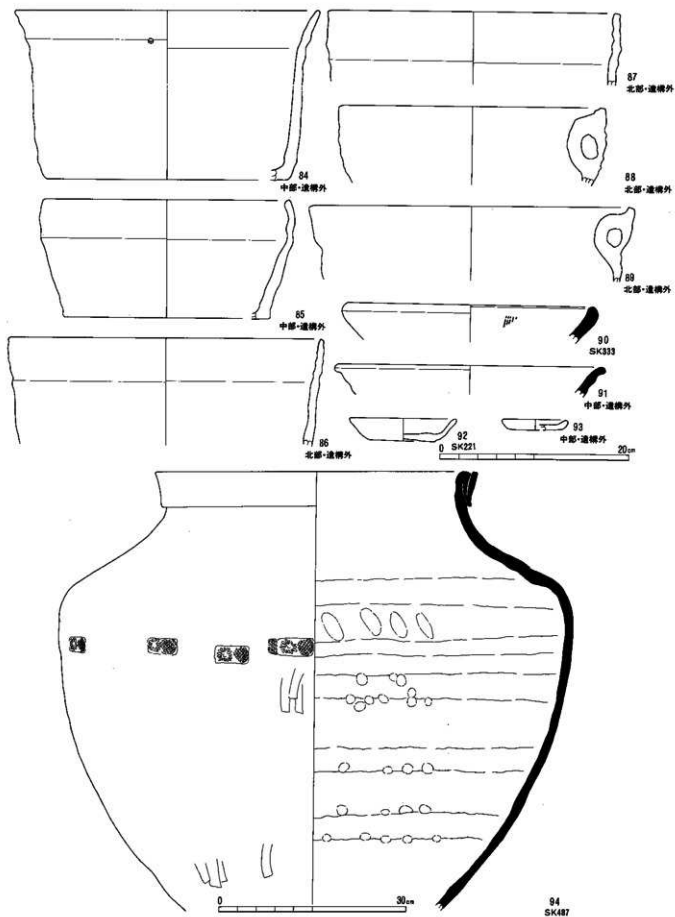


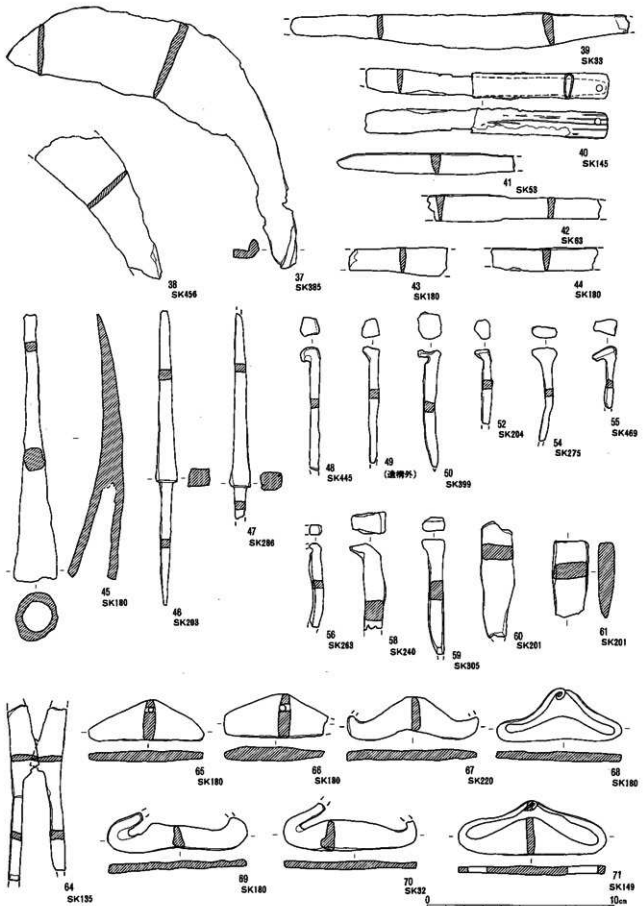


中世土器・陶磁器実測図

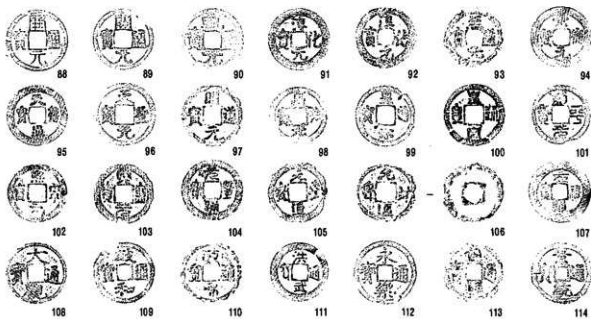
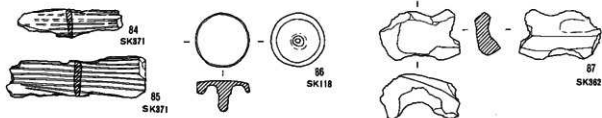
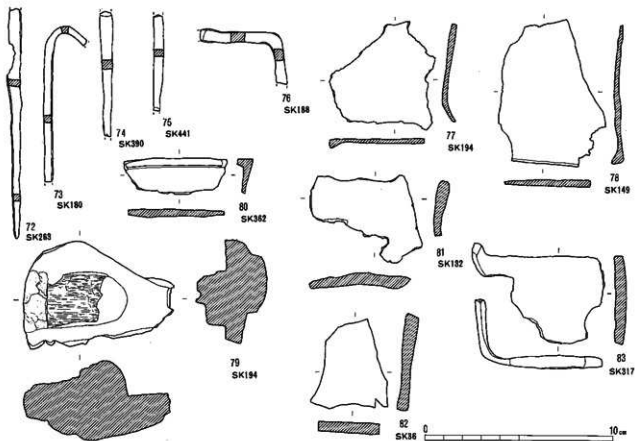




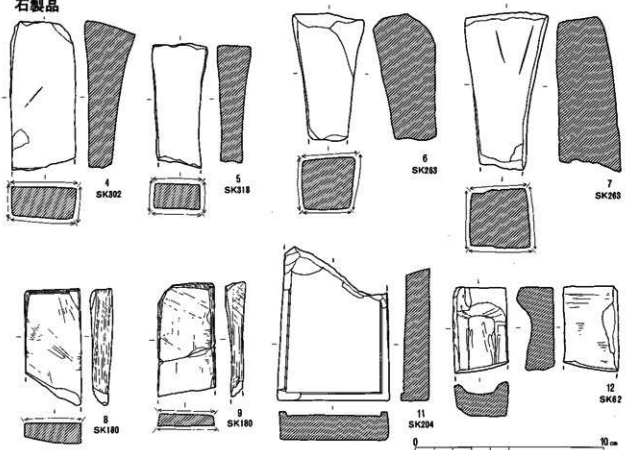




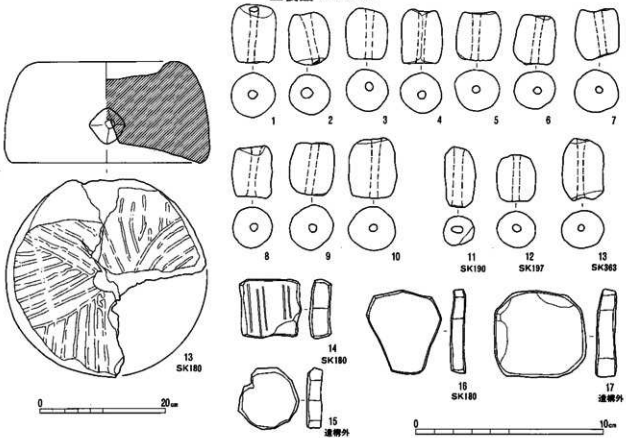
中世金属製品実測図



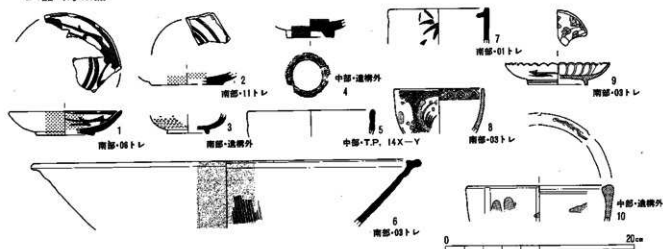
石製品



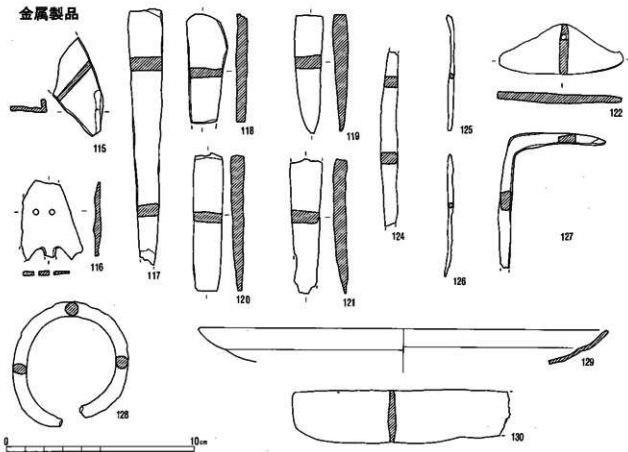
土製品 1~10: SK263



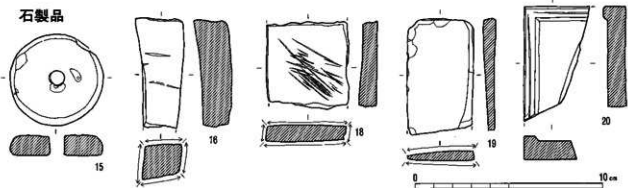
土器・陶磁器

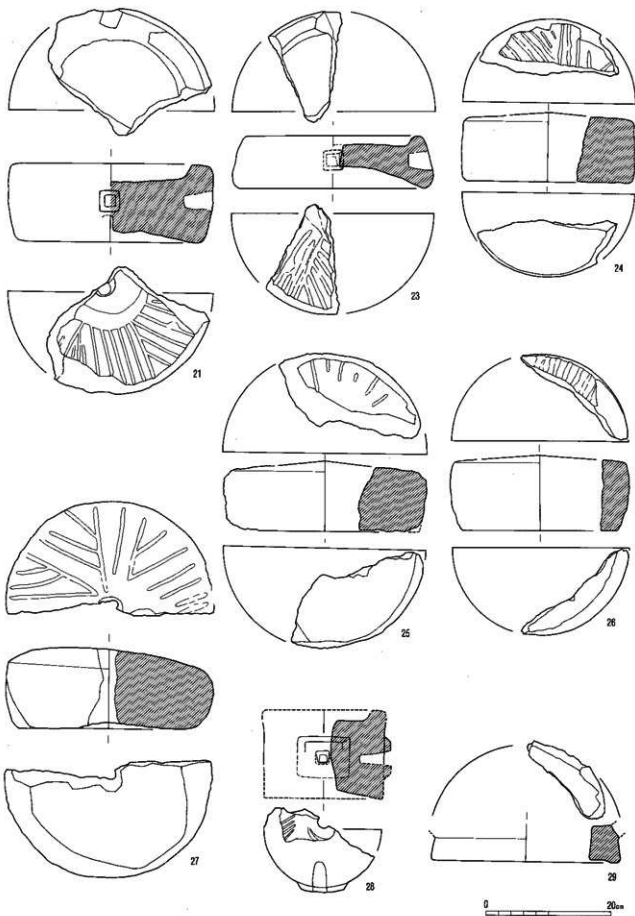


金属製品



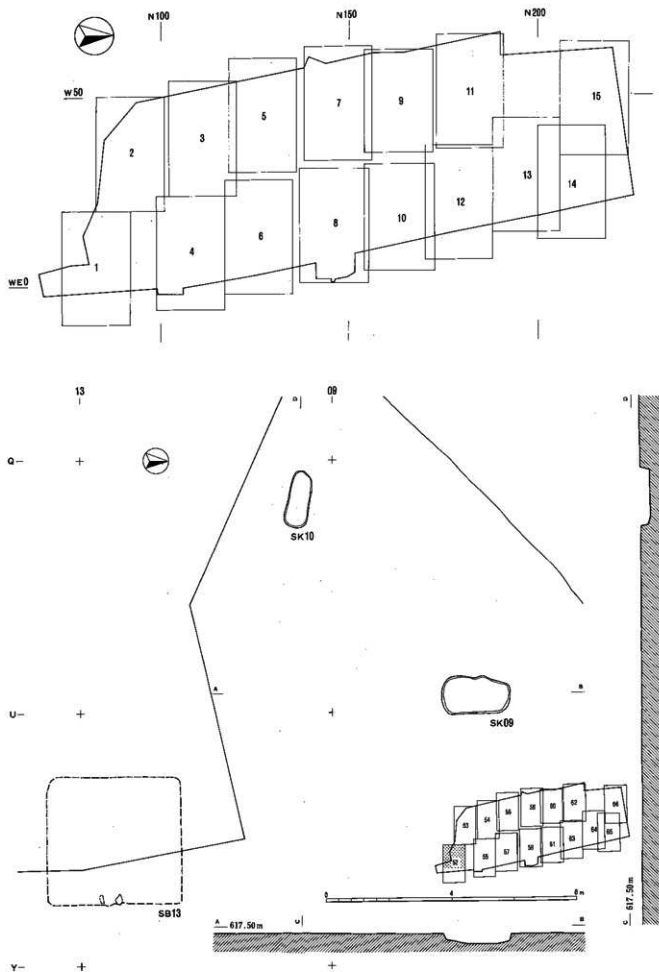
石製品

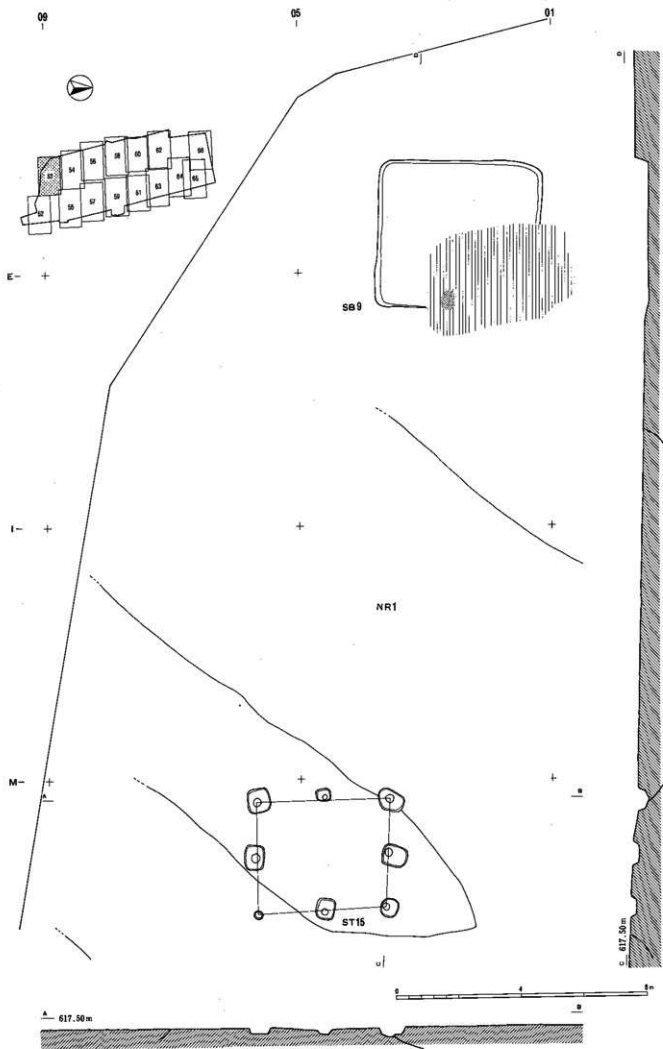




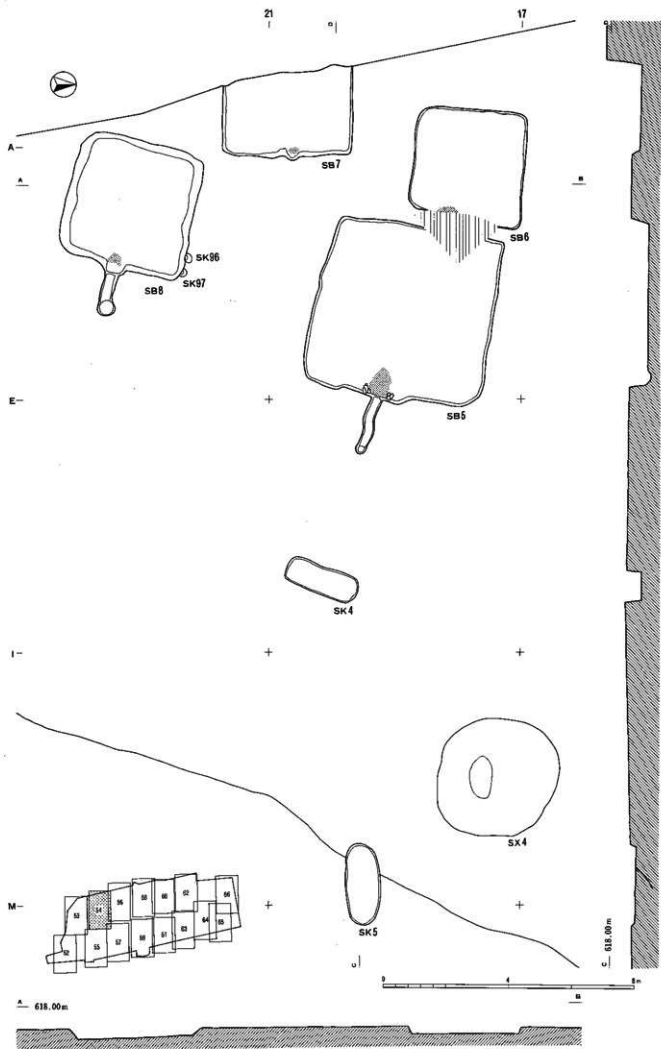
遺構外出土石製品実測図

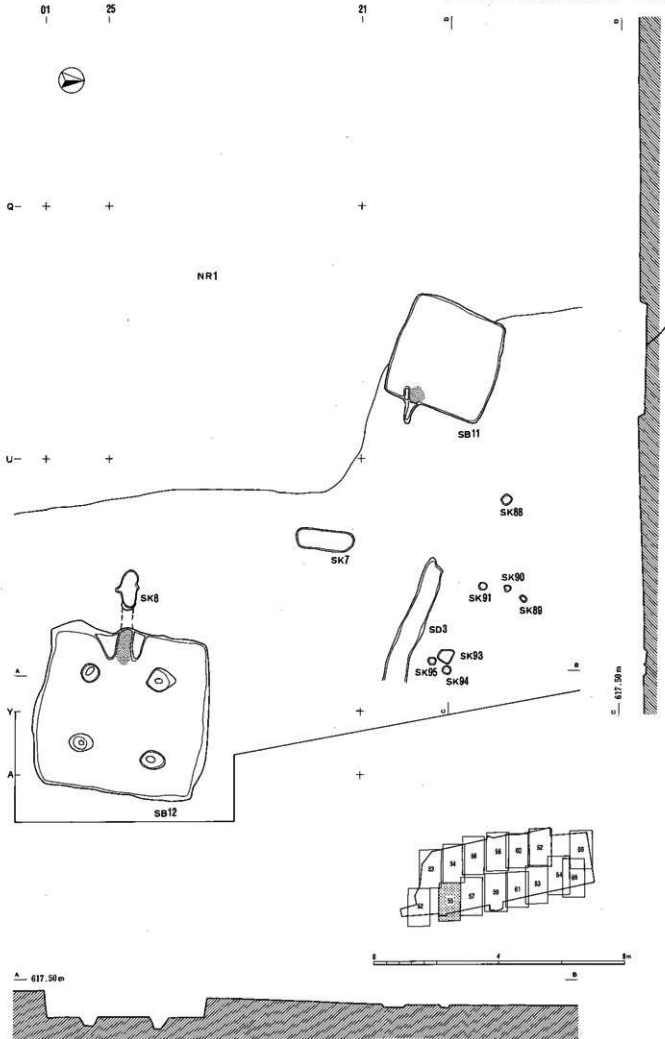
图版52 中二子遗迹古代遗构实测图

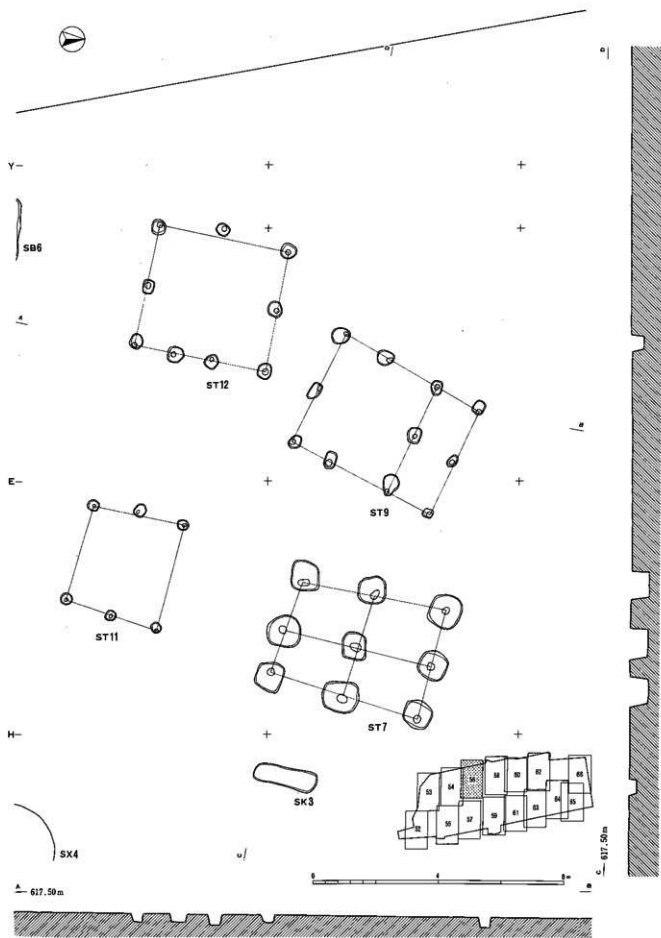


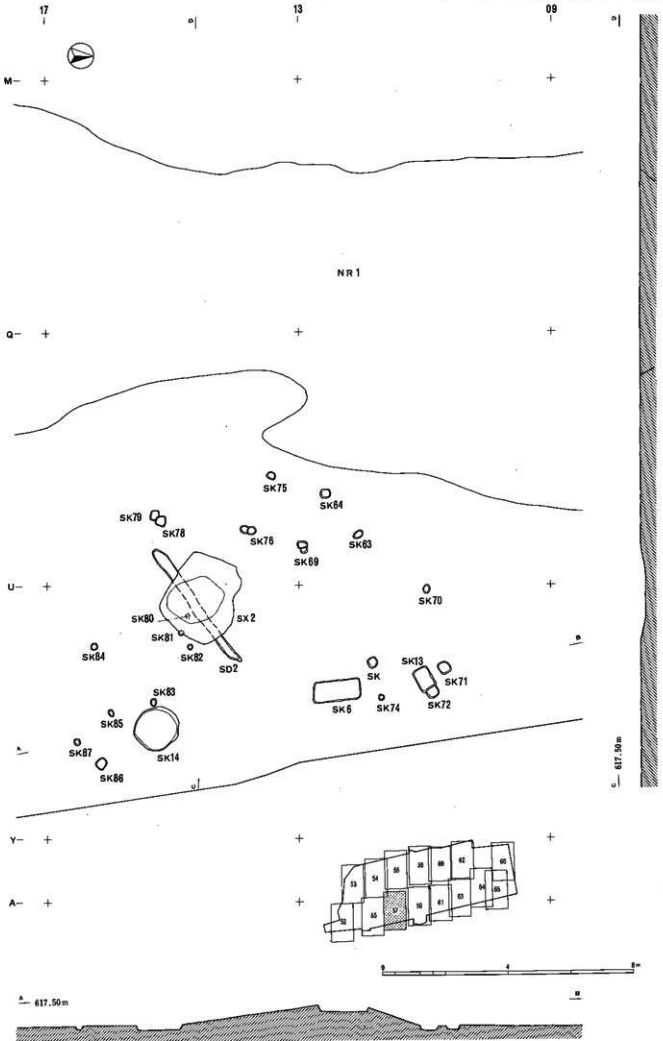


図版54 中二子遺跡古代遺構実測図

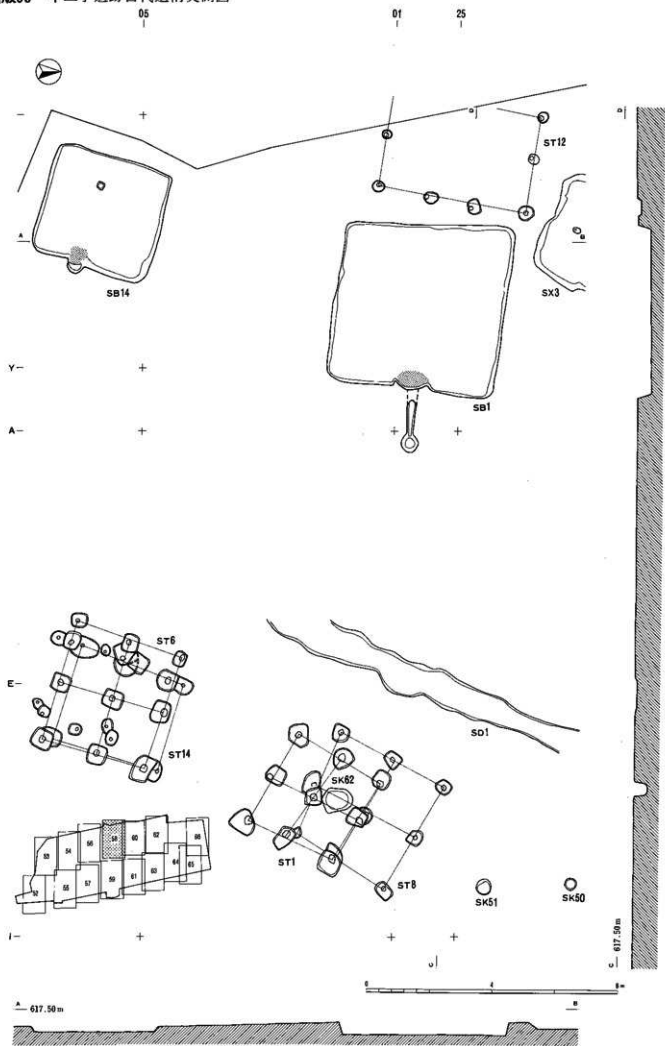


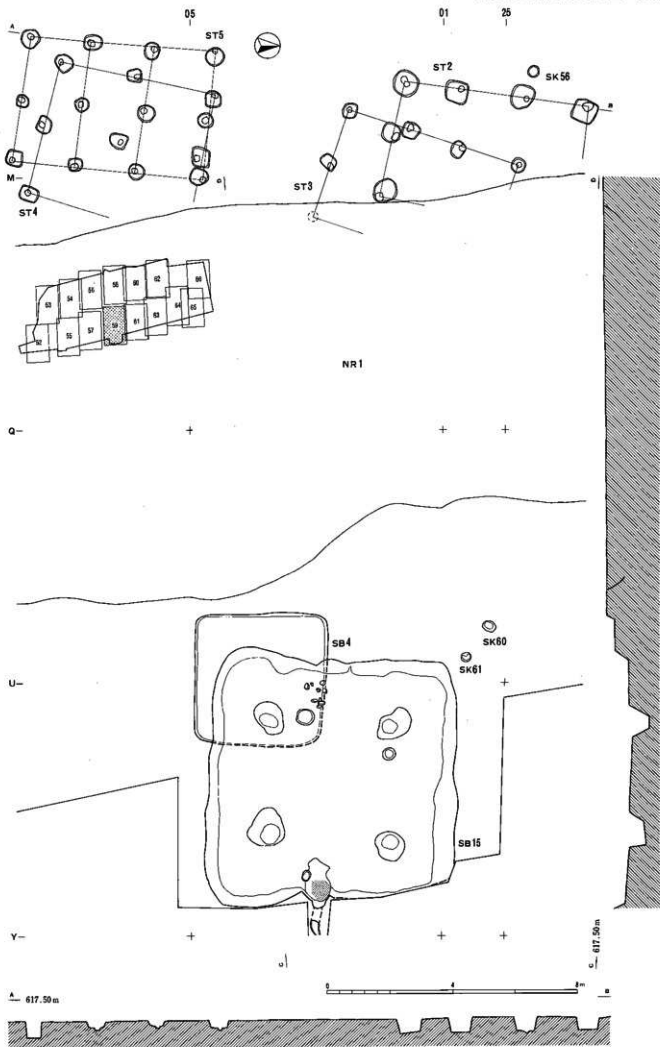




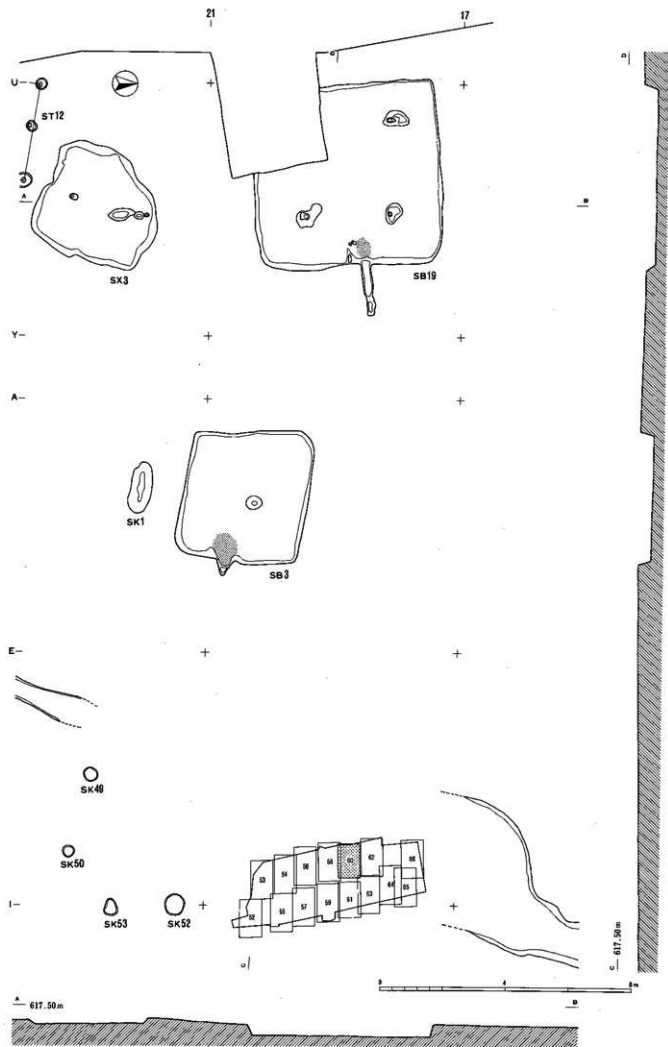


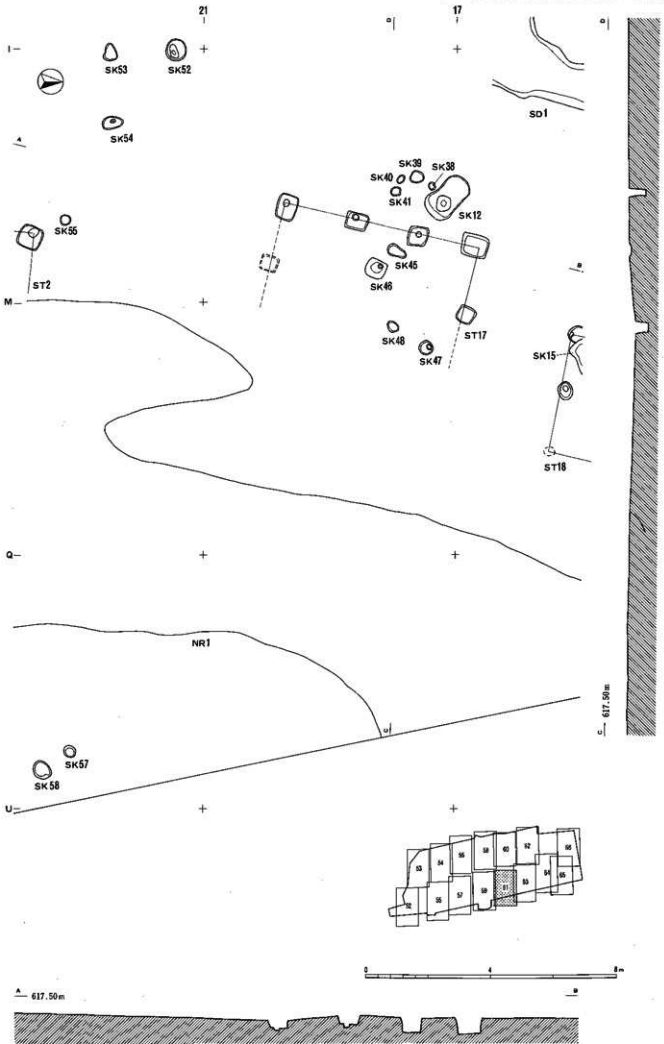
図版58 中二子遺跡古代遺構実測図



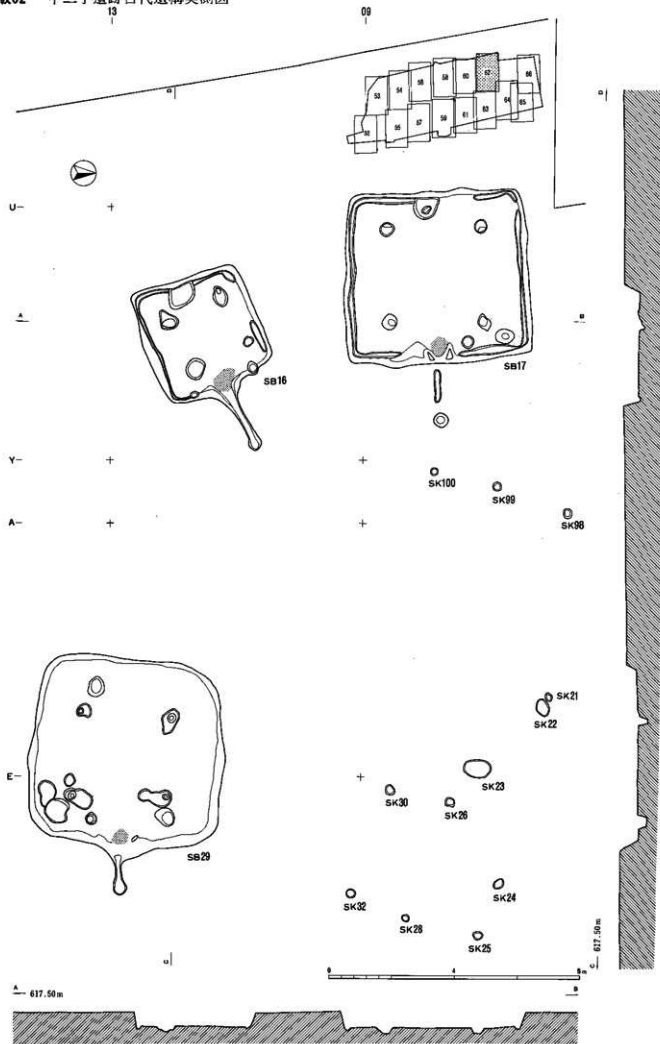


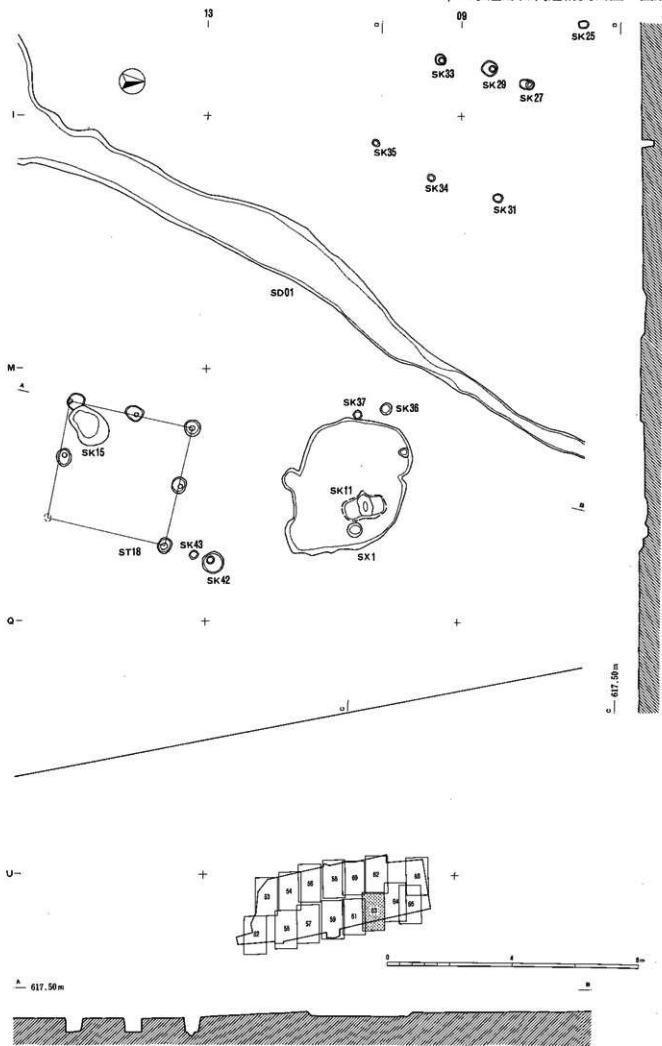
图版60 中二子遺跡古代遺構実測図



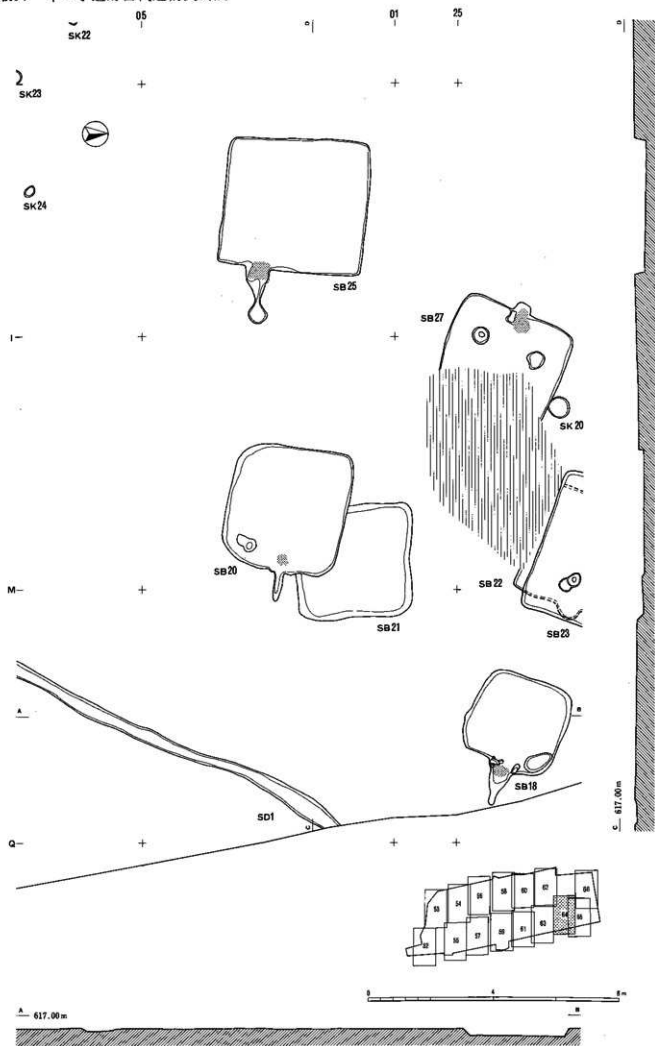


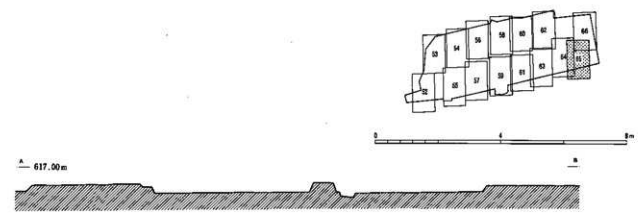
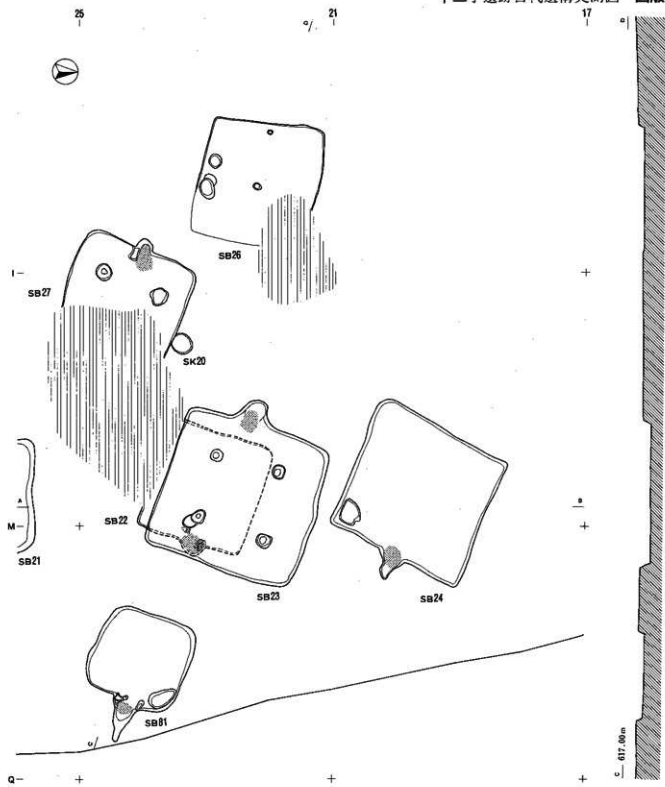
图版62 中二子遺跡古代遺構実測図

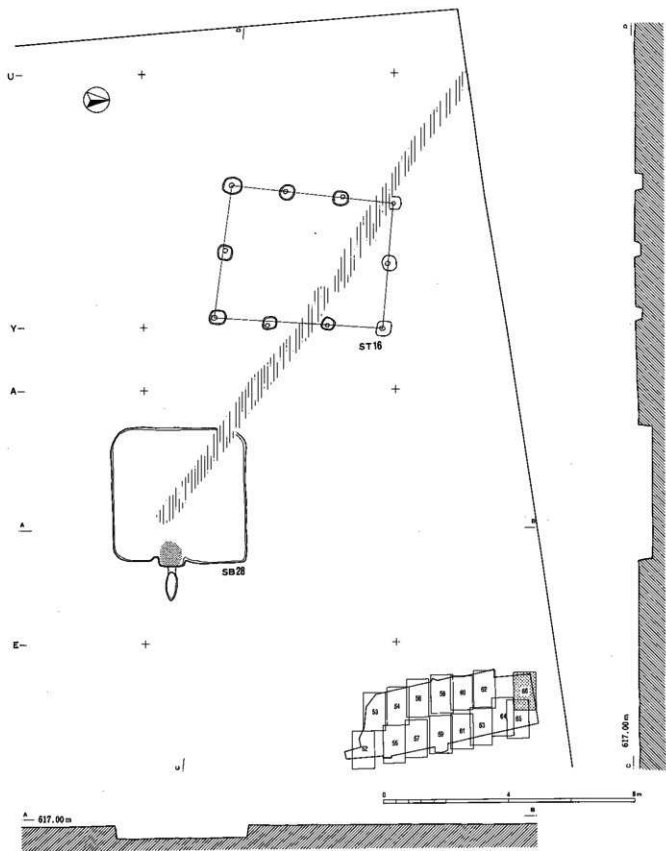




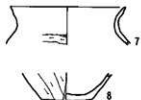
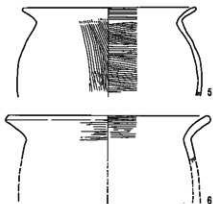
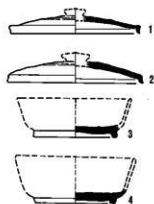
図版64 中二子遺跡古代遺構実測図







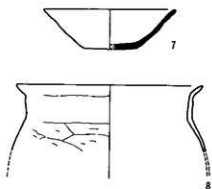
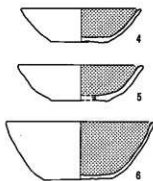
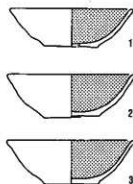
SB1



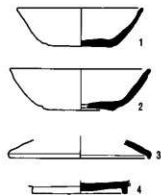
SB3



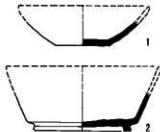
SB4



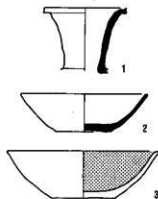
SB5



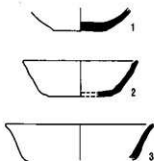
SB6



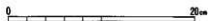
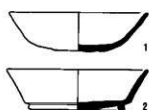
SB7



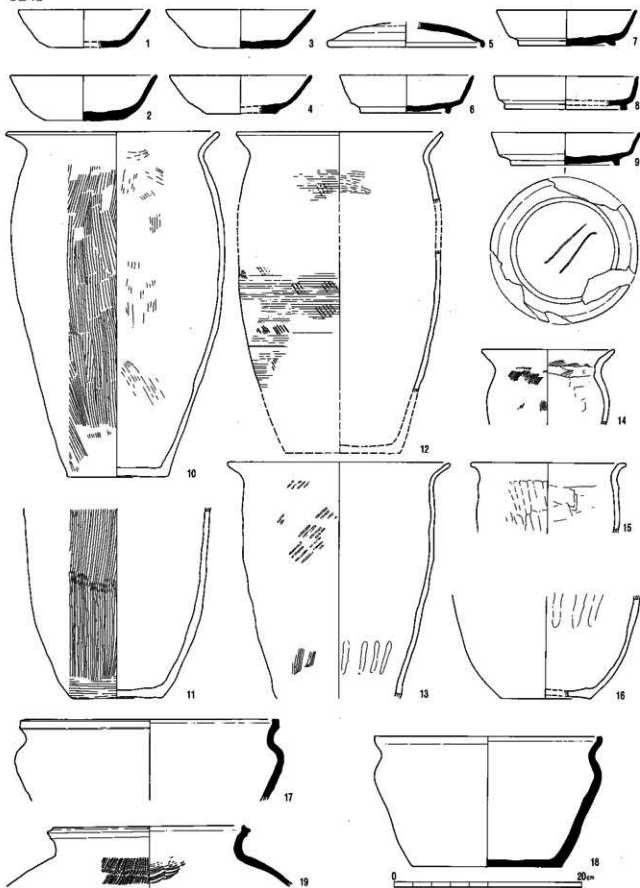
SB9



SB11



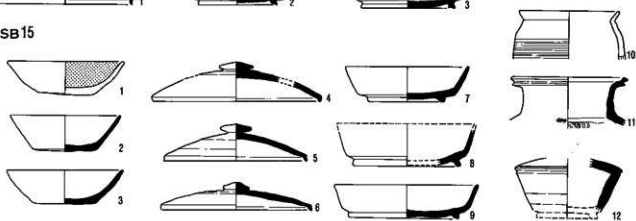
SB12



SB14



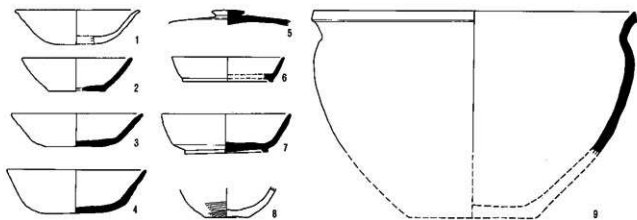
SB15



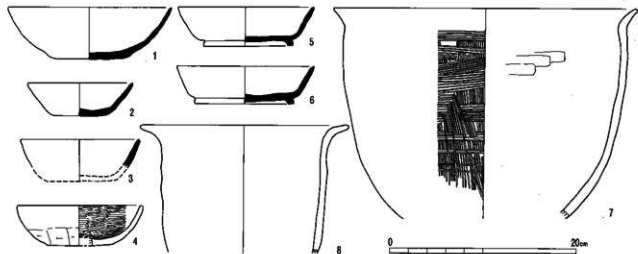
SB16



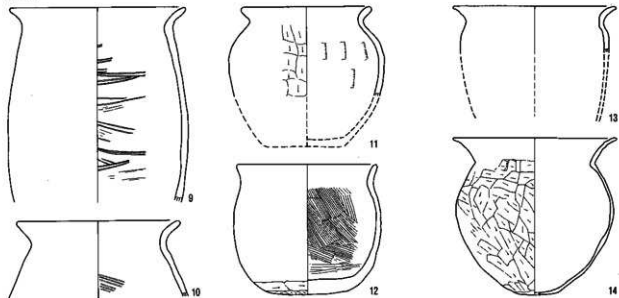
SB17



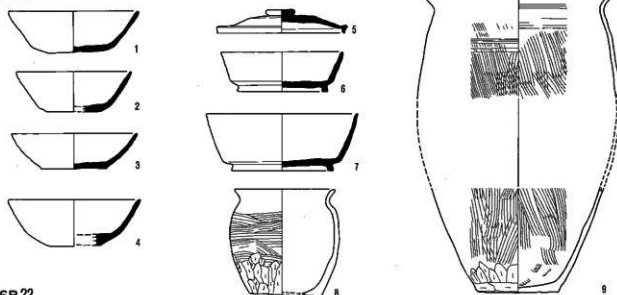
SB19



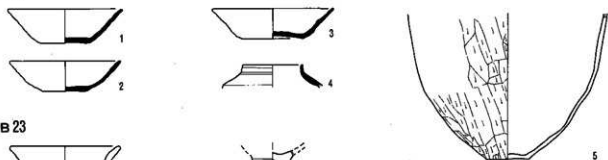
SB19



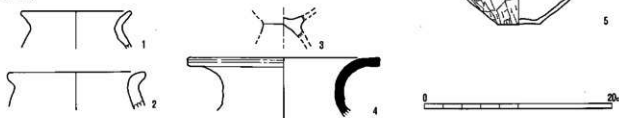
SB20



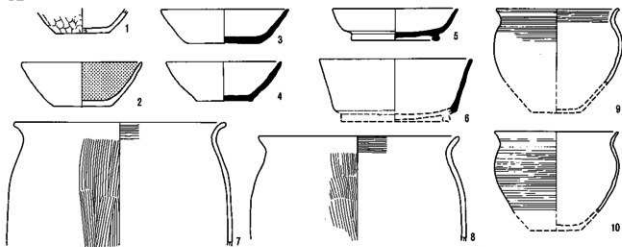
SB22



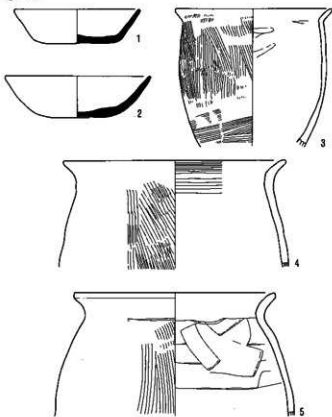
SB23



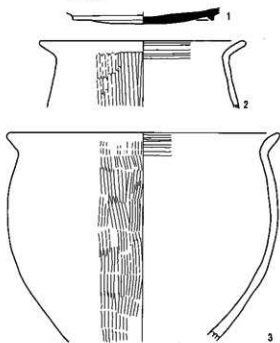
SB 24



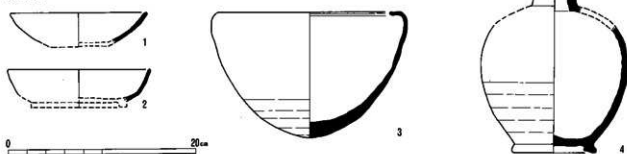
SB 25



SB 27

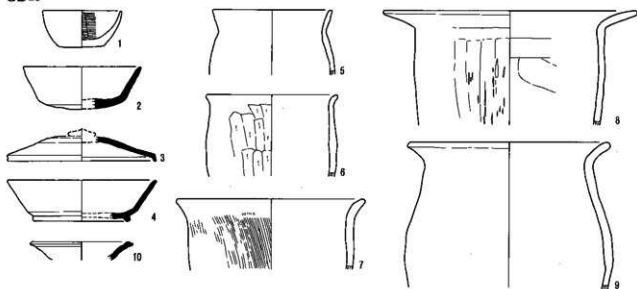


SB 28

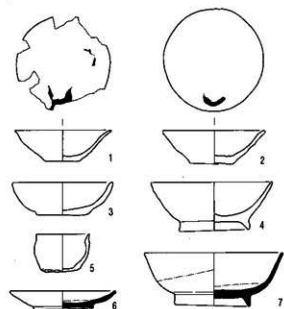


0 20cm

SB29



SK 4



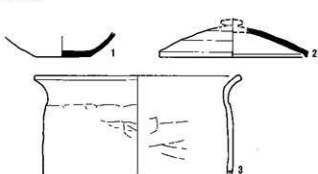
SK 3



SK 7



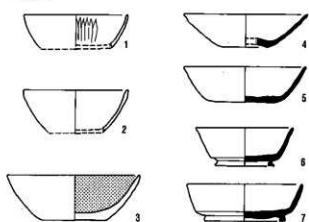
SK 12



SX 1



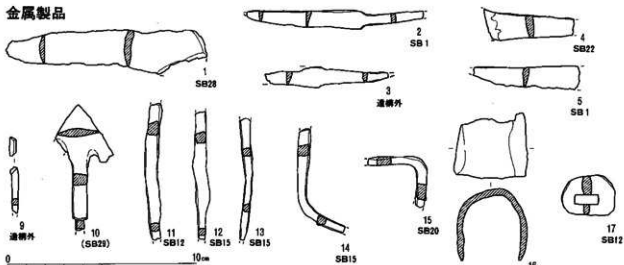
SX 4



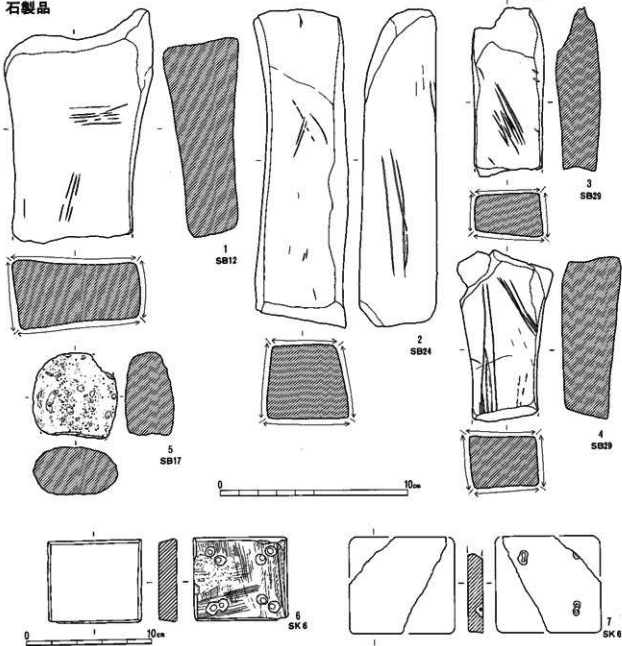
SX 3



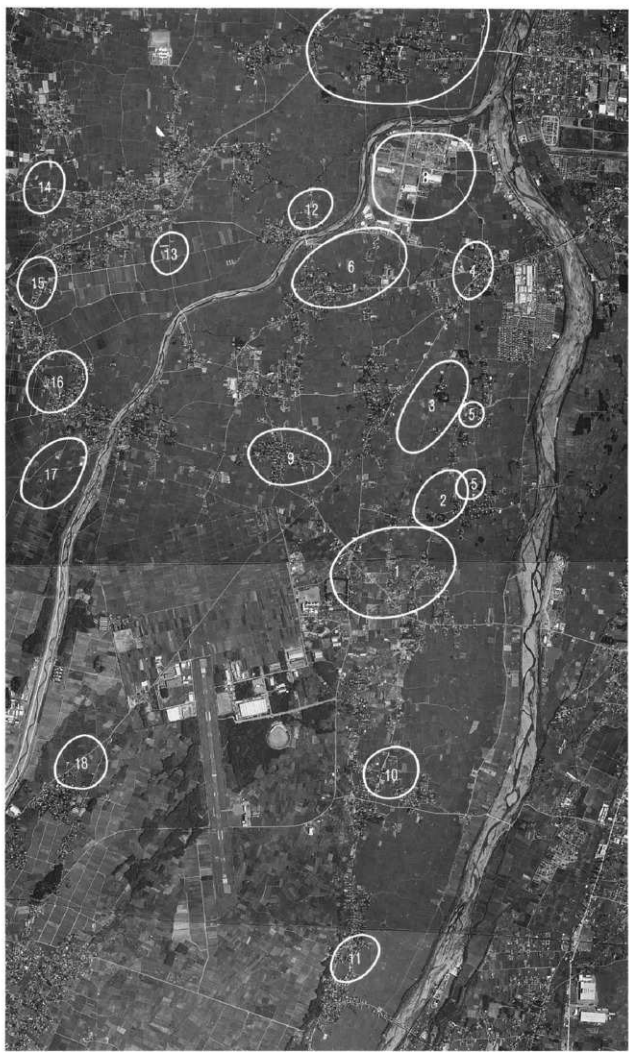
金属製品



石製品



写真図版(PL)



1. 神戸遺跡
2. 上二子遺跡
3. 中二子遺跡
4. 下二子遺跡
5. くまのかわ遺跡
6. 下神遺跡
7. 南栗遺跡
8. 大久保工業団地遺跡
9. 南尻井遺跡
10. 牛の川遺跡
11. 今村遺跡
12. 梶浜渡遺跡
13. 和田町遺跡
14. 西和田遺跡
15. 太子堂遺跡
16. 川西遺跡
17. 川西開田遺跡
18. 北耕地遺跡



遠景
(南上空から)



遠景
(北から)



遠景
(南から)

調査区近景
(南部地区
北から)



調査区近景
(中部地区
北から)



調査区近景
(北部地区
北から)





SB1
(西から)



左SB1 カマド
右SB2 カマド



SB2
(西から)

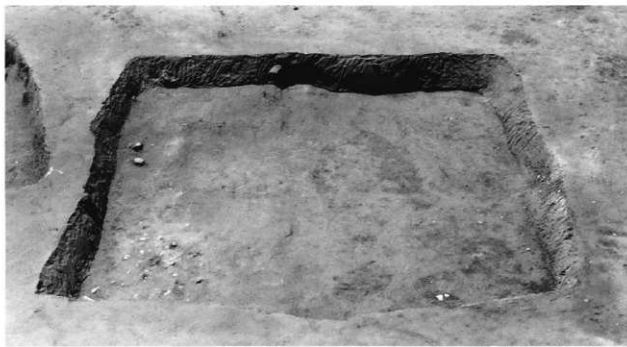
SB4・5
(北から)



SB4
(西から)



SB5
(西から)





SB9
(西から)



左SB9カマド
右SB10カマド

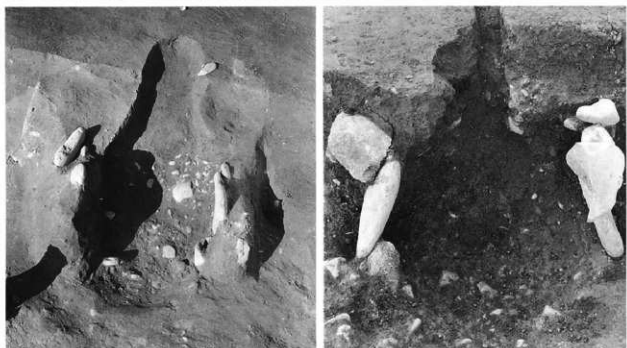


SB10
(西から)

SB22
(東から)



左SB22カマド
右SB24カマド



SB24
(東から)

